

コードギアス 反逆のル
ルーシュ LOST COLORS
R2 ～蒼矢の騎士～

宙孫 左千夫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ブラックリベリオンから一年。ブリタニアには一人の若い騎士の姿があった。

美しい銀の長髪を持つその男は、帝国最強の騎士団「ナイト・オブ・ラウンズ」に所属する騎士。

「ナイト・オブ・ゼロ」。

「本来は存在しない」という意味のゼロという称号を賜った男。

新たな物語はその男の行動によって紡がれていく……。

目次

コードギアス 反逆のルルーシュ LO

ST COLORS R2 蒼失の騎士

TURN 1

①巻 0話『プロローグ』—— 1

①巻 1話『R2 前夜 A』

5

①巻 2話『R2 前夜 B』

22

①巻 3話『R2 前夜 C』

48

①巻 4話『ナイト オブ ゼロ A』

60

①巻 5話『ナイト オブ ゼロ B』

88

①巻 6話『ラウンズの象徴』

115

①巻 7話『作戦 会議』—— 130

①巻 8話『ゼロの左腕』

152

①巻 9話『政庁 攻防戦 A』

176

①巻 10話『政庁 攻防戦 B』

195

①巻 11話『政庁 攻防戦 C』

215

①巻 12話『エピソード』―― 228

コードギアス 反逆のルルーシュ LO

ST COLORS R2 蒼失の騎士

TURN 2

②巻 0話『プロログ』―― 234

②巻 1話『月の光』―― 238

②巻 2話『ナナリーの目標』

255

②巻 3話『ルルーシュの苦悩』

277

②巻 4話『それぞれのラウンズ』

297

②巻 5話『カレンの決意』

316

②巻 6話『蒼月とクラブ』

334

②巻 7話『歓迎会 A』

351

②巻 8話『歓迎会 B』

369

②巻 9話『歓迎会 C』

386

②巻 10話『歓迎会 D』

406

②巻 11話『歓迎会 E』

424

- ② 卷 1 2 話『歓迎会 F』 440
- ② 卷 1 3 話『エピソード』—— 450
- コードギアス 反逆のルルーシュ LO
- ST COLORS R2 蒼失の騎士
- TURN 3
- ③ 卷 0 話『プロローグ』—— 460
- ③ 卷 1 話『総督の護衛計画』 466
- ③ 卷 2 話『ゼロの評価』 476
- ③ 卷 3 話『裏の裏』—— 501
- ③ 卷 4 話『青対紅』—— 520
- ③ 卷 5 話『青い亡霊』—— 537
- ③ 卷 6 話『守るべき者』—— 555
- ③ 卷 7 話『ロイの本質』 575
- ③ 卷 8 話『過去からの変化』 591
- ③ 卷 9 話『ゼロの提案』 610
- ③ 卷 1 0 話『ナナリーの依頼』 627
- ③ 卷 1 1 話『アーニヤの変化』 648
- ③ 卷 1 2 話『特区 日本』—— 661

コードギアス 反逆のルルーシュ LOST COLOR

RS R2 蒼失の騎士 TURN 1

①巻 0話『プロローグ』

行政特区日本。

ブリタニアの統治を受けながらも、イレブンではない日本人としての権利を取り戻せる政策。

これが上手くいけば、黒の騎士団の役割はなにも無くなってしまう。

それも良いのかもしれない、と黒の騎士団の幹部であるライは考える。

ライの目指すものは日本解放ではない。彼の望みはただ一つ、大切な人と平和に暮らせる世界を作ること。

正直に言えば、ライはイレブンの現状にもブリタニアに対する支配政策にも、あまり強い憤りを覚えていない。しかし、日本解放は彼女が——紅月カレンが望んでいる。

それがライが黒の騎士団にいる理由だ。

進むべき道は既に失われている。守るべき家族はもうおらず、自身が裏切った国への

償いをするには時が経ちすぎていた。しかし、自分ではない大切な人が進む未来を手助けすることは可能だということを知った。なにより彼女は——紅月カレンはライを必要とした。必要としてくれた。

ならばそれに応じよう、とライは再び剣を取った。誰でもない、紅月カレンという一人の女性のために。

——彼女の進む道に障害があるのなら、それは僕が取り除こう。

それがライが再び戦いに身を投じる上で立てた誓いだった。事実、この数か月間、ライはカレンの進む道に立ちはだかるものを、彼女と共に文字通り粉砕してきた。

だが、ライはここにきて迷いを覚えていた。

行政特区日本。

この政策はカレンが真に望む日本解放の形でない以上、ライ自身にとつてもあまり好ましく無いもののはずだった。

そもそも、ブリタニア皇女ユーフェミアが唱える行政特区日本など、ただの夢物語だ。

日本人とブリタニア人が平等に生きていける社会。そんな社会は不可能だ。それを可能とするには、日本人は殺されすぎたし、ブリタニア人は殺しすぎた。

しかし……ライはこうも思うのだ。

それが夢物語で終わると誰が断言できるだろうか、と。

事実、世界とは理想で動いてきた。一人の人間がこうしたい、ああしたい、と思いはじめたことが、多くの理解者、共感者によつて結束し、拡大し、そして達成されてきた結果が今の世界なのだ。

ただ理想とは無数に存在するため、選出され、歴史となる理想が少ないだけの話である。

それに、このユーフェミアの理想は必ずしもカレンの望む日本解放の挫折を意味しない。

それは始まり。この行政特区日本は、限定的ながらもブリタニアの完全支配の歴史が根底から覆されるものである。

言うならばそれは、ブリタニアへの反逆。

つまり、行政特区日本はカレンが望む日本の形では無いにしろ、カレンが望む日本の形への未来の道筋にはなる可能性がある。

と、ここまで結論付けた時、ライは端正な顔立ちに苦い笑みを浮かべてしまった。

これらは全て自分を説得させるための建前だ、と気付いてしまったのだ。

本当は、もつと感情の根底の部分では、ライは行政特区日本が上手くいけばいいと考えているのだ。

ライの願うものは日本解放ではなく、大切な人と共に平和に暮らせる世界を作るこ

と。

だから、日本解放ができなくても行政特区日本でそれが実現できるならそれもいい。本心がそこにあつた。

だが、ライにとつて自身の本心などというものは考慮するに値しない些末なものだ。カレンが望むなら。

カレンが、ライの望む世界よりも、もつと違うものを望むのならば、ライはいつでも彼女のために戦場を駆ける。

誓つたのだ。

そして、ライはその誓いを最後まで果たすつもりだった。

①巻 1話『R2 前夜 A』

行政特区式典会場。

鈍器で殴られ続けているような頭痛が、思考を阻害する。

歯を食いしばって堪えながら、ライは気だるい体を起こす。

霞む視界に抵抗しながら必死に視線を巡らし、状況を確認。周りにはC・C・とスザク。そして床に倒れている数人のSPが見えた。

「一体、何が……?」

痛みを訴え続ける頭を強引に働かせて記憶を探ってみる。

だんだんと思いついてきた。

ゼロとユーフェミアが二人で話をすると言つてG1ベースに消えてからすぐ、まず一緒に来ていたC・C・が急に倒れた。

それを助けようとしたスザクも倒れ、傍に駆けつけたライと、ユーフェミアのSP達も倒れた。まるで電気ショックを浴びせられたかのような衝撃だった。

「そうだ、ユーフェミア様とゼロは!」

ハツとして、体に鞭を打って立ち上がる。頭痛が収まる気配は無く、その過程で何度

もの吐き気に思わず喉を手で押さえる。

なんとか立ち上がると、向かい側のブリタニアの陸上戦艦——G1ベースから、一人の少女が白いドレスを揺らしながら駆けてきたのが見えた。

弱肉強食を絶対とするブリタニアの皇女でありながら、平等を謳った心優しき女性。

「ユーフェミア様！」

その女性は、微笑を絶やさなままライの前まで駆けてきて踵を鳴らして止まった。

ユーフェミアが一人でG1ベースから出てきた事に、ライは疑問を持った。

「ユーフェミア様。ゼロは？」

彼女は、顔色を変えずに答えた。

「ゼロ？ ああ、ルルーシュですね。いいんです、彼はブリタニア人ですから」

「!？」

ライは目を見開いた。

いま、ユーフェミアはゼロのことをルルーシュだと言った。

それはつまり、ユーフェミアが黒の騎士団の中でもライとC・C。しか知らないゼロルルーシュという真実を知ったということに他ならない。

(どういふことだ……?)

ライはユーフェミアの発言を考察した。

あの、ルルーシユが無意味に敵に正体を晒すとは考えにくい。また、スザクならともかく、このユーフェミアが腕力に訴えてゼロの仮面を剥ぎ取ったとは到底思えない。

ならば、なぜユーフェミアはゼロの正体がルルーシユだと知っているのか。ルルーシユのミスでもなく、ユーフェミアの暴力ではない可能性。

例えば、そう。ゼロが自分の正体を隠す必要が無くなったと考えるならば、それが意味するものは……。

「それでは、話し合いは上手くいったのですか？」

ライの問いかけに、慈愛を体現したような少女は上品に頷いた。

「ええ。とても有意義なお話になりました」

この瞬間、ライは喜びと、言い様のない虚脱感を同時に味わった。

ユーフェミアのこの言葉は、強靱な戦士であるはずのライの力という力を奪うのに充分なものだった。

なにせ戦争が終わる、終わるのだ。

ただ、と喜びに打ち震える反面、ライは黒の騎士団の一員として敗北感も感じずにはられない。

(いや……)

その感情を些細なこととして心から振り払う。

ライの頭の中で一人の女性の姿が浮かぶ。

紅月カレン。ライが今一番大切に思える女性。

行政特区日本の成立は、彼女が目指した日本解放とは違う。しかし、それは、日本解放への新たな一歩であることには間違いない。

黒の騎士団は今まで武力による解放を目指してきた。

それが途絶えたというのは、黒の騎士団の一員として確かに完全に大手を振って喜べるかと言え、そうではない。

しかし、変わる。

黒の騎士団の戦いが誰も死なない、誰も殺さない戦いへと変わる。

戦争から政治の戦いへ変わる。

それは、ライがカレンと共に長い時間を生きていける可能性が大きく広がったことを意味している。

戦いの無い世界で彼女と共に過ごす。それこそライにとっての幸せに他ならない。

もつとも、そんなことをカレンに言ったら怒られるかもしれないが、ゼロが決めたことならば彼女も渋々ながらも納得するだろう。

それに日本解放への道は途絶えたわけではない。ただ、その日本解放への道のりがほんの少し変わるだけ。

「おめでとうございますユーフェミア様。私も微力ながら貴方に協力いたします」

「ほんとうですか。では、早速手伝っていただきたい事があります」

「喜んで」

彼女の問いかけにイエス・ユア・ハイネスはもう必要ない。しかし、ライは目の前の女性に最大の敬意を払いながら、付き従う騎士のように恭しく頭を垂れた。

ライはユーフェミアの言葉を待った。彼女の頼みごとはなんでも最大限やろうと思っただ。

目の前の女性は、困難だが価値があることを成し遂げようとしている。しかも、それは自分にとっても意義のあること、もちろんカレンにとつても……。

ならば協力は惜しむものか。惜しむ理由などあるものか。

「日本人を殺して下さい」

「……………はっ？」

ユーフェミアが変わらぬ微笑を浮かべたまま出した言葉に、ライは純粹に戸惑った。

まず自分の耳を疑った。当然と言えば当然で、それは、目の前の潔白で純粹な女性からはあまりに似つかわしくない言葉だった。

「なるべく早くお願いしますね。私も日本人は皆殺しにしなければいけないので。では」

優雅に一礼してライの脇を通り過ぎようとするユーフェミア。

ほとんど反射的に、ライはユーフェミアの進路を塞ぐような形で立ちはだかった。

「ちよ、ちよつと待ってください。あなたは一体何を言ってるんですか？」

すると、ユーフェミアは楽しい遊びを邪魔された子供のように顔をムツと歪ませた。

「日本人は虐殺です。殺します。そうしなきゃいけないの。だからどいてください」

「どきませんよ。一体全体どういう——」

乾いた音と、一拍遅れる火薬臭。

次の瞬間、ライの腹部に気が狂いそうになるような激痛が湧き上がる。

「ユ、ユーフェミア……様？」

撃たれた。ユーフェミアに撃たれた。目に映るのは細い手の先に握られた小さな銃。

実を言えば。ライはユーフェミアが銃を照準し、発砲する動作が全て見えていた。

通常なら、ライは撃たれる前にその優れた身体能力を駆使し、彼女の銃を叩き落としたり、その相手の腕を捻り上げることぐらいは難無くやっつてのけただろう。

しかし、誰が思うだろうか。

虐げられてきた日本人を救うために立ち上がった心優しき皇女。

微笑みは柔らかく、物腰は優雅。その姿を見れば誰もが希望の光を見た。

そんな少女が自分に銃を向けてきたからといって、引き金を引くと誰が思えるだろ

う。

膝から下の力が急速に抜ける。意思には無断で膝が折れた。そしてそのまま、ライは天を見上げるように地面に倒れた。

「な……ぜ？」

自由の利かなくなり、赤く生暖かいものがこぼれる唇からライは弱々しく問う。返ってきたのは、優しい少女の激しい怒声だった。

「日本人は皆殺しにしなきゃいけないのっ！」

そしてライは見た。自分に罵倒し続ける少女の目に光る怪しい光を。ギアス。

ライは確信した。ライもギアスを持つ者。そういうことは直感で理解できた。ユーフェミアはギアスにかかっている。では一体誰がギアスをかけたのか。

遠のく意識のなかで、ライは一つの可能性に突き当たった。

いまのいままで、ユーフェミアが共にいた人物は誰だったか？

ゼロルルーシュだ。自分と同じ絶対遵守のギアスを持つ無二の友。

「日本人は皆殺しにしますっ！」

そう言って、ユーフェミアが会場の方へ駆けていく。

「な、ぜだ……！」

誰もいない空間に、もう一度問いかける。その問いには誰も答えない。ただ、
「やめろユファイイ！」

ゼロの叫び声だけが響いた。

「ゼ、ロ……？」

首だけを動かしてG1ベースの方を見ると、見慣れた黒い仮面にマントをなびかせる人物がこちらに走ってくる。

黒の騎士団のリーダー。ゼロ。

ゼロはユファイを追うようにして走り、ライの近くまで来ると足を止め、その状況を見て愕然とした。

「ライ!？」

ゼロは、腹部から血を流して倒れているライを見つけると、息を飲んで後ずさった。

「ゼロ……これは、一体……」

ライは、ゼロに震える手を伸ばした。その手には真つ赤な液体がこびりついていた。

「すまないライ……すまない！」

しかし、ゼロはそう何度も謝りながら、ライの手から逃れるようにユファイを追って会場に駆けて行ってしまった。

「ルル、ーシユ……」

ライは、自分の身体を無理やり起こそうと、体の下に腕を持っていく、まるで何十キロもの重りをつけているかのような苦労があった。

「ぐっ、う……」

腹部に刃物を突き立てられ続けるような激痛。足に力が入らない。それでもライはなんとか体を動かし、うつ伏せになって起き上がる。

寝ている場合ではない。なにかがおかしいのだ。

全身に雷を受けているような痛みが駆け巡った。額から大量の油汗が浮かび、腹部からは血が滴りおちて、床に小さな池を点々と作っていく。

「い、一体、なにが……」

ライは、痛みを堪えて通路の壁まで這うように歩く。

とにかく、ゼロとユーフェミアを追わなければならないと考えた。

ライは、壁にたどり着くと背を預けて息を整える。

その時。またあの乾いた銃声が聞こえた。そのせいか腹部がまた再び痛み出した。

『虐殺です！』

あの少女の優しい声が大音量で会場に響き渡ると、次には少女の声を遥かに上回るおびただしいまでの銃声が会場を支配した。

「なんなんだ、何だって言うんだよ」

ライは再び歩きだす。そして、息も絶え絶えで会場に出た。

「!?」

場の惨状に、ライは思考を止められた。

それはかつて自分が作り出したあの光景と似ていた。

青い大空が見上げられる開放的な空間であるにも関わらず、血の匂いが沈澱し、充満していた。

記憶と重なる。

人の内蔵という内臓が辺り一面に飛び散りひどく臭い。その匂いは風によって運ばれて鼻腔を通り抜け、舐めてもいないのに鉄の味を舌に含ませる。

耳には天をつんざくような絶叫、断末魔。至る所から沸きあがる。

男。女。若いのも、子供も、お年よりも赤ちゃんまでも、みな差別無く平等に死んでいた、死んでいく、死にかけている。

地獄絵図。二度と見ることはないと思っていた景色。それが無遠慮に広がっていた。

「なんだ……、なんなんだこれ、うっ……」

その場でライは嘔吐した。

気持ち悪い。気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い。人間とは人間という形で無くなった瞬間、こんなにも人に不快感を与えるものなのか。

ライは腹の全てを出し切り、虚ろな瞳で再び顔を上げ、
「ちく、しょう……」

その場で気を失って倒れた。

○

紅蓮式式の操縦席。待機していた紅月カレンは、式典会場内での異常に気が付いた。

「なに!? 会場で何が起こってるの? ゼロは? ライは?」

『いま確認している!』

扇の声の後、程なく、カレンの横のモニターにその映像が表示された。

それは、至る所に赤い不気味な文様が飛び散っていた。いや、違う。それが全部人の血だと気付くと、カレンは瞳を見開き、怯えた。

「な、なにつ、なによつ、これ……どうなってるの!? ゼロは!? ライは!? ライ!」

カレンはライの通信機に呼びかける。しかし、返事は無い。そこに強制通信が割り込んできた。

『黒の騎士団総員に告げる!』

「ゼロ!」

カレンは己のリーダーの無事を喜ぶ。

良かった。ライはゼロと一緒にいた。だからゼロが無事ならライも無事なはず。だ

が、その喜びは瞬時に打ち消された。

『ユーフェミアは敵となった！ 行政特区日本は反体制者を誘い出すための卑劣な罠だったのだ！ そして——』

次の言葉に、カレンは肺の空気が一気に奪われた。

『そして、作戦補佐はその凶弾にかかり倒れた！ 現在も会場内にいる！』

「!?」
撃たれた？ ライが？ なぜ？ 行政特区日本は戦争を無くすための政策じゃなかったの？

カレンの思考が錯乱する。それを元に戻したのはリーダーたるゼロの命令だった。

『黒の騎士団のナイトメア部隊は式典会場に突入せよ！ ブリタニア軍を殲滅し、日本人を、作戦補佐を救い出すのだ！ 急げ！』

その言葉がカレンを動かした。

部下に指示を出すのも忘れ、カレンは一目散に紅蓮を走らせる。その後ろからは慌てて零番隊の無頼が続いた。

（ライ、ライ、ライ！）

カレンの頭の中ではその名前が、祈るように何度も呟かれていた。

なぜ彼が撃たれなければいけない？ 特区日本に協力的だったというのに、なぜ

……。

へ正直に言えばねカレン。僕は日本解放より、それより、平和な世界で君と過ごせるなら、それで——

先日、行政特区について二人で話し合った時の、ライの言葉を思い出す。

その言葉は黒の騎士団零番隊紅月カレンとしては決して許容できる発言ではなかった。

黒の騎士団としてなにより大切なことは日本解放。その黒の騎士団の幹部である作戦補佐が日本解放より大切なものなどあつてはいけない。

だから、そう言ったライに、カレンは少しだけ怒った。

でも、その言葉はただのカレンとしてはとても嬉しい言葉だった。本当に嬉しいと感じられる言葉だった。だから、その時気付いた。

私はこの人が好きだ、と。

だからもし、カレンが信じ抜くと決めたゼロがこのまま黒の騎士団として活動するよ、ユーフェミアの行政特区日本に協力したほうが、真に日本のためになると判断し、そして自分が黒の騎士団零番隊長紅月カレンではなく、ただのカレンとして彼の前に立てる時が来るならば、

その時は……。

「ライ……」

頭をよぎるのは、いつも優しく微笑む彼。

何度も願った。死なないで、死なないで、と……。せめて気持ちだけでも彼の下に少しでも早く届けばいいと願わんばかりに。

「お願いライ。無事でいて……」

『そして、ブリタニア帝国第三皇女ユーフェミアを——殺せ！』

私、まだ、あなたに自分の気持ちを伝えてない……。

○

ライが式典会場の冷たい床で目を覚ますと、目の前の光景は地獄のままだった。

死体。死体。死体。死体。転がっていた。いたる所に転がっていた。

ライはこの光景を見たことがあった。死体が自然になる現場。異質なはずの死体が景色となる現場。

吐き気が止まらない。過去の光景がフラッシュバックする。

かつて自分が生み出した惨状。惨劇。ギアスが生み出す悲劇。

(これが、ギアスを持つものが起こす必然的な未来だと言うのか……)

かつて、自分の力も同じ結末を生み出した。

ならば自分とはなんなのだろうか。自分は、死神以外の何者でもないのか。

「ライー！」

ライの暗い思考は愛おしい声によって遮られた。

「カ……レ、ン？」

上を見ると、そこにはカレンの泣き顔があつた。

どうやら、カレンは床に倒れている自分を抱きかかえながら泣いているらしい。

困った。

カレンの泣き顔なんて見たくない。けど、その泣き顔が可愛いと思える。いつまでも見ていたいと自分の中の小さな悪魔が囁く。

本当に困ったものだ。

「お願い！ 死なないで！ お願い！」

でも、愛しの女性をいつまでも泣かせておくわけにはいかない。

女性の泣き顔。確かに美しくはあつても、それを見る機会が多い男など最悪な男だ。

「ライー！ 死なないでよお！ ライー！」

ライの頬に、カレンの数滴の涙がこぼれた。

「カレン……僕は、大丈夫だ」

言葉が思うように出ない。でも、言わなければいけない。

自分なんかのために涙を流すより、カレンにはその力を惨劇の拡大を防ぐために使っ

てほしかった。

「カレ、ン。ユーフェミアを。とめ、ろ……」

「ユーフェミア？ ユーフェミアがあなたを撃つたのね!？」

「そう、だけど、ちが、う……あれ、はギア」

「分かった！ 分かったからもう喋らないで！」

「とめ……とめるんだ、カレ——」

ライの言葉は、自分の口から塊となつて溢れた血に遮られた。

カレンの瞳が、大きく見開かれる。

「分かった！ 分かったからお願ひ！ もう喋らないで！ 本当に死んじゃう！」

ライはかすれゆく視界の中、傍にたたずむ紅蓮の姿を見た。

深紅の装甲は所々はがれ落ちていて、何箇所かは機関部がむき出しになっている。

おそらくブリタニア軍のKMFからの銃撃をかくくりながら、他に見向きもせず直進して自分を探しにきてくれたのだろう。

その証拠に、回りにはまだ銃弾が飛び交っている。

そして無頼、おそらく零番隊の無頼は自分達を守るように円陣を組みながら、サザランドやグロースターと交戦を続けている。

「紅月隊長！ 担架です！」

その時、カレンの後ろに白い担架を持った黒の騎士団の団員が現れた。

カレンは、それを聞いて名残惜しそうにライの手を少し強めに握った後、

「彼を、頼む」

と言つて、ゆつくりライを寝かし、離れた。

「カレ、ン……」

最後に見たカレンの顔。瞳は猛禽類の鋭さを帯び、その口元はギリツと軋む歯に連動して小刻みに震えていた。

怒り。耐え難い怒り。怒りはその捌け口を要求する。

「よくもライを……ユーフェミアあああああー！」

そう言つて、カレンは紅蓮式式に向かつて歩いていく。

「だめだ、カ、レン……」

君に怒りの顔は似合わない。それに、恐らくユーフェミアにはなんの罪も無いんだ……。

ライは担架に乗せられて、その振動でまた意識を失った。

①巻 2話『R2 前夜 B』

ユーフェミアの日本人虐殺命令に端を発した、黒の騎士団による大決起事件ブラックリベリオン。

後にそう呼ばれたこの戦闘は、すでに終焉へと向かっていた。

ライがベッドの上で目を覚ますと、最初に視界に入ったのは白い天井だった。

「……んん、は？」

周りを見渡す。白いカーテン、大きな棚に積まれる様々な薬品、用途が分からない計器、どうやらここは医務室のようだ。

「っ！」

身体を動かした拍子に、腹部に激痛が走る。

自分の服を震える手でめくってみる。そこには何重にも巻かれた白い包帯が見えた。

それはユーフェミアによって撃たれたのは、夢ではなく真実である事を証明していた。

「目を覚ましたか作戦補佐！」

その時、一人の団員が医務室に入ってきた。

「いっは、……ぐっ」

激痛に顔を歪める。

団員はライに駆け寄った。

「おとなしくしててください！ あなたは重傷なんですよ！」

「し、しかし……」

「駄目です！ くれぐれも安静にさせるように、とゼロと紅月隊長からの厳命を受けています！」

ゼロとカレン。二つの名が並んで告げられたことで、ライは若干ながら思考を取り戻した。

「状況は？」

「えっ？」

首を傾げる団員に、ライは珍しく声を荒げた。

「黒の騎士団の状況だよ！ 行政特区は!?!」

団員はライの言葉を聞いて押し黙り、やがて、重そうに唇を動かした。

「行政特区は卑劣なるユーフェミアの罠でした。何万人もの同胞が犠牲に……」
憎しみを込めた表情だった。ライには驚く以外の選択肢は無かった。

「死んだ？ 何万人も？ ユーフェミア様は？」

「奴にはゼロが天誅を下しました！ 未確認ですが死んだという情報もあります！」

「ゼロが殺した？」

そして、ライは団員からユーフェミアの暴挙の全てを聞いた。

あの時見た地獄の光景。それらは全てユーフェミア自身の命令によって行われたものだと言うのだ。

普通ならば、なぜあのユーフェミアが!? と驚くところだ。だが今のライには一つの予測があつた。

ギアス。

ライが持つ絶対遵守の力。そしてそれはあのゼロ——ルルーシュも持っているもの。最後にライがユーフェミアと会った時、そのユーフェミアの瞳に鈍く、そして赤く灯る光が見えた。

あれは間違いなくギアスの光だ。ならばゼロ——ルルーシュがユーフェミアにギアスをかけ、あのような惨劇を起こさせ、さらにはその罪をユーフェミアに押し付け、自らの手で殺害したということになる。

「馬鹿な……。そんな馬鹿な」

頭を大きく振って、ライはその恐ろしい推測を否定した。

ゼロが、ルルーシュが、友が、そんなことをするはずがないではないか。

彼は非情ではあるが、非道は酷く嫌う。なによりそれが事実なのだとしたら非道どころか鬼畜同然ではないか。

〈その言葉で充分だ。お前にギアスは必要ない……〉

自分にこんなことがあつてもゼロに従うようにギアスをかけてくれと頼んだあの日、ルルーシユはそう言つて拒否した。

その時、自分達は初めて友達を超えて親友になれた気がした。

「……そうだ、僕たちは友達以上の」

ならば聞かねばならない。あの狂気の原因を、ギアスを持つ者として、作戦補佐として、なにより……友として。

「ゼロの居場所は？」

「分かりません」

「？ どういうことだ？」

「詳しくは聞いておりませんが、実はゼロと連絡が途絶えたという話もあります……」

ライは聞いた。黒の騎士団。いや、日本の一斉決起を。

そしてその経過の話を聞いていく内に、ライの中では一つの結論が導き出された。

負ける。黒の騎士団は敗北する。

理由として、まず時間がかかりすぎていた。黒の騎士団の戦闘は時間が全てだ。そも

そも戦闘力でいえば黒の騎士団は決して強大ではない。主力KMFがブリタニアはザーランド、騎士団はそのサザーランドの一世代古いグラスゴーを改造した無頼。ここから見ても分かる。

いままでは奇襲等の策を用いてその差を埋めてきたが、策とは時間が経てば経つほど意味が無くなっていくものだ。

そうなれば後は地力の勝負になり黒の騎士団にその地力は無い、悲しいほど無いのだ。

だからこそその奇策。だからこそその奇襲。だからこそその短期決戦。それなのに、それを生かすにはもうあまりにも時間が経ちすぎている。

そして、もう一つの問題。理由は分からないがゼロ不在という現状。

致命的なのはゼロ不在という事実ではない。ゼロ不在ということが、こんなライの監視兵にまで知れ渡っていることがまずい。

ゼロの不在が騎士団のほとんどに、いや全体に広がったとすれば、まずゼロを慕って集まった民兵から崩れる。

そこを見逃すブリタニアではない。そして、先程も言ったが今の黒の騎士団にはその動揺した民兵を突いてくるブリタニアを押し返す地力は無いのだ。

「行かなければ……」

前線にはカレンがいるはず。彼女は自分から逃げ出すような性格はしていない。

おそらく敗色が濃くなればなるほど己の体を盾として味方を守るだろう。ライが愛した女性はそういう人だ。

そして、そういう人間ほど、戦場では真つ先とは言わないまでも確実に死ぬのだ。痛みなど無視して、ライはベッドから立ち上がる。

「駄目ですよ作戦補佐！ ベッドに戻って下さい！ 安静に——」

「安静なんて、後でいくらでもできる！」

「そうはいきません！ ゼロの厳命なのです！」

埒があかない。ライは迷わずあの力を解放した。

「ライが命ずる。黙って僕を見逃せ！」

程なくして、団員の瞳に鈍い光が宿った。

「……はい、分かりました」

返答も聞き終わらず、ライは腹部の激痛に耐えながら医務室を後にした。

○

神根島。

「ここですすでに一つの終焉を迎えようとしていた。

「スザクツ！」

「ルルーシユうううううう!!」

怒りに囚われた二つの銃声が響き、直後、断罪の白騎士が宙を舞う。

ゼロ——ルルーシユは押し倒され、あつという間に拘束された。

「ゼロ!？」

カレンは反射的に飛び出そうとした。しかし、

「ルルーシユだ! 日本人を! 君を騙した男だ! そんな男を助けたいのか君は!」

スザクがゼロ、いや、ルルーシユ・ランペルージに馬乗りになりながら彼を片手で押さえつけ、カレンに怒鳴る。

スザクの手には銃が握られており、銃口はしっかりとカレンに向けられていた。

カレンは思わず立ち止まってしまった。自分の気持ち整理できていなかった。

ゼロの正体がルルーシユ。正直そんなことはどうでもいい。しかし、彼は自分を、自分達を騙していた。

黒の騎士団は日本解放のためではなく、全く違う目的のために命を賭けさせられていた。

いや、そんなこともまだいい。

嘘でもその違う目的と同じぐらい日本解放も大切だと言ってくれば、カレンは迷わずスザクの敵に回れた。

しかし、ゼロは言った。

通過点だと、結果的に日本が解放されれば満足しろと。それは、現在日本解放に命をかけている仲間達や、本気で日本のためだけを考えて散つていった兄を大きく裏切る思想だ。

カレンは後ずさる。逃げようと思つた。もう分からない。なにがなんだか、なにを信じればいいのか分からない。

逃げれば、ゼロはスザクに捕らえられるだろう。スザクの強さは良く理解している。貧弱なルルーシュが一人で逃げられる可能性なんて無い。しかし、それでも構わない。ゼロは兄とは違うのだから。守る必要はどこにもないではないか。

逃げたい。こんな現実嫌だ。逃げたい。逃げたい。逃げたい。

——カレン

彼の声がか心によぎつたのは、そんな時だった。

「ゼ、ゼロから離れて！」

カレンはスザクに銃を向けた。しかし、涙は流れ続けている。手は震えて、それに連動して銃がカタカタと動く。

「ゼロは日本解放に必要よ……必要なの！」

カレンは、怯え、虚勢を張る子供のように叫んだ。

スザクは、こちらに顔だけを向ける。ルルーシユは抵抗していたが、悲しいかな、その抵抗はスザクの腕一本で抑えられていた。

スザクの瞳が冷たく細められる。

「そうか、君もゼロと同じく日本解放が第一目的じゃないんだね」

カレンの唇がかすかに震えた。

なにを言っているのか分からなかった。自分は紅月カレン。兄の意思を継ぎ、日本の解放に身を捧げた女。

「だから。ゼロに裏切られても、そんなに気丈でいられる」

「そんなことは……」

「違うだろ。君がゼロを必要とするのは日本解放のためじゃない。『彼』と『過ごす』ためにゼロが必要なんだろ」

「っ……………」

そんなことは無い、とは言えなかった。

事実、カレンはどこかでその行政特区日本の中で彼と過ごす日常を想像していた。

二人で学校に通い、授業に出て、彼は顔が良いからすごくモテて、それにちよつと嫉妬して、怒って。それを皆が冷やかす。

そして二人で困った顔で俯く。

学校もたまにはサボツて二人で遊びにいくのもいい。

自分は朝早く起きて二人分の弁当を作り、彼からプレゼントでもらつた大きな目のバッグに入れて、ちよつとだけおしやれして、待ち合わせ場所に向かう。

駅前での待ち合わせ。その後はどこでもいい。夏なら海。冬なら映画館でもいい。

ただ会つて、カフェでずつと他愛無い話をし続ける。そんなことでもいい。

もちろん日本解放を目指す以上、黒の騎士団としての活動は続ける。しかし、それは今のように血なまぐさい活動ではない。

普通に学校に通いながら、普通に幸せを噛み締めながらできる、誰も死なない戦い。

そんな日々も良いかもしれないと思つた。

日本解放後の日本ではなくて、行政特区日本でそんな生活が送れるならそれも良いかもしれないと思つてしまつた。

それは本当に一瞬にも満たない間の思考。しかし、カレンは一瞬とはいえ日本解放を妥協し、彼と過ごす日々々に幸せを見た。

「君は前に言つたね。兄のために戦つていると。よく言う、本当は自分が幸せになりた
いだけだろ。だからそうなるためにゼロが必要だった」

スザクの言うことは事実だ。だが、カレンが日本解放を目指す気持ちにだつて嘘は無い。

順序の問題。優先度の問題。ただ、それは気付いてはいけなかったのかもしれない。「違う、私はお兄ちゃんの意志を継いで、日本解放を——」

カレンは言葉を止めた、そして己に問う。

日本解放を望むのか？ 私は本当に「何より」望むのか？

例えるなら、ライの命と日本解放がはかりにかけられたとして、自分は日本解放を選べるだろうか？

答えはノーだ。選べるわけが無い。

「私は……」

兄は違った。兄は本当に何より日本解放を望んでいた。なのに、それなのに……、

「あ、ああ……。私は……」

お兄ちゃんの意志を継いでないの？

自問がカレンの体の全身の力を奪う。しかし、仕方がないとも言える。

その事実、今まで兄の背中だけを見てきたカレンにとって易々と許容できるものではなかった。

カレンにとって、兄以上の男の存在を易々と自認できるものではない。

それほど本気でカレンは兄を愛していたし、兄の背中を追いかけてきた。

「そののながいけないスザク」

と、ここでカレンの思考をかき消すようにルルーシユが口を開く。

スザクは視線だけをルルーシユに向ける。

「いけなくはないさ。間違つてもいい。ただ、その過程であんな風に他人を踏み躪つて。弄んで。それは絶対に許されない」

ルルーシユはその言葉に対して、あざ笑うように息を吐く。

「理想だよ。お前はそうやって理想を生きていく。それは良い。だが、その理想を誰が支持した?」

「……」

「世界は認められたものが理想となつて動く。スザクお前はさつき俺に世界にはじき出されたと言つたな。逆だよ、お前の理想は誰も支持しない。共感しない。真に世界にはじき出されたのは、お前達」だよスザク」

おそらく、スザクにとつてもっとも神経を逆なでするその言葉を聞いても彼は眉一つ動かさなかつた。

「君の挑発には、乗らない……」

スザクは懐から小さな箱を取り出すと、それをルルーシユに押し当てた。

直後、電気がはぜる音。

「ぐあ!?!」

ルルーシユの体が小刻みに震えた。

「ゼロ！」

カレンは走り出す。

「お前は来るな！」

パン！ と、スザクの怒声と共に響く乾いた銃声。

放たれた弾丸は、高速で空間を飛来し、カレンに向かう。

カレンは動けなかった。

「カレン！」

唐突に、カレンは後ろから横に突き飛ばされた。

倒れる過程で見たのは綺麗な銀髪。

「ぐあああつ！」

男の悲鳴が洞窟内に響く。

「ライ！」

ライは、足の腿を撃ち抜かれて地面に倒れ込んだ。

○

ライは医務室から抜け出した後、自分の月下に飛び乗り紅蓮式を追跡した。月下のレーダーを使えば、味方の紅蓮式式の居場所が分かるからだ。

ギアスを使つて輸送機を調達し、この島で紅蓮を見つけ、洞窟に入る。この洞窟は前に来たことがあるので迷わずに進めた。

そして組み伏せられるルルーシュ、銃を向け合うカレンとスザクが見えた。ライは三人に向かつて歩くスピードを速めた。

言いたいことは色々あつた。聞きたいことはいろいろあつた。カレンに、ルルーシュに、スザクに、山ほどあつた。

しかし、カレンに近づいた時、スザクは彼女に対して引き金を引いた。

だからライは、当然の行動を起こした。

「ぐあああつー！」

足に焼きごてを押し付けられたかのような激痛に、ライはたまらず地面を転がる。

「ライ！　なんで!？」

カレンが急いで駆け寄ってきて、ライを助け起こした。

「だ、大丈夫だカレン」

そうは言つても、油汗が止まらない。

下手な強がりなのは明白。しかし、それを通すのが男だ。特にカレンの前では、意地でも通す。

ライは心配そうな顔をするカレンを手で制し、ニッコリと笑つて見せた。

スザクはそんな二人の様子を祭壇の上から見下ろした。

「……」

スザクがルルーシユから身を離し、ゆっくりと立ち上がる。

祭壇の上のルルーシユはもはやピクリとも動かない。どうやら気絶しているようだ。

「ライ、ちようどいい。君もここで……」

スザクの瞳が、尖る。

ライの背筋に悪寒が走る。

それは、自分を完全に敵と見なしている瞳だった。

いままでスザクは黒の騎士団とブリタニアという所属の違いはあれ、こうも完全に敵意を向けて来ることは無かった。

ライだって同様だ。スザクは友達。大切な友達。だから、完全に殺し合いを演じるにはお互い覚悟が足らなかった。

でも、いまのスザクにはその覚悟がある。

へそれでも僕は期待している、僕とライの道が交わることを……

行政特区式典会場。あの惨劇の前、スザクは笑顔でそう言っていた。ライもどこかでそれを望んでいた。

でも、それは……。

ライはキツ、とスザクを睨み返した。

(そうだねスザク。僕たちは交わらなかつた、いままでも、そして、これからはもう二度と……)

お互いの道を繋ぐ導(しるべ)——ユーフェミアはもういない。もはや対なる道を進むのみ。

——そうなつたら、お互い容赦はしない。

それは、まだ二人が敵対する組織に身をおきながらも、大切な友人同士であつた時に交わした最後の約定だつた。

「スザクっ！ お前え！」

カレンの瞳が燃え上がる炎のように激しさを増す。そして彼女はライを守るように前に出た。

ライはそんなカレンの腕をとつさに掴む。

「逃げろ。カレン……」

目の前にいる男は、もうアッシュフオード学園で共に笑いあつた学友じゃない。

枢木スザク少佐。完全なブリタニア軍人だ。

「……歩けるっ！」

カレンがスザクを睨みながら小さく聞いてくる。ライは首を横に振り、

「無理だ。だから君一人で……」

「できるわけ無いじゃない」

そう言うと思っていた。

「カレン。状況を見てくれ」

「……」

「僕の言っていることが分かるね？」

「……あなたは私の上司じゃないでしょ。命令は聞かない」

カレンは、足のスタンスを広く取った。

「私がスザクを抑える——いえ、殺すわ。だからあなたはその内に逃げて」

カレンは右手に銃。左手にナイフを持ち、腰を落とした。いつでも目の前の敵——スザクに飛びかかれる姿勢だ。

スザクは祭壇からゆっくりとこちらに向かって歩き出した。

来るなら来い。スザクの目がそう言っていた

ライは心の中で舌打ちした。

カレンは確かに強い。武術に関しては天才と言ってもいい。しかし、同じ天才なら男のほうが強い。

「駄目だカレン。逃げ——」

その時、咳き込むと同時に真っ赤な血がライの口から溢れた。ライは思わず手で口を押さえ、さらに何度か咳き込む。

ライの体が小さく揺れる度に、口を押さええている手の指の隙間から血がこぼれ、地面に雫となって落ちた。

遅れて、腹部からの激痛。

(ぐっ、腹の傷が完全に開いたか!?)

無理もない。ライは腹を撃たれている。本来なら絶対安静で、こんな風に歩き回るなどもつてのほかなのだ。

「あなたは、私が守る!」

無茶な行動が、自分を心配してのものだと分かっているからなのだろう。カレンはそんなライの様子を見て、今度は迷い無くスザクに銃を向けた。その美しい顔には決死の覚悟が見えた。

「カレ、ン……」

カレンは刺し違えるつもりだ。

しかし、分かっているはず。カレン自身、そのような覚悟で挑んでもスザクには敵わないと分かっているはずなのだ。

「駄目だカレン」

スザクは本気だ。このままでは三人とも捕まる。捕まったテロリストの末路は決まりきっている。ブリタニアは支配の国なのだ。そして、その支配に従わない者への仕打ちには自分が一番良く知っている。

ならば、

ギアス。ライが持ついかなる相手にでも命令できる絶対遵守の力。

これだけは使いたくなかったが、仕方がない。

「スザク！」

スザクの顔がゆっくりとだか、確実にこちらに向いた。

「ライが命じる。スザク！ 僕たちを見逃せ！」

ライはギアスを開放した。しかし、いつも感じられる手ごたえがない。

それどころか、スザクは迷いなくライに対して銃を向けた。

動揺するライの様子を見下ろし、スザクは言った。

「気は済んだかい？」

瞳は正気を保っていた。

「ば、馬鹿な。効いていないのか？」

「ギアスっていうんだろ」

スザクの言葉に、ライは驚かすにはいられなかった。

「対策は知ってる。聴覚に働きかける力なんだってね。それなら、単純に耳が聞こえないようにすればいい」

「聞こえないように、って……」

スザクの耳に注目する。そこには耳栓があつた。

ライは、空いた口が塞がらなかつた。

（馬鹿な、だつてついさつきまで会話を——）

「さつきまで会話をしていたのになぜ？　っていう顔だね。簡単さ、日本の古武術には口の動きだけで相手の言葉を理解する術があるんだ。それを使っている」

思い当たるものがあつた。読心術という相手の口の動きだけでなにを話しているか分かるというものだ。

「僕にはもうギアスは効かない」

「なぜ君がギアスを、この力の存在を……」

「答える必要は無い」

そしてスザクは、狼狽えるライに迷いなく告げた。

「ライ。残念だよ。色々……」

「くっ！」

絶対絶命とはこのこと。

ギアスは使えない。戦術は敵わない。増援は期待できない。

だが……と、体はボロボロでありながらも、ライの明晰な頭脳はあらゆる可能性を提示する。

この三人の中でカレンだけが無傷。そして彼女がその優れた体力を全力で逃げることに費やせば、あるいは、

ライは決断しなければいけなかった。自分の希望など無視した思考で。

「カレン」

ライは、痛みに耐えながら言った。

カレンはその呼びかけに応じて、スザクに目を向けたまま悲しそうに笑う。

「ライ。ごめんね、こんなことに巻き込んで……」

見ているこちらにも辛くなるような本当に悲しい笑顔だった。

だからライはあえて、優しく微笑んだ。

「心外だね。僕は君に巻き込まれたなんて思ったことは無いよ」

喋る度に腹の包帯が湿っていく。意識が朦朧としてきた。急がなければ、最後の機会さえ失ってしまう。

その前に、これだけはしっかりと言わなければいけない。

「君と共に進むと決めたのは、僕だ……」

ライはカレンをジッと見つめた。

愛した女性の姿。最後になると覚悟した。だからしっかりとその姿を記憶に刻む。

「カレン、君が好きだ」

正直な言葉。その言葉で充分伝わった。

黒の騎士団に誘われて良かった。みんなに会えて良かった。カレンと過ごせて幸せだった。全てがその一言で伝わった。

カレンは驚いた顔でこちらに振り向いた。でもすぐに、

「嬉しい……」

本当に嬉しそうに微笑んでくれた。

スザクの足音が近づいてくる。別れの時間は近づいていた。

「ありがとうライ。いまだから言うけど、私もあなたのことをずっと前から——」

カレンが涙をこぼしながら。それでも、気丈に笑顔を作って言う。

しかし、それを最後まで聞くわけにはいかない。

聞いてしまえば、離れないで欲しいと思ってしまう。この先、暗い未来しかないとしても一緒にいたいと思ってしまう。

死ぬまで共にいて欲しいと我侷を言ってしまうことになる。しかし、それらは口に出してはいけない。出すわけにはいかない。

もう、愛する人を失いたくはないから。

(すまない、カレン。僕は)

だから、ライは、

(一度だけ)

カレンの言葉を遮るように、

(君を裏切る……)

“命令”した。

「ライが命ずる！」

力が体に収束する感覚。そしてライはそれを迷い無く解放する。

「カレン！ 今は全力で僕を見捨てろ！」

ギアスの力がカレンに浴びせられ、そして心を陵辱する。

「！」

手ごたえあり。ギアスはしっかりとカレンに植え付けられた。

絶対遵守に例外は無い。

だからカレンはすぐに走り出すはずだった。

「嫌……」

ライは目を見開いた。

なんとカレンは、命令を拒絶するように身を揺らしながら、しゃがみこんだ。

「嫌、駄目。駄目……それは」

（馬鹿な！ 抵抗しているのか!?!）

信じられないことに。カレンは絶対遵守の力に逆らおうとしていた。

「くっ、行けえ！ カレン！」

ライが怒鳴ると、カレンは怒られた子供のように小さくビクツと反応する。

絶対遵守に例外は無い。

カレンはやがて、全力で走り出してライの横を通り過ぎていった。

ライはそれを見送りながら、他人には分からないくらい小さく笑う。

後悔がないと言えば嘘になる。悲しくないと言えば嘘になる。

それでも、最後の最後にライは様々なものを失ってきたこの力で一人の女性を守るこ
とができた。

それだけは満足で、そこに嘘は無い。

（さよならカレン。多分、初恋だった）

ライは目を閉じてもう一度だけ満足そうに笑うと、今度はしっかりと“敵”を見据え
た。

覚悟は済んだ。

「逃がさない。犯罪者は！」

スザクはカレンの後を追おうとする。しかし、

「させるかあああ！」

そこに身体を起こしたライが渾身の力を込めて体当たりを食らわす。

腹が、足が、まるで火炎放射器を浴びせられたかのような激痛に見舞われる。しかし、

ライはそれらを精神力で無視した。

きりもみする二人。ライはなんとか、スザクを押さえつけようとしたが、ハンデは大

きかった。

「ぐあー！」

ライはスザクにうつ伏せに倒され、そして押さえつけられた。

「……無駄だよ。いつもの君ならともかく、今の状態じゃ僕には勝てない」

「くっ、スザクッ！」

顔をガシツと地面に押しさえつけられた。口の中に冷たい土の味が広がる。

「スザク、なぜカレンを撃った」

「……体に穴が二つも空いてるんだ。それ以上喋るとさすがに死ぬよ」

「君の気持ちは分からなくもないが、こんな……」

「分かるものか」

スザクは静かに、しかし怒気が含まれる声で言った。

「大切な女（ひと）を大切な友に奪われた。俺”の気持ちなど”

そして、

「……ライ。君を逮捕する。容疑は国家反逆罪だ」

ライはスザクを振りほどこうと体を動かす。だが無駄だった。

先ほどの体当たりが最後の力だったようで、身体はもうピクリとも動かない。

「ゼロに作戦補佐……この二人さえいれば、俺は……」

「くっ……スザク——」

ライの頭部に重い衝撃が襲った。おそらく、スザクが手刀で首筋を打ったのだろう。

視界がぼやける。景色が、色を失っていく……。

「ルルー、シユ……。カ、レン……」

初めて出来た友達。初めて出来た家族以外で死んでも守りたいと思った女性。

それぞれの顔を思い浮かべながら、ライの思考は暗い闇の中に沈んでいく。

『おやすみ』

そして、

『……おやすみ』

あの声が聞こえた気がした。

①巻 3話『R2 前夜 C』

その男にとつて、学校——アツシユフオード学園の屋上は大切な場所だった。

だから男はあの出来事から一年が経った今でも、定期的にこの場所を訪れるようにしている。

もつとも、その場所が大切な場所だったと思ひ出せたのはごく最近のことだったが……。

「今夜は冷えるな」

男——ルルーシユ・ランペルージは屋上の入口から転落防止用の手すりに向かう途中、通り抜けていく秋の夜風に対してそう評価した。

いや、冷えるのは風のせいだけじゃない。春だろうが夏だろうが、今のルルーシユにはこの屋上が酷く冷えたものに感じられただろう。

辺りは暗い。すでに一般の家庭では家族で食卓を囲んでいる時間だ。

屋上には当たり前のことだがルルーシユ一人しかいなかった。

やけに広く感じた。

かつてここは、よく三人で集まって他愛もない話をしていた場所だった。

『どうしたんだいルルーシュ。元気がないのかい？ 珍しいね』

その時、ルルーシュの背後から声がした。ゆっくりと振り返る。

そこには一人の男がいた。銀の髪、端正な顔立ち、スラリとした体躯。

『本当だ。どんなに落ち込んでてもそれを人に感じさせないのが君だったのに』

そしてもう一人。見覚えのある男が現れた。

くせ毛、栗色の髪、こちらも顔は整っているが隣の男と比べると、多少童顔だった。

「ライ、それにスザク……」

二人はルルーシュにとってかけがえない友人だった。しかし、ルルーシュは分かっている。いま目の前にいる二人は幻だと。

この場所に二人が居るはずがない。なぜなら彼らは遠くへ行ってしまったのだから。『人をなんだと思ってるんだお前達は』

その時、二人の友人の前に立ちはだかるように、自分“が現れた。

自分——ルルーシュは二人に文句を言う。

『俺だつて人間だ。元気がない時だつてある』

まるで子供のようにムキになる自分に、ライは柔らかな笑みを浮かべる。

『そういう時に限つて、見た目だけでも強がるのが君じゃないか』

スザクもそれにつられて笑う。

『そうそう。君は意地っ張りなんだよ昔から』

『スザク。それについて、なにかルルーシユの面白恥ずかしい昔話はないのかい?』

『あるある。あれは七年前の神社の階段で——』

『ば、馬鹿! スザク!』

自分が早足でスザクに詰め寄る。
そして、決まりきった会話を交わした三人は楽しそうに笑って語り合う。少なくとも自分は本当に楽しくて笑っていた。

楽しくて、本当に満たされていた。

(しかし、それは過去のことだ)

そう心で呟くと、三つの影はふっと消えた。

また冷たい風が吹く。

ルルーシユは、改めて屋上から学園を眺める。

ブリタニアの皇帝から記憶を改変させるギアスを受け、ただC・C・を呼び出すために、それだけのために、そんなくだらないことのためにだけに汚された学園。

鳥籠。その比喩はルルーシユ自身が言ったものだが、はまり過ぎていて思い起こすたびに逆に笑みさえ浮かんでしまう。

その鳥籠の中で、ルルーシユは約一年、実験マウスのように偽りの生を謳歌させられ

ていた。

思い出した途端、ルルーシユの顔は苦痛に歪む。身体が痛いわけじゃない。これは心の痛みだった。

奴の——いや、奴らの手のひらで滑稽に踊らされた苦痛。

憤怒など生ぬるい。今にも怒りで顔の穴という穴から炎が湧き出そうぐらいだ。

許せるものではない。許してはいけない。思い知らさなくてははいけない。復讐しなくてはいけない。

——スザク。友を売り払った男に。

——皇帝。全てを奪った男に。

復活したルルーシユ——魔人ゼロの手によつて。

(……が、しかし)

次の瞬間には、その怒りは水を引くように消えていった。

(順序を間違えてはいけない)

いつもそうだった。どんなに怒りに身を囚われていようと、そのことを考えるだけで怒りは潮のように引き下がる。

(復讐より先にナナリー。それにアイツを……ライを助けなければいけない)

ナナリーは妹。ルルーシユの生きる目的。それを奪われた。ならば奪い返さなくて

はいけない。絶対に。

そしてライ。ルルーシユが創設した黒の騎士団の幹部であり、ゼロとしてもルルーシユとしても信を置いていた男。

しかし、ルルーシユはそんなライに対し、意図的ではないとはいえ裏切りに近い行動を取ってしまった。

思い出すのはブリタニアへ連行される途中の、その輸送機の中での記憶。

スザクに捕まったルルーシユとライは別々に監禁された。拘束服を着せられ、猿轡を噛まされ、覆面を被せられた。

そんな中、ルルーシユはライと一度だけ顔を合わす機会があった。本当に一瞬の出来事だった。お互いブリタニアの兵士に挟まれて連行される途中の通路ですれ違っただけ。

ともに目だけが見える覆面と猿轡をさせられていた。だから声を交わすことは出来ない、表情も分からない。

ルルーシユは最初。通路の先にライの姿が見えた時、思わず目を逸らしてしまった。怖かった。聡明なライのことだ。こうなった全ての元凶が自分だと気付いているに違いなかった。

しかし、この場が自分が心を許した数少ない人間との最後の対面になるかもしれない。

い。自分達は遅かれ早かれ処刑される。だから……。

ルルーシユはそう考えて、恐る恐るライと視線を合わせた。

怒りの視線や軽蔑の視線を覚悟した。それは甘んじて受けようと思った。それだけのことを自分はしてしまっただから。しかし、覆面から覗くライの瞳はそんな暗い色に染まっていなかった。

その瞳はとても柔らかかで、とても優しくだった。

それだけではない。次の瞬間、ライの瞼は不規則に動いた。

ルルーシユはすぐに気が付いた。

それは、二人で作った遊びの暗号。瞼の瞬きの短長を1024通りにパターン化しその組み合わせで言葉にする暗号。

ブ ジ デ ヨ カ ツ タ

唾然とするルルーシユの隣を、ライは通り過ぎていった。

蔑視も怒りも無く、その瞳はただ優しくルルーシユ——友の身を案じていた。最後まで。

処刑される可能性にも気付いていたはず、

最愛の人との別れも、その責任が誰にあるかも知っていたはず、それでも……

「最後まで信じてくれていた。案じてくれていた。俺のことを……」

風がルルーシユの前髪を弄ぶ。それでも、ルルーシユは微動だにせずただ俯き続けていた。

その時、携帯の振動音が身体を揺らす。ルルーシユは懐から携帯を取り出し、そのディスプレイを見る。

画面には“Q—1”の表示。指で目元を拭い、一度深く呼吸してから携帯に出た。「私だ」

『カレンです。二、三、打ち合わせしたいのですが、いまよろしいですか？』

電話の相手は紅月カレン。ルルーシユ——ゼロの親衛隊の隊長だった。

「構わない。なんだ？」

『はい。実は……』

二人はそれから数度、事務的なやり取りを交わした。

『では、私たちはこのまま領事館で待機していればよろしいですか？』

「ああ頼む。ところで救出した藤堂達の様子はどうか？」

『やはり一年近くも拘束されていたせいか、体調は万全ではないようです』

無理もないか、とルルーシユは心の中で呟いた。

一年にも及ぶ投獄。しかも、藤堂達は重要な囚人として捕らえられていた。

おそらく一日中、身体すらまともに動かさなかったに違いない。

人間とは動かなければ衰退の一途を辿る。そんな落ちた体力を取り戻すには、どんなに努力をしても数ヶ月はかかるだろう。

「そうか。あまり無理はさせたくはないが、いつでも出撃できるよう体力を取り戻すように言っておいてくれ」

『わかりました』

「では……」

ルルーシユはそう言って携帯を切ろうとする。

『あの……』

再びカレンがなにかを言いたげに口を開いた。

「? なんだ」

『……なにか分かりましたか?』

ルルーシユはその言葉の意味をすぐに理解した。

紅月カレンは友が愛した女性。そして、その友を心から愛した女性。

公式には、ライはブラックリペリオンでゼロと共に死んだことになっている。しかし、そんなことを誰が信じるものか。

事実、死んだとされたゼロは生きていた。だからライも生きている。絶対に。それが黒の騎士団。そしてルルーシユとカレンの見解だった。

しかし、それを完全に信じられる人間などいるだろうか。もしかしたら、もうあの笑顔は二度と見れないのかもしれない。そう不安にならない人間がいるだろうか。

特に彼女はレジスタンスだからよく分かっているだろう。ブリタニアに逆らい、捕らえられた者の末路を。

処刑。

それを完全に否定できるほど、ブリタニアが甘い国ではないことを。

「……いや。私もまだなにも掴んでいない」

それが事実だった。ルルーシュはナナリーの搜索と同時進行でライを探しているが、その行方は掴めていない。

そう考えると、ナナリーはまだ良いのかもしれない。少なくとも絶対生きている。あとは取り戻すだけ。

しかし、ライはどうなのか。

ライは本当に殺されたのか、それとも生きているのか。それを確認する手段と力すら、復活したばかりの今の黒の騎士団には無かった。

「なにか分かったら、お前にはすぐに知らせる」

『はい、お願いします……』

カレンのその声からは虚勢と落胆、そしてわずかな悲しみが感じられた。

誰よりも傍にいて欲しい男の生死が分からないのだ。

そのカレンの苦しみや不安は想像に難くない。普通なら部屋に閉じこもってずっと泣いていても不思議じゃない。

しかし、彼女はそうしなかった。

一度は裏切られたゼロを助け出し。

再び日本解放を目指し。

ライを取り戻そうとしている。

自らの手で全てを果たそうと精一杯、不安と戦いながらしつかりと地に立っている。しかし、ルルーシユは思う。それはとても脆いものではないかと。

カレンは決して強くはない。ただ普通の女性より、ちょっと身体と意志が強いだけ。ただそれだけで心は普通の女性と変わらない。

カレンは、きつとギリギリなのだろう。色々な物を背負いすぎてそれでも虚勢を張ってなんとか立っているのだろう。

ライはきつと生きている。その不確かな希望を支えに、息も絶え絶えで、心をすり減らしながら、ボロボロになりながら。

「カレン。ここから先はルルーシユからの言葉として聞いてくれ」

『? ……なに、ルルーシユ?』

カレンが困惑したような声を出した後、口調を緩めて聞き返してくる。

ルルーシユは静かに、しかし、絶対的な意志を込めて言った。

「ライは絶対に見つけ出し、助け出す」

受話器の向こうで息をのんだような音がした。

「俺が言いたいのはそれだけだ。切るぞ」

『……ありがとう』

電話が切れる。

ルルーシユは手に持った携帯を懐に戻しながら自嘲気味に笑った。

（ありがとう、か……）

そんなことを言われる義理は、少なくともこの件に関して言えば無い。

カレンがライと生き別れになったのは自分の責任なのだ。罵倒されたって文句は言

えない。だというのに「ありがとう」ときた。

「決めたよ、ライ」

だから、ルルーシユは決意した。

「俺はナナリーを助け出す。絶対にだ。そして……」

ルルーシユの瞳に、強い意志の色が宿った。

ライがもつとも望んでいたのは何だ？

それはカレンの幸せだ。しかし、カレンの幸せは当然のことながらカレンとライが揃わなければ叶わないだろう。

だから、

「お前が帰ってくるまでカレンは俺が守る。支える。そして何があつても必ず死なせない。不幸にしない」

ルルーシユは誓う。かけがえの無い友に。

「それが、こんな俺を最後まで信じてくれた、お前に対するせめてもの……」

今夜も、屋上には冷たい風が吹く。そんな中、ルルーシユはいつまでも夜の空を眺めていた。

①巻 4話『ナイト オブ ゼロ A』

『キャンベル卿。あなたの屋敷が完成したそうですよ』

EUの戦線から帰国したとたんに届いたその知らせを受け、ロイはとある場所に来ていた。

肩まで伸びた銀の長髪。線の細い端正な顔立ち。絹のように白い肌は、無駄のない筋肉を包み、その体格は細身ながらも、物腰はしっかりとしていた。

「……か……」

ロイは家と呼ぶには少々抵抗のある建造物を見上げながら呟く。そして、いまだ慣れない白い軍服の襟を締め、なんとなく身だしなみを整えてから改めて歩き出す。

ちなみに、その軍服はブリタニア内において特別な意味を持つものだった。

ナイト・オブ・ラウンズ。

帝国で“一三人”にだけ着用を許された名誉の軍服。

ブリタニア最高にして最強の騎士団、その団員、その騎士、もつと言えばブリタニア軍の中核の一角を担う者の証。

身長は何倍もある門を通り抜けると、広がるのは暖かい日差しと、よく手入れされた

庭園、そして数十人は楽に暮らせそうな、豪勢な屋敷が広がっていた。

「お金つて、あるところにはあるんだなあ」

ロイ・キャンベルは自分がブリタニアのスラム街で住んでいた頃に使っていた、ほつたて小屋と比べて、なんだか虚しい気分になった。

「それにしても……」

グルリと見渡す。

ラウンズとして下賜した領土の中に、自分の意見など一切無視で建てられたお屋敷。装飾は壮観を抱かせるには充分な豪華さを誇るが、どこか古き良き穏やかさを取り入れたかのような、静かな趣を感じさせる。

これ程のお屋敷が半年で完成するとは、ブリタニアの建築技術は素晴らしいの一言だ。

庭にポツンと立つ銅像なんて売ったらいくらするんだろうか？ そんなことを考えながら、公園のような庭を歩き、改めて今日から自分の家になる屋敷に足を踏み入れる。屋敷に入ったら入ったでエントランスホールの広さにまた啞然としつつ、とりあえず任務帰りで疲労がピークなので二階にあるはずの自室で休むことにした。

高級そうな絨毯が敷かれた階段を上りつつ、ロイはなんとなく自分の境遇を振り返る。

スラムで賭けKMFパイロットをしていたところを、なんの因果か皇帝陛下の目に止まり、あろうことか帝国最強の騎士団ナイト・オブ・ラウンズに任じられてから約一年。大出世。貧乏人から貴族へ。しかし、元がスラム出身ということもあり、いくらKMFの操縦技術が優れているといっても、あまり貴族の人達には良い目で見られてはいない。

まあ、そこらへんは仕方がない、とロイは思っていた。

なにせ自分は苗字すら持っていないような地位だったのだ。キャンベルという名もラウンズ就任と同時に皇帝陛下より直々にいただいたものである。

そんなことを考えている内に、自室にと割り振られているはずの部屋に辿りついた。

「……だな」

ロイはドアのノブに手をかけて、それを回さずにピタリと止めた。

部屋の中から心配がしたのだ。一人、いや二人。

使用人？ それともメイド？ という考えが浮かんだが、よくよく考えればそれは無

い。使用人やメイドは明日から来ることになっている。となると……。

(泥棒か?)

ロイは素早く腰に備えてあった銃を取り出す。そしてドアにそつと耳を当て、中の様子伺った。

会話が聞こえる。

内容はよく聞き取れなかったが、中にいるのは二人で間違いないようだ。

(二人か……なら)

静かに深呼吸し、ドアノブを持つ手に力を入れる。

ロイは勢いよく扉を開く。同時に、銃を構えてなだれ込むと、即座に中の人物に照準を合わせた。

「動くな！」

部屋には予想通り二人。その二人は銃を突き付けられても、特に驚きもしない。それどころか、

「よお、ロイ。先にお邪魔してるぜ」

「……お帰りなさいロイ」

と、優雅に椅子に腰掛けてティーカップ片手にロイを迎えた。

その二人を、ロイはよく知っていた。

「ジノ！ それにアーニャ!?!」

一人はジノ。ジノ・ヴァインベルグ卿。

金髪碧眼の顔が整った美男子。黙っていれば二枚目だが口が開くと三枚目になる。

見た目は一見すると長身の優男だが、そこはナイト・オブ・スリーの称号を持つ騎士。K

M Fの腕前は半端ではなく、特に愛機“トリスタン”を駆つての空戦に持ち込まれたら彼の右に出るものはいない。

そしてもう一人はアーニヤ。アーニヤ・アールストレイム卿。

ピンクの髪に、虚ろな瞳の少女だ。少々感情表現の波が穏やかではあるが、付き合つていれば悪い子じやないのはよく分かる。彼女もれっきとしたラウンズで、席次はシックス。史上最年少でラウンズになっただけあつてK M Fの扱いは大人顔負けだった。

「おいおい、なんだなんだ銃なんか持つて。泥棒でも出たのか?」

「二人とも、来るなら来るって言つてくれればいいのに」

ロイはほつとしつつ銃を下げた。

ジノにアーニヤ。この二人は、貴族でありながらスラム出身のロイに分け隔て無く接してくれる数少ない人物で、ラウンズの仲間であり、同僚であり、友人だった。

「台所を借りたぞ」

ジノはそう言つて軽く手を振り、多分自分で持つてきたと思われる紅茶を口に含む。

「あ、うん。それは構わないけど……」

「とりあえず、その銃をしまえよ。無粋なものはせつかくの紅茶を不味くする」

「分かつた」

ロイは、抜き身になっていた銃を慣れた手つきで腰のホルスターに戻した。

「でも、どうしたのさ急に……?」

「私は野暮用。アーニヤはロイに会うって言ったら勝手に付いてきた」

と、ジノは隣のアーニヤを見て、ニヤリと悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「将来の自分の家になるかもしれないから、見ておきたかったんじゃないの」

「……ジノ」

ニヤニヤ笑うジノ。アーニヤは咎めるような視線を向けた。

ロイはよく意味が分からなかったが、自分の屋敷を気に入ってくれたのかな? と解

釈した。

「アーニヤはここに住みたいの? 僕としては大歓迎だけどね」

「えっ……」

ロイの言葉に息を飲むアーニヤ。そして、

「本当?」

と、何かを期待するような瞳をロイに向けた。

対して、ロイは笑顔でこう答えた。

「ああ、いつでも『泊まり』に来てくれて構わないよ。どうせ、部屋なんていくらでも余ってるし。なんなら友達も連れてきてくれ」

「泊まり……」

すると、アーニヤはなぜか落胆したように、小さく息を吐いた。

「? どうしたのアーニヤ?」

「……別に、なんでもない」

ふて腐れたように唇を尖らせ、紅茶を口に含むアーニヤ

「泊まりでも結構凄いなと思うぞ私は。あつ、でも明日から使用人も来るんだつたな。

だつたら大したことでもないか」

と、ジノが心底楽しそうに笑う。

「ジノ。笑いすぎ」

アーニヤが、再び不満げな口調でジノに言う。

ナイト・オブ・ゼロ。

ラウンズでありながら、*“存在しない”*ゼロという名を持つ男——ロイ・キャンベル

は自分の銀髪を掻きながら、二人のやりとりにはてな、と首をかしげたのだった。

○

席に座り、アーニヤからティーカップを受け取るとロイは優しく微笑んだ。

「ありがとうアーニヤ」

アーニヤは、無言で頷いた。

「今回の任務では、私達が帰った後も、大活躍だったそうだな」

ジノはテーブルの上に出されたクツキーをボリボリ豪快に食べながら言った。
「ジノ……。喋るか食べるかどっちかにしたら？」

ロイは、友人に対して咎めるように言った。

食事会のとときかは見惚れるぐらい優雅な所作で食べるくせに、こういうところではスラム出身の自分が呆れるような食べっぷりである。

もつとも、ジノに言わせれば、自分はスラム出身の割に貴族みたいな仕草が板に付きすぎていて、逆に異様らしいが……。

「おお、悪い悪い」

紅茶で口の中のクツキーを流し込むと、ジノは改めて口を開いた。

「でも、今回は凄かったよな。EU相手にスザクと二人で大暴れ」

ジノの言葉に、アーニヤが付け足す。

「……青い聖騎士（ブルーパラディン）」

「青い聖騎士」とはロイの二つ名だ。約一年間のラウンズとしての戦いで、いつの間にか敵からそう名付けられていた。

自分から名乗るならともかく、敵が名付けたにしてはやけに綺麗な言葉を使うものだと最初は笑ってしまったものだ。

「やめてくれよ二人共。っていうか、僕のあげた功績なんて君たち二人が今まで築き上

げてきたものに比べたら……」

と、ロイは伏し目がちに息を吐く。

それを見たアーニヤは、手に持ったティーカップをカチャリと鳴らしてテーブルに置いた。

「ロイ、もしかしてまた何かされたの?」

「えっ」

「どうなの?」

目を細めるアーニヤ。その瞳には軽い怒りの色が浮かんでいた。

(……鋭いな、この子は)

軽く感心する。

実を言えばロイはここ最近いじめ、というか陰湿な嫌がらせを受けていた。

やはり、平民以下の立場にいたロイが、一気にブリタニアでも最高峰の地位であるラウンズに就任することを快く思わない人は多い。

弱肉強食。実力主義が国是のブリタニアにおいては、力が全てであり、力を持っていない者は敬意を払われて当然なのだが、ブリタニア人の全員が全員それでロイの大昇進を納得できる訳もない。

仕方がない。元々軍で頑張っていた人たちから見れば自分はただの成り上がり者。

分かりやすく一般企業——会社で例えるなら、社長が社員でもなかった一般人をただ気に入ったからという理由だけで、いきなり幹部にしまったようなものだ。

その会社内で長年その幹部を目指してきた人たちや、社員はさぞかし面白く無いだろう。

だからといってラウンズである上に実力もあるロイに表立つて文句を言う者などいるわけもなく、必然的にその文句は裏、つまり陰湿で陰険なものになる。

「心配してくれてありがとう、アーニヤ」

そう言つてロイはアーニヤの頭を軽く撫でる。

アーニヤは特に抵抗することもなく、その差し出された手を受け入れた。

「でも大丈夫。君みたいに僕のために本気で怒ってくれる人もいるし。それに……」

ロイは、正面のジノに目を向けた。

「僕を気に掛けてちよくちよく会いに来る悪友もいるからね」

「おいおい。悪友とはひどいな」

と、口では文句を言つていても顔は笑っている。どうやら、悪友というのは彼にとつてまんざらでもないようだった。

「……」

アーニヤはまだ納得がいていない様子だったが、

「分かった……ロイがそう言うなら」

と言って、紅茶を一口含んだ後、話題を変えた。

「ロイ。ラウンズの生活には慣れた？」

「ああ、アーニヤにも手伝ってもらったし。お陰ですっかり慣れたよ」

「……良かった」

「良かったなアーニヤ。お礼に今度遊園地連れてつてくれるつてよ。もちろんロイの奢りです」

唐突にジノが訳の分からないことを言い出した。

「ジノ」

ロイは、ジノに咎めるような視線を送る。

別にアーニヤに奢るのが嫌なわけじゃない。

アーニヤは自分がラウンズに入ってからしばらく世話係に任命された経緯もあって、本当に良くしてくれた。

だから、一回や二回ぐらいむしろこつちからお願ひして、奢らせてほしいぐらいである。

しかし、アーニヤは見た目こそ幼いが、まごうことなき誇り高きラウンズ。このような子供扱いな物言いは、アーニヤが不快に思うだろう。

「んっ、なんだ？」

「なんだだつて、君ね……」

ロイがジノに文句を言おうとした時、クイツ。

と、ロイは軍服の裾を引つ張られた。振り向くと、アーニヤが、「本当？」と呟きながら小さく首をかしげていた。

ロイは熟考した。

あれ？ まさか？ もしかして……。そう思つておそろおそろ聞いてみる。

「い、行きたいのかい？ 遊園地」

誇り高きナイト・オブ・シックスは、コクリ。と小さく可愛らしく頷いた。

ロイは、再び熟考。

「……分かった。今度一緒に行こう」

「うん。約束」

そう言つて、アーニヤは手の小指を立ててこちらに突き出してきた。

ロイは迷わず、その小指に自分の小指を絡ませると、

「指きりげんまん。嘘付いたら針千本のくます……つてあれ？」

リズム良く歌つてる途中で歌を止めた。

なぜかは知らないが、アーニヤは無言で、しかも奇妙な物でも見るような顔でこちらを見ていたからだ。

「アーニヤ？」

「……ロイがこれを知ってたのが意外だった」

そう言ったあと、アーニヤは指きりの歌をあまり緩急の無い口調で歌い、

「指切った」

と絡めていた指を解いた。その後、改めてこちらに戸惑いがちな視線を向ける。

「これは、私が最近ある人から教えてもらったもの。だからそれをロイに教えてあげようと思ったんだけど、ロイはすでに知ってた」

「あ、そうなんだ」

「どこで、知ったの？」

そう聞かれて、ロイは返答に困った。なんで、自分がこの歌を知っているのかが分からなかったからだ。

過去に誰かに教えてもらった記憶もなければ、書物などで読んだ覚えもない。

それでもアーニヤに小指を出されたら、体が勝手に反応し、無意識にその歌の歌詞が頭に浮かんだのだ。

「そうだね。なんでだろう、不思議だ……」

ロイが腕を組んで悩んでいると、

「そんなのどうでもいいだろ〜」

と、ジノが立ち上がって、こちらに歩いてきた。

ジノはそのまま長い腕をロイの肩に回してもたれかかる。長身のジノにこれをやられると結構重い。

「ジノ、重いんだけど……」

「で、遊園地はいつにする？ 私にも予定があるからな。決めるなら早くしてくれよ」

「ジノも来るつもり？」

つまらなそうに、アーニヤが言った。

「当たり前だろ。来なくていいとか、寂しいことは言うなよアーニヤ」

「来なくていい」

「えー、なんでだよ」

「なんでも」

「まあまあ二人とも……とところでジノ。僕に用事があつて来たんじゃないのかい？」

「あつ、そうだった」

と言つてジノは自分の席に戻る。カップに残っていた紅茶をグイツと飲み干して、

「単刀直入に言おう。私と一緒にエリアーに行かないか？」

「エリアー?」

その名を聞いて、ロイの頭に真っ先に浮かんだキーワードがあった。

「ああ、あの『日本人』の」

元日本。今現在、色んな意味でもっとも熱いエリア。ロイが頭の中で日本に関する過去の事件。現在の情勢等を検索し、思い起こしている。

「ロイ……」

と、アーニヤがなにやら複雑な表情を浮かべながら呼びかけてきた。

「んっ、なんだいアーニヤ?」

「『イレブン』の呼び方」

「……あっ」

ロイは、ハツとした。

「まっ、ラウンズとしてはマズイわな」

ジノも、微笑みを浮かべながら、やんわりと言った。

旧日本——現在エリアー。

旧日本人——現在イレブン。

これは、簡単に言えば国の決定事項。そして、軍人はその国の決定に従うのが当然。

ましてやその軍の中核の一角を担うラウンズが、その国の意思決定を些細なことは

いえ守らないというのは言語道断である。

軍で地位を得たものは、その地位に見合うだけの範を示さねばならない。

が、しかし。この二人の友人が心配しているのは、そんな範とか、規律の遵守とかそういうものではない。

そもそも目の前の二人はそんなことに拘られない。ジノもアーニヤもさすがに公の場では、しっかりと軍の規範を示すが、プライベートともなれば、

『日本？ 日本人？ 呼び方なんてそんなの分かればいいんじゃない？』といった感じだ。

だが、先ほども言った通り。ロイは実力はあるながらも出生、そして出世の経緯から軍内部で反発を受けやすい立場にある。

呼び方一つ取つても、そういう人たちにとってロイを中傷する絶好の材料になりかねない。その点を二人は心配してくれているのだろう。

「そうだね、ちゃんとそう呼ばないと……」

そう言つてロイが、何気なく言い直そうとしたとき、

——違う！ イレブンじゃないっ！ 日本人だ!!

唐突に。本当に唐突に、そんな誰かの言葉が頭をよぎつた。

「どうした？」

「いや、そのイレブンって呼び方、誰かが凄く嫌がっていたような気がするんだ……」

「そりゃあ沢山いるだろう。イレブンなんて特にそうだろうし」

「いや、なんていうか、もつと身近に……」

「イレブンの知り合いでもいるのか？」

「……いや、いない」

ジノの問いをロイはキツパリと否定した。

人を記憶することに関しては自信がある。だから断言できる。

今までイレブンと出会ったことはない。もちろん、スラムで生活してる時にもその様な知り合いはいなかった。

しかし、なんとも言えない妙な違和感が止まらない。

「……とりあえず気を付けた方がいい。個人的には分かればいいとは思う。だけど」

「そうだな、私とアーニヤ。あとスザクはもちろん気にしないが……」

「ああ、分かったよ」

それでも、アーニヤはまだ心配そうな顔でこちらを見ていた。

ロイは、そんな少女に優しく微笑む。

「心配はいらないよアーニヤ。これからは気を付けるから」

そう言つてロイはアーニヤの頭を優しくなでる。アーニヤはまた、特に抵抗すること

も無くロイの手を受け入れた。

そんな光景を見ていたジノが、ため息混じりに言った。

「ロイ」

「んっ、何？」

「お前さ。私によくアーニヤを子供扱いするなって注意するけど、傍から見ると、お前が一番子供扱いしてないか？」

「えっ、あつ、ごめん。つい……」

ロイはパツと、アーニヤの頭から手を離す。

「あつ……」

アーニヤはそのロイの手を名残惜しそうに見送った後、ジノにいつもより五割増しぐらいの不満そうな瞳を向けた。

「ジノ。私は構わない」

「スマン。悪かった。そんな目で見ると、ごめんなさい……で、話を戻すぞ。というか戻させてくれ。エリアーの件だが。実は近々カラレス総督に代わって、新たな総督が赴任されることになった」

「あ、うん。その話は聞いたよ。ずいぶんと思いついた人事をされるもんだと驚いた」

「で、それに伴って、エリアーには私とスザクが派遣される」

「スザクが？」

ロイは、声を弾ませた。

枢木スザク。ロイの同僚。そしてナンバーはセブン。

同じ日にラウンズに就任した事がキツカケで知り合った同僚である。

最初、スザクはロイを避けているような態度が多かったが、今ではそんなこともなく、二人はとても仲が良かった。

任務も共にこなす機会も多く、二人で専用機に騎乗して戦っている姿を「ブリタニアの二本槍」なんて呼称されることもあるぐらいだった。

「でも、君やスザクが行くなら僕は必要無いだろう？」

そう言うと、ジノは口元を歪ませながら、

「私もそう思っていたんだがな……」

「ゼロ」

アーニヤがそういうと、ロイの頭に一人の男が浮かんだ。

〈聞け！ ブリタニアよ。刮目せよ、力を持つ者よ！〉

そうやって始まったあの演説を知らないブリタニア人はいないだろう。

魔人ゼロ。黒いマントに黒い仮面。黒一色の出で立ち、まさに魔人の名に相応しい。

その男が、一年の沈黙を破って再び姿を現した。それも、エリアーの総督を殺害するというオマケ付きでだ。

しかし、ゼロは公式には一年前のイレブンの未曾有の大反乱ブラックリベリオンで死んだことになっている。だが復活したゼロが本物かどうかなんてあまり関係が無い。

そう、関係ない。そもそも、ゼロの正体など誰も知らない。だからあの黒い仮面を調達すれば誰だってゼロになれる。

ゼロは象徴なのだ。ただ、ゼロという象徴に見合った力と奇跡があれば、正体が誰であれ、それが日本の救世主、魔人ゼロなのだ。

「話は分かった。けど、それだけでは僕が行く理由にはならないだろう？」

いくらゼロが実力を持ったテロリストであったとしても、それは過去の話だ。

ロイが軽く調べた限りでは、現在、ゼロが率いる黒の騎士団は力を大きく落としてい

る。
やっかいな事と言えば中華連邦の領事館に立て籠もっていることぐらいだが。これも将来的には実は大した問題ではない。

領事館の立て籠もりは長くは続かない。なぜなら、ブリタニアと中華連邦は同盟関係になろうとしているのだ。

そうなれば、流石に中華連邦の領事館だってゼロを追放するだろう。

後は簡単な話だ。敵が——ゼロが中華連邦の領事館外に姿を現した瞬間、ブリタニアの軍の力で蹴散らせばいい。それで終わりだ。

そんなロイの思考を感じたのか、ジノは言った。

「黒の騎士団。何日も経っていない内にかつての力の復活の兆しを見せつつある」

そう言つて、ジノは懐から何枚かの写真を取り出し、テーブルの上に軽く放つた。

写真に写っている人物は、老若男女様々な囚人だった。しかし、ロイはその写真を見てピンときた。

「これは黒の騎士団の幹部の写真だね。確か、僕がラウンズに就任するちよつと前に捕まつたつていう」

「ほう。よく知ってるな」

「まあね。特に、この人には戦術を勉強する上で、何度も世話になった」

そう言つて、ロイは一枚の写真を手を取った。写真には精悍な顔つきをした男が写っていた。

藤堂鏡志朗。黒の騎士団軍事総責任者。

彼が黒の騎士団に入る前、日本軍に所属していたときに起こした敵島の奇跡は、戦術を学ぶ者にとって参考になるべき教訓がいくつもある。

ロイもラウンズになってから、何度もその敵島の奇跡のデータを検証し、多くの戦術

を学ばせてもらったものだ。

「一度直にお会いしてみたかったよ……」

そう、ロイはどこか遠い視線をして言った。

藤堂鏡志朗は一年前のブラックリベリオンで逮捕されたと聞く。

どんなに優れ、尊敬できる軍人でも、そうなってしまうばただのテロリスト。今までのエリアーの総督が冷徹カラレスだったことを考えれば、すでに生きてはいないだろう。

「そうか、なら会いに行こうぜ」

「は？」

ジノの言葉に、ロイはキョトンとした。

「実はここにいる全員、ゼロに奪還された」

「ちよつと待つてくれ。奪還された？」

「ああ、まだ公式発表はされてない。ほんの二時間程前の話だ」

奪還。ということとは、それをしたのはゼロだろう。

確かに、ゼロは前にも一度、ブリタニアに捕まっていた藤堂鏡志朗を強奪したことがある。だがあの時とは状況がなにもかも違う。

先ほども言ったとおり、今のゼロには大した戦力は無い。

いや、というかそれ以前に、

「まだ生きてたのかい。この人たち？」

「知らなかったのか？」

「僕はてつきり、捕らえられた幹部はすでに処刑されているものだとばかり思っていた」というより、そんなことに気を回す暇が無かったと言った方が正しいかもしれない。いくら尊敬できる人と言っても、所詮テロリスト。しかも捕らえられたとなれば、その後迎える道はブリタニアには一つしかなく、それは当然であり必然。

そんな当然なことを気にするより、ロイにはラウンズとして学ばなければならぬこと、身につけなければならぬこと、気を向けねばならないことは腐るほどあった。

「まあ、お前の疑問はもつともだが、その論議はまた今度にしよう。とりあえず話を続けるぞ」

ジノは咳払いして、仕切り直した。

「いくらゼロが過去の団員を救出できたといつても、その戦力は依然大したものじゃない。私が懸念しているのは、もつとブリタニアの私的な問題だ——」

「……分かった。読めたよジノ、君の言いたいことが」

ジノの言葉が終わる前に。ロイは口を挟んだ。

聞けば、新総督就任に伴ってエリアーには大量に文官が派遣されるらしい。

だが、あのエリアはいままでカラレス総督の性格や気質に合う、多数の武官が幅をきかせていた。

古来より、文官と武官は仲が悪いもの。

その上、それを統括する新総督は決断力、経験、統率力に乏しいときている。

結果、導き出されるのは、ブリタニア内部の文官、武官の衝突。それに伴う無意味な派閥の発生。しかも、新総督にはそれを止める力はないため、最悪、自滅と言う名の内部分裂が起こる。

その影響は、黒の騎士団に対抗するブリタニア軍全体の混乱を招き、テロリスト共のテロの多発を許す結果になるだろう。

「察しがいいなロイ。しかし、お前が思っている事態を未然に防ぐことが出来るのが私達ラウンズだ」

ジノが不敵に笑って言った。

意味は分かる。

再び息を吹き返しつつあるテロリストと、対立が目に見えているブリタニア軍内部。

その両方の監視をラウンズがやってのけなければならぬ、とジノは言っているのだ。なぜならラウンズにはそれが出来るだけの地位と権限がある。なにせ、ラウンズは皇帝直属の騎士。そのラウンズの行動、言動はエリアの総督だって無下にできない。

「とは言っても、何事も限界というのはある」

ジノは、軽いため息をつけて言葉が続けた。

「私とスザクの派遣が決まった頃と比べて、エリアー11の変化の波が激しい。んで、どう考えてみても私“一人”だと手があまりそうになつてきた……」

スザクの派遣は決まっているのに、ジノが使った“一人”という言葉。

友情は友情。能力は能力。だから、ロイはハッキリと言った。

「分かるよ。スザクは確かに強いけど、そういう能力はザルだからね」

そういう能力、とは部下の間を取り持ったり、指揮したり、纏め上げる能力のことだ。帝国最強の騎士団。なんて言われているから勘違いされることも多いが、ラウンズとして求められるのは“人を倒す力”だけじゃない。

それはラウンズ入団の必須条件なだけであつて、ラウンズは軍の一角を担う者。いわゆる将校でもある以上、“人を生かす”術を身に着けなければいけない。

しかし、スザクは鼻真目に見ても、そういう能力に恵まれているとは言えなかった。

「そこで、お前に白羽の矢を立てた訳だ。だから行こうぜ。っていうか、来てくれエリアー11に」

ロイは顎に手を添えて考える。

ゼロ復活の放送には、正直に言えば興味を持った。

あの時は、ブリタニアに一時帰国していて、さらに偶然に偶然が重なってラウンズ一同が集合していた時だったから尚更鮮明に覚えている。

——魔人ゼロ。

面白い男だと思う。エリアーにおいて、絶対的な支配者たるブリタニアに反旗を翻し、そして一時的とはいえ日本の王と言える程の勢力を手にした男。

正体は全て謎に包まれているが、なおさらそれが人々にミステリアスな魅力と、探究心を抱かせる。

そして、その魅力には正直ロイも引き込まれていた。

考えれば考えるほど、答えは決まっているようなものだった。

「行ってみよう」

ロイがそう言うと、ジノが嬉しそうな笑顔を浮かべた。

「おお、そうかそうか。それは良かった」

「でも、皇帝陛下が許可を下さるかどうか」

「大丈夫。実を言えばこの話はシュナイゼル殿下が言い出したことなんだ。文武に優れるラウンズをもう一人ぐらい派遣できたらいのにね、ってな。そう言われた瞬間ピーンときたよ。ああ、これはキャンベル卿も誘ってみてはどうか？　って言ってるんだなってな」

皇帝陛下に次ぐ権力を誇っているシュナイゼル殿下がそう言っていたのなら問題ないだろう。

「分かった。出立はいつだい？」

「三日後だ」

「三日後？ それはまたずいぶん急だね。分かった準備しておこう」

「……私も行く」

その時、アーニヤが二人の会話に割り込むように言った。

「え？」

これには、さすがにジノもびっくりしたようで、彼は軽く目を見開き、キョトンとしていた。しかし、すぐに困ったような顔を浮かべて、

「おいおい。一つのエリアにラウンズが四人も行つてどうするんだよ」

「……じゃあジノが残ればいい」

「元々任じられたのは私なんだが……。つてか、今の話聞いてたか？ 一人じゃどう考えても厳しい——」

「ジノ一人なら無理だけど、ロイ一人ならこなせる。問題ない」

「はは……」

冷や汗交じりの苦笑い。そんなのジノを気にせず、アーニヤは言葉を続けた。

「どちらにせよ私も行くか迷ってた。でも、決心がついた」

「え、そうなの？」

ロイが聞くと、アーニヤは小さく頷く。

「うん。あそこにはナナリー皇女殿下が行くことになってるから。だから、お願いジノ」

ジノはやれやれと呟いて肩を竦めた。

「分かったよ。四人ともエリアーに配属していただけるよう、私が陛下とシユナイゼル殿下に頼めばいいんだろ」

こうして、一つのエリアにラウンズが四人も派遣されるという前代未聞の事態がほぼ決定した。

①巻 5話『ナイト オブ ゼロ B』

ロイの新居でのやりとりの後、ジノは用事があると言つてすぐに帰つた。エリアーへの出立に向けての準備など、色々あるのだろう。

準備に関してはロイも同様である。ロイは、アーニヤと二人だけである場所に向かう事にした。二人は、ロイの所有する庶民的な乗用車に乗り込み、キャンベル卿私有地の草原を抜けて、都市部に向かう。

「ロイ」

運転する車の中。助手席に座るアーニヤが携帯をいじりながら話しかけてきた。

「なんだい？」

ロイは視線を前に向けながら答え、左右を気にしつつ高層ビルが立ち並ぶ都市圏の交差点を右折した。

「いつものは？」

「いつもの？」

疑問に疑問で返答したロイだったが、すぐに思い当たる。

「ああ、それなら君の前の収納ラックにあるよ」

するとアーニヤは目の前のラックを空けて、中からあるものを取り出した。

眼鏡だった。ロイの車にあることから分かるが、それはロイの所有物だった。

かなり分厚い眼鏡である。いわゆる牛乳瓶底眼鏡と言われるものだ。ご丁寧にもレンズには渦の模様が描かれている。

アーニヤは大切そうにその眼鏡を取り出し、レンズに「はあく」と息を吹きかけて、備え付けの布で丁寧拭く。

「ロイ。この眼鏡、かけないの？」

「今はいいだろ」

応じて、ロイは苦笑した。この牛乳瓶底眼鏡、実はラウンズ就任式前に皇帝陛下直々に頂いたものである。それも複数個。と言っても、そもそもロイは目が悪くないので眼鏡は必要ない。それにこの眼鏡、実は度が入っていない伊達眼鏡である。

よりにもよってなぜ眼鏡、それも伊達眼鏡を陛下から直接賜ったのかはさっぱり分からない。

とはいえ、陛下直々に賜った品なのでぞんざいに扱うわけにもいかず、とりあえず外に出る時や人前に立つ時はこの眼鏡をかけるようにしていた。

基本的に公務はこの眼鏡をかけてこなすし、例えばラウンズとしての仕事で報道関係のカメラの前に立つ時なんかも必ずかける。

それが、皇帝陛下への忠誠を示すことになるはず、と自分を励ましながら、少々センズに欠ける眼鏡だと分かっていても毎日かけ続けていた。

「似合わない」

正直な言葉に、ロイは再び苦みを感じさせる表情を浮かべた。

「それは自覚してるよ」

「だけど……役には立ってる」

「? どんな?」

アーニヤの意外な言葉に、ロイは耳を傾けた。

この眼鏡は伊達だし、重いし、相手から顔は見えなくなるし……正直に言えば役に立ってない。皇帝陛下からいただいたものでなければ即座に処分している一品だ。それでも、アーニヤはロイの役に立っていると思っっているらしい。

「これをかけると、ロイに寄ってくる女性が少なくなる」

「そうかい?」

「そう。少しだけど」

ロイは首を捻った。ついでに制限速度を少しオーバーしていたことに気付いて、軽くブレーキを踏む。

「でも、それって役に立ってるっていうのかな? 僕としては女性にモテなくなるわけ

だから逆に損してる気がするんだけど……」

「役に立ってる」

「でも——」

「役に立ってる、だからこれ無しで出歩いちゃだめ」

アーニヤは有無も言わさぬ口調でキツパリと告げる。そして、助手席から身を乗り出し、ロイにピカピカになった眼鏡をかけた。危ないので、仕方なく甲斐はメガネがかけやすいように頭を助手席に寄せた。

途端に、ロイの端正な顔が分厚いレンズに覆われて、冴えない田舎臭い感じになる。

それでも、アーニヤは満足そうに「これで少しだけ安心」と頷いた。

運転中に無駄に駄々をこねられるよりはいいか、とロイはしぶしぶ自分の気に入る位置に眼鏡をかけ直した。

目的地はそろそろだった。

○

〃カメラロット〃

元はブリタニア第二皇子シュナイゼル・エル・ブリタニアの直轄であった特別派遣嚮導技術部がスザクのナイト・オブ・セブン抜擢に伴って発展的解消となった研究チームの総称である。

所属は、一応だが皇帝直轄だ。

「さあ、到着」

ロイ達はキャメロットの駐車場に車を止め、その施設の入り口で立ち止まっていた。ついでに、ロイは重たい眼鏡をクイツとかけ直す。

正直、任務帰りで体がクタクタなのだが、エリアーに行く決めた以上、ここにはその事を報告しに来なければいけない。

だが、なぜナイト・オブ・ゼロであるロイが、セブンのチームであるキャメロットにわざわざ報告に来なければいけないのか。

答えは簡単。このキャメロットはロイのチームでもあるからである。

ラウンズは、それぞれが自分専用のナイトメアフレーム開発のチームと、専用の部隊を持つことが認められている。

通常、その部隊や開発チームは、ラウンズに任命された者やそのバックの貴族が全額、もしくは大部分をポケットマネーで賄うのが常だが、スラム街出身のロイにそんなお金もバックもあるはずがない。よって最初はロイの開発チームは国のお金で組織されることになったのだが、国のお金とはつまりは税金であり、税金とは当たり前のことだが国民が納めるものだ。

その税金を、ロイのナイトメアフレーム開発に使用するのは国民感情的にあまりよろ

しくないのではないかという意見が帝国宰相シュナイゼル・エル・ブリタニアから出た。ロイも同感だった。

例えば、ロイが数々の戦場を潜り抜け、星の数ほどの武功を立て、その上でラウンズに就任したなら良い。

それなら、税金で専属チームを設立すると言っても、味方をしてくれる国民もいるだろう。しかし、今もそうだが当時のロイはその実力があまり国民に知られていない。その上目立った武功も無く、知名度も新兵並にしか無い。

そんな奴に税金が、しかも湯水の如く金を使うナイトメアフレームの開発に使われたら、納得がいかない国民の方が多いだろう。

ということ、シュナイゼルの提案と紹介で、ロイはすでに設立されているこの「キヤメロット」を自分のチームとしてスザクと兼用運用してはどうか、となった。

もともと「キヤメロット」はスザクの専属チームとしての発足が決定されていたのだが、当のスザクは文句などなについて言わず、ロイとのキヤメロット兼用を快く承認し、その責任者も、

へいよいよいよいよ。つていうか、君の事は、生体データとか見た時から目を付けてたんだよね。大歓迎

と、むしろ万歳しながら迎えてくれた。

更に、この責任者は本物の天才で、ものの数週間でロイの専用機を作り上げてくれた。それだけじゃない。こここの部署の人たちはスラム出身のロイにもとても良く接してくれた。

だから、ロイが何か任務に赴く時にはすぐにここにその報告に来るし、時間の許す限り電話ではなく直に伝達するのが礼儀だとロイは思っていた。

「さて、入ろうか。僕の相棒は先にここに帰ってきてるはずだ」

ロイの後にアーニヤが続き、二人は入り口をくぐる。

施設内の通路を歩く。途中、見知った研究員が何人かいたので、二人は軽く手を振り、挨拶をしながら進む。

その光景は、少し異常だった。

通常、ラウンズ程の高い地位の人間が来れば研究員達は頭ぐらい下げそうなものだが、ここにはそんなのは一切無い。

なんというか、すれ違う人すべてが親密さが溢れる対応——言い換えれば気軽な対応をしてくる。

この二人はラウンズの中でもキャメロットによく顔を出す方だから、という理由もあるだろうが、上下関係をきちんと明確にする軍の施設としてはちよつと不自然である。

といつても、その不自然さをロイは気に入っているから文句など言わないし、アー

ニヤも同じだった。

「そういえば、ロイは一時期ここに住んでたんだっけ？」

「ああ、ラウンズに入ってから二ヶ月間ぐらいだったかな。会議室にベッドと机だけ運んでね。そういえば私物が増えたのは居候先に引っ越してからだなあ」

そんな会話をしながら、二人は迷わずに施設内を進む。すると、

「あら」

と、廊下の向こうに見知った女性が現れて、すぐこちらの存在に気付いた。

ロイはニツコリ微笑んで、その女性に挨拶をした。

「ただいま、セシルさん」

「ロイ君。お帰りなさい」

その女性は、柔らかい笑みを浮かべながら歩み寄ってきて二人を迎えた。

女性の名はセシル・クルーミー。通称「キヤメロットのお袋さん」。

もつとも、それを口に出すものなら、

「私はまだ二十代ですよ。お袋さんとは何事ですか」

と満面の笑顔で言われた後、
「人との正しい付き合い方を教えられてしまう」ので、

要注意だった。

しかし、お袋さんと呼ばれるに相応しい包容力と優しさを兼ね備えた大人の女性だ。

「今日は二人で来たのね」

そう言つてセシルは、笑顔をロイからアーニヤに向けた。

「いらつしやいませ、アールストレイムきよ——」

「ただいまセシル」

セシルが言い終わる前にアーニヤは言葉を挟んだ。セシルはしまった、といった感じで小さく口を開ける。

「……」

アーニヤは無表情のまま、セシルをジツと見続ける。

慌てたような、困つたような顔をして、セシルは取り繕うように言つた。

「お、お帰りなさい。アーニヤちゃん」

「失格」

アーニヤはムツとして言つた。

「失格。セシルにはがっかり」

「すみません。つい……」

頭を下げるセシル。

軽く笑いながら、ロイはその光景を黙って見ていた。

このやりとりについては、話は半年ぐらい前にさかのぼる。アーニヤがこのキヤメ

ロットにロイを訪ねて来た時、ロイがこの部署で軍の階級の垣根を越えた待遇を受けていると知り、

へだつたら、私もここではロイと同じ扱いがいい」

と言い出したのが始まりだ。それからというもの、アーニヤはこの部署、特にセシルに敬語を使われるとご機嫌がすこぶるナナメになる。

「セシル。もう少し努力して」

「……すみません」

シユン、として肩を落とすセシルに、あくまで「階級にこだわらない態度」を「命令口調」で求めるアーニヤ。

その矛盾がなんとも可笑しくて、でも、とても暖かいものに思えて、ロイはあえてアーニヤを止めなかった。

純粋にセシルに迷惑をかけているアーニヤの行動は完全に許容できるものではない。だが、それ以上に、そんなのはどうでもよいと思えるぐらい、光景は微笑ましい気持ちになれる雰囲気溢れていた。

（多分、お姉さんみたいな感じになって欲しいんだろうな……）

ロイは、そう思っていた

アーニヤ・アールストレイム。

その少女のことを、ロイは一年近い付き合いを通して、多少は分かるようになっていた。

アーニヤは、いくら表情が乏しいところはあるとしても、やっぱり女の“子”である。

ロイはアーニヤのことをよく子供扱いするなどは言うが、体だけ見れば子供である。その事実は変えようが無い。それはロイもよく分かっている。

“子”である以上は親がいる。少なくとも親の代わりになる人が必要だ。

アーニヤの家庭とか家族構成を、ロイはよく知らない。

話してくれるのを待つてはいるのだが、今のところそのような様子も無い。だから、アーニヤがどのような人たちに囲まれて過ごしてきたのかは知らない。

けど、これだけは言える。

アーニヤは求めている。親や家族のように接してくれる人を。

だから、自分のことは“兄”と思つて懐いてくれてるんだらうし、セシルには母、もしくは姉を求めているのだらう。と、ロイはそう思つていた。

もちろん。それはロイの勝手な妄想かもしれない。いや、そうである可能性の方が高いかもしれない。でも、ロイには今のアーニヤの可愛らしい我侷を止める理由をどうしても見いだすことは出来なかった。

例え、それがセシルの災難だと分かっていたとしても。

「ところでロイ君。今日はどういった御用かしら？」

ひとしきりアーニヤに注意され終わったセシルは、ロイに弱々しい口調で尋ねた。

○

「という訳で、僕の機体とスザクのランスロットを持っていきたいんですが」

廊下を三人で歩きながら、ロイはエリアーに行くことになった経緯をザツと説明した。

セシルは頷いた。

「分かったわ。それから先の話は、ウチの責任者を交えてお話ししましょうか」

そして、三人はとある扉の前で立ち止まる。セシルは迷わずその扉を開けると、部屋の中の人に声を掛けた。

「ロイドさん。ロイ君が来ました」

「ロイ君？ おやおや、君はいつもちようどいい時に来るね」

多くの技術者達が真剣な眼差しでモニターに流れる一般人には理解不能な記号の羅列を見つめている中、一人の男がのっそりと顔を上げて飄々と返答した。

一言で表すなら、それはひよろりとした男性だった。白衣、ロイより薄い眼鏡、にやけた笑みが他人に独創的な印象を与える。

ロイド・アスプルンド。この「キャメロット」の責任者であり天才。ちなみに伯爵

だ。

「つと、これはアールストレイム卿も。いらっしやい」

ロイドはアーニヤの姿を確認すると、手を上げてニツコリと挨拶をした。

アーニヤはロイドに敬語を使われても別に何とも思わないようで、ペコリと小さく頭を下げた。

「ただいまロイドさん」

「おかえりロイ君。いや、ちょうど君に連絡を入れようかと思ってたんだよ。本当、タ
イミングはバッチリだったね」

「? 僕になにか御用でしたか?」

「この子のことさ」

そう言つてロイドが見上げると、そこには二機の——青と白のナイトメアフレームがあつた。

「ランスロット」と「ランスロット・クラブ」。

「ランスロット」の方はナイト・オブ・セブンであるスザクの専用機だ、その外見は騎士が白い甲冑を着込んだ姿を連想させる。

ちなみに、それは美しかった。

人型であつた従来の「サザーランド」や「グラスゴー」さらに言えば現在主力機に

移行しつつある「グロースター」と比べても、それはまさに人型中の人型だった。

人型のロボットではない。人の形をしたロボット。

人型から始まり人を目指したナイトメアが到達した一つの終着点。ランスロットはそう呼べる精巧な機体なのではないだろうか。

この「ランスロット」はスザクの機体。そして、ロイの機体はその隣だった。

「ヴァインセントプロトタイプカスタム」。正式名称「ランスロット・クラブ」。

元は現在「ランスロット」の量産機として先行量産されている「ヴァインセント」のプロトタイプとして開発された機体だった。

しかし、ロイが自分の趣味を詰め込みすぎて、それこそ「ランスロット」並に搭乗者を選ぶ機体に仕上がってしまい、データ採取という名のお蔵入りになっていた。

「クラブ」はそれをロイに最適化し、徹底的に改修した機体である。

改修の過程で、サクラダイトの搭載量を増やし、「ランスロット」と出力はほぼ「同じ」にしている。

「ランスロット」は白い騎士を連想させるのに対し、「クラブ」の方は青と白の装飾が施されロイの二つ名である「青い聖騎士」の名の通り青い騎士を思わせた。

この「ランスロット」と「クラブ」。見た目は似ているが、武装と装備が少し違う。

最も違う点として、「ランスロット」は一騎にて戦況を変える一騎当千的な思想を純

粹に目指しているのに対し、「クラブ」はその一騎当千の思想を引継ぎながらも、指揮官としての能力が高いロイに合わせて部隊と共に行動、言い換えれば部隊を運用する状況を思想に組み込み、胸部の二機のフアクトスファイアの他に、それを補佐するセンサー・レーダー類の搭載が多く成されている。

そのセンサー・レーダー類は頭部に集中して設置されており、その結果、「クラブ」の頭部は「ランスロット」と違い、サイのように大きな角が付いたような形状になつてた。

ロイがクラブを見上げると、それに合わせてロイドが言った。

「『クラブ』の可変アサルトライフルの強化を試みたんだ」

「『クラブ』独自の武装を眩きながら、ロイドは懐から端末を取り出し、画面を表示させてロイに説明しようとした。だが、

「それは後回しにして下さい」

話し出すと長い上司の性格を熟知しているセシルは、ため息混じりに言った。

○

その場でロイが今までの経緯を説明すると、ロイドは「分かった」と頷いた。

「君の出立に合わせて『クラブ』を調整しておこう」

「ありがとうございます」

「でもスザク君の『ランスロット』はちよつと時間がかかるな。あれは後から届けるよ」

「? 『ランスロット』はどこか故障でも?」

「まさか。僕の『ランスロット』が故障なんてするわけないでしょ」

と、ロイドはニマーと口を歪めた。その顔は、自分のお気に入りのおもちゃを自慢する子供のようなだった。

マズイ、とロイドは思った。この顔をした時のロイドは要注意である。なにせ、この顔をした後は『ランスロット』の自慢を永遠と何時間でも話し出すのである。

「いいかいロイ君。そもそも『ランスロット』は一騎でも多数の敵と戦えるように設計されているんだよ。それなのに、途中で故障——」

「この前の模擬戦で、スザク君が頑張っちゃったのよ。ね、ロイドさん」

ロイドの会話がセシルの言葉と笑顔に遮られる。

ロイドは特に気分を害した様子も無く、「あ、うん、そうなんだよ彼、スザク君がね」と言つて話題を変えた。

ロイドは心の中でホッと胸を撫で下ろした。話題が機体が中心となる以外の話になれば、もう安心である。

さすが『キャメロット』のお袋さん。ロイドさんの諫め方もよく心得ているなあ、と

ロイは感心した。

そんな高度な心理的やり取りがあつた事など気付かずに、ロイドは話を続けた。

「スザク君。腕はいいんだけど扱い方が荒いでしょ。だから駆動系の部品が真つ先にダメになる。ま、もつとも、それは『ランスロット』の性能を十二分に引き出している事の証明だからね。こういう修理ならこつちとしても大歓迎だけだ」

ふと、ロイドがその青い瞳をロイに向けた。同時にその顔が子供から、人を見定めるような大人の科学者のものに変つた。

「その点、君は大人し過ぎるね」

「えっ……」

瞬時にはロイドの意図が掴めない。

そんなロイに構わず、ロイドは眼鏡をクイツとかけ直して話を続ける。

「パーツの磨耗率も低ければ被弾率も低いから損傷率も低い。これは君が効率的な戦術を展開している証拠だけど、言い換えれば、『クラブ』の性能を限界まで引き出していないことになる。例えば『クラブ』じゃなくてもフロート付きの『グロースター』でも武装が同じなら今までの君と同じような戦果があげられるんじゃないかな」

「す、すいません……」

それが、自分を咎めているのだと思つてロイは謝罪してしまう。

それを見てロイドは「アハ」と独特の笑い声を上げる。同時にその顔が大人の科学者から、子供の科学者のものに戻った。

「別に咎めてる訳じゃないよ。君の場合、機体の性能を引き出せないんじゃないかと、引き出さないだけだからね。つまり、君を本気にさせる敵がないってことなんだろうし。それに、そういう技量の高い君だからこそ」

ロイドの瞳が怪しく光る。

「どんどん新しい物を与えてみたくなるんだよね」

ロイドは改めて懐から端末を取り出し、表示されていた強化型可変ライフルのページを消して、新しいページを表示させた。

「今のハドロンブラスターを外して、新しく付けてみたいのがあってね」

「新しい武器ですか？」

「ご名答。スザク君の場合、新しい武器を作ったら、慣れるのに時間がかかるけど、君の場合その心配は無いしね。はい、これ」

ロイドから端末を受け取り、ロイドは図案に注目した。それは、すでに「ランスロット」や「クラブ」に取り付けられているハドロンブラスターのようだったが、形状が少しスマートになっており、砲身も細く、長くなっていた。

「ロイドさん。これは……？」

「可変ハドロンプラスチック」

言いつつ、ロイドは身を乗り出してロイドの持つ端末を操作する。すると表示は新しい図案に切り替わった。それはハドロンプラスチックの砲身が引っ込んで半分程に短くなったものだった。

「？」

首をかしげていると、ロイドが説明を始めた。

「これは状況に応じて狙撃型と拡散型に可変可能なハドロンプラスチックでね。ザツと特徴を説明すると狙撃型は通常のハドロンプラスチックより威力が低いけど、貫通性と射程、それに命中精度が向上している。ただ、連射がきかないのは可変ライフルの狙撃モードと同じ。後者は射程が短くて威力も低いけど、その代わり広範囲の敵にダメージを与えることが可能」

「扱いが難しそうですね……」

説明を聞いてロイドが一番最初に浮かんだ感想がそれだった。

そもそも、兵器に可変という思想を取り入れる上で一番のネックがその耐久性だ。銃であれ何であれ、可変という機構を取り入れるとその武器は構造上、耐久性を著しく損なう。

耐久性の低い武器ほど前線で戦う兵士に不評を抱かれるものはない。いくら高性能、

高水準の武器であつても破損、もしくは故障し、いざという時使えないのではただの鉄の塊。

その点を踏まえ、このロイドが開発した可変ハドロンプラスターを見ると前線で戦う兵士であるロイにも、そのような不安が如実に浮かんた。

それでも、これがあくまで地上兵器であるKMFに取り付けられると言ふのならロイもこのような不安はそれほど抱かなかつただろう。

事実、“クラブ”の可変ライフルは頑丈でロイが地上でどのような高機動戦闘を行つても、壊れることなく一度もなく、充分に主であるロイの希望に伝えてくれた。だが、時代とは変わっていく。

フロートユニット。

空において戦闘機以上の機動と高速移動を可能にしたこの新兵器。それはロイの専用機である“クラブ”にも装備されている。

与えられた任務のほとんどを、ロイはこのフロートユニットを取り付けて遂行する。しかし、このフロートユニットが高性能であればあるほど、可変兵器にとってはネックになっていた。

空の高機動戦闘において機体と搭乗者にかかる負担は地上の高機動戦闘とは比べ物にならないぐらい激しい。

例えば、この可変ハドロンプラスターの狙撃モードの長い砲身を展開したまま、少しでも激しい回避行動を取れば、その長い砲身は全方位から重力や風の圧力を受けてねじ曲がってしまうだろう。

いやねじ曲がるだけならまだ良い。最悪の場合、その砲身の重力、空気の抵抗によって思った通りの回避行動が取れず敵の直撃弾を受ける可能性もある。

それをフォローするための拡散モードなのだろうが、この拡散モードにも問題はあつる。拡散モードの有効範囲は確かに広く、砲身も短いから空中で多少無理な機動をしても壊れないだろう。

取り回しが効くという点でも通常のハドロンプラスターより優れている。しかし、データを見る限りその威力には疑問符が浮かぶ、おそらく一発では戦闘機などの小物とはかくKMFレベルの大家物になると、破壊、撃墜は難しいだろう。射程も短い。つまり、拡散モードは通常のハドロンプラスターのようにメインの武器として使うには少々威力が心もとない。

まとめると、この可変ハドロンプラスターは通常のハドロンプラスターに比べ、使える状況がひどく限られる。

性能が一部の状況に優れているよう特化されてはいても、それ以外のあらゆる状況に對しては退化・劣化しているのである。

ハッキリ言えば、こんな限られた状況でしか効果が期待できない武器をつけるぐらいなら、なにも取り付けない方がその分機体が軽くなつて良いだろう。

と、これはあくまでロイ以外の一般のパイロット——騎士の視点を加えた上での評価である。

この兵器をロイだけが使うことが前提なら話は変わってくる。

「確かに、通常のハドロンプラスターと比べて欠点は多い武器だ。でも君なら問題無いだろう」

ロイドの言う通りだった。

一般の騎士にとって優れた武器とは移り変わっていく状況に合わせてオールマイティに使える武器のことを指す。

その観点から言えばあらゆる状況に対応できないこの可変ハドロンプラスターは確かに愚劣な武器と言えるかもしれない。

だが……、

例えば、その移り変わって行く状況を自分でコントロールできる人間にとつてもその武器は愚劣だろうか。

例えば、その特化された武器が一番効力を発揮できる状況を自らの手で作り出せる人間にとつてその武器は愚劣たりえるだろうか。

答えはノーだ。

そして、このロイ・キャンベルは移り変わる状況に合わせて戦うタイプではない。

もちろんその状況に合わせて戦術を展開する能力も大したものだが、このナイトオブゼロの真骨頂はそうではなく、優れた知性と戦闘能力を生かして、自分の望む状況を自分の手で作り出す能力に長けていることだ。

それは知性、戦闘能力どちらかだけに長けていても無理な能力。

つまり、この可変ハドロンブラスタターはロイのような希少であり類稀でありながら強力な能力を持つ者が扱った場合にのみ、それこそ鬼神のような力を発揮する。

ロイは素直に感謝した。

先行量産型の調整やフロートシステムの調整。次世代量産期の開発や“ランスロット”の強化などキヤメロットはそれらの作業でてんでこまいだったはずだ。

それなのにこんな量産性、凡庸性を完全に度外視したロイ専用の武器を作るのは完全な厚意がなければ出来ないことだった。

兵器の開発とは最終的にはその量産が目標に置かれるもの。

ロイドの目的がそこにあったかは別として、あの“ランスロット”だってあくまで量産をみこしたシユナイゼルが開発を許可したものだ。しかし、この可変ハドロンブラスタターはそんなのを一切無視したもの、つまり本当に後にも先にもロイのためだけに作ら

れたものなのである。

「助かります。短期間で僕の専用機を作っていたただけではなく、こんな武器まで」
それを分かっていたから深々と頭を下げた。ロイドは頬を染めて笑顔を浮かべた。

「いや〜。こんな感謝されると僕も照れちゃうな」

「気にすることは無いわよロイ君。キヤメロットはラウンズ二人の担当になって資金面に余裕ができて大助かりなんだから。これぐらいの仕事をするのは当然よ」

キヤメロットの二人は、そう言っただけでそれぞれの顔で微笑んだ。

「アハ。それに、優れたデイベイザーに合わせて改造・改修を繰り返すのは楽しいからね。そういう意味では本当に君達二人は最高だよ」

「? どう楽しいの?」

ロイドの言葉を疑問に思ったアーニヤが言った。

ロイドは「う〜ん。そうだね」と少し考え込んで、

「君たちの感性で言えば、男性が女性に自分の選んだ服を着せる喜びに似ているかもしれないね〜」

と、肩をすくめながら言った。さすが「そういう事」の『概念は知ってるんだあ』と豪語するだけのことはあり、その言葉はかなりの確だった。

「なるほど」

ロイは頷きつつ、そして同時に想像してみた。

例えば、セシルさんみたいな美人に自分が服をコーディネートするとすれば、それは……。

「？ ロイ君、私の顔に何か付いてる？」

ロイの視線に気付いたセシルは、首をかしげながらも笑顔で聞いてきた。

ロイは、少し慌てて答える。

「あつ、いや、セシルさんみたいな美人に、僕の選んだ服を着てもらうのは楽しいだろうなど思っています」

セシルはそれを聞いて少し頬を染めると、ニツコリと微笑んだ。

「あら、お世辞でも嬉しいわ。でも、あまり大人をからかつては駄目よ」

「そんな、お世辞だなんて——って痛っ!？」

その時、右足から激痛がした。ロイは急いで視線を下に移すと、自分の足の上で、小さな足がグリグリとかかかとを動かしたあと、猫のような俊敏さで離れた。アーニヤだった。

「な、なにをするのさアーニヤ!？」

ロイが足を抑え、涙目で訴えると、アーニヤはいつものように涼しい顔で、そつぽを向きながら一言。

「……スケベ」

少しだけ、本当に少しだけアーニヤのその小さなホツペが膨らんでいる気がした。

「へっ？ なに？ どういうこと？ っていうか怒ってる？」

「……別に」

アーニヤの返答は、いつも以上にぶつきらぼうなだった。

「ところでロイ君。ちよつと新武装の運用データを取りたいから。手伝ってくれる？」

ロイドの言葉に、ロイはアーニヤへの疑問は一時置いておいて顔を上げた。

「分かりました。すぐにパイロットスーツに着替えてきます」

「ち、ちよつとロイドさん！」

ロイドとロイの間に入り込んで、セシルが声を荒げた。

「んっ、なに？ セシル君」

「なに？ じゃありませんよ！ 確かロイ君は今日E.U.の戦線から帰ってきたばかりの

はずです。なのにそんな——」

「構いませんよセシルさん」

ロイは笑ってセシルの言葉を止めた。

セシルは心配そうな顔をこちらに向けて「でも……」と呟く。

ロイはさらにニツコリと微笑んだ。

「僕のために作っていただけた武器。凄く興味があります。それに、エリアーに行くまでそんなに時間もないし。少しは慣れておかないと」

それを聞くと、セシルは呆れたような、心配そうな複雑な表情を浮かべた後ため息混じりに言った。

「もう、あなたもスザク君も人が良すぎます……」

「よかったよかった。じゃあ、ロイ君。シミュレーターに」

「分かりました」

ロイは嬉々として準備を始めた。

①卷 6話『ラウンズの象徴』

二時間後。

「ロイ。大丈夫?」

キャメロットの応接室。濡れたタオルを顔に被りながらソファの背にもたれてうなだれているロイに、隣に座るアーニヤは心配そうな声を掛けた。

「大丈夫、伊達に鍛えてないから……。と言いたいけどちよつと休まないとマズイ」

ロイは息も絶え絶えだった。

悔っていた。嘗めていた。あと久しぶりで忘れていた。あの人——ロイド伯爵のデヴァイサーに対するドS体質を。

体はもはや疲れでボロボロ。指一本動かすのも億劫だった。

通常なら、こうなる前にセシルがストップをかけてくれるのだが、不幸にも来客があつたらしく途中で席を空けたため、このようなことになってしまった。

ロイはシミュレーターに入っていたので分からなかったが、二時間空けてセシルが戻ってきた時は凄かつたらしい。

セシルの表情は驚き。怒り。そして笑顔の順で変わり、それを見たロイドは顔を真つ

青にして立ち尽くしていた。

そして、セシルはシミュレーターを強制停止させて、ロイが頼りない足取りでタラップを降りた後すぐにフラリと倒れて尻餅を付くと、急いで駆け寄り、部下にテキパキと濡れたタオルや水を持つてくるように指示した。

しばらくしてロイが活力を取り戻すと、彼女は安心の吐息を漏らした後、すぐにこれ以上のない笑みを浮かべながらロイドの襟首を掴んで個室に引っ張っていった。

その時のロイドの顔が悪戯をして倉庫に押し込められる前の泣きじやくる子供の顔に似ていたらしいが、残念ながら誰もそんなロイドを助けはしなかったらしい。

「あゝ、キツイ」

「でも、こういう練習も必要」

アーニャは心配そうに眉をひそめながらも、正しいことはしっかりと言った。

「……うん、分かっているよ」

天井を見上げたまま同意する。

アーニャが言うことはもつともだった。自分達はスポーツマンじゃない、兵士だ。そして戦場に出た兵士は疲れたから、体力が限界だからといって、敵に待ってもらえない。ない。

医学的にいくら認められないハードトレーニングでも必要なのだ。こういう、限界を

一枚も二枚も越えるような訓練は何度でも何日でも。機会があるなら毎日でも。

アーニヤがシミュレータータートルームにずっと居たにも関わらずロイドの無茶なシミュレーションにストップをかけなかったのは、こころに理由がある。

どんなに厳しくてもシミュレーションはシミュレーション。ミスつても死にはしないんだから、時には体力の限界を超えるまでやるのが本人の、自分のためになる。

例え気絶しようが、吐こうが、骨が折れようが筋肉が断裂しようが、操縦桿が握れなくなろうがやるべきなのだ。

戦場では自分の体がどんな状態でも戦い続けなければいけない。いや、戦い続けてやるといふ気持ちを持ち続けなければいけない。

なぜなら、最後の最後で自身の絶体絶命の状況を救うのは技術でも体力でもなく、どんな状況でも諦めないという精神力なのだ。

この一年、多くの修羅場をくぐってきたロイはそれを分かっていたし、アーニヤもこの年には分不相応のその理論をよく理解していた。

ロイやアーニヤ、そしてジノ、他のラウンズもそういう世界で生きてきた。しかし、それが分かっているだけでも体が痛む、という現実は変わらない。

それはロイもアーニヤも理解している。だから、常に他の軍人の規範となるべきラウンズにしては、少々だらしなくうなだれるロイに対し、アーニヤはなにも言わなかった。

「ロイ！」

その時、唐突に鋭い呼びかけが部屋に響き渡った。

アーニヤではない。声に反応して、ロイが部屋の入り口に目を移すとそこには一人の女性の姿があった。

「エニアグラム卿!？」

反射的に体を起こす。額の上に乗っていた冷たいタオルが床に落ちた。

「おつ、いたいた」

その女性は嬉しそうな声をあげて、ニッコリと笑うと大股でこちらに歩いてきた。

ノネット・エニアグラム。

ナイト・オブ・ラウンズ。席次はナイン。切れるような鋭い目と眉。不敵に笑う口元。全身を覆っているカモシカのような体の筋肉は相手に俊敏さと力強さを感じさせる。性格は大胆にして豪快。付け加えれば性格ではないが剛力。一部の騎士にはその姉御体質から『姉さん』と呼ばれているとかいないとか。

「探したぞロイ。せつかく家にまで出向いてやったのにもぬけの殻だものな。まあ、お前のいそうな場所なんて大体想像は付くが」

黙っていれば綺麗な表情が、瞬時に子供のような大雑把な笑顔になる。ノネットはそのままロイに近づくとその肩をバシバシと叩いた。ロイは思わずせき込んだ。

「とういかロイ。なぜ帰ってきたらすぐに私の所に挨拶に来ない？ 私の家族も使用人も、お前の帰りを首を長くして待っていたというのに」

ノネットはロイの首に腕を回し、そして引き寄せた。ちなみに身長はノネットの方が大きいため、ロイは自然と覆いかぶされる形となった。

この体勢はジノによくやられているから慣れているのだが、ジノとは決定的に違っているものがあつた。

「あ、あのエニアグラム卿。その、当たってますが……つてぶっ！」

ロイは柔らかいものに口を塞がれて、軽い呼吸困難になる。ついでに、かけていたメガネがその柔らかいものに押しやられて、大きく上にずれた。

それを見たノネットの長い眉が動く。同時に、彼女は腕の力を弱めた。

「当たっているのは構わん。それよりお前はまたそのような眼鏡をしているのか？

まったく、綺麗な顔をしているのに見えなかつたらもつたいないじゃないか」

ロイは素早く体を翻して、重たいメガネをいそいそとかけなおす。柔らかいものの衝撃でフレームが曲がったみたいで、眼鏡は少々斜めにかかつていた。

「はは、それはどうも……」

「皇帝陛下よりいただいた品なんだから、大切にしまっておいても文句は言われないうろくに、律儀な奴だな。あつ、そうだ、皇帝陛下にいただいたもので思い出したが、お

前の新しい家。見に行つたがなんだあれは。私が貸してやつていた家のほうが大きいじゃないか」

貸してやつていた、というのはその言葉の通りの意味だった。

ロイはラウンズに就任して二ヶ月程このカメラロットに住んでいたのだが、いくらカメラロットの設備が整っているといつても所詮は研究施設。暮らし続けると困ることも色々あつた。

それを知つたエニアグラム卿が、

『ならウチに來い』と言ひ出して、それに、本気で遠慮するロイの襟首を『後輩が先輩の好意を遠慮するものではないぞ。アハハハ』とむんずと掴んで強制的に家に連れて行き、ヒモ……ではなく居候にした。

それから、約半年以上、ロイはエニアグラム卿の家に居候として、部屋ではなく、家を貸し与えられていた。

「どうせお前のことだから遠慮して、あの程度の家にしてもらったのだらうが、ならわざわざあんな家を建てんでも、私の家に住み続ければよいではないか」

「いえ、いつまでも他人様の家におじやましてゐるわけにも……」

ロイの言葉を、ノネットは「くだらん」と一蹴したあと、何かを思いついたらしく、「つまり、他人様でなければ良いわけだ」

「……へっ?」

「よし。なら、もういつそ婿に来てしまえ。いや、お前はラウンズだったな、ならば私が嫁に行くのもありか。そうなると、私の今の家は親族の誰かにくれてやるとして……」

「あ、あの、エニアグラム卿?」

「お前の家で暮らすのもありと言えばありだな。なに気にするな。どんなに小さくても、住めば都。士官学校のサバイバル訓練の時、コーネリア殿下と道に迷って救援が来るまで三日間過ごしたあの洞窟に比べれば天国だ。大変だったぞ、ウジみたいな虫がそこら中にいてな。その時、殿下が幼子のように怖がるという貴重なお姿と、可愛らしいお顔を見せていただけたのを、私は一生忘れられんよ。アゝハツハツハ、つと話がずれたな」

ノネットはコホンと咳をすると、再び口を開いた。

「というわけでロイ。どうだ」

どうだ、と言われてもロイは苦笑いしか出来なかつた。確かにノネットは文句無しの美人であり、そりゃあロイだって健全な男子である以上、ノネットにある意味当たり前な感情を多少なりとも抱くことはある。

しかし、いくらなんでもそれは話が急すぎるといふか、なんといふか、行き当たりばったりすぎる気がする。

「エニアグラム卿は冗談が上手いですね」

「冗談、だと?」

ノネットの顔がニヤリと歪む。ロイは、ノネットのその獲物に止めを刺そうとする猟師のような視線を受けて、小動物のようにブルツと小さく震えた。

「エ、エニアグラム卿?」

「いいだろうロイ。私が本気だと教えてやろう」

そう言つてノネットがロイに向かつて一歩前に踏み出すと、

ポフツ、とその豊満な胸に何かが当たつて、足を止められた。

ノネットが怪訝に思つて、自分の胸に視線を移すとそこには毛むくじやらかなピンクの物体——じゃなくて、アーニヤの頭が見えた。ちなみにその小さな顔は、その豊満なものの中にすっぽりと埋もれていた。

「なんだ。いたのか」

「……いた」

アーニヤがそう言つて窮屈そうに顔を上げる。それによつてアーニヤの顔の上半分は見えるようになったが、それ以外の大部分はいまだに埋もれている。

「どいてくれないか? 邪魔だ」

「嫌」

「年上には譲るものだぞ。色々と」

「サラサラ無い。そんな気は」

アーニヤは谷間から上へ、対してノネットは見下ろす形で視線を交わせ、そのちよ
ど真ん中で火花が散る。

「……」

しばらく二人は見つめ合いという名の、睨み合いを続けていた。それは永遠に続くか
と思われたが、

「今日のロイ姫には騎士が付いていたか……」

と、ノネットが歩を下げる。多分、ライバルと言っても年下相手に本気になる自分を
見直して興が冷めたのだろう。同時に、柔らかい物も下がったので、ようやくアーニヤ
は圧迫感から解放された。

結果だけ見れば、敵の進行を退けたアーニヤの勝ちである。だが、当のアーニヤは喜
ぶこともなく、今まで強大な脅威に晒されていた自分の頬をさすり、続けて、ふと視
線を下げてなにかを確認すると、

「屈辱。でもいつか必ず……」

と、KMFの模擬戦にコテンパンに負けても浮かべないようなひどく悔しそうな、そ
れでいてほんのちよびつとだけ悲しそうな表情を浮かべ、拳をグツと強く握り締めた。

きつと、彼女はその悔しさをバネに一回りも二回りも成長していくのだろう。多分。そんなアーニヤには気にも留めず、ノネットは改めて口を開く。

「仕方ない。口説くのは今度にするでしょう、今日は違う目的で会いにきたわけだしな」
そして、ノネットは改めてロイを見据えた。

「ロイ。今日はおまえにプレゼントがある」

「へっ?」

ロイが素つ頓狂な声を上げると、その前に紙袋が差し出された。

「エニアグラム卿。これは?」

「いいから開けてみろ」

言われるままその紙袋を受け取り、中のものを取り出すと、ロイは良い意味での驚きで言葉を失った。

「私とお揃いのだ。どうだ嬉しいか?」

それはマントだった。

マントと言ってもただのマントではない、ナイト・オブ・ラウンズだけが着用を許されるあのマントだ。いや、この場合オリジナルは今ノネットが羽織っているので、レプリカと言うべきだろう。

「お前だけマントが無いというのも可哀想だからな。鼻屑にしている職人に仕立てさせ

た。できるのに半年もかかってしまつて、渡すのが就任から大分経つてしまつたが……」

ロイはマントを広げて感嘆の声を上げた。

「あ、ありがとうございます。こんな……」

それは立派なマントだった。裝飾が豪勢で、見ていると目がチカチカしそうだ。

純粹に嬉しい。公務などで、ラウンズが全員揃う時、一人だけマントを付けていないというのを、ロイはなんとなく寂しく感じていたものだ。しかし、そんな気持ちなど一切口に出したことはなかったというのに、この女性は、そのロイの気持ちを汲んでこのようなプレゼントをしてくれたのだ。

ただ、嬉しさと同時に、ロイには一つの心配が浮かんだ。

「ちなみに、これ凄く高いんじゃないや……」

高い。とはもちろん値段的な意味である。

ロイがおそろおそろ聞くと、ノネットは「なに」と言つて軽く笑う。

「大したことはない。悪いが安物だ。そうだな……せいぜい車一台ぐらいじゃないか」

「エニアグラム卿の言う車つて、あのいつも乗り回してるフランスパンみたいに長い車ですか？」

「ハハハッ、面白い例え方をするな」

「スイマセン庶民で」

「早速着て見せてくれ」

「はっ」

ロイはマントを翻し背に羽織る。そして、胸の前にある紐を繋ぎ固定する。

「ど、どうです?」

少し照れながら聞くと、ノネットは満足そうに「うむ」と頷いた。そして、すこし目を細めて笑った。

「やはり、お前には青い色が良く似合う」

「そうですか?」

「ああ。……なあ、似合うよな?」

ノネットが振り返って聞くと、アーニヤは、

「ピンク色の方が……」

と言って何やら考え込んだ後、

「……何でもない」

と、残念そうにため息をついた。流石に、男にピンクは無しだと思っただけらしい。

その時、

「ロイ君。アーニヤちゃん。ロイドさんから、ふんだくったお金で買ってきた個数限定

の高級ケーキはいか、が……」

セシルがお盆にケーキと紅茶を乗せて部屋に入ってきた。その表情は笑顔だったが、「つて、エニアグラム卿!?!」

とすぐに驚愕の表情に変わる。

驚くのも無理は無い。地位的に将官クラスに相当する人物が人知れず、ここにいるのだ。

「よおセシル。邪魔をしている。あつ、ケーキは私の分もあるか?」

しかし、当の本人はあつけらかんとそう言つて楽しそうに笑つた。

○

「ふう……」

ロイは自宅に戻り、足元をふらつかせながらも自室のベッドの上にドサリと身を倒した。同時に、新品のシートからフワツと良い匂いが舞い上がる。

あのあと、キャメロットではエニアグラム卿に散々模擬戦に付き合わされて、

それにロイドさんが大喜びしてデータを採取し始めて、最終的にセシルさんが止めて、その後、アーニヤとは別れた。

アーニヤはここ一年、とある皇族の専属の護衛になったため忙しい。それでも、その合間を縫つて会いに来てくれるので、本当に優しい友人である。

ロイはもう、シャワーも浴びたので、そのまま眠りの世界に旅立とうとした。しかしふと、壁にかけられた青紫のラウンズマントが目に入る。

ロイは思う。

(このマント。僕のため、だろうか……)

睡眠に移行しそうな脳でそんなことを考えた。

ラウンズのマントとは、ラウンズの勲章であると同時に、いまのラウンズである人物を象徴するものでもある。

だから、このマントを羽織れば、それが同じラウンズであるロイでも、あくまでエニアグラム卿のマントを羽織っているロイ。ということになる。

そんなの当然だろう？　と思う人がいるかもしれないが、ロイの場合はそれが結構重要だったりする。

ラウンズ自身を象徴するマント。

玩具とか一般市民が真似て作るとかなら話は別だが、軍人がこのマントを勝手に複製・制作することは認められていない。

しかし、そのラウンズである本人の手でそれが行われれば話は別だ。つまり、本人以外の軍人がそれと同じマントを持ち、羽織るといふその意味は、

『この者はノネット・エニアグラムが認めた男である。文句があるなら、私にも文句を

言っているのと同じだぞ』

という威嚇になるということ。これで、いままでの少々気が滅入るような嫌がらせも減るだろうし、なにより任務においてよく反発を受けていたロイの指示や命令も、多少は軍人や騎士に受け入れてもらいやすくなるだろう。

情けない話だが、ロイはラウンズとして、実力や経験とかそんなものよりなにより、知名度と武勇伝、あと戦果が足りていない。

皇帝に気に入られたからラウンズになれた男、という印象の方が強いのだ。だから、初めて会う軍人や騎士は大抵、ロイを見くびって反発する。

だから、このマントを羽織るといのは色々な意味でロイのプラスに働く。

ノネットの配慮には素直に礼を言うべきだろう。ただ、いつかはこのマントに頼らなくても、信頼されるラウンズになりたい。

そう思いつつ、疲労した体に睡眠という休息を与えることにした。
エリアーへの出立まで、もうそれほど時間は無い。

①巻 7話『作戦 会議』

アーニャ・アールストレイムはナナリー・ヴィ・ブリタニアの護衛任務を自分でも驚くほど楽しんでいた。

というか気に入っていた。任務をではない、ナナリーという人間をだ。

ナナリーとの触れ合いは様々な意味で新鮮だった。護衛という任務はその対象と四六時中一緒にいる事になるので、仲良くなるのに時間はそうかからなかった。

それに、本人達も自覚していないのかもしれないが、二人には淡い共通点もあった。

ナナリーはスザクの事を、アーニャはロイの事を……。

そんな共通の課題・問題を抱える少女達が仲良くなるのは自然な流れでもあった。

いつしか、アーニャはナナリーを皇女殿下ではなく、一人の大切な友達として見るようになった。

と言つても、それはもちろん表には出さない。

アーニャはナイトオブラウンズ。ナナリーは皇女殿下。皇女とその臣下。地位が違う。しかし、お互い裏では友である事を無意識に了承していた。

だから、ナナリーがエリアー行きを決めた時、アーニャは自分もついて行こうと考

えた。

別にナナリーから頼まれたわけでは無い。ただアーニヤ自身が、友の理想のために何か協力したいと思つたのだ。

なぜなら、アーニヤには、そのような理想などなにも無かつたから。

○

ジノ、ロイ、アーニヤの三人がエリアーに出立する前夜。

エリアーの新総督に就任することが決定しているナナリー・ヴィ・ブリタニアが暮らすベリアル宮では、とある会食がセツティングされた。

「では……偉大なるブリタニア、唯一皇帝陛下の御名の下に」

一人の男が上座で音頭を取ると、その場の全員が唱和する。

『御名の下に』

アーニヤもそれに習つて言う。同時に、手に持つた果実酒をグイつとあおつた。

——不味い。

それがアーニヤの素直な感想だった。

酒は、ジノとロイがたまに二人で美味しそうに飲んでいるが、こんなものをがぶがぶ飲んでよく楽しい気分になれるものだ、とアーニヤは思う。

「♪」

当のジノは、アーニヤの隣で、鼻歌交じりで果実酒を飲み干し、美味そうに息を吐いた。

そんなこんなで会食は始まった、メンバーはシュナイゼル、その副官カノン、ナナリー、ジノ、アーニヤ、そして、ローマイヤ。

ちなみに言えば、シュナイゼルとは、あのシュナイゼルだ。

第二皇子シュナイゼル・エル・ブリタニア。

宰相という地位にあり、世界の三分の一を支配するブリタニア帝国の実質ナンバー2に名を連ねる男である。そんな男も、今この場だけは、目の前の腹違いの妹に一人の兄として優しく微笑みかけた。

「大丈夫かい、ナナリー？」

声に従って、アーニヤが顔を向けると、そこには、アルコールのせいで顔をぼつと赤くしたナナリーがいた。

さすがにアーニヤと歳が同じなだけあって、果実酒に対する味の評価は一緒だったようだ。ただ、そのあとの仕草がちがう。

「は、はい。大丈夫です……」

アーニヤはお酒を飲んでも、その苦痛があまり表には出ないが、ナナリーにはそれが如実に顔に出ている。

(……可愛らしい)

と、アーニヤは同性でありながらも、今のナナリーにそのような女性特有の魅力を感じた。顔が赤くなつてそれを恥らう様子など、心を驚掴みにされるような保護欲をかき立てられる。

純粹に、アーニヤは羨ましいと思う。あの魅力はどんなに頑張つても自分には出せないもの。だから、今、自分自身が抱く気持ちと同じ気持ちを、*“あの人”*が自分を見て抱いてくれる事は無いだろう。

「すみません。シユナイゼル兄さま……」

ナナリーが更に恥ずかしそうに手で頬を挟む。シユナイゼルはそんな妹に穏やかな視線を送った。

「恥らう事は無いよナナリー。しかし、君の可憐さはいつ見ても損なう事は無いんだね」
齒が浮くようなセリフをサラリと言うシユナイゼル。

「兄さま……」

ナナリーはそんな兄の言葉に、今度は耳まで真っ赤にさせた。

そんなこんなで、会食は和やかに進んだ。会話も弾み、時には皆の顔に笑顔も浮かんだ。

会食開始から三十分が過ぎた頃。会話の話題はこの場にはいない男の話になった。

「ところで、一つお聞きたいのですが、ナイトオブゼロは来られないのですか?」

シユナイゼルの副官。女性のような外見と気品を持つ男、カノン・マルディーニは首をかしげながら一同に問うた。

「てつきりこちらにいると思っただけですけどいらつしやらないし、遅刻して入ってこられる様子も無いし。個人的にはお会いできるのを楽しみにしていたんですけど……」

艶やかな仕草で、頬に手をあて、残念そうに首を左右に振るカノン。

返答は、そのカノンの一番身近な男、シユナイゼルから出た。

「彼はいいんだよカノン。欠席の理由も聞いてるから」

「?」 そうなのでですか殿下」

「ああ、彼には本当に悪い事をしてしまった。私は詫びねばならないんだろうね、兄としても、弟としても」

と言って、ヤレヤレと首を振る。

そのシユナイゼルの様子を見たジノが、小声でアーニヤに話しかけてきた。

「なあ、アーニヤ」

「なに?」

アーニヤは視線を向けずに答えた。

「何でロイは来ないんだ?」

アーニヤは黙って、メインのヒラメのムニエルの脇に備え付けられたサラダを口に運ぶ。

それでもジノは構わず聞き続けた。

「あいつ、今日は来る予定だったよな？　なのに急に欠席とはどういうことだ？　私は

何も聞いてないんだが……」

「ロイは、来る『予定』だった」

ジノは怪訝そうに眉をひそめた。

「アーニヤ。お前、どうせまた、ナナリー皇女殿下の公務の予定が入ってた昼までロイの執務室にいたんだろ。なんか聞いているのか？」

「……ロイの来れない理由は」

アーニヤは、少々棘のある口調で説明を始めた。

○

話は今日の昼前に遡る。

ロイの執務室は、一見すると図書室に迷い込んだのではないかと勘違いしてしまいうになるほどの学術書に囲まれていた。

しかし、その本は乱雑に置いてあるわけではなく、全て丁寧に整頓されており、棚の外観からも、この部屋の主の几帳面な人柄がうかがえるようだった。

その部屋の一番奥に置かれた執務机の上で、ロイの指が的確にキーボードの上を渡り歩くのを横目で見つつ、アーニヤはソファの上で、分厚い本のページをめくった。

アーニヤは、日課のお勉強の最中だった。本来であれば、ロイが家庭教師のように勉強を見てくれるのだが、今日は自習だった。

それも無理はなかった。

今、ロイは一言で言えば忙しかつた。忙殺されていると言つてもいい。

一ヶ月間の長期任務から帰ってきたばかりなので、その終了報告書を作成しなければならぬのはもとより、急にエリアー行きを決めたのも相まって長期的にゆっくり片付けるはずだった仕事も数日で片付けなければいけなくなつた。

それに、ロイにはナナリーの立ち上げる各種、福利厚生やそれに連なる事業の執務の取り纏めを一手に引き受けてもらっている。

ロイはスラム出身だが一体どこで勉強したのか、その政治的、内務的能力はあのシユナイゼルに「僕の秘書になってほしいぐらいだ」と言わしめる程で、面倒くさくて時間もかかる書類仕事でも文句一つ言わずに、しかも迅速に片付けてくれる。

そのお陰もあって、ナナリーの立ち上げた事業の運営経過もおおむね良好だった。しかし、それらはいつても定期的にギリギリでやっている事だった。

ロイはいつても期限内に追われている。そして今もだ。しかも今日は、明日の朝までに完

成させなければいけない類のものも多かった。

夜にはシユナイゼル、ナナリー両皇族との会食も予定されている。これは、エリアーの情勢に対する対策会議も兼ねての会食なので、執務が終わらなくて出席できないのではシユナイゼル殿下にラウンズとしての資質も問われかねなかった。

「……」

アーニャはまたチラリと、パソコンの光に照らされるロイの真剣な横顔を盗み見た。

分厚い眼鏡をかけているから表情は良くうかがえないが、きつと眉をひそめて唸るような顔をしているのだろう。

ナナリーの手伝いをして欲しいと頼んだ手前、アーニャは常々、ロイの手伝いをしたかと思っているのだが、そうするにはまず勉強から始めなければいけなかった。

全くもって、今まで戦闘技術の習得や戦術ばかり熱心に学んでいた自分に少々呆れるが、だからと言って文句ばかり言っても仕方が無いので、いつかロイの作業の手伝いが出来る事を夢見て、アーニャはここ半年程、熱心に政治学と社会福祉学を学んでいた。

分厚い専門書と格闘していると、たまに意味の分からない単語が出てくるので、その本を一旦置いて、本棚から新たな本を取り出し、その単語の勉強をする。その繰り返し。

アーニヤの前の机に、次第に本がたまって行くのはそういう理由からだった。

「アーニヤ。分からない事があつたらいつでも聞いていいからね」

時々、ロイは思い出したかのように笑顔をこちらに向けてくれる。

アーニヤはそれにコクリと頷いて返答した。

と言つても、実際それをするつもりは無い。それほどロイは忙しいし、邪魔などしたくは無い。

だつたら、自分は家で大人しくしていればロイにとっては一番良いとは思うのだが、そこらへんはここ一ヶ月以上ずっと会えなかつた訳だし、こうやって傍にいるぐらい大目に見て欲しい所だつた。

アーニヤはそのまま、ナナリーの護衛任務にあたる昼までロイの執務室で過ごしていた。ロイは構つてはくれないが、それでも一緒にいるという事実だけでアーニヤは満足だつた。そう満足だつたのだ。執務室に、あの人が来るまでは……。

「ロイ様♪ いらつしやいますか?」

木製の重い扉を勢い良く開けながら、一人の少女が部屋に雪崩のように入り込んできた。

突然の事にびっくりして、ロイは視線をその扉に移す。そして、その人物の姿を確認すると、目を丸くした。

アーニヤと歳の変わらないぐらいの少女がそこにいた。ただ、その地位は全く違う。「あつ、いらつしやいましたわね。ごきげんようロイ様〜♪」

その少女は、ロイを見つけると、嬉しそうに部屋の内へと入っていく。

カリリーヌ・レ・ブリタニア。ブリタニア帝国第5皇女。歳はアーニヤと同じ15。個性的なドレスを翻し、大きな輪が付いた髪留めを愛用している。顔立ちはそれなりに整っており、どことなく妹のナナリーと似ていなくもない。

「こ、これはこれはカリリーヌ皇女殿下」

ロイは素早く机の前に出て敬礼をし、膝を折るとうやうやしく頭を下げる。

ラウンズであり臣下であるアーニヤもそれに習い、即座に頭を下げた。

しかしカリリーヌは、そんなアーニヤを無視して、というか眼中に無いといった感じで前を通り過ぎると、ロイに駆け寄った。

「お顔をお上げになつてロイ様。私とあなたの間柄ではありませんか」

——ただの皇女と騎士の関係。それ以上でも以下でもない。

その言葉が口から出かかったが、アーニヤはグツと我慢した。大変な労力だった。

そんなアーニヤの苦労を尻目にカリリーヌは嬉しそうに言った。

「帰国なさつたと聞いてすぐに飛んでまいりました。でも、次からは会いに来て下さると嬉しいわ」

「申し訳ありませんカーリーヌ様。わざわざ足をお運びいただいて恐縮の限りです」

「いえ、いいんです。ロイ様にも様々な事情があたりでしょうし」

アーニャはそんなカーリーヌを冷めた視線で見つめる。

カーリーヌはどうも、ロイの事を気に入っているらしく、この執務室にも良く来る。そう、アーニャにとって聖域であるこの部屋に来るのだ、この御方は。

(今回は一体何しに来たの、この人……)

そう思いつつ、カーリーヌの猫かぶりの不快さに眉を歪ませた。

猫かぶり。と言うのはその通りの意味である。ここにいるカーリーヌはあくまでロイに好かれようとして、可愛らしく振舞っている。

カーリーヌの本性はそうではない。アーニャは忘れない。かつてこのカーリーヌがナナリーに辛らつな言葉を浴びせた事を。

とは言っても、最近はそのような事は無くなった。だが、それはロイが「ナナリー殿下と仲良くして下さい」と何気なく頼んだからだ。

ロイは何の事情も知らず、ただ、友達のスザクがナナリーと知り合いだと言い、そして、そのナナリーとカーリーヌの歳が同じだからという理由だけで、本当に何気なく言った言葉だったが、流石のカーリーヌも大好きなロイの頼みとあつては軽く受け取る事は出来なかつたらしく、以前のように直に辛らつな言葉を浴びせる事はなくなつた。

だが、心の中では何を思っているか分かったものではない。

かつて、ナイトオブスリー。ジノ・ヴァインベルグはこう言った。

——この国の皇族は結構きついで。

その通りだった。この国の皇族は一部を除き、他の家族を陥れる事を何とも思っていない。

そして、このカーリーヌという皇族はその「何とも思っていない」方の部類に入る。

気は抜けない。特にカーリーヌはナナリーを嫌いに嫌っている。なのでいつ、その矛先をナナリーに向けるか分からない。

そうやって、瞳を鋭くするアーニヤに全く気付かない様子で、カーリーヌはロイを立たせると笑顔で言った。

「ロイ様。積もる話もございましょう。今から私、軽く買い物をしたあとレストランで昼食をとろうと思っっています。よろしければご一緒してくださいませんか？」

「いえ、私は……」

ロイが仕事があります、と言う前に、カーリーヌが口を挟んだ。

「ロイ様、行きましょ。行きましょよろよ」

「いえ、しかし……」

ロイは弱々しく否定を繰り返すが、カーリーヌは一向に引き下がらない。いや、引き下

がらないどころか、むしろ接近している。今にも鼻と鼻が触れ合いそうな距離である。
(……近い)

アーニヤはそう心の中で呟くと同時に、体を起こして言った。

「カーリーヌ様。ロイは仕事中」

その言葉が聞こえたのか、カーリーヌはピタリと止まって。

「なに？ あなた居たの？」

と、こちらに敵意丸出しの視線を向けて面倒臭そうに言った。

アーニヤはそのカーリーヌの赤い瞳を真っ向から見つめ返す。

「いた。しかも朝から」

「そう。別にそれはどーでもいいんだけど。で、あなた何か言ったかしら？」

「言った。ロイは仕事中」

「ふん。お父様の飼い——」

飼い犬が、またこの私に意見するの。とカーリーヌは言いかけてハツとして言葉を止めた。

ここでのお父様の飼い犬。というのは皇帝の騎士であるナイトオブブラウンズの事を指す。かつてカーリーヌはこの言葉をアーニヤに臆面無く言い放ったが、今は口をつぐんだ。

言えないだろう。なにせ今回は、飼い犬は飼い犬でも前回とは違い、隣には大切なナイトオブ라운ズズのロイがいるのだから。

「お、お父様の名誉ある素晴らしき騎士様如きが私に意見するの!」

「……」

卑下と尊敬語が入り混じりすぎて言葉がおかしくなった。

アーニヤは、相変わらざる無表情面で言う。

「カリーヌ様。今ロイは大切な仕事に取り組んでる。しかもそれは明日の朝までに仕上げなければ関係各所に影響を及ぼす物」

「ロイ様は優秀だから私と多少遊んだぐらいでは仕事を遅らせたりしないわ」

「……」

アーニヤは生まれて始めて盛大に舌打ちをする所だったが、これも我慢した。本当に大変な労力だった。

そのまま、戦いは無言の境地へと至った。

視線がぶつかっている。そりゃあもうバチバチと。

ある人の言葉を借りれば、女の「意地の張り合い、せめぎ合い」と言った所だろう。

「あ、あの、二人とも……」

自分の執務室に、なんだか険悪な雰囲気立ち込めていくのを感じたのか、ロイがお

そるおそると間に入ろうとする。

しかし、

「ロイは黙ってて」

「ロイ様は下がって置いて下さい！」

と凄まれて、ロイは何も言えずシユンと肩を落とした。

そんなロイの様子を尻目に、アーニヤは瞳の鋭度を高めて、カリーヌに向き直る。

「カリーヌ様。我侬も程ほどに——」

アーニヤが少々棘を含んだ口調で言いかけた所で、

『キャンベル卿。いらっしやいますか』

という、女性の音声が部屋に響き渡った。

ロイはすぐに机に備え付けてあるボタンを迅速に押すと同時に話す。多少、助かった

という気持ちがあつたのかもしれない。

「キャンベルだ。何か？」

『キャンベル卿にプライベート通信です』

「プライベート通信？」

ロイは怪訝な顔をしたが、考えたからどうなる問題でも無いと判断したのでらう。すぐに返事をした。

「分かったモニターに出してくれ」

『了解しました』

すると、しばらくして、机に備え付けてある小さなモニターにある人物が映った。

ロイは、また目を丸くした。

「オ、オデュツセウス殿下!？」

映し出されたのは、ブリタニアの第一皇子。オデュツセウス・ウ・ブリタニアだった。

『やあロイ。任務から帰ってきたって聞いてね。ああ、変にかしこまった挨拶はやめておくれよ』

それでも、ロイは背筋を伸ばし、恭しく頭を下げた。

オデュツセウスは気分を害した様子も無く、

『律儀な男だね君は。まあ、君のそういう所は好きだよ』

と言つて、軽く微笑んだ。

実を言えばこのオデュツセウスもロイを気に入っている皇族の内の人だった。

『ロイ。良かったらまた私の悩みを聞いてくれないかな。……つて何をしているんだい

カリーヌ?』

オデュツセウスはロイの後ろに引っ付いていた妹を見つけて首を傾げた。

カリーヌはここぞとばかりに元気良くロイに抱きついて言った。

「いまからロイ様とデートに行くんです♪」

「えっ、ちよ、カリーヌ様!？」

素っ頓狂な声を上げるロイを尻目に、画面の中のオデュッセウスは柔和に微笑んだ。

『そうか、それは良かったねカリーヌ。なら、私の件は後回しで構わない。別に急ぎではないからね。悪いが頼むよロイ』

「え、いや、私、自分は……」

ロイはまた「仕事が」という単語を口に出す前に、言葉を挟まれた。

『最近、君のお陰なのか、カリーヌが我俣を言う事もすっかり減ってね、なによりナナリーと仲良くしてくれるようになったのは本当に良かった。昔なんか口を開けば悪口ばかり——』

「お、お兄様! そろそろよろしいかしら!」

慌てた様子で、カリーヌが言葉を挟む。

『ああ、そうだね。邪魔をしてすまない。では、ナイトオブゼロ。ロイ・キャンベルよ。君に我が妹、カリーヌのエスコートを命じる』

命じられてしまった。

これは皇族からの命令だった。しかも、その相手はいくら凡庸と言われていても、ブリタニアの第一皇子。

そんな方から命じられたのだ。それは、その内容はどうかあれあのシユナイゼルに命じられたのと同じぐらいの効力を持っていると考えてよい。

いや、それ以前に、仕えるべき主に命令されたら、騎士の返す言葉は一つしかない。

「えつ、あ、い、イエス・ユア・ハイネス……」

「やったく♪」

と、小さく万歳をするカリーヌの隣で、

「……」

アーニヤは、ため息しか出なかった。

○

「それで、散々カリーヌ様の豪遊に付き合わされて、帰ったら見事に日が沈んでたつて聞いた。それで、今ロイは自分の執務室で一生懸命書類の山と格闘してる」

「それは、それは……」

ジノはアーニヤの言葉に対して苦笑した。

「私も手伝いたいけど……力不足。まだ部隊運用とか、指揮体勢の構築とかのレポートならまとめられるんだけど、それはロイがすでに終わらせた……」

それはつまり、もうアーニヤが手伝える類の仕事は残ってないという事だった。

「ロイ。今夜は眠れないかも」

アーニヤは俯いて言った。

ジノは困り果てた様子で、頭をポリポリと掻いた。

「そうか、それは災難だったな」

「ロイ。今夜は眠れないかも……」

アーニヤは大切な事なので二度言った。

ジノは、そのアーニヤの意図に、はたと気付いた。

「ロイ。可哀想……」

「いや、アーニヤ。こう見えて私も結構忙しいんだよ、昨日も徹夜でさ。眠くて眠くて」

そう言うジノに、アーニヤはそのやや赤めの瞳を初めて向けた。

「可哀想……じゃないの？」

わずかに首を傾げるアーニヤ。

語尾の変化をジノは聞き逃さなかった。

「いや、それは、まあ……」

「ジノは親友。ロイはそう言ってた」

「私だってそう思ってるけど、こればかりは」

「親友だって、言ってたのに。ジノにとっては違う……の？」

そうアーニヤは、どこか悲しげに瞼を歪める。

ジノは……諦めた。

「分かった、分かったよ、後で手伝いに行けばいいんだろ……」

そうジノが言うと、アーニヤは顔を悲しげな表情から、いつも通りの無表情面に戻し、パツとその視線をジノから目の前の料理に戻した。

「そう。ならお願い。私もナナリー殿下を送り届けてから行く」

その表情の変わり様は、ある意味賞賛に値した。

ジノは呆れて、皮肉交じりの笑顔を浮かべた。

「……つたく、ロイと知り合ってから、そういう話術ばつか上手くなったなアーニヤ」

「誉められたと思っておく」

と、ここでジノは「んっ、待てよ」と、

「アーニヤ、お前やれる仕事も無いのに何しに来るんだよ？」

するとアーニヤは少々自信ありげに言った。

「お夜食を作る」

「夜食？ 何を？」

「おにぎりを習った。夜食にはこれが一番」

と言つてアーニヤは、胸の前でおにぎりを握るような仕草をした。

しかし、ジノは、さらに疑問に思った。今までアーニヤがおにぎりなんて作った所を

見たことが無かったからだ。

「だれから習ったんだ？」

「セシル」から」

ジノは少し考え込んで。

「……ほう、それは楽しみだ」

と、またセシル式料理を食べられるのかと素直に喜んだ。

「私は味見した事無いけど、味はセシルが保障してくれた」

この場にロイがいたら、顔が真っ青になっていたに違いなかった。

○

会食も終わり、全員が食後の紅茶を楽しんでいたころ。

「そろそろ、頼もうかな」

と、シユナイゼルがナナリーに視線を送った。

ナナリーは小さく頷き、

「ではローマイヤさん。お願いします」

「はい」

と、静かに返答をしたのは、今まで末席に座り、会食中もほとんど口を開かずに黙り込んでいた淑女風の人物だった。

緑を基調とした服を翻し、彼女がスツと腕を上げると、部屋の隅に立っていた給仕達が一礼して部屋を退出していく。

そして、その扉が完全に閉められた事を確認すると、ローマイヤは口を開いた。

「では、これより現在のエリアー、及び、周辺地域の情勢について説明させていただきます」

ローマイヤが言うと、上から巨大なモニターがゆつくりと降りてきた。

今回の会食の一番の目的が始まろうとしていた。

①巻 8話『ゼロの左腕』

中華連邦の動向と、ゼロが再び姿を現したバベルタワー事件。幹部メンバーが奪還された政治犯強奪事件の説明、検証を終えた後、

「では、次に黒の騎士団の戦力についてのデータです」

と言つて、ローマイヤはモニターを操作する。

「現在、黒の騎士団で使用されているナイトメアは大きく分けて三つ。『月下』と『無頼』、そして『紅蓮式式』」

モニターの表示が切り替わる。黒の騎士団の『無頼』、『月下』、『紅蓮式式』がそれぞれ映し出された。

「『無頼』については、これと言つて特筆するべき所はありません」

「つまり、検証するべきは『月下』と『紅蓮式式』か」

ジノの言葉に、ローマイヤが頷いた。

「この二機は構造上の類似点が多数あります」

「要は同じ機体？」

アーニヤの問いかけは、間違つてはいなかったようだ。

「はい。性能や出力はほぼ同じか。『紅蓮式』の方が少し上。その程度だと思われるます」

「でも、有名だよねクレンちゃんの方は」

「『紅蓮』です」

ジノに容赦無い突っ込みを入れたあと、ローマイヤはモニターに映る『紅蓮式』を手で持った棒で示した。

「この『紅蓮式』は高性能の輻射波動機構を備えており、それが『月下』との決定的な違いになります」

「輻射波動?」

「要は電子レンジだよアーニヤ。チンされちゃうんだ」

「ふーん」

「これは映像を見ていただいた方が早いですね」

ローマイヤが手元のパネルを操作すると、モニターには黒の騎士団の戦闘シーンが映し出された。

『紅蓮式』が地を駆ける。『サザーランド』の銃撃を俊敏な機動でかわし、あつという間に肉薄すると、その身の丈程はありそうな巨大な右腕を振り上げた。

『サザーランド』はなす術無く、その巨大な爪に鷲掴みにされる。刹那、鈍音を立て

て断続的に発生する破壊の衝撃。『サザーランド』の胴体には、マグマから噴出する泡にも似たものがそこら中に浮かび上がる。

次の瞬間。『サザーランド』は爆発炎上し、その炎をバツクに、『紅蓮式』は爪を構え直し、肉食動物の眼のようなメインカメラで次の獲物を探していた。

「これが輻射波動か、実際見ると凄いものだね」

シユナイゼルが驚きの声を上げる中で、

「……」

この場で、おそらく『紅蓮式』の強さを最も良く理解したであろう帝国最強の騎士ナイトオブラウンズの二人は黙ったまま、真剣な眼差しでモニターを見つめ続けた。

「お二方共どうかされましたか？ 質問があるのでしたら——」

怪訝そうにローマイヤが尋ねると、ジノが珍しく真剣味を帯びた口調で、

「その、青い機体は何だ」

「は？」

ローマイヤは映像を止める。見ると確かに、紅蓮式が映し出される隅に青い機体が映っていた。

「ああ、これですか。『月下』の先行量産機、もしくはそれを改修したものと思われま

す」

「こいつも輻射波動を装備していないか？」

「その通りです。興味がおありですか？」

「もう一度最初から流してください」

ローマイヤは「承知しました」と、手元のパネルを操作する。再度、黒の騎士団の戦闘シーンが流された。

映像は主に「紅蓮式」や四聖剣の「月下」が中心になるよう編集されていたが、その隅では確かに青い「月下」の戦闘も多く映し出されていた。

「……怖いねえ」

視線を映像に向けたまま、ジノはポツリと呟いた。

アーニヤが同意と言わんばかりに、

「この青いの。混戦の中「紅蓮式」の背後を守りながら、常に最善最適な手段で敵を撃破している。他の部下へのフォローも完璧」

「二対一ならともかく、指揮官としては戦いたくないな。こいつは自分の部隊の力を何倍にもできるタイプの人間だ」

ジノはその真剣な眼差しを、改めてローマイヤに向けた。

「ローマイヤ。このパイロットの名前は？」

「……しばらくお待ちを」

ローマイヤが手に持ったパネルを操作すると、黒の騎士団特有のバイザーを付けた一人の男が映し出された。

「ライ——別名『ゼロの左腕』と呼ばれた男です」

眼鏡を掛け直ながら、ローマイヤは説明を続ける。

「捕えた団員の証言では、ゼロは作戦立案をする時には必ずこの男に意見を求めたといえます」

「あつ……」

テーブルの一角から驚きの声。ナナリーだった。

「知っているのかいナナリー？」

シユナイゼルが尋ねると、ナナリーはおどおどとした態度で困惑した後、このまま無言ではいられないと悟ったのか、観念したように目を伏せた。

「はい、私が、アツシユフオード学園で過ごしていた頃。その……とても良くしていただいた方です」

「アツシユフオード？ ならもしかして……」

「この人物を逮捕、拘束したのはナイトオブセブンです」

補足したのは、ローマイヤだった。

シュナイゼルは意味深に「ほう」と言葉を漏らす。

「ナイトオブセブンが？　なら、もしかして彼とこのライという少年は顔見知りだったのかな？」

シュナイゼルは、その青い瞳をナナリーに向けた。

「そ、それは……」

ナナリーはサツと顔を曇らせた。

そんな妹に、シュナイゼルは口調を和らげて言った。

「ナナリー。安心していいよ。君が何と言おうとナイトオブセブンの立場が悪くなったりはしないから」

「……」

ナナリーは、それでも多少躊躇して、

「仲は良かったです。それこそ親友のように……」

「そうか、ならば彼はブリタニアのために辛い選択をしてくれたんだね……」

「このライというテロリストは、アツシュフオード学園の生徒ですが、本当の生徒ではなく、あくまで仮入学扱いだったそうです」

「仮入学？」

「はい。身元不明の記憶喪失者だったらしく、それをアツシュフオードが厚意で保護し

たようです」

「なるほど。しかし、なぜそんな少年が黒の騎士団に入団することになったのかな？」

「それは恐らく、『紅蓮式式』のパイロットのせいだと思われます」

「？」

首を傾げる一同を尻目に、ローマイヤが手元のパネルを操作すると、またモニターの映像が変わった。

映し出されたのは、『紅蓮式式』と青い『月下』が前後に並んで戦っている映像だった。

映像の『紅蓮式式』は躊躇無く戦場を猛進し、立ちほだかる敵を撃破している。前に、前に、前に、と。

後ろの事など微塵も気にしていない。まるで、そんな心配は無用と言わんばかりだ。

『紅蓮式式』は敵を蹴散らし、飛び散らせ、ブリタニア軍を蹂躪していく。青い月下はそんな『紅蓮式式』の殿（しんがり）を見事に務めていた。『紅蓮式式』が討ちもらした敵を掃討し、時には『紅蓮式式』の進攻のフォローを行い、紅い背後を守り続ける。更に戦闘と同時に部下に指示まで出しているようで、時折、黒の騎士団の量産機である『無頼』が、的確な援護をこの二機に行っていた。

それは戦闘のプロであるラウンズの二人や、指揮官・戦略家として超が付くほど優秀

なシユナイゼルでも、思わず見入ってしまうほどの手際の良さだった。

「この二機は『騎士団の双璧』と呼ばれ、『ゼロの右腕』『ゼロの左腕』とも称されたコンビでもあり——」

「あつ、もしかして、この二人は」

と、ローマイヤの説明の途中で、なぜかカノンが嬉しそうに言った。

「恋仲だったそうです。『紅蓮式』のパイロットである紅月カレンは、アツシユフォード学園に通い、潜伏を続けながらテロ活動をしていました。その過程で、このライと親しくなったと思われれます」

「なるほど。籠絡された訳ねこのライ君は。いや、分かるなく。私もこんな美人に迫られたら黒の騎士団に入団しちゃうかも」

「ジノ。不謹慎極まりない」

アーニヤが無表情で言い放った後、ローマイヤは「全くです」と言いたげに鋭く氷のように冷たい視線をジノに向けた。

ジノは、ばつが悪そうに苦笑した。

「冗談だよ。ところで、このライってやつ素顔の写真は無いのか？」

ジノは、画面に映るバイザーを駆けた男——ライを指して言う。

ローマイヤの返答は早かった。

「はい」

「なんで？」

ジノが聞き返すと、ローマイヤは困ったように眉をひそめた。

「なんで、と言われましても……。無いものは無いとしか……」

「このナイトメアの動きは只者じゃない。少なくとも、どこかで訓練を受けていると思うんだが。それについては？」

「不明です」

「不明？ おいおい。これほどの腕前なんだぜ。いくら記憶喪失者だと言っても、生体データとか調べれば色々分かるんじゃないの？」

「調査はもちろん行われました。ですが……」

「その情報が提示されていない。という事かい？」

シユナイゼルの言葉に、ローマイヤは、少し躊躇してから肯定した。

「はい。その通りです……」

「その、情報規制も父上——皇帝陛下がご命令を？」

「はい」

「そっか〜」

がっかりして、ジノは椅子の背もたれに体を預けた。

さらに言えば、ジノはどこか納得のいつていない様子だったが「それなら仕方が無いな」と言つて食後のコーヒーを口に含んだ後、不敵に笑つた。

「なら、その面（ツラ）はエリアーで直に拜むとするか」

アーニヤも、ジノに同意とばかりにコクコクと顔を上下させた。

そんな二人を見て、シュナイゼルは興味深そうに、

「ほう、ラウンズにここまで言わすとはね」

「先程はこのパイロツトの事を、怖いとおっしゃつてませんでした？」

カノンの問いに対して、ジノは口元を綻ぼせる。

「怖い、けど戦つてみたい」

「恐怖と興味。それを同時に感じさせる人間か。中々いないよ、そんな人物は」

そのシュナイゼルの言葉に「あの……」とローマイヤが口を挟んだ。

「盛り上がっている所申し訳ありませんが。それは不可能です」

「んっ？　なんで？」

「このテロリストはすでに、この世にいませんから」

それを聞いて、ジノが「はあ？」と、素つ頓狂な言葉を漏らした。

「このライつてやつはスザクが『殺さずに捕らえた』んだろ？　だったら、先日の政治

犯強奪事件で一緒に奪還されたんじゃないのか？」

「いえ、このライという人物に限り、皇帝陛下の御名において、刑の執行はすでに取り行われていきます」

一同の顔に疑問符が浮かぶ。代表してシユナイゼルが不思議そうな顔で尋ねた。

「藤堂を初め、黒の騎士団の主要幹部の処刑をお認めにならなかつた陛下が、このライという人物に限って刑を？」

「はい。すぐに執行を許可されたそうです。刑はブラックリベリオン鎮圧より一週間後、時間も場所も非公開で執り行われました」

「ちようど、スザクがラウンズ入りしたあたりか。それにしても、非公開で処刑とはなぜだ？ 何か理由があるのか？」

「それは私に聞かれましたも……」

ジノの問いに、口ごもるローマイヤ。

その時、ふとアーニヤは何も発言しないナナリーの方を見た。

ナナリーは今にも泣きそうな顔で、ドレスの裾を強く掴んでいた。

(ナナリー殿下……)

アーニヤは、そんなナナリーを悲しげな瞳で見た。

よほど、このライという人物とナナリーは仲が良かったのだろう……。それが、その表情から痛いほど見て取れた。

そんな人物が死んだのだの、死刑にされたのだという話を目の前でされて、平気でいられるほど、ナナリーは自分のように汚れていない。

「もういない人の話は、これ以上必要ない」

一同が会話を止めてアーニヤに視線を向ける。もちろんナナリーも。

アーニヤは、それらの視線がどうも居心地悪かったが、ナナリーの心境を考えればそんなものはなんでも無かった。

静かな時間の後、初めに口を開いたのはカノンだった。場の雰囲気は無理やりにも変えようとしているのか、その口調はやけに明るかった。

「そうです。アールストレイム卿のおっしゃる通り、死んでしまった人間について語り合っても仕方ありませんよ。それに」

カノンはまるで本物の女性ののように艶やかに微笑む。

「いるではありませんか。そんな能力を持つ人間が私達の所にも」
「確かに……」

と、軽く笑ったのはたのは、なんとあのローマイヤだった。

ちなみに、その笑みが今まで見たどの笑顔よりも親密さに溢れていたのを、アーニヤは見逃さなかった。

「おや、また始まったね。カノンのキャンベル卿鼻痕が」

シユナイゼルがヤレヤレとため息混じりに首を振る。それに、カノンはこれまた柔らかな笑みで答えた。

「鼻屑ではありませんわ殿下。正当な評価です」

「そういえば私の親族の中にも、彼を気に入った者が多くいるね」

「そうですわね。恐れながら、カリリーヌ様などはその典型かと」

「はは、ロイ様ロイ様といつも追いかけてるのは知ってるよ。でも、今回の件もあるし、カリリーヌには私から少し諫めの言葉をかけておいた方が良いだろうね」

そう言いつつ、シユナイゼルは壁の時計をチラリと見た。時間はゆうに夜の十一時を越えていた。

「さて、時間も時間だし、これぐらいにしようか」

シユナイゼルは温和なその顔を少々真剣な物に変えた。

「ナナリー。最後に教えてほしい」

「はい。なんでしょうお兄様」

「君が総督に推薦を願いだした理由。そして、どういう総督になるつもりなのか、それを教えてほしい」

「……」

「今までの会議を聞いての通り、今のエリアーは君が以前暮らしていた時と比べその

情勢は大きく変化している。実際、私としても心苦しい。自分は、もしかしたら妹にとんでもないものを押し付けようとしているのでは無いか、と思う時もある」

「いいえ」

ナナリーは首を静かに横に振った。

「シュナイゼル兄さまには感謝してもしきれません。兄さまがお父さまにお口添えをしてくださらなければ、私が総督になるなんて決して無かつたでしょうから」

それを聞いて、シュナイゼルは小さく息を吐いた。

「複雑な気分だねどうも。しかし、私が君を危険性のある場所へ送り込もうとしているのは事実だ。でも、ナナリー。君にはエリアーでやりたい事がある。そうだね？」

「は」

「ならば、せめてそれを教えてほしい。それを知っておくと私も君のサポートをしやすからね」

一同の瞳がナナリーを見つめた。

ナナリーは俯いていた。その指は強くドレスを握り締めている。

そんな妹を見るシュナイゼルの瞳に、少々険しいものが浮かぼうとした時、

「……私は」

ナナリーは気持ち打ちあけはじめた。

○
会食の翌日。

エリアー1に向かう輸送機の中。指揮官用に設けられた質の高い座席の上で、ロイはノートパソコンのモニターを見つめながら、徹夜明けの眠たげな臉をこすった。

(あく。眠い……って、うっ！)

大きくあくびをすると、唐突に昨日食べたイチゴジャムおにぎりその他もろもろが口の外に出たいと騒ぎ出した。

体調は、正直あまり良く無い。

睡眠不足なのも原因だろうが、それ以上に、昨晚アーニヤとジノが仕事の手伝いに来てくれたと同時に練り広げられた、

ドキツ☆ジャムだらけのおにぎり世界大会くブート・ジヨロキアもあるよ☆
のダメージが大きすぎる。

しかし、妹のように可愛がっているアーニヤの厚意を無にする事などできず、勢い良く食べて片付けた。

というか、

へロイ。料理はあんまり得意じゃないけど、頑張って作ってみた。自信は無いけど、食べてくれると嬉しい……

と見てるこつちが悲しくなるぐらい不安そうな顔をして、それでいて拒絶すれば壊れてしまいそうなくらい儂く潤んだ瞳で言われたら、男として食うしかなかった。

「よ、よし。収まった……」

ロイが胸をなでて、不快感を打ち払うと。

「眠そうにしやがって」

と言って、誰かがロイの背中をバシンと叩いた。同時に、またあの言い様の無い圧迫感が胃の底から込み上げてくる。

背中を叩いたのはジノだった。隣には、アーニヤの姿もある。

ロイは、しばらく咳き込んだ後、

「な、何するんだよジノ！ 僕にバスで遠足に出かける小等部の子供のようなあだ名でも付けたいのかい!？」

「んな大げさな」

朗らかに笑う。というか、昨晩は自分と一緒に徹夜だったはずだが、なぜかその顔には気力が溢れていた。

「だ、大体ジノ。君は何でそんなに元気なんだ……」

「うん。やっぱアーニヤの作ってくれたあれのおかげじゃないか?」

「ま、まさか、あれって、あれかい?」

憂鬱気味な表情を浮かべるロイとは対照的に、ジノははつらつと言った。

「やっぱ、セシル式の料理はいいね。なんというか眠気も吹っ飛ぶ程個性のある料理で、体調まで整えてくれたよ」

それはギャグで言っているのか？ と突っ込みたいところだったが、ジノが本気でそう言っているのは良く分かってるので、何も言わなかった。

かつてジノがセシルのバナナとイチゴを牛のレバーで包んでチリソースかけた地獄料理を「うん、中々いける」と言って食べているのを隣で見た時から、ジノについては色々諦めている。

「これからも、アーニヤには日々、セシルの料理をより忠実に再現できるよう日々精進してもらいたい」

「頑張る」

ジノの言葉に、淡々ながらも素直に頷くアーニヤ。

もう、ロイはどうして良いか分からなかった。世界が闇に包まれたような気がした……。

そんな風に、暗い思考を巡らしていたのに気付いたのか、アーニヤは少し不安そうな表情を浮かべて聞いてきた。

「ロイ。もしかして私の料理マズかった？」

「へっ?」

アーニヤは少し躊躇いがちに言った。

「ロイ。なんだか私のおにぎりを無理に食べていた気がする……」

見破られていた。

「あつ、いや、それは……」

「美味しくなかった?」

アーニヤは首を傾げた。

こんな不安そうで、悲しそうな顔をするアーニヤを、今までロイは見たことが無かった。

奥歯を噛み締める。ロイは覚悟を決めた。男には、引くに引けない時がある。

「な、何言ってるんだいアーニヤ。そんな事無いよ。凄く……」

おかしい。なぜ言葉に反して、気持ちがこんなに悲しくなるのだろうか。

「美味しかったよ! 当たり前じゃないか!」

100万ドルの笑顔で言った。

きつと、ここにスザクがいれば、そのロイの健気さと勇氣に感極まって涙を流しつつ、それを称えながら惜しみない拍手を送ったに違いなかった。

「本当?」

いまだ不安そうにアーニヤに、ロイはその笑顔を維持したまま答える。微妙に口が引きつっているのはご愛嬌だ。

「もちろんさ」

ここにきてようやく、アーニヤの顔に微細な笑みが戻った。

「じゃあ、また作る。セシルに習って」

「おう、今度スザクにも作ってやれよ」

「うん、スザクにも作る」

「……」

エリアーににいる友人に、ロイは静かに胸で十字を切った。

この瞬間。ナイトオブセブンとナイトオブゼロは、運命共同体となった。

「ところでロイ。さっきから何を見てるの?」

アーニヤは身を乗り出して聞いてきた。その目線はロイの前にあるパソコンの画面に向けられていた。

「んっ? ああ、黒の騎士団のデータだよ」

そう答えて、ロイは画面を二人の方に向けた。

「僕が持ってたのは古いデータだったからね。昨日の会議にも出席できなかったし、今朝ローマイヤさんに新しいデータを送ってもらったんだ」

「ローマイヤ、ねえ……」

それを聞いてジノが不思議そうに聞いてきた。

「ロイ。そういえばお前、ローマイヤと仲良いよな」

「んっ、そうだね。彼女には仕事で色々助けてもらってるし、仲が良いと言えばそうなのかも」

「前々から疑問だったんだが、どうやって“あの”ローマイヤと仲良くなったんだ？」

「どう、つて聞かれても困るけど。国立図書館で何度か会っている内に自然とね、あとは成り行きかな」

「ミス・ローマイヤは何度か会ったからって仲良くなれるタイプでは無いと思うが……」
「そうかな？ 確かに最初はきつい人だなあと思ったけど、付き合ってみれば優しい女性じゃないか」

「マジで？」

「うん。マジで」

ロイはパソコンを操作しながら、凄い事を、当たり前前のようにサラリと言った。

ちなみに、そんなやり取りをしていた二人の隣で、アーニヤが「やつぱり……」となにやら悲しそうに呟いたが、ロイは気付かなかった。

「よし、二人とも見てくれ」

ロイがパソコンの操作を終え、その画面を二人に向ける。そこには、黒の騎士団の制服を着た人物がズラリとリストになって並んでいた。

「黒の騎士団のパイロットリストだ。そして、おそらく僕たちが戦う事になる中で、特に注意が必要なのは……この三人だ」

パソコンのエンターを押すと、画面のリストのほとんどが消え、三人の人物が残った。「奇跡の藤堂。四聖剣の朝比奈。そして、ゼロの右腕、紅月カレン。この三人は今の黒の騎士団のトップ3だ。この三人の相手は必ず僕たちが担当した方が良いだろう」

「犠牲を出さないために？ 相変わらず優しい考えだな」

ジノが苦笑して言う。ロイもそれに、含んだ笑いで答えた。

「優しい優しくないは関係ないよ。ただ、味方の損失を少なくするにはこうした方が良くってっていうのを提案してるだけさ」

「じゃあ、私は是非このカレンって子の相手したいね」

ジノが横からパソコンを操作し、紅月カレンのデータを拡大表示させた。

ジノはその写真を見て嬉しそうに「うんうん」と頷く。

「やっぱ美人。これは一度直でお会いしてみたいね」

そのジノを見ながら、アーニャは淡々と言った。

「……会いに行ってみたら？ この子も喜ぶと思う」

ジノはそれになっこり笑って答えた。

「あつ、やつぱりそう思う？ まいったなあ」

ジノはそう言つて、輸送機の窓に映る自分の顔を見ながら、齒を光らせてみたり、前髪をかきあげてみたりと、なにやらポーズを取り始めた。

それを眺めながら、またアーニヤは淡々と言った。

「思う。ラウンズを討ち取れる滅多に無いチャンス。私がこの人の立場だったら、ジノが会いに来たら大喜び」

「……」

ジノがピタリと止まって振り返り、ジト目でアーニヤを見る。

ロイは堪えきれずにぷっ、と吹き出した。

「違う。ジノ、一回会いにいつてみなよ。絶対喜ばれるから」

「ちえ、面白く無い」

一瞬ふて腐れたジノだったが、すぐに何かを思い出したのか、

「そうだ。なあロイ。『ゼロの左腕』って知ってるか？」

「ゼロの左腕？ ああ、そんなのもいたらしいね。たしか、紅月カレンと並んで『騎士団の双壁』といわれていた男だよな」

「この人」

アーニヤが横からロイのパソコンを操作する。そして、そのリストの中で比較的上の方にあった、ライという名前をクリックする。

画面にはそのライの情報が拡大表示された。しかし、そこにはバイザーをかけた男の写真とたった二言。

『処刑済み。データ無し』

と、あるだけだった

「ロイ。どう思う?」

アーニヤは怪訝そうに、ロイに尋ねる。もちろん、なぜ、この幹部だけ処刑されたのか。なぜデータが開示されないのかを含めてアーニヤは尋ねている。

ロイは「そうだね」と頷きつつ、思考をまとめた。

「多分、ブリタニアの人間だったとかそういう理由じゃないかな」

「どういうことだ?」

「これはあくまで予想だけど。このライっていうのはブリタニアにとって、黒の騎士団にいたら色んな意味で都合の悪い人物だったんじゃないかな。だからこそ刑の執行も非公式で迅速に行われ、更にはこのようにデータも残さなかった」

「なるほど」

「どちらにしても、死んだ人間なんだろう? 僕達には関係ないさ」

「結構面白そうな男なんだけどな……。って、おっ」

ジノが、ふと窓の外に視線を向けると、あるもの発見した。

「見ろよ二人とも」

ロイとアーニヤはその言葉に従って視線を外に向けると、ジノは少々興奮気味に言った。

「あれがオフネサンだろ？」

「富士山だよジノ……」

ロイがツツコミを入れると、アーニヤは首を傾げた。

「到着？」

「ああ、エリアーだ」

輸送機の着陸を知らせるアナウンスが入ったのは、その後すぐだった。

①巻 9話『政庁 攻防戦 A』

三人のラウンズ。ジノ、ロイ、アーニヤは並んで細い輸送機のタラップを降りる。自分が身に着けている慣れない青紫のマントに少し違和感を感じながら、ロイは背筋を伸ばしてキビキビと歩く。

エリアーニーへの赴任は、ノネットからマントをプレゼントされて、初めての任務である。

この青紫のマントをしている以上、ロイの恥はノネットの恥に繋がる。いつも以上に気合を入れて任務に取り組もうとロイは心に決めていた。

そんな事を考えながら、ロイはエリアーニーに降り立つ。

「……あれ？」

その時。ロイはこの場の異様さに気が付いた。

迎えが無い。輸送機の周りには誰もいない。

通常、ラウンズが植民エリアに入国しようものなら、最低でも騎士数人が車を用意して待っているもののだが。

「ねえジノ。僕達の到着は、ちゃんと伝えてあるんだよね？」

ロイは、背後に立つ長身の男に問いかけた。

緑色のマントに身を包んだナイトオブスリー。ジノ・ヴァインベルグは、

「ああ、そのはずなんだけどな。きつとみんな忙しいんだろ」

と、いつも通りの無邪気な笑顔を浮かべて答えた。

ロイは眉をひそめた。

「忙しい？ そんな馬鹿な。いくら忙しいって言ったって、誰も迎えに来ないなんて事

は——」

「そんな小さい事気にするなよ。ラウンズは心の広さも持ち合わせてないとな」

「……そんなものかい？」

「そんなもんだ。それよりロイ」

と、ジノはロイの肩に軽く手をポンつと置いた。

「悪いんだが、お前一人で私達二人分の入国手続きもやってくれないか？」

「？ それは構わないけど。なぜ？」

ロイの問いに対して、ジノは肩をすくめてみせた。

「実はブリタニア出発の時点で私の“トリスタン”とアーニヤの“モルドレッド”の調子がどうも良くなってな。いつ戦闘になるか分からないし、早く政庁で整備しておきたいんだ」

「そういう事なら」とロイは素直に頷いた。

「構わないよ。じゃあ僕がまとめてやっておく」

「すまないがよろしく頼む」

「ジノ」

と、その時。今まで二人の会話を黙って聞いていた少女——ナイトオブシックス、アーニヤ・アールストレイムは、はてなど首を傾げた。

「何を言ってるの？ 私の“モルドレッド”の調子は別にどこも悪くな——」

アーニヤは、全部を言葉に出来なかつた。その小さな口を、ジノの長い腕が伸びてきて塞いだからだ。

「はいはい。という訳でアーニヤはお兄さんと一緒に、先に政庁に行きましょうね」

「……」

無言で暴れるアーニヤを、ジノはその長い腕を器用に使つて抑える。

「大丈夫大丈夫、怖くないよアーニヤ。後でお菓子買ってあげるから、大人しくお兄さんについてきましょうね」

「それじゃあ、まるで人攫いだよ……」

ロイがため息混じりに突っ込むと、ジノはこちらに手をヒラヒラと振り、

「いいからいいから。あとで合流しようぜロイ」

といまだに暴れるアーニヤを片腕で器用に抑えながら、気持ち悪いほどニコニコと笑う。

少し怪訝に思ったが、だからと言ってジノがアーニヤに危害を加える事などあるわけではないので、どうせまたジノの無意味な冗談だろうと思う事にした。

「分かった。じゃあ、僕は。手続きを済ませてから政庁に向かうよ。じゃあね」

「ああ、いつてらっしやくい♪」

ロイは青紫のラウンズマンントを翻し、二人に背を向け、ターミナルに向かって歩き出す。

アーニヤだけは相変わらず無言で暴れていた。

○

三十分後。ジノはご機嫌だった。

「なんだなんだ、こんなものか？ 大した事ないな、ここの守備力も」

ジノは操縦桿を巧みに操作すると、彼の愛機であり戦闘機である「トリスタン」はツバメのような機敏さで、空を縦横無尽に飛び交う。

遅れて、その「トリスタン」の通った軌跡の後に多くの銃撃が浴びせられた。

「♪」

ジノは鼻歌混じりで「トリスタン」を巡回させ、機首を地上のナイトメア群に向け

た。

その地上にいたナイトメアは、ブリタニア軍のサザーランド”だったが、ジノは迷わず二つのスラッシュハーケンを発射する。

打ち出されたハーケンは弧を描いて敵の”サザーランド”に襲い掛かり、計六機のナイトメアを易々と切断した。

「攻撃方法は中々良かったよ、諸君」

ジノは指を振って、切断された”サザーランド”のコックピットから這い出す騎士達に労いの言葉を呟き、次の標的を探す。

すると、”トリスタン”のモニターに、一人の少女が映し出された。

アーニヤだった。ラウンズのマントはしておらず、あのへそ出しルツクのパイロットスーツ姿である。

『……ねえ、ジノ』

アーニヤは、何かを口に詰めているかのようにくぐもった声で呟いた。彼女もジノとは違う場所で、専用機の”モルドレッド”を駆り、戦闘の真つ最中だった。そのせいか、顔はしっかりとジノを見つめているが、手元はせわしなく動いている。

「どうしたアーニヤ、そんな顔をして。強い奴でもいたか？」

ジノが尋ねると、アーニヤは首を横に振った。

「じゃあ、どうした？」

しばらく、アーニヤは黙っていたが、やがてゆっくりと顔を上げて言った。

『ロイに、怒られない？』

その顔は、見事に不安そうな色に染まっていた。

（ああ、なるほどね……）と、ジノは納得した。

「怒るんじゃないか？ あいつは、〴〵いうノリ」は嫌いだろーし」

『……』

アーニヤの元から暗い顔が、ますます沈んでいく。

ちなみに、〴〵いうノリ」とは、政庁の守備力を試すために、その政庁にラウンズが攻撃をしかけるようなノリの事だ。現在、絶賛実行中でもある。

「アーニヤ。さっきも言ったが、ここを守りが弱いつて事は、ナナリー総督の危険に直結するつてことだ。だから、これは新総督のためでもあるんだ」

『それは、分かっているけど……』

ジノはナナリーの名を出したのはちょっと卑怯だったかなと思いつつも訂正はしなかった。そもそも、言っている事に間違いは無い。

「もし、ここの守備隊がこのまま私達の突破を易々と許すようなら、後でラウンズの名の下に、守備部隊を増強するよう命令しないとな」

すると、アーニヤは少し考え込んで。

『……分かった』

と、しぶしぶ了解し、彼女は意識を戦闘に戻した。しかし、まだ通信は繋がっている。ジノは一応言っておく、

「おっと、くれぐれもやりすぎるなよ。死人なんかもつての他だからな」

『分かつてる。怒られるならまだしも、嫌われたくはない』

というアーニヤの言葉を最後に、通信はプツンと切られた。

ジノは思わず笑ってしまった。

「アーニヤの奴。相変わらず、ベタ惚れだな」

ラウンズの間では周知の事実だが、アーニヤはロイの事が好きだ。

それが異性としてなのか、それとも単なる年上の男性に対する憧れなのかは分からないが、とにかく好意を抱いている。

だが、残念な事にその好意は、本人——つまりロイには正しく伝わっていない。

(ロイはアーニヤの事を妹分として見てるからなあ……)

ロイもアーニヤに好意を持っている。しかし、それはアーニヤがロイに向けるものは全く種類が違うものだ。

こう言ってはなんだが、それがやがて悲しい結果にならないかと、ジノは少しだけ不

安になる。

あと五年。いや、三年もあればアーニヤは美しく成長する。その時は、流石にロイだつてアーニヤに「女」を感じる事になるだろう。

そうなれば、ロイだつて鈍いけど馬鹿じゃない。ちゃんとアーニヤの気持ちにも気付くだろうし、それを受け入れる、か受け入れないかは分からないが、うやむやにはせず結果はきちんと出す。

ロイとはそういう男だ。だから、時間さえ経てば、きちんと結果は出るし解決はする。しかし、

(この職業はいつ死んでもおかしくはないもんな……)

ラウンズという高い地位は、任命された騎士に様々な権利と特権を与えるが、普通の人が持っている様なものを奪う。

その一つが時間だ。この地位はいつも死と隣り合わせで、しかもそれは唐突にやつてくる。そう、時間は終わるのだ。唐突に。

だから、くつつけるなら、とつととくつつくべきだとジノ思うが、残念ながら、現実問題それは厳しい。

ロイは先程も述べたが、鈍い。当のアーニヤもなんだかんだで押しが弱い所があるから。何か劇的な外的要因の変化でもない限りは二人の仲は当分平行線だろう。

（まあ、結局こういうのは本人同士と時間の問題なわけであって私にはどうしようも無いわけだが……）

それでも、とジノは思う。

アーニヤもロイも大切な友人だ。友人には幸せになってほしいし。悲しい結末にはならないでほしいと願う。

（スザクにも言える事だけ……）

ジノは呆れ顔で髪をポリポリと掻く。

こう改めて考えてみると、どうもジノの周りの男は病気と思えるほど色恋沙汰に鈍い。

全くもって、そんなのに想いを寄せる女性陣が不憫に思えて仕方が無かった。

その時、思考にレーダーの電子音が介入した。

KMFの反応が二つ。

「おつ、まさか、あれは」

ジノは、新しいおもちゃを見つけた子供のような顔で笑った。

目の前には二騎の「グロースター」。しかし、カラーリングがただの雑魚では無い事を示していた。

グラストンナイツ。今は亡き勇将ダールトン将軍が鍛え上げた一流の息子たちの総

称。

その内の二人が、前に立ちはだかっていた。

『どこのだれだか知らないが、ここまでだ』

『よくも、好き勝手暴れてくれたな』

二騎の「グロースター」から、静かだが怒りを含んだ声が外部スピーカーを通して響く。同時にその「グロースター」は大型のランスをどっしりと構えた。

その光景を見て、ジノは少しがっかりした。戦闘機相手に大型ランスなんか持つてきてどうするつもりだったのかと、理解に苦しんだからだ。

「失格。その武装は拠点を守る事に適してはいるが……」

まあ、それでも相手が一流の腕を持つ騎士なのは変わり無い。なら、今回はあえて相手の土俵に上がって楽しむ事にした。

「仕方ない」

ジノは操縦桿を、横にグイッと動かす。

すると「トリスタン」に変化が起こった。戦闘機から、腕が、足が、そして、頭部が現れる。

やがてそれは一騎のKMFになった。スマートな体躯に、二本の角が生えたような頭部。どこことなく、その姿は死神を彷彿とさせた、

一連の変化を目撃した「グロースター」のパイロット達が驚きの声を上げる。

『なに！ まさか!? あなたは……』

『可変KMF “トリスタン” ……。そういう事でしたか。ジノ・ヴァインベルグ卿』

二人の驚きの声に対して、ジノは満足そうに鼻を鳴らす。

「ああ、君たちを試しに来た。私を止めてみたまえ」

“トリスタン” は二振りのMVSを連結して、鎌にも似た槍に形を変えて、敵を牽制するように真つ直ぐに構えた。

すぐに「グロースター」から、怒りを押し殺した声が響いた。

『いいでしょう、私たちも、このままでは収まらない』

向けられた苛立ちを嘲笑うかのように、ジノはあえて軽薄に言った。

「ああ、本気で頼むよ」

『ッ！ 言われずともお!!』

火に油を注がれた騎士の叫びに呼応して、二騎の「グロースター」が槍を構える。そして怒り狂った虎の勢いで「トリスタン」に猛進した。

「ありがとう！」

“トリスタン” はその二騎を迎え撃つように槍を振り上げた。

この時、ジノの頭の中では、すでに二騎の「グロースター」を倒す構図が一瞬で浮か

びあがっていた。

あとはそれを実行に移すだけ。しかし……。

「つて、あれ!?!」

その「グロースター」の大型ランスを打ち払うはずだった「トリスタン」の槍は大きく空を切った。

二騎の「グロースター」が「トリスタン」と打ち合う直前に大型ランスを引き、大きく迂回してトリスタンを通り過ぎたからだ。

そしてあろうことか、「グロースター」はそのまま一目散に逃げていった。繰り返すが、逃げていったのだ。そうとしか思えない行動だった。

ジノは一瞬呆然とした。だが、すぐにハツとして正気に戻る。

「お、おいおい。マジかよ! 音に聞こえたグラストンナイツが逃走!?! そりゃあ無いんじゃない?! 逃げるなよ卑怯者く!」

ジノは「トリスタン」のランドスピナーを唸らせ、地面に煙を上げてその後を追う。しかし、中々追いつけない。

相手は一流の操縦技術を持つ騎士が操る「グロースター」。

その性能を完全に逃げる事に費やされてしまえば、この「トリスタン」でも追いつくのは難しい。

「ちっ、逃げ足だけは速い」

ジノは、戦闘機に変形して追いかけてようか一瞬迷う。

その時……。

○

“グロースター”のパイロット。グラストンナイツのエドガーとクラウディオは背後に迫るナイトオブスリーから全力で逃げながら、苛立っていた。

『おい！ 一体いつまでこうしていればいれればいいんだ!? ここまでされておめおめと背を向けるなど!』

クラウディオがモニター越しに、コックピットを震わす程大きく怒りの声を上げる。もちろんエドガーも同じ気持ちだった。

しかし、“トリスタン”に突撃した瞬間、“グロースター”の通信が開いて、ある上官に、“トリスタン”とは戦闘をせず、指定されたポイントまで撤退するよう命令されたのだ。階級が下である自分達はそれに従わなくてはいけない。

「気持ちは分かる！ しかし、“あの方”の命令には従わなければならないだろう！」すると、クラウディオは吐き捨てるように言った。

『知ったことか！ あんな成り上がり者の言う事など——』

「よせクラウディオ！ 音声は全部記録に残るんだぞ！」

その時、背後から爆発音がした。

エドガーがハツとして振り返ると、

「なっ——」

思わず息を飲んだ。

そこには、炎に包まれる“トリスタン”の姿があった。

○

炎に包まれていく“トリスタン”の中で、ジノは冷静に各種計器に視線を走らせた。損傷は軽微。いや無傷と言っても良い。ただ炎が上がるだけの操作式地雷だったようだ。

「こんな物……一体何のつもりだ？」

しかし、炎に包まれて視界は奪われた。このまま前進し続けるのは得策ではない。

ジノは機体を跳躍させて炎を払い消す。炎が散って、再び視界が開けた時、すでに二騎の“グロースター”の姿はどこにも無かった。

ジノは不快感丸出しで舌打ちをした。

「この隙に襲い掛かってくるぐらいしろよ」

その時、敵にロックされた事を知らせるアラームがコックピットに鳴り響いた。

素早く“トリスタン”に回避行動を取らせる。

同時に、さつきまで「トリスタン」がいた場所に、ライフルとバズーカの弾が降り注がれて爆発と粉塵が巻き起こる。

「攻撃？ 新手か！」

ジノが視線を上げると、三騎の「サザーランド」がこちらに銃口を向けていた。新たなおもちゃの登場に、ジノは唇を舌で湿らせた。

「へえ、奇襲か。まあ、私達以外だったら有効な戦術だったと思うよ」

さつそく迎撃しようと、ジノは「トリスタン」の腕——スラツシユハーケンを前に突き出す。しかし、発射はしなかった。いや、できなかった。

三騎の「サザーランド」が一目散に引いて、通路と壁の奥に消えてしまったからだ。「つて、なんだよ。また逃げたのか」

ジノはその瞳を少々険しくして、逃げた「サザーランド」の後を追う。「まったく。どいつもこいつもちよこまかと。少しキツイお仕置が必要だな」

「トリスタン」をKMFから戦闘機に変形させ、スピードを上げると、その「サザーランド」の小隊にはすぐに追いついた。

追いついた場所は、「トリスタン」が飛びまわれる程の、大きなホールになっていた。「はい、ここまでですよ。つと」

「サザーランド」を照準に捉える。そしてスラツシユハーケンを打ち出そうとした

時、

「!」

横から銃撃が降り注いだ。

ジノは達人級の反応速度で操縦桿を操作した。

間に合った。『トリスタン』は宙に舞い上がりつつ銃撃をかわす。

ジノは攻撃を加えてきた相手に視線を送る。そこにいたのは、グラストンナイツの『グロースター』だった。先程とは違い、大型ランスの他にライフルを装備している。

「先回りしていたのか!」

その『グロースター』に機首を向けようとした時、またそれを阻むように多数の銃撃。新手の『サザーランド』の小隊だった。

「ぐっ」

完全に虚をつかれた形になった。しかも、やつかいな事に、さつきまで追いかけていた『サザーランド』の小隊までもが反転し、こちらに銃撃を浴びせ始めている。

いや、それだけじゃない。

今まで気付かなかったが、レーダーを見ると『サザーランド』の三個中隊がそれぞれ別方向からこちらに近づいている。いや、今到達した。

ライフルの黒い銃身が一斉に向けられ、倍以上に増える銃撃。破壊力を持った鉛は、

まるで嵐の暴風に混ざる水滴のように縦横無尽に“トリスタン”に襲い掛かる。

それでもジノは、巧みに“トリスタン”に回避行動をとらせ。その銃撃を避け続ける。

とんでも無い空間把握能力と空戦技術である。並みの騎士ならいくら高性能KMFの“トリスタン”でもとうに撃墜されているだろう。

だが、そんな並みの騎士ではないジノでも、今の状況はあきらかにマズかった。ここはいくら広い空間とはいえ所詮は施設の中。限られた空間では“トリスタン”の高い機動性能をフルには生かせない。

全方位から浴びせられる銃弾を機敏な機動でかわしつつ、ジノは本日何度目かの舌打ちをした。

「読んでいたのか、私が“サザーランド”を追ってここにくると？ いや、まさか……」
誘われたのだ。なにせ、敵の集合速度が迅速すぎる。

おそらく、敵の指揮官は、あらかじめ“トリスタン”がここに来ることを見越して、部隊に指示を出していたのだ。

そうでなければ、いまの状況の説明がつかない。

(完全に嵌められたって事か……?)

中々どうして優秀な奴がいるようだ。

こうなれば、一時撤退するのが定石だが。

「くそっ！」

ジノは地上のグラストンナイツの「グロースター」を睨みつけた。

撤退しようにも、あの二騎の「グロースター」が逃走に使えるような通路を巧みにその機体で塞ぎつつ広い範囲に掃射を繰り返してきている。

しかもそれは敵を倒す攻撃じゃない、敵を逃がさない射撃だ。あのように撃たれれば、射線が限定されていないだけに予測しずらく安易に潜り込めない。

(少々やつかいだな……)

逃げたいのは山々だが、ルートの確保のためには最低でもあの「グロースター」の内
のどちらか一騎を倒さなければならぬ。

しかし、あの「グロースター」は帝国でも指折りの騎士と名高いグラストンナイツが
騎乗している。

先ほどのように二対一の状況に持ち込んでいるならまだしも、今は敵の「サザラン
ド」の援護攻撃も馬鹿みたいに激しい。よってその撃破も容易では無い。

だからと言ってこのまま長引けば、敵の数が増えるだけ。消耗戦となれば包囲されて
いる方が――

と、ジノはここに来てはたと気付いた。

(おいおい、まさかこの私が……)

チエックメイトされる一歩手前。

この状況になるように、一人の指揮官が部隊に指示を出したのなら、それは大したものだ。

「くそっ！ ラウンズを舐めるなよ！」

ジノは“トリスタン”を変形させ、銃弾の壁を突き進んだ。

①巻 10話『政庁 攻防戦 B』

(おかしい……)

アーニヤ・アールストレイムは“モルドレット”のブレイズルミナスを展開し、四方からの銃撃を防ぎながら、状況を確認する。

今、アーニヤは敵に囲まれていた。

この数分間おかしいことだけだった。敵を追いかけても、すぐに撤退する。追いついて攻撃を加えようとすると、また違う場所から攻撃が来る。

そして気付いたら見事に敵に囲まれていた。

しかも、こちらには量産型の“グロースター”が多い。

それらが、バリアー——ブレイズルミナスを止めると。大型ランスを構え、それこそ槍袂のように襲い掛かってくる。

射撃能力に優れた“サザーランド”を“トリスタン”に回し、格闘能力の高い“グロースター”を射撃武器は効果が薄い“モルドレット”に回す。

理になかった配分だ。おかげで、こちらにはミサイルを撃ち込むヒマもない。

(いや、それだけではない。この人たち、急に動きが良くなった……)

政庁に突入した頃は、脆弱な守備力に落胆していたアーニヤだったが、ある時を境に、急に全ての部隊が一つの意志の元に組織的に動くようになった。

こちらの行動は常に先回りされ、驚くぐらい絶妙なタイミングで敵に補足され、奇襲を受ける。

アーニヤはやつかいだと思った。もちろん少しだけだが。

(と言つても……)

大ピンチ、という程でも無い。

アーニヤは、チラリと上——天井を見る。そこには大きな穴があり、青い空が見えた。アーニヤが政庁に突入するときに向けた穴だった。

実は、アーニヤは形勢不利と見るや、追い詰められるフリをして、ここまで戻ってきていたのだ。

(ブレイズルミナスを展開しつつ、上空に退避。天井を盾にして態勢を立て直し。折を見て再突入。ミサイルで一網打尽……)

そこまで考えた後、アーニヤは「あつ」と言つて、顔を上げる。

(ちゃんと殺さないように注意しないと……)

もし、こんな事で死人を出そうものなら、怒られるだけでは済まないだろう。下手をすれば彼に完全に軽蔑されるかもしれない。それだけは耐えられない。

アーニャは「モルドレッド」を操作し、上空を目指す。

下からの銃撃は相変わらず激しいが、ブレイズルミナスを下方に集中させれば問題ない。

半分ぐらいの高さまで浮上した所で。

「！」

青い空が見える大穴の中心を、下から赤黒い閃光が通過し、雲の隙間に消えていった。思わず宙に浮かんだまま立ち止まる「モルドレッド」。

「あれは……」

間違いない。ハドロン砲の黒光だった。

「誤射？」

いや、違う。それにしては。対象である自分と距離が開きすぎている。

これは、きつと……。

(警告……)

その射撃は「穴を通過しようとしたら、こうやって撃ち落す」と言っているのだ。

今、ブリタニアのKMFでハドロン砲が装備されているのは三騎。この「モルドレッド」と「ランスロット」そして……。

アーニャは恐る恐る、視線を地上に向ける。

青い騎士の姿があった。騎士は、新しく装備された兵器——可変ハドロンプラスタ―狙撃モードの細長く展開された砲身を緩慢な動作で、この“モルドッド”に向ける。

同時に、コックピット内に敵からロックを受けた事を知らせるアラームが鳴り響く。

「……」

アーニヤの顔に変化は無い。相変わらずの無表情な顔で、その青い騎士、ナイトオブゼロ専用騎“ランスロット・クラブ”を見つめている。

しかし、その淡々とした顔には似合わない冷たい汗がだらだらと流れ始めていた。

通信を知らせる電子音。

アーニヤは体を震わせた。無視するわけにもいかず、戸惑い気味に通信を開く。

〈音声オンリー〉の表示。しかし、すぐに誰か分かった。その声はとても聞き覚えのあるものだったから。

『まだこんな馬鹿な事を続けるかい？』

アーニヤは、ここにきてその顔を一気に曇らせる。

理解した。きっと、途中からこの人が指揮を執ったのだろう。ならば、手加減していたとはいえ、自分がこれだけ追い詰められたのも納得だった。

言葉に迷ったが、無理やりひねり出した。何か言わないと怖くて仕方なかった。

「あのねロイ……私はナナリー総督のため——」

アーニヤはジノに言われた（丸め込まれた）言葉を思い出しながら、その（音声オンリー）と表示されているモニターに身を乗り出して話しかける。

しかし、アーニヤが言い終わる前に、

『アーニヤ』

本来ならば喜ばしいその呼びかけ。だが、今だけは、アーニヤは悪寒にも似たものを感じ小さく肩を震わせる。

嫌な予感がする。

『僕はね……まだ続けるのか？』と聞いているんだよ』

ドスの効いた声が響いた。

アーニヤは愕然とした。マズかった、これは非常にマズかった。この声は、温厚な彼には珍しく本気で怒っている時の声だった。

アーニヤは、急いで外部スピーカーの電源をオンにした。そして、

「降参する……」

と、即座に“モルドレッド”に両手を挙げさせた。

○

「まったくジノめ。アーニヤまで巻き込んで」

ロイは“クラブ”の狭いコックピットの中で大きくため息をついた。

まず、空港に誰も迎えに来ていないという時点でもっと疑うべきだった。

エリアー1への入国手続きをしている過程で、このエリアにラウンズの赴任決定は伝わっていたが到着時刻が知らせていない事を知った。

そのせいで手続きにはいつもの倍の時間がかかった。いま思えば、多分それもジノの計算の内だったのだろう。

手続きの途中で政庁が襲われていると聞いて来てみれば、襲っているのは見慣れたK MFが二騎。

ロイは、すぐジノの悪ふざけを理解した。

その後、ロイはすぐに愛機に乗り込むと、司令室に通信を開き、ラウンズの権限の元に、この政庁の指揮権を拝借した。

“モルドレット”は両手を挙げて、ゆっくり降りてくる。

アーニャはきつと、ナナリー総督のため。とか丸め込まれてつき合わされたのだろう。

しかし……どんな経緯があれ、事を起こした以上それは本人——アーニャの責任である。それが一人前の騎士というものだ。

友のために、というその動機は確かに美しい。だが、行動は決して許されることではない。

鋭い瞳で、ロイは着地した「モルドレッド」を一瞥する。

これで一つ片付いた。あとは「トリスタン」だけだ。

再び「クラブ」のリーダーに目をやって「トリスタン」と交戦中の部隊の様子を眺める。

（流石といった所だなジノは。これだけの布陣で包囲しているにも関わらず、手間取らせるなんて……）

改めて味方で良かったとしみじみと思う獅子奮迅ぶり。ロイは感嘆のため息をもらした。

しかし、それはロイの予想の範囲内でもある。

（まあ、時間の問題だな）

ロイは、「トリスタン」と交戦中の部隊に通信を開く。

「ナイトオブゼロより各部隊に到達。G1、G2はライフルを捨て、大型ランスで接近戦をしかける、「トリスタン」の変形途中を狙え。チームアルファはそのまま前進。チームベータはポイントHに移動後、待機、「トリスタン」の視認を待て。チームガンマとデルタ、そしてシータはその場で分散し「トリスタン」への射撃を継続しろ。当てなくてもいい。広い範囲での掃射を心がける。とにかくジノ——じゃなかった。アンノウに空を自由に往来させるな」

『イエス・マイ・ロード!』

答える騎士達の声は力強い。最初、騎士達は命令しても、本当に自分たちがラウンズに勝てるのだろうか、と気弱な者も多かったが、“モルドレッド”を捕らえ、“トリスタン”と政庁守備隊の戦闘もいまやどうみても守備隊の方が有利。

有利な状況に身を置くと、人間不思議なもので、恐怖心なんて一気に掻き消える。

「よし、ほとんどの問題はクリアされた。あとは……」

眼鏡の分厚いレンズ越しに、レーダーを見ながら思案を巡らせていると、ピピピツという電子音。

通信だ。開くと、モニターには、少々困った顔をした若い騎士の姿が映った。

『キャンベル卿。アールストレイム卿を確保——いえ、保護? いえ、なんと言いますか……』

若い騎士はしどろもどろに喋ってやがて口をつぐんでしまう。騎士の後ろには、“モルドレット”から降りたアーニヤの姿があった。

どこことなくその姿は、悪戯をして、叱られるのを待つ子供のように肩をシヨボーンと落としていた。

思わず全てを許してしまいたくなるような姿だったが、ロイは兄貴分として、心を鬼にした。

「確保でいい。すぐに拘束しろ」

『ええ!』

戸惑う騎士。ロイは小さくため息をつく。

「それができないなら、ナイトオブシックスには罰として政庁にある女子トイレ」
“の掃除をさせろ。本人には私がそう言ったと伝えればいい”

『いや、ですが——』

「話は以上だ、これより私はもう一騎の“アンノウン”の襟首を捕まえにいく」

『イ、イエス・マイ・ロード……』

ロイは無造作に通信を切った。

「つたく……」

“クラブ”のフロートシステムを起動させ、機体はフワリと空に舞い上がった。

○

天井の大穴から空に向かっていく“クラブ”を見ながら、ロイに通信を送った若い騎士は困った顔で息を吐いた。

「ロイは、何て?」

後ろからナイトオブシックス、アーニャ・アールストレイムが不安そうな顔で話しかけてきた。

若い騎士は、振り向きざま背筋を伸ばす。少し迷って。

「あの、ナイトオブゼロ様はナイトオブシックス様に、罰として政庁全ての女子トイレの掃除をさせろ、と……」

「……」

ナイトオブシックスがスツと眉間に皺を作る。

若い騎士は慌てて、

「ああ、すいません！ やるわけ無いですよね！ ナイトオブシックス様がそんなトイレ掃除なんか……」

「あなた」

「は、はいー！」

ビクッ！ と体を震わせる若い騎士。怒られると思った。しかし、その可憐な桜色の唇から出た言葉は若い騎士の予想と違っていた。

「トイレはどつち？」

「……へ？」

若い騎士が素っ頓狂な声を上げる。対してアーニヤは淡々と言った。

「トイレはどこかと聞いてる」

「あ、あちらですが……」

「そう。ありがとう」

アーニヤは若い騎士の指を指した方向に歩き出し、懐から携帯を取り出すと、どこかにかけて、それを耳にあてた。

しばらくして、相手が出たようだ。

「セシル？ 私。うん、そう。トイレ掃除のやり方教えて。何でか？ ロイにそう言われた……」

素直に、ナイトオブシックスは罰として課せられた政庁のトイレ掃除に向かっていた。

○

ナイトオブスリーと政庁守備隊の戦いは、ナイトオブゼロの予想に反して攻守が完全に入れ替わろうとしていた。

「……っ！」

ジノの神妙な顔から発せられる呼吸音と共に、死神の鎌にも似た“トリスタン”の槍が“サザーランド”の頭部を切断する。

作動する緊急脱出用のイジェクション・シート。遠くに射出された箱型のコックピットを横目で見て、ジノは言った。

「七騎目！」

振るった槍を構えなおす。同時に、背後の二騎の“サザーランド”が黒い銃口をこちらに向ける。

それに気付き、ナイトメア形態のまま脚部に力を溜めて素早く飛び上がる“トリスター”。

“サザーランド”の騎士達は一瞬引き金を引くべき対象を見失った。

ニヤリと笑う。なぜなら、ジノにとつてはその一瞬で充分だった。

巧みに操作された“トリスター”は“サザーランド”の背後に着地し、一閃。

次の瞬間、二騎の“サザーランド”は兵器としての機能を完全に奪われ、四つの塊となつて、崩れ落ちた。

「八騎！　そして九騎！」

慣性で揺れる金髪の前髪から汗が飛ぶ。続いてジノは視線を全方位に巡らし、敵を探る。

『でやあああああ！』

“トリスター”の側面から大型ランスが迫る。グラストンナイツ。エドガーの“グロースター”だった。

「しっしっしっ！」

ジノは槍でその一撃を受け流す。返す刀でその“グロースター”にトドメを刺そう

と、槍を振り上げた。

しかし、

『させるか！』

今度は違う方向からクラウディオの“グロースター”がランスを構えて迫ってきた。ジノは咄嗟の判断でトドメを刺すのを中止して防御に転じた。

重量の違う二本の槍が接触して火花を散らす。負けたのは大型のランスの方だった。

グラリと体勢を崩す“グロースター”。すかさず“トリスタン”の槍が上段から襲い掛かる。

もらった！ ジノは心で小さく呟いた。MVSの刃はKMFの命とも言えるエナジーファイラーの格納部分を易々と切り裂いた。

小さく立ち上る煙。爆発はしない、コックピットは当然無傷、騎士にも怪我は無いはず。そうなるようにした。

それらを見届け、ジノは追い詰められているにも関わらず笑みすら浮かべて言った。
「十騎！」

『よくもクラウディオを！』

体勢を立て直したエドガーが、仲間がやられた事に対する怒りに任せて、至近距離でスラッシュハーケンを打ち出す。

“トリスタン”はそれに素早く反応。身を回転させるようにして躲し、“グロースター”に肉薄する。

『……………』

息を飲むエドガー。繰り出される“トリスタン”の槍。グラストンナイツの腕をもつてしても、回避行動すら取れなかった。

刹那。槍は一呼吸で“グロースター”の頭部と脚部を完全に破壊した。

「十一騎……。よっー」

勝利に浸る余裕はない。

ジノは急いで“トリスタン”を戦闘機に変形させ、全方位から迫る“サザーランド”からの銃撃を飛び上がってかわす。

張り巡らせた緊張を解くように、大きく息を吐いた。

状況は、包囲されたところより好転した。

退却するのに一番のネックだったグラストンナイツの“グロースター”を片付けた。

これにより、“トリスタン”に追隨できる腕を持つ騎士はこの場にいなくなつた。

「さて、こうなつたらスタコラサツサだ」

ずいぶん数の減つた“サザーランド”を無視して、ジノは機首を退路に向け、足のペダルを踏み込む。

風の層を突き破り、加速する“トリスタン”。退却を阻む者はだれもない。が、そう上手くはいかなかった。

「！」

ジノは、背筋に寒気のようなものを感じて、“トリスタン”をKMFに変形させて減速、フロートを確認させて急浮上、急旋回させた。

刹那、先ほどまでの“トリスタン”の進行方向を妨げるように、幾筋もの紅黒い光が、彗星のように降り注いだ。

光は地面を浅く削り、小さな煙を立てる。

「これは、可変ハドロンプラスチックの拡散モード……」

ジノは気の抜けたようにはあ、と息を吐く。

「なんだ、そういう事か」

ここにきて、ジノもアーニヤと同じ事を納得した。

いくら手を抜いていたとはいえ、ナイトオブスリーである自分を追い込められるような人間は、冷静に考えてみればそんなにいない。

「お前かよ、ロイ……」

頭上に視線を送る。

そこには、やっぱりというかなんというか、右肩の短い砲身を構えた青い騎士——

クラブ”の姿があった。

『ジノ……まさか、あの包囲から突破するなんて。完全に予想外だったよ』

外部スピーカーから響く同僚の声に、ジノは「ハッ」と息を吐き軽く笑って答えた。

「ナイトオブスリーの実力も安く見積もられたもんだ」

『そうかもしれないね。これでも、君の強さは僕が一番良く理解してるつもりだったんだけど』

「だろ。けど、実戦で予想を越えるなんて事は良くある事だ」

『全くもってその通りだ。次からより一層気をつけるよ』

“クラブ”は、フロートを起動させつつ静かに着地した。それに伴って、“クラブ”を中心に円形状に風が吹いて、ほこりが舞う。

ジノはフフンと笑った。

「アーニヤはどうした？」

『トイレ掃除』

「おお、それは災難。アイツの事だから、お前に言われた事は徹底的にやるぞ」

ジノは肩をすくめる。

ロイはそれに対して、淡々とした口調で答えた。

『そうかもね。まあそれは置いておいて……ジノ』

ロイの声のトーンが一段下がった。

『悪ふざけが過ぎるんじゃないか』

その底冷えるような声。

(うわ、怒ってるな)

ロイとは、友人となつてそれほど長い年月は経っていないが、その考えは手に取るようにわかる。

だから、ジノは不敵に笑った。

「そうかな？」

ジノは軽薄に答えた。

ロイのムツとする顔が鋼鉄の装甲越しでも見えるようだった。

『……大人しく降りてくるんだジノ。そして、皆に謝れ』

「嫌だ。と言つたら？」

『……ジノ』

押し殺したロイの声。しかしアーニャと違い、ジノはそんなものでは物怖じしない。

いや、むしろ……。

「私はラウンズ。お前もラウンズ。立場は同格。だったら私がお前の命令に従う必要は無いよな？」

『……』

「さて。となると、この後の展開はおのずと決まってくる」

ジノは、MVSの微細振動を再起動させる。全てを切断する刃がその対象を求めて断続的な唸りを上げる。

“トリスタン”は地面に着地し、同時に槍を自身の周りで数度回転させ、刃先をクラブに向けて構えた。

「“私を止めてみたまえ”。ナイトオブゼロ」

『……』

“クラブ”から反応は無い。ただ突っ立ったままだ。

それでもジノは“クラブ”をジッと見続ける。まるでその中にいる騎士の心まで覗き込むように。

やがて、

『……いいだろう』

青い騎士は背から、スラリと二振りの刃を取り出して構えた。

ショートソードだ。“トリスタン”の槍と同じMVSの刃が、重く不気味な振動の音を立て始める。

『ラウンズを止めるのは、確かにラウンズの役目だ』

「クラブ」は腰を少しだけ落とし前傾姿勢になる。

見つめ、口元を緩めるジノ。同時に、ゾクゾクとした感覚が彼の背中を駆け上る。

——逆らうな。あいつを怒らせたら怖いぞ。

——いや、良い機会だ。

二つの思考。両極端の感情。そして狭間に立つジノ・ヴァインベルグ。

その擦れ合い。その狭間に身を置く感覚が何ともいえない恍惚にも似た感情を生み出す。

所詮騎士だの、貴族だの着飾ってはいるが、それ以前にジノは一人の男の子であり戦士。強い相手と戦えるという事実はその心を興奮させる。

小細工無しのカチンコなら尚更だ。

「本気で来いよ、ロイ」

『……一つ確認したい』

「何だ？」

『脱出装置は正常か？』

ジノはその言葉を聞いて、思わず呆気にとられた。

挑発とも取れる言動だが、それは軽口ではない、ドスの効いた脅し文句。

そんなの、今までロイに言われた事がなかった。

「ふ、ふふ、ふふふ。くつくつく」

頑張って押し殺す。でも、ジノは笑いが止められない。

ロイとの戦い。

二人とも味方だ、その上技量の高いラウンズだし、何より友達だ。当然本気の戦いにはならないだろう、でも……。

「言うねえ！」

熱い戦いにはなりそうだった。

ジノは槍を振り上げ、ランドスピナーを加速させた。

①巻 11話『政庁 攻防戦 C』

“トリスタン”の死神の鎌にも似たその槍が、大きく振り上げられて、こちら——“クラブ”に迫る。

“クラブ”は二刀のMVSを十字に重ねて、槍を受け止めようとした。

しかし、それはフェイントだった。

槍は、途中で軌道を変えて、ロイが剣を構えたのとは違う方向から襲い掛かってきた。

“トリスタン”の槍が唸って迫る。

そのフェイントを、ロイは読んでいた。迫る穂先に反応し、一本のMVSの軌道を変えて受ける。

重量級に分類できるトリスタンの槍を片手で受けるのは流石に無理があつたらしく、衝撃で“クラブ”がよろめいた。

だが、ロイは慌てない。一本で受け止めるという無理をしたお陰で、もう一本のMV Sは空いている。

そのMVSを“トリスタン”の頭部を狙って鋭く突き出す。しかし、“トリスタン”

はそれを悠々とかわした。

『そう上手くいくかよー!』

トリスタンはかわした際の勢いを利用し、回転しながら両刃の特性を生かして、重みのある一撃を繰り出してくる。

ロイは巧みにその連続攻撃を受け流すが、受ける度に“クラブ”の腕が鈍い軋みの音を上げた。

「くっ!」

一撃がコックピットを何度も揺らし、そのたびに重い振動がロイの体を打つ。

ロイはラウンズの名に恥じないレベルの訓練をしている。だから並みの騎士に比べて体は頑丈だと自負している。

だが、そんなロイでもジノの一撃を受けるたび、その重い振動によって内臓という内臓から全てが吐き出されそうになる。

(……強いな)

分厚い眼鏡の奥の瞳が鋭く尖る。

専用機の特性上、ジノはヒットアンドアウェイの戦法を最も得意としていられると思われがちだが、実はそうではない。

ジノの最も得意とする分野は“トリスタン”の機敏さと大型の槍による重量級の一

撃を生かした接近戦での高機動戦闘だ。

この「クラブ」とて、他の量産機の「グロースター」等と比べれば相当機敏ではあるが、「トリスタン」と騎士であるジノの技量はそれを上回る。

ロイは隙を見て、ショートソードを一旦引き、即座に二本同時に鋭い突きを繰り出す。その攻撃を崩せないと見るや、ジノは機体を一旦跳躍させ距離を取った。

それぞれの得物を、手馴れた動作で構え直し、再び睨み合う二騎。

『……いいねえ』

ジノの楽しそうに呟く声が、スピーカー越しに響く。

『ロイ。私とお前のいままでの模擬戦の戦績を覚えてるか？』

「……僕の34勝105敗5引き分け」

ロイは淡々と答えた。

『数だけ見れば、私はお前より圧倒的に強い事になる。だが、今の戦いはどうだ？』

「……」

『お前の事だから、自分よりジノの方が強いくとか思ってるんだろうが、それは違う。互角だよ、いや、それ以上かもしれない。お前は強いし、なにより怖い奴だよホント。油断はしない。相手を過小評価しない。常に沈着冷静。でも、それは実戦の時だけなんだよな。お前はいつだって無意識に人に遠慮していた。謙遜してた。友人の私にでさえ』

「買いかぶりすぎだよ」

『いや、お前は優秀だよロイ。それを私は良く知ってる。でも、私はそんなお前と模擬戦をしても、良い訓練にはなるが、熱い気持ちにはなれなかった。だから——』

「まさか、それが理由かジノ。こんな馬鹿げた事をした」

ロイの口調に更なる怒気が加わる。

『いや違う。本当にナナリー総督のためさ……と云いたい所だが。まあ、今思えば少しくこうなる事を望んだのかもな』

“トリスタン”が改めて槍を構え直す。ロイも“クラブ”の操縦桿を強く握り直した。

『お前の真の実力が知りたい。いや、知ってはいるから、きっと確かめたいんだろうな。私自身で』

「……そこに意味はあるのか」

『意味？ おいおい野暮な事を聞くなよ！』

“トリスタン”のランドスピナーが唸って煙をあげる。ロイも一拍遅れて、前に出た。

『好きなきの事をもっと知りたいって思うのは！』

振り下ろされる槍。それを両剣でクロスして受ける。

『当然の！』

“トリスタン”は止まらず、更に下から薙ぐ。

“クラブ”は半身になってそれを避ける。完全には間に合わず、青い装甲が削られて火花が飛ぶ。

『事だろ！』

数度回転されて勢いの付いた槍が更に上段から振り下ろさせる。

「ッー！」

歯を食いしばって、ロイはショートソードで受け止めた。

○

「おい、いいのかあれ……」

“サザーランド”に騎乗する騎士の一人がポツリと言った。

加速していくラウンズ同士の剣戟の応酬に見惚れ半分、呆然半分として見守っていた十人以上の騎士達も、その一言で我に返る。

『いいのかつて？』

「止めないと不味いんじゃないか？」

『じゃ、じゃあお前止めろよ……』

モニター越しに言われて“サザーランド”に乗る騎士はブルブルと首を横に振った。

「馬鹿いうなよ。あんなの草刈り機の中に手を突っ込むようなもんだぞ……止められるのは同じラウンズ様ぐらいだって」

「そうだ、アーニヤ様は？」

「すでに自騎を政庁地下の格納庫に預け、居住ブロックに向かってしまわれた。これらるにしても二十分はかかるだろう」

「グラストンナイツの方々は機体を失っていらつしやるし……」

「ギルフオード卿や、グラストンナイツでもせめてあの方がいらつしやれば話も違おうの
だろうが……」

騎士達は、ほとほと困り果てた、その時、どこからともなく一騎の「サザーランド」
が現れて、「クラブ」と「トリスタン」の方に向かっていった。

騎士は親切心で、その「サザーランド」に声を掛けた。

「おいおい、その「サザーランド」！ どいつか知らないがああ戦いを止めるつもり
なら止めておけ。怪我じゃ済まないぞ」

その「サザーランド」は歩みを止めない。

「おいっ！ 聞いているのか!？」

すると、その「サザーランド」はピタツと止まった。そして、外部スピーカーで一言。

『大丈夫、私もラウンズだ』

「へ？」

“サザーランド”は再び、激戦を繰り広げる二騎のKMFに向かっていった。

○

何十合目か分からない“トリスタン”の槍による攻撃を、“クラブ”はシユートソー
ドで弾き、二騎は再び距離を取った。

「……」

ロイはコックピットの中で、モニターに映る“トリスタン”を睨み続けながら、荒く
なった息を整えた。

『ふう。……まで続いたのは初めてだなロイ』

ジノの軽薄な声が響く。しかし、その息はロイと同じく上がっており、通常よりやや
深めの呼吸音が断続的に響いていた。

ロイは次の攻撃パターンを瞬時に頭に浮かべ、“クラブ”を身構えさせる。

“トリスタン”はその場で槍を振り回し、どつしり構えた。

『湧き上がってるんだろ？ 昂ぶってるんだろ？ いいぜ、私が全部受け止めてやる！』

ロイは鋭い瞳で“トリスタン”の一举一動に集中した。動作にいつでも対応できる
ようグリップを握る指に力を込める。

同時に考えた。

心の湧き上がり、昂ぶり。

確かにある。強い騎士と戦っていると、何か、ワクワクとしたものがこみ上げてくる。それは麻薬のように心地よく心を包み込む。しかし、それはロイにとって嫌悪、とまでいなくても、好ましいと捉えられる感情ではなかった。

怖いのだ。それらを自分が受け入れると、最終的には全てを壊してしまうような、漠然とした予感がある。

だから、いつもなら、ロイはそれに抵抗するのだが……。

(いいだろう)

今回はその麻薬をあえて受け入れた。

どっちにしろ、こんな微妙な情勢の時期だというのに、大それた事をしたジノを簡単に許すつもりは無い。当然殺しはしない。極力怪我もさせない。しかし、お仕置きする必要がある。だから……。

(殺す“つもり”で、いくぞ)

心で布告する。

呼応して、青い装甲に包まれた、脚部の機関がバツタの跳躍前にも似た動作で力をためる。

刹那、“クラブ”は身を低くして弾丸の如く飛び出していた。

迎え撃つ「トリスタン」。唸る「クラブ」のショートソード。得物同士がぶつかり合つて飛び散る光のしぶき。

『ッ！』

「トリスタン」はよろめきながらも、剣戟を受け止めると、すぐに制御を取り戻し、軽いステップを踏みながら、槍をまるで軽い鞭のようにしなやかに繰り出す。何度も。

「クラブ」は再び受けに回った。その「トリスタン」の攻撃を受け止めるたびに「クラブ」の足が半歩づつ下がる。

(受けでは負ける……なら攻める)

意を決して、ロイはその重い一撃の渦の中に飛び込む事にした。

そもそも、槍と剣では、距離が離れば離れるほど剣の方が不利だ。それならば、いつでも内へ。という思い切った行動だった。

その前進を嫌がり、防ごうと繰り出される「トリスタン」の槍。

受け、かわし、時に装甲を削られながら潜り抜けつつ、「クラブ」は「トリスタン」に肉薄する。

そして、「クラブ」はついに自分の攻撃エリアに足を踏み入れた。

『!!』

ジノが息を飲む。

機体同士が接触するまで接近した所で、ロイは渾身の力を込めて二つの刃を繰り出した。

半端な防御や回避は命取りだと悟ったのか、ジノはそれを防御ではなく、攻撃によって防ごうと会心の一撃を繰り出す。

「うおおおお！」

『だああああ！』

三つの刃がそれぞれの敵を切り刻もうと空間を切り裂き、風の唸りを上げた。その時。

「！」「！」「！」

帝国最強の騎士二人の渾身の一撃は、二騎の間に介入した何者かによって止められた。

二騎の専用騎の間に立つのは、量産騎の「サザーランド」。

（ス、スタントンプアーで、「クラブ」と「トリスタン」のMVSを避けて腕を止めた!?）

ロイはその光景に啞然とした。少なくとも「サザーランド」の騎士は自分とジノの閃光のような攻防が「見えていた」という事になる。

そうでなければこんな芸当はできない。いや、例え見えていたとしてもだ、ラウンズ

である自分でも性能の劣る「サザーランド」でこんな芸当ができるかどうか……。

ジノも同様に驚いているのだろう。攻撃を受け止められた後、「トリスタン」の動きは無く、止まったままだ。

そんな二人を尻目に、「サザーランド」のコックピットが開き、内部が外へとスライドする。

中から現れたのは、黒い衣装——アッシュフォード学園の制服に身を包んだ男だった、その男は静かに立ち、二騎を見渡して言った。

「止めるんだ二人とも」

それは、試合終了の合図だった。

言葉に反応するように、「トリスタン」のコックピットハッチが開き、中から白いパイロットスーツに身を包んだジノがスツと立つ。

彼は、端正な顔で苦笑して言った。

「ちえ、良い所取りだなスザク」

ロイも、コックピットをスライドさせ「クラブ」の外に出て学生服の少年に呼びかける。

「スザク！」

スザクは、ゆつくりとこちらを見て軽く笑った。

ナイトオブセブン、枢木スザク。ジノ、アーニヤと同様ロイの同僚で友達。

栗色の癪毛、童顔とも言える柔らかな顔立ち。一見すれば育ちの良いお坊ちゃんのような風貌だが、見た目とは裏腹に、敵からは「白き死神」と呼ばれ、すさまじい戦闘力で恐れられている男である。

「久しぶりだねロイ。けど、再会を喜ぶより先に、今は君の名を貸して欲しい」
「僕の名を？」

「ああ」

と言つて、スザクは少々険しい顔でジノに向き直つた。

「ジノ」

「久しぶりだなスザク。元氣だったか？ で、何だいその格好？」

「トリスタン」の装甲に肘を付き、笑顔で、片手をヒラヒラと振る。

「……」

スザクはその様子を少し呆れ気味に見つめ。言つた。

「ナイトオブゼロとナイトオブセブンが命ずる。政庁守備隊はナイトオブスリー。ジノ・ヴァインベルグ卿を拘束せよ」

「へ？」

ジノがそれを聞いて素つ頓狂な声を上げる。

周りにいた「サザーランド」は少し戸惑っていたが、躊躇は一瞬だった。ラウンズ二人の名に勝る命令を出せる人間は今の場にはいないからだ。

そして、特に抵抗もしなかった「トリスタン」はあつという間に「サザーランド」に取り押さえられた。

「お、おいスザク!?!」

ジノの慌てた声。スザクはそれを無視してチラリとこちらを見た。

ロイはコクリと頷き、

「ナイトオブスリーを連行しろ!　「男子トイレ」まで」

もちろん、全部の掃除を終えるまで、許すつもりは毛頭無かった。

①巻 12話『エピソード』

「えっ、逃げた？」

眩くと同時に、マリーカ・ソレイシイはその手に持った見舞い用の花束を、思わず落としてしまいそうになる。

場所は、ブリタニア帝国首都の、とある軍病院の中。清潔感あふれる広い廊下には、戦争で傷を負った者達が弱々しくもブリタニア軍人らしい凛とした動作で横切っていく。

「あなた、彼の妹か何か？」

疲れた顔で、マリーカにそう尋ねるのは看護婦だった。身長は同じ部隊に所属する金髪の前輩並に高く、マリーカはどうしても彼女を見上げる形になる。

「いえ、私は……」

かつて同じエリアで仕事をしていた後輩です、と答えようとして、口をつぐんでしま

う。
(妹……)

そう見えるのだろうかと考えて、少し気分が暗くなってしまった。

心身共に大きなあの人と比べると、並び立つなどおこがましいとは気付いてはいる

が、淡い夢のようなものは抱いてしまう自分がいる。

「妹では、ないです……」

結局、彼女は否定しか出来なかった。

看護婦の方は、その質問に特に意味は無かったのだろう。

「そう」

と、どうでも良さそうに生返事をして、辺りをキョロキョロと見渡した。

「私達もね。正直困ってるんですよ。いくらマシになったとはいえ、二元負傷レベル5の重傷者にこう自由に動き回られると、細菌感染の危険だってまだあるのに……」

「……」

負傷レベル5。その重傷度をマリーカは知っている。かつて、自分と最も親しかった者が同じレベルの負傷を置いて、歩くのもままならなくなったのを見たことがある。

「すみません。ご迷惑をおかけして」

反射的に、マリーカは頭を下げてしまった。

「いえ、まあ、ごめんなさい。あなたに謝られる事でもないのだけれど、もしお知り合いなら大人しく怪我を治すように説得してくださいね」

「看護婦さん！」

控えめだが、良く通る声が聞こえた。振り返ると、その先には患者と思われる白衣を

着た長身の男が、こちらに早足で歩いてくる所だった。

見覚えのある人物だった。元エリアーでコーネリアの従者をしていた時に、常にその傍にいた騎士。

「これはギルフォード卿。彼は見つかりました？」

看護婦に問いかけられたギルフォードは、申し訳なさそうに瞳を緩めた

「はい、院外でランニングしているのを手の者が見つめました」

ランニングと聞いて看護婦の表情が引きつった。すでに峠を過ぎたとは言え、まだ安静にしなくてはいけない患者がランニングと聞けば、看護婦として頭が痛くなるのは想像できる。

しかし、彼女はすぐにその笑顔を多数の患者に向ける緩やかなものに戻した。というか、こういう事はもう何度もあって、彼女も慣れているのかもしれない。

「では、すぐに戻ってきていただけなのですな」

「それが、その……申し訳ありません。これ以上体を鈍らせる訳にはいかないとか訳の分からない事を言つて逃げているそうです」

「逃げ……」

再度、看護婦の表情が引きつった。

「ど、どうもあの方は、シュナイゼル殿下が来院された時から、少し元気が出過ぎている

ようですね。皇族の方にお見舞いに来ていただいてはしゃぐ気持ちは分かりますが、子供ではないんですから、他の患者の手前もありますし、少し謹んで頂きたいですわ」

言葉の刺をマリーカは感じ取った。当然、ギルフォードもそれを察知しているのだろう、応じるように頭を深く下げた。

「ごもつともです。私の部下がご迷惑をおかけして誠に申し訳ありません。すぐに連れ戻しますので」

「分かりました。お任せ致します。戻られたら必ず私まで伝えてくださいね」

「はい、必ず」

「では」

そして、看護婦は通常の業務に戻っていった。

頭をあげ、女性の背後を見送りながら、ギルフォードは弱った表情でため息をついた。

「あの、ギルフォード卿」

事の成り行きを見守っていたマリーカは、元上官に気付かれていないと知りつつも、声をかけた。

「んっ、君は……」

眼鏡の奥の瞳が細くなった。

「ご無沙汰しております。一年前まで姫様の従者をさせていたいただいたマリーカ・ソ

レイシイです」

ギルフオードの中で、欠片が塞がったようだった。

「ああ、ソレイシイ君か！ 久し振りだね」

「覚えてて下さいましたか」

「少し大人びたので、見ただけではすぐに分からなかったよ」

口元を緩めたギルフオードだったが、彼はすぐに表情を不思議そうなものに戻した。

「ところで、今日はなぜここに？ 聞けば君はグリンダ騎士団を経て、今はヴァルキリ工

隊に所属しているそうだが。見たところ、同僚の見舞いか何かかい？」

「その通りです。配属地の移動中に本国で自由時間があつたものですから、お見舞いに

……」

ギルフオードは、マリーカの持っている花束に目をやったあと、再び視線を少女に戻

した。

「誰の？ 私が知っている方かな？」

同じく入院しているギルフオードでも、この病院は大きいので患者全員を把握できて

はいないのだろう。興味深そうに聞いてきた。

マリーカは、不意に頬を染めた。

「いえ、あの、どうやら、今日はお会い出来なさそうで……」

と、ここでギルフォードは当人以外のグラストンナイツのメンバー内で囁かれていた噂を思い出した。

「ああ、あいつのか。すまない、すぐに連れ戻すからもう少し待っていてくれたまえ」

「いえ、顔だけ合わすつもりで、もう出立の時間ですので私はこれで」

「そうか……わざわざ来てくれたのに、本当にすまなかった。あいつには君が来てくれたことは伝えておくよ」

「いえ、大丈夫です」

マリーカは、笑顔で言った。

「あの人も、お忙しいでしょうから。では、失礼いたします」

「ああ、君も任務を頑張ってくれたまえ。武運を」

その言葉にお礼を言つて、マリーカはその場を後にした。

ああは言つたが、心の中では落胆の色が広がり始めていた。時間と機会が無い上に、今回は一世一代の大勝負の気構えでやってきていたのだ。

「武運を。お体を大事に……」

せめて、彼の過ごす場所でそう呟いて、心を慰める。

彼女が目当ての人物と再会することになるのは、もう少し先の話になりそうだった。

コードギアス 反逆のルルーシュ LOST COLO

RS R2 蒼失の騎士 TURN 2

②巻 0話『プロローグ』

「悪いが、君と馴れ合うつもりは無い」

差し出した手は、何者にも受け入れられる事は無かった。

首都郊外の一角にある巨大闘技場。その選手待合室。

新たにナイトオブブラウンズに任命されることになったロイ・キャンベルと枢木スザクは、コンビを組んで、現ナイトオブブラウンズであるジノとアーニャのペアと模擬戦を行う事になっていた。

ブリタニアの皇帝陛下の御前で、である。

現ラウンズ両名の武勇はよく聞こえてきている上に、相性が良いのかこの二人は戦場をもよく共にしている。それなりのコンビネーションを発揮して襲いかかってくる事は容易に想像できた。

対して、ロイが組む枢木スザクという人間は、エリアーのブラックリベリオンを止

めた戦果に始まり、その腕前が十二分にある事は疑いようが無かったが、その人となりは分からなかった。

性格が分からなければ完全なコンビネーションは困難である。もつとも、それはある程度の時間を必要とすることであり、ロイ自身もそこまで望んでいたわけではなかった。だが、せめて初めて顔を合わせる時ぐらいいはお互い好印象となつて、コンビネーションを築ける足がかりにできればと考えていた。

だから、出会つてすぐに先に名乗つたし、手もこちらから先に差し出したのだ。

しかし、返つてきたのは冷たい視線と言葉、そして差し出されず彼の腰の部分で強く握られる拳の鈍い音だけだった。

「枢木卿。私に、何かあなたの不審を買うような行動があつたらどうか」

尋ねながらも、自身の行動を思い起こすが該当するものが無い。身分卑しい出身の者を無条件で嫌うような類のものだろうかとも思つたが、そんな様子も無い。

事実、

「無いよ。そんなもの」

というのが、枢木の答えだった。

「ではなぜっ……」

栗色のくせ毛の下に見える眉間に溝ができる。

感情を、ロイは感じ取っていた。

怒り、憤怒と言っても良い。

それがこれ以上なく、ロイに叩きつけられる。思わず身構えそうになる程に。

「枢木卿、どういう理由で僕にそんなものを向けるのか」

枢木は力を込めていた口元を緩め、

「キャンベル卿。答えは言えない、けどこれだけは言える」

絞り出すような声だった。

「君は悪くない。悪くないんだ。ロイ・キャンベルである君は。だから」

「なんだそれは、訳が分からない！」

ここにきて、ロイも苛つき始めていた。無意味に無礼な態度を取られているのだ。常人ならば怒り出しても誰も咎めない所である。

「必要以上に僕に近づかないくれ。頼む」

「答えになっていない。つまり、あなたは僕と永遠に仲良くする気はないという事なのか？」

肯定が返ってくるかと思つたが、逆だった。

「いや、そうではない。まだ、整理ができていないだけなんだ。もうしばらく待つてほしい」

意味が分からなかった、そうであるが故にまだまだ問いかけたいことも沢山あった。しかし、それ以上のやりとりは、枢木が背を向けることによつて出来なくなつてしまつた。

こんな第一印象なのだ、御膳試合の結果は散々なものとなつた。

観戦していた有力貴族からは、既に絶大な戦果のある枢木はともかく、ロイのラウンズとしての腕前を疑問視する声が多数あがつた。それが原因で、元々ナイトオブゼロに与えられる予定だつた領地の授与も一年近く遅れる事になつてしまつた。

②巻 1話『月の光』

エリアー1政庁にあるナイトオブセブン、枢木卿専用の執務室。

帝国最強の騎士団の一員であるジノとアーニヤ。この二人をトイレ掃除送りにしたスザクとロイは、久々の再会を祝っていた。スザクは学生服のまま、ロイはすでにラウングズの軍服に着替え、青紫のマントを羽織っていた。

二人は向かい合って湯呑に注がれた熱い緑茶を音を立てて飲む。間に置かれたテールにはスザクが揃えた各種煎餅が完備されており、お茶のお供は完璧だ。

「本当に驚いたよ。三人同時に来るんだから」

熱い息を吐きだしながら、スザクが言う。ロイは苦笑した。

「ジノの奴。まさかスザクには僕達が来ることすら伝えてなかったなんて……びつくりしただろ？」

「そりゃあそうさ。政庁に帰ってきたら君達は本気で戦ってるし、アーニヤは一心不乱にトイレ掃除してるし……全く、人が悪いよジノも」

同意して、ロイは再び湯呑を傾けた。

日本のお茶は初めて飲む。紅茶と違って独特の強い渋みがあるが、不味くはない。む

しろロイの味覚には合っているようだった。

「ところでロイ。僕の『ランスロット』は？」

「あれはもう少し調整がいるらしくてね。ロイドさんが直に持つてくるよ。来週って言うってた」

「そうか。調整の時間がかかっているのは、やっぱりあれが原因かな……」

「セシルさんから聞いたよ。模擬戦で無茶したんだろ？」

「エニアグラム卿が相手だったんだ。手なんか抜けないよ」

「つい、ロイは苦笑してしまう。」

「そうだね。僕もあの人に模擬戦でエライ目に合わされたのは一回や二回じゃないし」

「同意の笑みを浮かべつつ、スザクは指をロイに向けた。」

「でも、良い事もしてもらったんだろ？」

「え？」

「そのマント。エニアグラム卿と同じものだから」

「青紫のラウンズマントを指されて、ロイは少し頬を染めた。思わずその手で、感触を確認する。」

「ああ。僕のために作ってくれたみたいで……」

「照れた顔を隠すように俯いて、太い眼鏡を指でかけなおした。」

それからしばらく二人の雑談は続いた。久々に再会したという事もあり、話す内容は事欠かなかった。

「ところでさ、ロイ」

会話の途中で、スザクが違う話を切り出してきた。本日三杯目のお茶をすすりながらロイは意識を向ける。

「なぜ来たんだい。このエリアーに」

「ああ、それは……」

何気なく答えかけて、ロイはふと言葉を止めてしまった。

一瞬。本当に一瞬だったが、スザクの目が鋭く尖った。

彼はすぐに表情を戻したが、その一瞬だけ、日本人独特の黒い瞳には軽い怒りのような感情が込められていたような気がした。

ロイは首を傾げた。しかし、隠す事など何も無いので、正直に言う。

「ゼロに興味があつてね」

「ゼロに？」

「あの放送。ゼロ復活の放送だけど君も一緒に見てたよね？ あれを見て面白そうな男だと思ったんだ。だから、直に会ってみたいと思って」

「……………へえ」

スザクは、今度は一瞬ではなく、ハッキリとこちらに敵意にも似た鋭い眼差しを送ってきた。

「なぜ、ゼロに興味を持ったんだい？」

尋問する警察官のようなやや暗く、重い圧力を感じさせる問いかけだった。

「なぜって……」

ロイは怪訝に思いながらも、答えた。

「理由なんて無いよ。ただ、このブリタニアに反旗を翻した男だから、ナイトオブブラウンズとして関心を抱いただけさ」

「……」

スザクは、指を顎に持っていき、何やら思考を始めた。こちらの言葉を値踏みしているようでもあった。

ロイは、スザクが何を考えているか読めなかった。だが、一つだけ漠然とした予想が浮かんだ。

「……スザク。もしかしたら、僕に来て欲しく無かったのか？」

思い切つて尋ねてみた。今まで、スザクは一緒に任務をすると決まればとても喜んでくれたが、今回は……。

答えずに、スザクは視線を下に向けてなにやら考え込む。

ロイは、その様子を黙って見ていた。やつぱり意味が分からなかった。自分は何かスザクの気に触る事をしただろうか？ と考えを巡らしてしまふ。

やがて、スザクはゆっくりと顔を上げた。表情は、元に戻っていた。

「いや、すまない。何でもないんだロイ。こっちの勘違いだったみたいだ」

スザクは、その細いながらも鍛え上げられた右腕を差し出してきた。

「君の優秀さは良く知ってる。これからよろしく頼むよ」

少なくとも、今この時のスザクの笑顔は本物だった。

ロイは顔を輝かせた。スザクが自分の事を歓迎していないなんて考えすぎだった。

「ああ、こちらこそ。また君と仕事ができて嬉しいよ」

差し出された手に、自分の手を重ねる。

一拍置いて、ロイは安堵感をかみ締めながら手を離し、再びソファに背を預ける。

同じようにスザクも体をソファに預けたのを見計らって、ロイは口を開いた。

「それにしてもスザク。ジノも言っていたけど、それ変わった服だね？」

さつきまでの暗い思考と空気を振り払うかのように、ロイはあえて明るい口調を心がけた。

別に、この言葉自体に意味は無い。ただ、さつきまでの嫌な話題から流れが変われば良い、そう思って何気なく放った言葉だった。しかし、スザクはその何気ない言葉に対

して心底意外そうな顔をした後、

「あ、ああ……」

曖昧に答えて、制服を指で撫でた。

「学生だからね、制服」

「アツシユフオード学園の？」

「君にとつても懐かしいんじゃないかい？」

「はあ？」

笑顔で言うスザクの言葉に、ロイは眉をひそめた。

「何を言ってるんだスザク。僕はそんな制服を見たのは初めてだよ」

「……そうだったね」

含みのある言葉遣い。

眼鏡の奥でロイは疑惑の眼差しを向けた。まただ、またスザクが一瞬だけ怪訝そうに

瞳を細めた。

（何なんだ、一体）

ロイは一瞬迷ったが、ここは今後のためにハッキリと言う事にした。

これからスザクとは、このエリアで共に背を預けあつてやっていく事になる。それなのに初日からその仲間に、胸がモヤモヤとするような感情は持ちたく無い。

(あの時のような結果は、もう二度とごめんだ……)

「スザク、いい加減にしてくれ。一体どうしたというんだ。今日の君はなんかおかしいよ？」 僕に気に入らない所があるのなら——」

「いや、なんでもないんだロイ。もう態度は直す。……ごめん。……最近色々あつてきすまなそうな顔。そんな顔をされたら、ロイはもう何も言えなくなってしまう。」

やはり、元ナンバーズであるスザクがラウンズをやつていく過程では、自分とはまた違つた強い風当たりがあつたりするのかもしれない。

ロイはいまだに、スザクの態度に釈然としないものを感じているが、とりあえずそう勝手に理由を作つて自分を納得させておく事にした。そうしておきたかつた。

「分かつたよ。色々あるんだね……」

「ああ、本当にすまない……つて、ん？」

スザクは突如、少し困つたような顔をして、

(あくロイ。あのさ)

小声で話しかけてくる。思わず、ロイも控えめに返答した。

(何?)

(えつと、君は気付いてないと思うんだけど……。一応言つておいた方がいいかな、と思つて)

スザクの言いたい事が、ロイにはすぐに分かった。まず悠々とお茶を一口含む。

(ああ、もしかして気付いたのかいスザク?)

(へっ? って事はロイ。君は気付いてたの?)

(とつくに)

ロイの言葉を聞いて、スザクは更に驚いた顔をした。

実を言えば。先ほどからドアの隙間からアーニヤ・アールストレイムが入り口のドアの隙間から顔を少し出して、こちらを、おそろおそろ覗いている。

(許してあげなよ)

そう説得するスザクに、ロイは、

(意外だなスザク。君がそんな事を言うなんて)

ロイは、テーブルに置いてあった固焼き煎餅を手にとって、乱暴にバリバリとかじる。それをお茶で流し込んでから、

(政庁の守備力に問題点があったのは認めよう。でも、それならそれで、ちゃんとした正しいやり方で主張するべきだ。アーニヤは間違った。簡単に許していいものじゃない)

正論である。しかし、いつもはその正論を頑なに養護するスザクは、今回それをしなかつた。

(それは分かるよロイ。でもさ……)

（スザク。間違つたやり方に意味は無いんじゃないやなかつたのか？）

（それはそうだけど……）

でも、とまた呟いてスザクは一旦言葉を置いた。少し考え込んでから、またこちらを説得するような口調で喋り出す。

（完全に悪意からきてやつたわけじゃない。少なくともアーニヤは純粋にナナリーのためにやってくれたんだろ？ だから、僕は君にアーニヤを許してあげてほしいんだよ……。あつ、もちろんジノは話が別だけど）

いつもそうだな、とロイは数ヶ月ぶりに再会した友の顔を見つめ、そんな事を思った。頑なに規律を重んじるくせに、それ以上にどうも情に流されやすい。あやふやででたらめ。

冷たい男にはなれるが、自分やジノと違って冷徹になろうとしてもなりきれない男。それがスザクだ。

でも、まあ、ロイはそんな人間味溢れる甘いスザクが大好きなので、その事について文句を言う気はサラサラないわけだが……。

ロイは、少し考え込んでから自分の頭をかく。そして、また深くため息をついて、「アーニヤ。掃除は終わったのか」

顔を向けずに、あえて怒気を含んだ声で言った。

背後のアーニヤは体を震わせる。そして扉に隠れたまま、戸惑いながらも答えた。

「うん。セシルに聞いたり、掃除のおばちゃんに手伝ってもらったり……」

「そうか」

ロイは体を捻り、ソファ越しにアーニヤに顔を向ける。その顔は、男ながら悪戯をした子供を許す母親のような顔だった。

「じゃあ疲れただろ。こっちにきてお茶を飲みなよ」

「でも……」

不安そうな顔で、動かないアーニヤ。

スザクは見かねたのか、助け舟を出した。

「ロイもこう言ってるし、罰は受けたんだろ？　ならこっちにきて一緒にお茶を飲もう

よアーニヤ」

それでもアーニヤはその場から動かず、視線を下に向けたまま尋ねた。

「……ロイ。怒ってない？」

いつも通りの淡々としたアーニヤの口調だったが、仲間であるロイとスザクには分かった。その悲しげで微細に震える口調を。

(少しやりすぎたかな……)

と、ロイは自嘲気味にため息。今度は温和な年上の顔で微笑んだ。

「もう怒ってないよ」

そう言ってしまうって、ロイは、ふと自分も何だかんだで情に流される人間だな、と実感した。

「本当？」

「ああ、本当さ」

「だってさ、良かったねアーニヤ。今、紅茶を淹れるから。あつ、確かケーキもあつたかな」

スザクは席を立ち、ロイ達に背を向けて部屋の隅にある棚まで歩いていく。多分、そこに紅茶を淹れる器具があるのだろう。

「……」

アーニヤはトボトボとした足取りでソファの前まで来ると、スザクが座っていた方が、ロイの座っている方が、どちらに座るか少し迷って、結局はロイの隣に腰掛けた。

トイレ掃除の後だからか、それともKMFに騎乗して汗をかいたからか、アーニヤはシャワーを浴びてきたようだった。

彼女が腰掛けたと同時に、ミルクのような甘いシャンプーの匂いがロイの鼻腔をくすぐって、ロイはなんか気恥ずかしくなった。

○

(考えすぎだったか?)

スザクは、柵の前で紅茶を淹れる準備をしながら、険しい表情で考えを巡らせていた。なぜロイがこのエリアに来たのか。ある事情から、スザクにはその理由をハッキリさせる必要があり、義務があつた。

(話を聞いた所によれば、ロイはジノに誘われてこのエリアに来たらしいけど……)

この点だけ見るならば、不思議な所は無い。

ロイは優秀な上に、アーニヤ、ジノと並んでブリタニアでは珍しくナナリーの思想に共感してくれる数少ない貴族だ。

このエリアへの派遣が決まっていたジノが気を利かせて、ナナリーの政策が上手いくように、友人のロイをこのエリアへ誘うことに關して不思議な所は何も無い。

(けど、もし彼がそうなる事が当然という背景を盾に、意図的にこのエリアに来たとすれば)

例えば、ロイがそうして欲しいというジノの思考を逆手にとって、意図的にジノにこのエリアの地に自分を「誘わせた」としたら?

彼の話術の巧みさを考えればありえない話でもないだろう。

だから、スザクは今回色々カマをかけてみた。

ゼロの事。

制服の事。

しかし、スザクはロイの一挙一動全てを見逃すまいと、その態度を凝視していたが、特に不審な点は見当たらなかった。

もつとも、賢い彼にとつてこの程度のカマかけに引つかかる事などまず無いだろうが、少なくとも今回だけで判断するならばシロと言うしかなない。

(それとも、疑う事自体が不毛なのだろうか?)

“あの方”の“あの力”は完璧なはずだった。

それは慈愛に溢れていた“彼女”のあのような行動を間の当たりにしたスザクが一番良く知っている。

(いや……)

スザクは、後ろで談笑するロイとアーニヤには分からないくらい小さく首を振った。

(本心を隠すのは、アイツと一緒に上手かった)

スザクは一度欺かれている。

(油断は禁物だ。常に疑い続けるぐらいで丁度いいんだ。“二人”とも僕より演技力や読みあいにかけては何枚も上手なんだ)

どちらにしろ、ロイについてはこのゼロが復活した地——エリアーに來てしまった以上“奴”共々、自分が目を光らせる必要があるだろう。

「スザク。お茶はまだ？」

そんな思考を遮るように、アーニヤの急かす声がした。

スザクは急いで顔つきを緩める。そしてゆっくりと振り返った。

「はいはい。今淹れるよアーニヤ」

「遅い」

眉をひそめるアーニヤ。

その時、アーニヤの隣のロイが、分厚い眼鏡をキラリと光らせた。

「アーニヤ。淹れてもらっているのに、その言い草は無いだろ」

「……ごめんなさい」

あのアーニヤがシユンとした。その光景を見て、スザクは思わず吹き出してしまった。
た。

風が吹く。外の日はもう沈み、夜になろうとしていた。

○

エリアーの政庁でのラウンズ襲撃事件から二日後。

ブリタニアのベリアル宮では、ナナリー・ヴィ・ブリタニアが明日のエリアーへの
出立にあたり、その準備を始めていた。

準備と言っても実質的な事は侍女達がやってくれる。ここでいう準備とは、つまりナ

ナリーの心の整理の事だった。

部屋の窓から、夜空を見上げる。

丸い月が浮かんでいた。しかし、それは視覚に障害のあるナリーには見ることできかない。

それでも、雰囲気を感じ取る事はできる。丸い月が自分に届ける優しい光と、その暖かさを。

ここ一年で身に付いた感覚だった。一年前まで、ナリーは満月である事を感じる事は出来なかった。そんな感覚は必要無かった。なぜなら、傍にはいつも満月である事を教えてくれる人がいたから。

——ナリー。今日は満月だよ。

そう言つて優しく手を擦つてくれた兄。ルルーシュ・ランペルージ。

今現在、生死不明の大切な家族。

(お兄様……)

ナリーは月に呼びかける。きつと、生きて同じ月を見ているであろう兄に想いが届く事を願つて。

(お兄様。私は日本で私が正しいと思う事を目指してみます。どうか、見ていて下さい。見守っていて下さい。そして出来れば……)

目頭が潤む。しかし、ナナリーはエリアーへ行くと決めた時、同時にもう泣かないと決めた。だから、ナナリーは今にも嗚咽を響かせそうな、いけない唇をギュつとして耐える。

(私の傍で支えて下さい。お兄様……)

気付くと、ナナリーは自分のドレスを力強く握っていた。

『ナナリー様』

唐突にドア越しに呼びかけられて、ナナリーは顔を上げた。

聞き覚えのある声だった。自分の身の回りの世話をしてくれている侍女の一人だ。

ナナリーは、自分の声が少し震えていないか心配になりながらおそるおそる返答した。

「あ、はい。何ですか？」

『お客様がお見えになっております』

「お客様？ どなたですか？」

『カリーヌ様です』

ナナリーは怯えの表情では無く、心からの笑顔を浮かべた。

「あ、では私の部屋にお通しして下さい。それと、お茶の用意をお願いします」

『かしこまりました』

侍女は部屋に入る事も無く一礼して去っていった。

(……そういえば、もう半年になるのですね。カリーヌ姉さまがここに足を運んで下さるようになってから)

感慨深い気分になりながら、ナナリーはふと、半年前の出来事を思い返していた。

半年前。このベリアル宮に初めてカリーヌ自らやってきた日の事を。

②巻 2話『ナナリーの目標』

半年前。ブリタニア本国、ベリアル宮。

「……」

「……」

「……」

部屋には重い空気が充満していた。

向かい合うのは三人の少女だ。この屋敷の主であるナナリー、護衛役であるナイトオブシックスのアーニヤ、そしてナナリーの姉である第五皇女カリーヌ。

身分の違いはあれ、三人は偶然にも同じ年だった。

通常、そんな女の子が三人集まれば、お菓子をつまみながらお茶を飲み、今流行の歌手や芸能人、この前あつた面白い事、好きな男子の話題などで、キャツキャツと大いに楽しく盛り上がりそうなものだが、

「……」

「……」

「……」

誰一人として口を開かない。静かだ、静か過ぎて、屋敷のどこかにいるメイドや侍女たちの話し声すら聞こえてきそうな程だった。

ナナリーは、黙って俯いてドレスの裾を握っているし、アーニヤはその傍で直立不動しながら、黙ってカリリーヌの事を睨むように見据えている。

カリリーヌは、どことなくそんなアーニヤの視線に気付きながらも、我意に介せず、といった感じで目の前のお菓子に手を付けず、黙って紅茶だけを飲んでいた。

長い長い時間が過ぎて、最初に口を開いたのはアーニヤだった。

「カリリーヌ様。何しに来たの？」

その言葉の意味がへ用が無いならとつとと帰れば？と言っているのは明白だった。

カリリーヌには、正しく伝わった。

「うっさいわね」

手に持ったティーカップを乱暴に置いて、彼女は不満げに言った。

「私だつてこんな所に来たくは無かつたわよ。でもロイ様がナナリーと仲良くしてください、つて言うんだもの。仕方ないじゃない」

今まで変化が無かつたアーニヤの瞳が、スツと細まった。

「ロイのために来たの？」

「悪い？」

「悪い。色々悪くて一つ一つの理由を挙げていくのも面倒。だけどあえて一つ言うなら、まずロイの頼みをこういう表面上の行動だけで取り繕おうとする性根が気に入らない。そもそも本気でこうやって、ナナリー殿下の家を訪問する『だけ』の行動をロイが望んでると思ってるの？ だったらお目出度すぎ」

そのあまりにハッキリとした言い様に、流石のカーリヌも驚いて目を見開き一瞬言葉を失った。だが、すぐに正気に戻ると、彼女は顔を真っ赤にして言った。

「あ、あ、あ、あんた！ ラウンズの分際で、皇女である私にそんな口の利き方して許されると思ってるわけ!？」

思わず立ち上がるカーリヌ。その視線をアーニヤは真っ向から見据える。

「私が仕えるのは皇帝陛下と、その皇帝陛下に護衛を任じられているナナリー皇女殿下であつて、カーリヌ様じゃない」

間違つてはいない。しかし、皇女であるカーリヌに向けて良い言葉でもない。厄介なのは、それを理解してアーニヤは言っているという点だろう。

馬鹿にされたと思つたのだろう。プライドの高いカーリヌの体がワナワナと震えだし、先ほどとは比較にならないほどヒステリックな声をあげた。

「キー！ あんた！ いい加減にしなないとお父様に言いつけて——」

「ロイは」

その名は、燃え上がる炎を沈めるのに十分な効果があった。

「この前、ガブリエツラ様のウォリック宮で、カリリーヌ様がナナリー皇女殿下に浴びせた悪質な言葉を知らない」

カリリーヌは息を呑んだ。

アーニヤは淡々と続ける。

「ナナリー皇女殿下はスザクの大切な女性。そして、ロイにとってそのスザクはジノと並んで大切な友達。そして、その友達の大切な女性を傷つけたカリリーヌ皇女殿下。この事実を知れば、ロイは何て思うだろうか？」

「……ッ！」

先程とは打って変わり、顔を青くして、後ずさるカリリーヌ。一応、ナナリーに対して酷い事をした、という自覚はあるらしい。

「何て、思う？」

アーニヤは追い討ちをかける。もちろん答えは分かりきっている。軽蔑だ、軽蔑されるのだ。いや、そこまではないにしても、嫌われる可能性は高い。

カリリーヌにとって、恋する憧れの異性にそんな風に思われるのは耐えられるものではないだろう。

「わ、私を脅そうっての……」

カリーヌがなんとか瞳の鋭度を保ったまま、でも弱々しく言う。
アーニヤは首を静かに振った。

「別に。ただ、カリーヌ様が余計な事を騒いだり、余計な事を皇帝陛下にチクツたり、陰湿で余計な事をナナリー皇女殿下に言わなければ、私も余計な事をロイには言わない。それだけ」

「くっ！」

カリーヌは苦虫を噛み潰したかのように呻いた。

その様子を見たアーニヤは、表情は変わらないものの、どことなく満足気に頷いた。

「私はそろそろ違う任務のために、しばらくここを離れなければいけない。そうなる前に、この事だけはハツキリと言っておきたかった。カリーヌ様。私が席を外す間、ナナリー皇女殿下を、ぐれぐれもよろしく。」

カリーヌはその皮肉に対して文句を言いたげに口をパクパクさせたが、最終的にはフーン！ とアーニヤから顔を思いつき背けるに留まった。

「分かつてるわよ！ 泣かせたりなんかしないわ！」

「正解。賢い選択」

アーニヤは、今度はナナリーに向き直る。

（ナナリー皇女殿下）

(あ、はい！)

事の顛末をオロオロしながら見守っていたナナリーは突然呼ばれて驚き、慌てて顔を上げた。

そんなナナリーにアーニヤは、淡々ながらも優しさが感じられる口調で言った。

(もし、どうしてもあの人から耐えられない仕打ち、言動を受けた場合、いつでも渡してある通信機のボタンを押して。飛んで来るから)

「聞こえてるわよ飼いだ！」

ナナリーに言われて、アーニヤはゆっくりと振り返り、首をかしげた。

「失礼だった？」

「当たり前じゃない！ あくムカツクウツツ!!」

なにやら頭を抱えて喚き始めたナナリーを尻目に、アーニヤはスタスタと部屋の入り口まで歩き、

「じゃあ行ってくる。なるべくすぐ戻ってくるから」

「いつてらっしゃい、アーニヤさん」

ボタンと丁寧な扉は閉まった。

同時に、ナナリーは怒りの声をあげた。

「つたく！ お父様の飼いだの分際でこの私に、あんな事を言うなんて！ 性悪だし根

暗だし！ 笑わないし！ 何よアイツ！」

「……」

「大体、ナナリー！ アンタがいけないのよ！ 一応今はアイツの主人でしょ!? だったら、ちゃんと目上の者に対する態度の教育ぐらいしときなさいよ！」

「あ、いえ。正確に言えば私はアーニャさんの主人では……」

「言い訳はいらない!!」

「申し訳ありません……」

反射的にナナリーは俯いてしまった。カリリーヌはその姿をみますイライラがこみ上げてきたらしい。

——なんで反論の一つもしないのかしら、この子は！

そんな事を思いながらかは知らないが、カリリーヌは更にナナリーに詰め寄った。

「大体ナナリー！ アンタは昔からそうなのよ！ 人の良さそうな顔をしてその実何を思ってるか分かったものじゃ——」

「カリリーヌ様」

カリリーヌは言葉を遮られて、怒りとイライラが織り交ざったような不機嫌な顔をして、声の方に振り返る、

「何よ！ って……」

そこにはドアから顔だけを出したアーニヤがいた。瞳は突き刺すように、責めるようにジツとカリリーヌを捉えている。

無言の圧力に圧されて、カリリーヌの頬に冷たい汗が通る。アーニヤは、判決前の裁判官のような威圧感を醸し出しながら、

「さっき言った事。もう忘れた？」

アーニヤはそう告げて、自分の赤い携帯電話のディスプレイがカリリーヌに見えるように掲げて見せた。

細かい文字が見える。

それが何か分かった時、カリリーヌは顎が外れるのではないかと思えるほど、あんどりと口を開けた。

そこには、ナナリーがこのブリタニアに帰ってきてから約半年間、カリリーヌから浴びせられた続けた罵詈雑音が書き込まれていたのだ。

どうやら全部一字一句抜かす事無く、携帯に打ち込んで記録していたらしい。

(な、なんて根暗でネチっこい女……)とカリリーヌが自分の事を棚に上げて少なくとも恐怖に震えていると、アーニヤはそれを上回るものをカリリーヌに提供した。

アーニヤは器用に片手で携帯を操作する。すると、その罵詈雑音が書き込まれた画面の上に、

「この内容をメールで送信しますか?」〈YES〉〈NO〉と出た。

送信先のアドレスを見てカリーヌが愕然とした。それは、猛烈に見覚えのあるアドレスだった。カリーヌにとって、何も見ずに書けと言われてもスラスラと書き込める自信のある、あのアドレスだ。

そう、ナイトオブゼロ。愛しい殿方であるロイ・キャンベルの携帯アドレスだった。

「YES? それともNO?」

カリーヌの行動は素早かった。

彼女はダツとナナリーに走って近づき、車椅子のその少女を横からギュツと抱きしめ、大げさに笑って見せた。

ナナリーはちよつとびっくりした。

「アーニャさん!」勘違いしないで。私たちはとつても仲良しこよしの姉妹なのよ。

さつきのは冗談! 冗談よ! 愛しの妹をちよびつと苛めてみたいっていう愛情の裏返しみたいな? 姉独特のあれよあれ。あはははは!」

アーニャはそうやって笑うカリーヌを淡々と見て、ゆっくりと携帯を下げた。

「二度は、無い」

冷徹に言い放って、今度こそ、パタンと扉を閉めて出て行った。

それを確認すると、カリリーヌはヘナヘナと力なくその場で座り込んだ。

「こ、怖いわアイツ。敵には回したく無いタイプね……」

こればかりは仕方が無い。アーニヤとカリリーヌでは今まで過ごしてきた生活の質が違う。この二人が勝負をして、カリリーヌに軍配が上がるという状況と条件はあまりにも少ない。

「あ、あの。カリリーヌ姉さま、大丈夫ですか？」

ナナリーは隣でうなだれる姉に恐る恐る声を掛けた。もしかしたら、またヒステリックな声が返ってくるかもと身構えたのだが、その心配は無用だった。

「……うん、なんとかね。ただ酷く疲れたわ」

カリリーヌはそう言ってノロノロと立ち上がり、危なげ足取りでナナリーの向かいにある椅子に歩くと、そこに力無く腰を落とす。

そして、すでに冷めた自分の紅茶を一気に飲み干した。

つい先ほどまでの覇気は微塵も無い。どうやら、完全に毒気を抜かれてしまったようだった。

「ナナリー、お菓子もらうわよ。なんかお腹空いちやった」

「あ、はい。どうぞ。食べてくださいお姉さま」

「んっ」

と答えてナナリー又は、目の前のお菓子に手を伸ばし、皇室御用達のドルチェをいくつか自分のお皿に移すと、すぐにパクつき始める。

「ナナリー。そういえば、あんた食べないの?」

「あ、では私も頂きます」

「取ろうか?」

「あ、ありがとうございます」

ナナリー又は、ナナリーのお皿を手に取り、いくつかの小さなケーキを見繕って、再び皿をナナリーの前に置いた。

ナナリーはコトリと皿がテーブルの上に置かれる音を確認し。そのお皿の位置を確認するように細くて白い指で、テーブルをおそろおそろなぞっていく。

「あ、そうか」

ナナリー又は気付いて、ナナリーの手を取り、その手をお皿まで誘導した。きちんとフォークも渡す。

「重ね重ねありがとうございます……」

「自分で食べられるの?」

「はい。お皿の位置さえ分かれば大丈夫です」

ナナリーはお皿の上に乗ったケーキをフォークで探し、位置を確認すると器用に食べ

始めた。

「ナナリーはそれを眺めてポツリと言った。

「なに、やっぱ大変なわけ？」

「ナナリーは、一瞬何を聞かれているのか分からなかった。

「えっと、……それは、私の目の事でしょうか？」

「そうよ。他に何かあるのよ」

「ナナリーは驚いた。

「この姉と再会してから一年、体に負った障害を疎まれこそすれ、気にかげられた事は一度も無かったからだ。

「そ、そうですね。大変じゃない、と言えば嘘になります」

「ふくん」

「ナナリーは何やら、新しい事実を教えてくださいました無垢な子供のような反応をした。

「でも、皆さんが良くして下さるので、それほど苦労は——」

「ナナリーが紅茶のカップを取って、口に運んだ所でそれは起きた。

「あつ……」

「ナナリーの小さな口の端から、紅茶が一筋垂れる。

「す、すみませんナナリー姉さま。お見苦しい所を」

ナナリーはテーブルに手を伸ばす。しかし、その手はすぐに止まった。

「！」

布をどこに置いたか忘れてしまった。

いつもなら、ナナリーはそんなミスはしない。目が見えない以上、食事やお茶の時、どこに何が置いてあるかを記憶する能力は必須だ。当然、ナナリーは長い暗闇の生活の中でその能力を身に付けている。

しかし、今日はナナリーが突然家にやってきてからずっと緊張のしっぱなしだった。

多分そのせいだろう。ナナリーは侍女が用意してくれた布を、テーブルのどこに置いてあるのか記憶に留めていなかった。

「……」

適当に腕を動かして探せば、テーブルの上に置いてある物を倒してしまうかもしれない。しかし、口元が汚れたままではあまりにもみっともない。

でも、どうする事もできずに。ナナリーはそのまま、固まっているしかなかった。

「……」

やがて、ナナリーは前に出した腕を下げた。当然、口元は気持ち悪のまま。

ナナリーはとても悲しくなった。自分なんて、兄がいなければ結局は汚れた口元を拭うことすらできない。そう思うと、涙が喉元までこみ上げてくる。

そんな時。

ふう、とカリーヌのため息。

ナナリーはビクツと肩を震わせた。怒られると思った。みつともないわねナナリー！と罵られると思った。

「みつともないわねナナリー……」

（やっぱり……）

予想通りの言葉にナナリーは身を固くする。しかし、後に続いた言葉は予想とは違っていた。

ガタつ、と席を立つ音がした。そして、こちらにゆつくり歩いてくる足音がした。

（えっ……）

清潔な布がナナリーの汚れた口元を拭った。

「喋りながら飲もうとするからでしょ……」

ゴシゴシとした手つきで拭われる口元。正直に言えば、ナナリーは少し痛かった。でも、

「んっ？ 何、笑ってるのよナナリー？」

「あつ、いえ、何でもありません……」

ナナリーは、なぜだか先程とは違う意味で目頭が熱くなるのを感じた。

話は戻つて。ナナリーがエリアーに出発する前日。

ナナリーの部屋ではカリーヌが紅茶を飲みながら、喋り立てていた。

「でさー、さつきまでロイ様とお話してただけけど、ふと携帯の通話時間を見たらもう二時間も経つてたの。それで私思つたわけ。ああ、このままおしゃべりを続けていては、ロイ様の迷惑になつてしまふ、つて、だから言つたの。ロイ様、私、名残惜しいですけど。私ロイ様のために我慢して電話を切ろうと思います、つて、そしたらロイ様「私なんかのために、そのような配慮をしていただきありがとうございます。カリーヌ様は将来きつと思慮深い素敵なレディになるのでしょうか」つて言つてくれたの。でもさく。それはそれで嬉しかったんですけど、私としては正直ロイ様には「僕はまだ何時間でもカリーヌ様とお話してたいです」つて言つてほしかったの。でもロイ様から健気で遠慮深い女性に映つた事はそれはそれで良かったと思うんだけど、どう思うナナリー？」

向かい合つて座る姉に、どう思う？　と言われても、問われている内容がイマイチ理解できなかったナナリーはとりあえず、

「そ、それは、良い判断だつたと思ひますわ」

と、一応同意の笑みを浮かべておいた。

一拍置いて、カリーヌの笑う声。

「あ、やつぱりそう思う？ だよね〜」

と、カリリーは満足げに手に持ったカップを口に運んだ。

選択は間違っていないかつたらしく、ナナリーは内心ホッとした。

「ここで、ロイさんとは、他にどんなお話をなさったので……」

ナナリーが手元のカップを口に運ぶと同時に、彼女は「あつ」と小さく声を上げた。

口元から紅茶が垂れて口元が汚れのた。

「すみませんカリリー又姉さま。お見苦しい所を……」

ナナリーは近くにあらかじめ置いてあつた布で口元を拭こうと、手を伸ばす。しかし、その前に、サツとその布を取つた手があつた。カリリー又だった。

「まったくあんたは。喋りながら飲もうとするからでしょ」

口元を拭われる。カリリー又はぶつくさとなにやら文句を言っていたが、その手付きは丁寧で優しかった。

「……………ふふ」

「ど、どうしたのよナナリー。急に笑ったりして、気持ち悪いわね……」

「あ、いえ。カリリー又姉さまと打ち解けられたのも、私がこうやって私がお茶をこぼして、それを姉さまが心配してくださったのがキツカケだったなって思っています」

「！」

カリリーヌが驚いて息を飲む音がした。ナナリーはなんだかその姉の反応が無性に可笑しかった。

「ちよつ!? 馬鹿じゃないの! 何言ってるのよ! 勘違いしないで! 私はロイ様が「ナナリー殿下と仲良くしてください」って言おうから仕方なく……。そう! 仕方なくなんだからね! 今日来たのもロイ様に、「出立を明日に控えてナナリー様は緊張なさっているとします。なのでよろしければカリリーヌ様が励ましてさしあげてください」って言われたからなんだからね! 本・当・に! それだけなんだからね! 勘違いしないでよね!」

まくし立てるカリリーヌ。その姉の顔はナナリーには見えないが、きつと真つ赤になっているのだろう。

カリリーヌ・レ・ブリタニア。

かつて、この名はナナリーにとって、恐怖の対象だった。

幼少の頃、ブリタニアで過ごしていた時から、この姉と顔を合わせれば、飛んでくるのは悪意と、棘の生えた言葉、それだけだった。

嫌われていた、という表現では生ぬるい。疎まれていた、いや、同じ血が流れている事に憎悪を抱かれていたと言っても過言ではない。

今でも、例えばアーニヤなどはカリリーヌがナナリーを本気で疎んでいると思ってい

る。

しかし、そうではない。ある人の登場でそんな関係は終わりを告げたのだ。

ナイトオブゼロ。ロイ・キャンベル。ナナリーのやりたい事を手伝ってくれるし、本気で聞いてくれる。優しく、強くて、素敵な人。そして……友人であるアーニャの大切な人。

あの人が、カリリーヌにやんわりとナナリーと仲良くするよう頼み始めてから半年。たった半年で二人の関係はガラリと変わった。

確かに、目の前の姉はいまでもナナリーに罵詈雑言を浴びせる事は多々ある。アーニャなどはそこに怒りを感じているのだが、ナナリーだけは知っている。

その言葉には、すでに昔のような陰湿な悪意は内包されていない。

それどころか、昔、と言っても一年ぐらい前の話だが、ナナリーという存在が近くにいるのも嫌がっていたはずなのに、今ではこうやって自ら足を運んで訪ねてきてくれる。

結局。必要なのはきつかけだったのかもしれない。

今まで、カリリーヌはナナリーを拒絶していたし、ナナリーはナナリーでカリリーヌを恐怖の対象として近づこうともしなかった。

いや、それどころか、近づいてきたら逃げる事ばかり考えてきた。だから当然、距離

が縮む事は無かった。しかし、そこに、ロイ・キャンベルという橋渡し人が現れてから状況は好転した。

ロイの頼みによつて、カリーヌはしぶしぶながらもナナリーへ顔を向ける機会が増えた。ナナリーも、ブリタニアに戻つて来てからは色々な事から逃げる事をやめた。結果、少しずつだが二人は歩み寄る事になった。

そして、いつの間にか遠く離れていた姉妹の距離は、昔に比べて信じられないぐらい短いものになつていた。

実を言うと、ナナリーがエリアー行きを決めたのは、この長年決別していた姉との冷たい関係が氷解したという背景もあった。

結局。必要なのはきつかけだったのかもしれない。

人は分かり合える。長年憎しみあつていても、正しいきつかけさえあれば必ず仲良くなれる。

ならば自分も、そのきつかけを作れる人間になつてみたいと思つた。

それを教えてくれたロイ・キャンベルのように。

それを目指したユーフェミアのように。

「聞いているのナナリー!？」

カリーヌの問いかけに、ナナリーは微笑みを向けた。

「はい、分かってます。それでも私は嬉しいんです。例え、カリーヌ姉さまがロイさんのために私に良くして下さるのだとしても」

「ちよ、ちよつとなに泣いてるのよあんな!？」

そう言われて、ナナリーは目頭が熱くなっているのに気付いた。

ああ、さつそく、もう泣かないという誓いを破ってしまったが。これはまあいいか。とナナリーは思った。

だつて、これは弱い涙ではない。嬉しさが溢れる心地よい涙なのだから。

「えつえつ、何よ、何で泣いてるの？ 私？ もしかして私のせいなの!？」

思いつきり動揺するカリーヌ。ナナリーは細い指で目元を拭って、姉を安心させようと柔らかに微笑んだ。

「違うんです。カリーヌ姉さまは悪くないんです。ただ……。少し、風が目には染みたくうで」

「え？ そうなの？ 侍女とか呼んだ方がいい?」

「いえ、もう大丈夫です」

「ならいいけど……でも、しっかりしなさいよナナリー、あんな明日から総督になるんですよ。コーネリア姉さまやシュナイゼル兄さまのように振舞えとは言わないけど、そんなにメソメソしてたら部下に呆れられるわよ」

「はい、気をつけます」

「つたく、あんたは昔から泣き虫なんだから。本当に、気をつけなさい」

と、カリーヌが呆れて息を吐くのと同時に、壁の時計から、夜の九時を知らせる鐘が鳴った。

「あゝ、じゃあ、私、ロイ様への義理も果たしたし、そろそろ帰るわね。お母様はあなたとロイ様のことはあまり良くは思つてらっしゃらないから。ここに来てるつてバレるとまづいの」

「あ、はい。ロクなお迎えもせず、申し訳ありませんカリーヌ姉さま」

「いいわよ別に、そんなの期待してなかつたし。あ、見送りはいらぬ。ここでいいから。じゃあね」

カリーヌが遠ざかっていく音がした。しばらくして部屋の扉が開く音。しかし、その扉は完全に開く前に、ピタリと止まった。

礼儀に厳しい皇族がドアを開けっぱなしで帰るのは考えにくい上に、去っていく足音も聞こえない。

「カリーヌ姉さま?」

ナナリーが不審に思つて呼びかける。カリーヌはすぐに返答せず、しばらく黙つてから、

「……せ、せいせいブリタニアの役に立ってから戻ってらっしゃい！」

その言葉を最後に、扉は乱暴にパタン！ と閉められた。

ナナリーはその言葉に一瞬呆気にとられたが、

(戻ってらっしゃい、か……)

嬉しくて、クスツと微笑んだ。

ナナリーは車椅子を操作して、再び窓際に移動する。夜の空には、もちろん丸い月が浮かんでいた。

(お兄様。世界は冷たいのかもしれない。でも、こちらから微笑めば、優しくしてくれる人は私の周りには沢山います……)

窓から風が入る。同時に外の梢が揺れて擦り合う音がした。その音は聞いていても心地良いものだった。

明日、ナナリーはブリタニアを発つ。

②巻 3話『ルルーシユの苦悩』

エリアー。アツシユフォード学園のクラブハウスにあるルルーシユ・ランペルージの自室。

(……見つけた)

ルルーシユは、その鋭利な目元を更に細めた。

暗い部屋、電気は点いていない、それもあってノートパソコンから浴びせられる光で、繊細な顔に濃い陰影が浮かぶ。

(口口を懐柔し、機密情報局をほぼ手中に収めて。俺はついに……)

複雑な顔で、ルルーシユはディスプレイを見つめる。

画面にはブリタニア軍の中でもトップシークレットに該当する情報がまとめられていた。

その中には、ルルーシユにとって忘れられない、あの名前があった。

(お前の尻尾を捕まえたよ、ライ)

迷わず画面上の友の名をクリック。情報が拡大表示される。しかし、そこには友の手がかりどころか、黒の騎士団のバイザーをつけたライの写真と、

〈処刑済み。データ無し〉

ルルーシュは親愛なる友に対する無機質な記載に、衝撃も、驚きも、悲しみさえせず。ただ冷淡にその二言の表示を眺めていた。いや、それどころか、その細い口元にニヤリとした歪みが生まれ、

「ふはははははははははっ！」

声 が 漏 れ、笑 みが 溢 れる。悦 に 染 ま っ た 声 が こ だ ま す 。

友 の 死 に 高 笑 い。し かし、決 し て 気 が 狂 っ た の で は な い。

む しろ、逆 だ。

（良 か っ た。こ れ で ハ ッ キ リ し た）

確 信 し た。

（ライは “生きている”）

ど こ か 冷 た さ を 感 じ ら れ る 笑 顔 の ま ま、ルルーシュは開いた指をグツと熱く握り締めた。

皇帝の直轄である機密情報局にまでライの処刑情報が提示されていないのは、つまり、その情報を秘匿するのでは無く、抹消したいという事だ。

秘匿される情報というのは、人の目から隠される必要はあっても、何らかの理由で残しておく必要のある情報の事だ。そして、この機密情報局とはそうゆう秘匿される情報

を扱う機関である。

しかし、その機密情報局にもライの情報が無いという事は、ライの情報は秘匿も残しておく必要も無くなったという事……。それはつまり、その存在は消えたのでは無く、生まれ変わったのだと予想できる。

ギアスの存在を知らない人間がこの情報を見れば、ブリタニアに都合の悪い人間が黒の騎士団にいたから、とでも予想するだろうが、ルルーシュは違うと知っている。なぜなら、自分もその体験者なのだ。

そう、敵は——皇帝のギアスは人の記憶をいじり、その人物を強制的に生まれ変わらせる事ができる。

(一番心配していたのはライが処刑されて、その情報が正確に記載、もしくは公開されている事だった。映像なんかがあればこれ以上無い証拠になるしな。しかし、こうも堂々と隠蔽されていると、そのわざとらしさに笑いすらこみ上げてくる)

ルルーシュは喜びをかみ殺そうともせず、再度クツクツクと陰のある笑いを浮かべた。

(やはり、ライは俺と同じく記憶を消去され、いや、自分より強力にギアスをかけられ、新たな人生を歩んでいる。という線が濃厚だな……)

だからこのようにライという存在を抹消したのだ。生まれ変わったライがいる以上、

前のライの情報などあった所で邪魔にしかならない。いや、ある必要が無いのだ。

次に、ルルーシュはそのページを消して、新たな情報を探し始める。

(ライが、記憶を改ざんされたとして、新たな人生を送らされているとすれば……)

自分が皇帝の立場だったとして、ライという優秀な人間を自由にできるとしたらどうするか。

「とりあえず、軍人から探するのが妥当か」

そして、ルルーシュはここ一年でそれなりの戦果を得た軍人に絞って、データの洗い出しを開始した。

ライがブリタニアの軍人になったとしたら、優秀な手腕をもって、この一年で大なり小なり確実に戦果は上げているはずだ。また、「ここ一年で軍に入隊した」という条件は考慮しなかった。

そんなもの本人と周りの人間の記憶をギアスで操作すればどうとでもなるからである。

ルルーシュは小一時間ほど作業を続ける。数は五万程、話にならない。

機密情報局のデータベースだ。軍事国家特有の、民衆の戦意高揚を狙った数多い過大に持ち上げられている軍人についても、ここでは正当な評価が下されているはず。それでも、優秀な軍人がこの数……。

ルルーシユは、改めてブリタニアという国家の底力を感じ取れた気がした。

数多い軍人の中から、二十代以上の男は枠から外す。年齢などいくらでも、ギアスで本人に信じ込ませる事ができるとはいえ、いくらなんでも、あのライの外見で三十歳代の軍人にするのは無理がある。

外見の問題としては、もう一つ。これみよがしにライの顔にしたままの軍人にするほど皇帝も甘くないだろうから、ある程度、顔の整形の線も視野にいれて調査しなくてはいけない。と言つても、元が美形なので、整形でも限界はあるだろうが……。

また、能力の点からも言えることはある。ルルーシユは、ブリタニアからの評価が一分野に特化してではなく、平均的に高水準な能力を有する軍人を選別した。

指揮能力だけ高いとか、戦闘力だけ高いというのはライの能力の質と違うため、それは論外だからだ。

つまり、調べるのは、

“ここ一年で、ある程度手柄を立てた十代後半から二十代で、軍からは、平均的に能力が高水準という評価を受けており、そしてある程度、顔が整った男の騎士もしくは軍人”

という事になる。もちろん階級が高ければそれに伴つて、高い戦果を上げやすいので、その点も考慮して、階級に反比例して戦果を上げた軍人もあとでチェックする。

(よし……)

先ほどの条件に当てはまる者を中心に調査を始める。絞っても対象の数は一万に近かった。

気が遠くなるが、こればかりは他の者に振るわけにはいかない。

自分が、やらなければいけない。

優秀な騎士の順に探した方が、ライを早く見つけやすいと思つたルルーシュは、まず、先ほどの条件に当てはまる中で、ブリタニアからの評価やその騎士の能力が高い順に並ぶ一覧を製作した。

一番上にある名前は。

(まあ、妥当と言えば妥当だな)

ブリタニア軍から一際高い評価を受けているのはナイトオブラウンズのジノ・ヴァインベルグだった。流石はラウンズなだけあって、文武共にその評価は高い。だがルルーシュはすぐにジノを除外した。理由は簡単。ライはこんなに身長が高くない。

その次にあつたギルフォードも除外。

後は、何人かの皇族親衛隊の名が続く。さすがに優秀な人間が揃つており、ルルーシュは何人かライの生まれ変わりの候補として頭の中にその名を刻んでおく。

あのグラストンナイツの名もあつた。

順にアルフレッド、クラウディオ、エドガー、デヴィット、バード。

その中で、バートの項目だけ文字が暗くなっていた。これは戦死を意味している。良く見ると、欄のところどころにそのような表示があった。

(……大丈夫だ。あいつはそんなに簡単に死んだりはしない)

一瞬よぎった不安を振り払うように、作業を再開。没頭する。

ルルーシユは、グラストンナイツの中で一番評価の高いアルフレッドの情報を拡大表示させた。

アルフレッド・G・ダールトン。能力は総じて高い。ルルーシユの中のライの評価と比べてみると、大体の能力がライと同等、もしくは一ランク下といった感じだった。能力の質も良く似ている。

「とりあえず。こいつも候補だな」

記載によれば、アルフレッドは先日の黒の騎士団の囚人奪還事件において「負傷」し、現在本国で療養中となっている。

(こいつは、またこのエリアーに戻ってくるだろうから、その時にでも確認するか)

あの、エリアーの元総督であるコーネリアの息がかかった騎士なら、負傷して一時本国に帰っていたとしても必ずこの地、思い出深いこのエリアーに戻ってくるだろう。

続けて、ルルーシュは騎士達の情報を確認していく。しばらくして、ピタリとマウスを止め、眉をひそめた。

(? こんな、欄の下の方にラウンズが?)

名の知れた皇族直属の騎士の名も終わり、そろそろ、普通の騎士の名が並び始めた頃、なんと、帝国最強の騎士団の一員であるはずのナイトオブラウンズの名があった。ルルーシュはその男の情報をデイスプレイに表示させた。

銀髪だ。彼のように長身でもある。最初の頃はいちいち反応していたが、似たような男を数十人と見た後ではもう何とも思わない。

名はロイ・キャンベル、ナイトオブラウンズのナンバーゼロ。

写真も三枚ほどあった。全て公務中のもらしい。

(何だこのダサい眼鏡は……センスのカケラも伺えないな……)

男は、見るからに重そうな牛乳瓶底眼鏡をかけていた。そのせいで素顔が分からなかった。

顔立ちが整っているかもしれないので、ルルーシュは、素顔の写真が無いか探そうとして、

(いや、探すまでも無いか……)

手を止めた。

項目に掲げたものの、注視すべき所は外見ではない。ルルーシュはこのロイという人物の能力と評価を見てその必要無しと判断した。

記載されている能力自体はブリタニア軍全体で見れば低くはない。むしろ高いぐら이다。しかし、ナイトオブラウンズとしての実力は最低だ。

ラウンズ同士の公式模擬戦の戦闘結果なんて散々たるものだった。全てのラウンズに大差を空けられて完敗している。

(なんでこんな奴がラウンズなんだ?)

操縦技能を見るに、低く見積もれば実力は口口より少し劣る程度。おそらく黒の騎士団の零番隊で言うならばギリギリ上位に食い込むぐらいのレベルだ。

それだけでもルルーシュは、ロイ・キャンベルの項目を閉じかけたが、その下にある情報で、ルルーシュのこの男に対する興味はほぼ無くなった。

スザク並に各地の戦場を転々としているくせに、小さな功績は多いが、大きな戦果を全くあげていないのだ。

(将官であるラウンズとして数々の戦場を行き来しているくせに、それでも手柄を立てられないとは……よほど平庸な男なんだろうな。それとも、やる気が無いのか? いや、それなら各地の戦場に出向く事もないだろう。つまりは、……やはり平庸という事か。つてああ、思い出した。こいつは確か皇帝に取り入ったかなんかでラウンズになっ

た男だったな)

それはあくまで噂だったが、この能力と評価で帝国最強の騎士団であるナイトオブラウンズの一員になれたのならそれも本当かもしれないな、とルルーシュはロイ・キャンベルの写真に向かって蔑みの視線を向けた。

この評価だけを信じるのであれば、この男よりラウンズに相応しい人間は何人もいた。

自身の實力に関係なく取り立てられるような人間を、ルルーシュはあまり快くは思わない。

それ最後に、ルルーシュはその男を、ライの生まれ変わりの候補から除外した。

ライは凡庸ではない。ライほどの男がラウンズという地位を手に入れば文字通り戦闘、戦略にと大暴れしているだろう。それは言い過ぎにしても、こんな低い評価に収まるはずが無い。

こいつよりも、ライの候補として可能性がありそうなのは、まだ沢山いる。

と、この時ルルーシュがブリタニア軍内のロイの評価ではなく敵国、つまりはEUや中華連邦からのロイの評価も見ておけばこの先の展開も違ったものになったのかもしれない。しかし、そうはならなかった。

○

『ライの生存が確認できたのは分かった。それで、私に話とはなんだ』

ルルーシユの目の前にあるノートパソコンのディスプレイの中で、物憂げな美少女が、傲慢な口調で言った。その後、艶やかに欠伸。

艶やかな金の長髪は張りのある肌に絡まっている。ベッドの上で、優雅に寝そべっているその少女は、ギリギリ大切な所をシーツで隠しており、それがルルーシユにとつて救いといえれば救いだつた。

「C, C,。お前まさか……」

『裸だよ。今から寝る所だつたんだ。こんな夜分にレディに連絡をするやつは男としてどうなのだ』

「服を着るまで待たせればいだろう。俺を！」

『急に連絡してきたお前が悪い。それに、男を待たせては女が廃るといふものだ』

「ええい！ 相変わらず、女としての常識に欠けている奴だ！」

ルルーシユは憎々しげに言うと、C, C, はその様子をさもおかしそうに眺め、フフンと笑う。

要は遊ばれているのだ。それが分かっているのだろう、ルルーシユの整った眉が怒りでピクピクと動いた。

『で、こんな時間に何の用だ。ちなみに愛の告白なら考えてやらなくも無いぞ。そうだ

なピザ五枚で受け入れてやろう』

「断る。ピザ五枚の値段だつて馬鹿にならない」

大分失礼な事を言われたにも関わらず、C, C, はまた心底楽しそうに悪戯っぽく笑った。

『ふふふ。で、何の用なのだ？』

「相談がある」

『で、こんな深夜に私をわざわざ呼び出したわけか？ 私はお前の相談をいつも笑顔で

受け付けるカウンセラーのお姉さんではないのだぞ』

「……カレンの事だ」

告げると、C, C, はからかいの笑みをなくし、少しだけキョトンとした。

『ふむ』と、彼女は一回頷き、

『聞こう』

体を起こし、傍にあった枕を抱き寄せた。肢体も、それに伴ってベットにわずかな軋みをあげさせながら扇情的な仕草で動く。

ルルーシュは、C, C, が動いた時にシーツがずれたりしないか心配になって、思わず目を逸らそうとしたが、

(さて！ なぜ俺がわざわざそんな事に気を使ってやらなきゃならない！)

思い直して、むしろ睨み付けるようにして、視線を動かさなかった。

C, C, はその様子を見て『ガキめ』と呟いてまたまたニヤリと笑う。

ルルーシユは、今にも怒り出しそうな自分を精神力で抑えつけ、全力で無視して話を続けた。

「ライの生存は分かった。しかし、同時にライは公式には処刑されているという事も分かった」

『それで?』

「正直に言つて。俺は女性の気持ちなどさっぱり分からない。だから、仕方が無いからお前に訊く。カレンにこの事実を伝えるかどうか。それについての意見を聞きたい」

『お前が私に助力を請うとなは。珍しい事もあるものだ』

「勘違いするな。助言ではなく意見を求めているだけだ。助けて欲しいわけじゃない」

『ムキになるなよボウヤ』

と、C, C, は考え込むように視線を下げた。

つまりは、簡単な話だ。

今のカレンを支えているのはライの生存という希望だ。そして、今回のルルーシユの調査で、その希望が叶った形になる。しかし……ライの公式の処遇は、あくまで処刑なのだ。

確かに、ルルーシュはライが生きていると確信した。

しかし、その確信たる証拠をカレンに示す事ができるわけではない。まだそれだけの材料は揃っていない。言い換えれば、ライが生きているというルルーシュの確信は他人から見ればただの予想、希望的観測に見えなくもない。

そして、そのルルーシュの予想、希望的観測をカレンが信じる保障はどこにも無い。つまり、カレンに今回の情報を伝えるという事は、ただライが処刑された。という公式上の事実を突きつけ、不安を煽るだけとなる可能性が非常に高い。

今の黒の騎士団にとってカレンは最重要戦力だ。そんな彼女の気分的に落ち込んだり、また、下手をすれば精神的に戦闘不能になったり、多少なりとも、その能力が低下するような要因——ライは公式には処刑——を告げて良いものかどうか、判断がつかない。

もつとも、一年前までのルルーシュなら、例えライが確実に殺されているという事実をつかんでも、それを隠し、「まだ行方は分からない」だの「今、全力で行方を捜している」と言っただけに希望を持たせ続け、こき使い続けるといふ選択をしただろう。

しかし、流石にルルーシュは、一年前のカレンとライが生き別れてしまった事に対する責任を感じている。それに、何かライの事について分かったらすぐに連絡するとカレンと約束もした。だから……

『つまり、指揮官ゼロとしてはライの情報隠しておきたいけど、このままだとルルーシユの良心の呵責につぶされそうだから、助けてくC、C、く。と言った所か』

助けてく、の辺りをやたら女らしい高い口で言われて、ルルーシユの苛立ちは一気に上昇した。

「相も変わらずお前の曲解した表現は俺を不愉快にさせる」

『しかし、事実だ』

その言葉にルルーシユがグツと唇を噛み、睨む。C、C、はそれを真つ向から見据えた。

しばらく、そのまま無言で見据え合っていた二人だったが——先に視線を逸らしたのはルルーシユだった。

ルルーシユは、どこか拗ねたような顔をした。

「……ああ、分かったよ。認める。俺は正直、あの二人には負い目を感じている。だから判断が鈍る」

『その甘さで、一年前敗北したというのに、もう忘れたのか?』

「分かっている。もう俺は『敵』に甘さなど持たない。しかし……」

ルルーシユは、頑と言いつつ放った。

「ライは味方だ」

C, C, はその言葉に呆れたようだった。彼女には珍しく大げさにため息まで付く。

『おい、敵に甘さを持たない。そして今、ライが敵——つまりブリタニア軍側にいる可能性が高いことを指摘したのはお前だぞルルーシュ』

「俺はライがブリタニアの軍人になっていて、と断定した覚えは無いぞC, C。それは可能性の一つにすぎない。もしかしたら文官をやっているかもしれないし、貴族の執事でもやっているかもしれない。俺のように監視付きで一般市民として生活している可能性だつてある。それに、例えばライが軍人であつて、俺の前に立ちはだかる事があつたとしてもだ。それはあくまで皇帝のギアスで操られているに過ぎない。スザクのように本心から俺に敵対していない以上、あいつは俺の敵じゃない。だから『できれば』助きたい」

『色々突つ込みたいところはあるが……とりあえず『できれば』とは？』

「そのままの意味だ。俺の目的である母さんの死の真相とナナリー。その二つの達成に支障が出ない程度でできれば助けたい。そう思っている。……とは言つても、その『できれば』の範囲で俺は絶対にライを助け出すがな」

『結局、それは目標が三つに増えたのと変わらんだろ』

「優先順位。あとは覚悟の問題だ。例えば、俺はナナリーの命とライの命が天秤にかけられたら、迷わずナナリーを選ぶ」

その言葉には絶対の意志が込められていた。嘘は無い。おそらく本当にそのような状況になれば、ルルーシユは迷わず、そうするだろう。

もつとも、いくらナナリーの方が大事。と言つていても、ルルーシユがナナリーと誰かを比べるなどという事自体、相当珍しい事だったが。

結局、なんだかんだで、ルルーシユはナナリーという絶対条件で、言い訳しているにすぎない。

結論から言えば、ルルーシユは敵にいても助けたいのだライを、友人を。

見捨てたくは無いのだ。いや、見捨てられないのだ。

思わず、C, C, は小さく呟いた。

——それを甘さと言うのだ。と

「ん？ 何か言つたかC, C,」

『いや、何でもない……まあ、いいだろう。これ以上は話が平行線になりそうだし。私もいいかげん眠い。で、私に聞きたいのは、ライについての情報をカレンに伝えるか否かだったな』

「ああ」

C, C, はゆつたりとした動作で更に枕を顔に抱き寄せ、そのまま考え込む。

ルルーシユは黙って待った。

正直に言えば。ルルーシュは今回の件はまだカレンには伏せておいた方が良く考えている。

結局、今回分かった事は、ライが公式には処刑された。という情報のみだ。そのあと、いくらルルーシュがカレンにとって喜ばしい自分の推論を説明した所で、それがカレンにとってどれほどの心の救いになるのか疑問が残る。

いや、下手をすれば、自分がカレンを励ますために嘘を付いていると思われる可能性もある。

正直、ルルーシュは自分がカレンにそれほど信頼されているとは思って無い。

一年前、カレンが日本の裏切り者であるゼロを見捨てなかつたのも、あくまでライに對する愛情があつたからであり、ゼロに對する敬愛からでは無い。

だから——ライの行方がハッキリするまで、いつそ黙っておくというのも、決して間違っていない……そう思っていた。

考えがまとまつたのか、C、C、はゆっくりと顔を上げた。そしてルルーシュとその視線を絡ませた後、ポツリと、

『カレンは、弱くないと思うぞ』

ルルーシュは、ある程度予想できたその言葉に「そうか……」頷いた。

少し……。本当に少しだが、ルルーシュは気分が軽くなつた気がした。

「わかった。参考にする」

『素直に“ありがとう”と言う所だぞルルーシュ』

ルルーシュはクイツと顎を上げた。そして意地の悪そうな瞳をC、C、に向ける。

「ふん。お前にとって、それはそんなに簡単に言っただけの言葉なのか？」

『……む』

黙るC、C。そして、彼女は下から睨みつけるようにして言った。

『可愛くないぞボウヤ』

ルルーシュは愉快そうに、しかし気品を持って静かに笑ったあと、勝ち誇った口調で言った。

「おや、ありがとう魔女。最高の誉め言葉だよ」

『ふん、切るぞ。こう見えても私は忙しいんだ』

「こつちだつて同じだ、俺も明日のスザクの歓迎会の準備もしなくてはいけないし、やることが多い……」

と、言いかけてルルーシュは、しまった、と心の中で言っただけで顔を歪めた。しかし、それを目の前の魔女に悟られると面倒になるので、すぐに表情を元に戻す。

『歓迎会？ まさか、また巨大ピザを焼いたりするのか？』

アウト。悟られた。

「……そ、そんな事はしない」

ルルーシュは平静を装って言ってみたが、無駄だった。

『お前は嘘が下手だな』

勘が良すぎる。この魔女は。

ルルーシュは自分の迂闊さに内心齒噛みしつつ、C, C, C, に向き直る。

「言っておくが、くれぐれも学園には来るんじゃない——」

『おやすみ。ルルーシュ』

「おい！ C, C, ——」

ルルーシュが体を起こすと同時に、目の前のディスプレイから魔女は消えた。

ルルーシュは舌打ちした。

（くっ、まあいい。あいつにだって、スザクのいる学園に来ることの危険性は分かるだろうし。それぐらいの分別はあるだろう）

翌日、その期待は見事に裏切られることになる。

②卷 4話 『それぞれの ラウンズ』

ルルーシユがC、C、と相談していた頃。

エリアーの政庁にあるナイトオブスリー、ジノ・ヴァインベルグの執務室件自室。ここでは、部屋の主であるジノと、同僚のロイがテーブルに座り、向かい合っていた。

時刻は、夜の九時過ぎ。ラウンズとしての仕事は終わり、プライベートの時間であつた。

「さあ、まずは一杯」

掲げられた赤ワインの瓶を見つめて、ロイは首を横に振る。

「それは本題が終わってからにしよう」

「真面目なやつだな。相変わらず」

「酒を交えながら仕事の話、というわけにもいかないだろ」

「了解。じゃあ、これは後で」

別段残念そうでも無く、ジノはワインの瓶をテーブルの隅に置いてやった。

その様子を眺めて、ロイはしかめ面で言った。

「で、『例の件』とやらは？」

「なんだよロイ。お前もしかして不機嫌か？」

「当たり前だ……僕はねジノ、君のやった事については、今も納得してないよ」

「でも、ちゃんと成果はあがったんだぞ？」

「政庁襲撃なんて大それた事をやっておいて、それで何も無く「はい、終わり」だったら僕は君と絶交してる。ローマイヤさんから連絡が無かったら、いまだに君とは口すらきいてないところだ」

「こいつは手厳しい。じゃあ、これは俺達の友情が続くための手土産ってことで」

ジノは、どこからともなく取り出した分厚い書類をテーブルに置く。その表紙は何も書いておらず真っ白だった。

ロイは、その書類を迷わず手に取る。片手で持つには少し重い書類の束。ロイはペー
ジを素早くめくりながら目を通していく。他人から見ると、本当に内容を読んでいるのか？ と疑問に思うようなスピードだったが、ロイはちゃんとしっかり読んでいるし、内容もキチンと把握していく。

速読。それも、かなり高レベルな。こういう能力を自然に身に付けている点も、ロイがシユナイゼルに気に入られている理由の一つだったりする。

書類の束を一通り読み終わると、ロイはポツリと呟いた。

「……ひどいな」

眼鏡の奥の表情を険しくしてしまう。

書類の束に記載されていたもの、それは今回ジノとアーニヤが起こした政庁襲撃事件によって発生した損害、つまりナイトメアや、政庁の設備を修復・修繕するために関わったブリタニアの民間業者の一覧と、その業者が政庁やナイトメアの修理・修繕に関わる事になった「経緯」だった。

「汚職、賄賂、秘密会合……」

膨大な数に、ロイは辟易した。

「すでにエリアーに來ているローマイヤの部下が、今回の事を機に調べ上げた。一年前までコーネリア殿下が推し進めたていた内部肅清のお陰で、このエリアの膿は相当取り除かれたはずなんだが……残念ながら今では完全に、とまでは言わないが所々で復活している」

ジノは、滅多に見せない真面目な表情を浮かべながら、淡々と話す。

ロイは、改めて友人を見る。

このジノ・ヴァインベルグ、二日前に気まぐれで政庁襲撃なんていうとんでもない事を起こし、このエリアーの政庁に大きな被害を与えた。それは表向きでは、ただの悪ふざけという事になっているが——というかロイもそう思っていたが——事実はそうではなく、ジノがローマイヤと示し合わせて、カラレス総督という内政に無関心な総督

が着任している間にはびこった膿を一斉に焙り出す為にうった芝居だったと言うのだ。

効果は絶大で、政庁の損害も大きかった分、企業の裏の動きも活発だったらしく調査もしやすかった。と、このローマイヤの部下がまとめた報告書には記載されていた。

つまり、ロイも見事にジノに騙されたという事だ。

その点に釈然としないを何かを感じつつ、でも、それを顔に出さないように、ロイは話を続けた。

「カラレス総督。武官寄りとは聞いてはいたけど、こうも無頓着だったとは……」

ロイは報告書に視線を戻し、把握した知識を深めるように、今度は最初からゆつくりとページをめくっていく。

これには汚職や賄賂をおこなった企業・軍人の他に、カラレス総督の内政方針と銘打って、その体制のずさんさもまとめられていた。

カラレス総督本人は現場でイレブンの粛清、逮捕に躍起になり執務は部下に丸投げ。

確かにカラレス総督は、イレブンの矯正を期待されてこの地に送り込まれた総督だが。そのみに全身全霊を傾けられてもブリタニアとしては困るという事に気付いていなかったようだ。

現場でしか力を注がない上官というのも、部下に舐められて規律が緩む原因である。

その上、カラレス自身は武官にありがちな典型的な文官嫌いだっただけで、その文官

にほとんど発言権を与えていなかった。つまり、実質軍部がこの一年間エリアーの全てを決めてきた、と言っても過言では無い。

しかし、武官の本分はあくまで戦であり、そして、武官が実権を握り政（まつりごと）にまで手を出すと、大抵賢い商人に振り回されて、こういう膿を生み出す結果になる。ブリタニア軍人として、全てを肯定するつもりは無いが、こういう事例を見せ付けられるたびに、文民の政治家が軍隊を統制する文民統制等のその適正さは認めざるを得ない気分させられる。

「この事、スザクには？」

聞くと、ジノは「いや」と首を振った。

「伝えてない。というか、アイツはまだこういうのを適切に対応するにはまだ早い」
「……うん。その方がいいだろうね」

ロイは頷いた。

ちなみに、ロイは決してスザクにリーダーや司令官、そして文官または執務を行うの素質が無いと思っているわけではない。

むしろ逆だ。

スザクは、そのKMFでの戦いぶりや、与えられる任務の種類から、いかにも猪突猛進で頭はからつきし駄目。みたいなイメージがあるが、ああ見えて頭は悪くない。い

や、むしろ賢い部類に入るだろう。それに、何よりスザクは努力を欠かさない人間だ。

最近、スザクは艦隊戦の戦術を学んでいるようで、その事についてもここ数日二人で議論を重ねたりもした。議論の中で、スザクの意見や戦術に対する推察等は、シユナイゼルから『戦術はコーネリア、戦略は私に匹敵する』と言わしめたロイから見ても、実のを得ている内容であり。そのスザクの努力の結果が如実に伺えた。

ロイの見立てでは、そう遠くない未来には、スザクは立派に文武を兼ね備えた騎士になれると思っている。

ただ、それはあくまで未来の話であり、今ではない。どれだけ努力をする人間でも時期尚早というのは必ず存在する。

それに、現在スザクはナナリー新総督をこのエリアーに迎え入れる際の警備の総責任者であり、その準備や仕事で手一杯だった。

また、ロイの見立てではナナリー新総督就任後は「アレ」の件でスザクは執務に忙殺される予定である。

「アレ」についての大変さは事前に相談を受け、助言をしてきたロイにはよく分かっていた。だから、スザクにはこんな小事まで気を回す余裕は無くなるだろうし、ロイ個人としても、スザクにはナナリー新総督の意思実現のために全身全霊を傾けてもらいたかった。

ロイは自分がナナリー皇女殿下の傍にいるより、スザクがナナリー皇女殿下を補佐した方が彼女も喜ぶと思っていた。それは彼女がスザクに接する時の態度を見れば良く分かる。

自分とて木の股の間から生まれてきたわけではないのだ、と、アーニヤヤカーリヌあたりが聞けば思わず苦笑いしそうな事をロイは思ったりした。

「しっかし……見事にコーネリア殿下の努力を水の泡にしているよな。まったく、ギルフォード卿が付いていながら……」

名高いコーネリア殿下の専任騎士である男の名を聞いて、ロイは首を横に振った。

「いや、ギルフォード卿の事だ。きつとこの事については何度もカラレス総督に進言をしていたと思う。でも、いくらあの人が言っても総督がこういう事に無関心だったら、指をくわえてみているしかなかった、というのが本当だろうね」

言いつつ、ロイは書類をテーブルに置いた後、眼鏡を外し、そこに息を吐いて曇ったレンズを布でふいた。

同時に、滅多に見せないロイの端正な顔があらわになった。通った鼻筋、細く繊細な顔立ち。思わず同姓でも見惚れそうなその顔が、大きくため息をつく。

「でもさジノ。こういう不正を暴くためにローマイヤさんと政庁襲撃を考えていたなら、事前に相談してくれても良かったんじゃないか？」

「いや、お前だったら絶対に反対すると思ったし。ローマイヤにも『キャンベル卿は絶対に反対なさると思うので、目的を明かすのは、事が済んでからにしてください。そしてその後、協力をお願いするのが得策です』って言われてたしな」

「ああ、そう……」と、拭き終わって綺麗になった眼鏡をロイは改めて顔に戻した。

ローマイヤさんも策士だなあ、とロイはある意味感心した。政庁襲撃前なら断固たる姿勢で反対できるが、終わった後ならロイは嫌々でも協力せざるを得ない。

「まあ、何かおかしいとは思ってたけど……。そういえば。この事はアーニヤは？」

「いや、知らない。アーニヤを誘ったのはそれこそ気まぐれだった。あとなロイ。何かおかしいと思ったんなら、少しは手加減してくれても良かったんじゃないか？ 俺なんかまだ、お前との戦闘のせいで体の節々が痛いんだけど」

「挑発してきた上に、本気で切りかかってきた人が良く言うよ……」

と、ここでロイはある事に気付いた。

「んっ、ちよっと待ってよジノ。政庁襲撃がこれを調べるためだけのものだったのなら、僕が最初に君の前に現れた時点で、降参して『トリスタン』から降りてもいいはずだよ
ね？」

「だってお前が本気になることなんてそうはないからさ。このチャンスを逃すと次がいっ
つになるかわかんないし」

矛盾したことを言いながら笑うジノ。ロイは、またため息をついた。

「……挑発に乗った僕も同罪ということか。まあ、それはこの際いいよ。でも、もつと他にやり方があつたんじゃないのかい？」

「そう言うと思つたからローマイヤは俺に話を持つてきたんだらうな。ナナリー総督就任までの時間も無い事だし、グズグズしてたら、内部の腐敗を取り除く前に、この東京租界が戦場になる」

ムツとして、ロイは唇を尖らせた。

「悪かつたね。どうせ僕のやり方は回りくどいですよ」

「拗ねるなよ。お前のやり方は決して間違つてはいないし、非効率でもない。まあ、ちよつと正道過ぎるだけさ」

「正道すぎる?」

「うゝん、なんていうか、皆が納得する方法で勝利を収める手段を探している、とでも言えばいいのかな。なるべく敵、味方から反発が少ないように勝とうとする節がある」

「そうかな?」

「そうさ、だからお前は敵からも『青い聖騎士』なんて尊敬を込めて呼ばれるんだらうな。負けたほうも正道でやられれば気持ちがいいもんさ。その点スザクや、あのいけ好かないブラッドリー卿とかを見てみるよ。スザクは力任せ、ブラッドリー卿はその卑劣

さから死神とか吸血鬼とか酷い言われ様だ」

ジノは肩をすくめて見せた。

「まあ、とにかく。これで、このエリアーを食い物にしてきたやつらも直に捕まるだろう。ローマイヤはお前にも色々動いてもらいたいそうさ」

「直接ローマイヤさんから頼まれたよ。ところで、この報告書にある逮捕者を直接捕まえる役だけだ。これは僕とジノにお任せしたいって言われたんだ。どうする？」

「そうだな。結構大きなテロリストグループと繋がってる企業もあるみたいだから。いざ捕まえる時は、一人がKMF部隊、もう一人が実働部隊を指揮しよう」

「了解。じゃあ早速明日から準備を始めよう。それにしても……」

と、ロイは考え込むように、アゴと指でなぞった。

「ん？ どうしたロイ。何か思う事でもあるのか？」

「あ、いや。総督就任前じゃなくて、就任後に動くんだな、と思つてさ……ローマイヤさん、ナナリー総督の威光を示すつもりかな？」

ジノと自分がこのエリアーに先行して在籍している以上、総督就任前に膿の排除を始めようと思えば始められる。しかし、それをしないという事は、ローマイヤはこれをナナリー総督の手柄にしたいと考えているのだろう。それなら確かに就任後に動いた方が都合が良い。

すると、ジノは苦笑した。

「いや、この場合ナナリー総督の威光というより、総督補佐団の威光だろうな。〃いいか野郎共、確かにナナリー総督はお優しい所はあるが、その代わり、私たちがきつちりとお前らを監視をしているぞ!」という事を示したいんだろ。そもそも、こう言つては何だが、まだナナリー総督が威光をお持ちになるのはまだお早い」

ジノの言葉には、ロイも同意だった。

「そうだね。ナナリー総督はまだお若い。今は知識を学ぶ時期であつて、威光をお持ちになられるべき時期ではない」

「この威光と知識。身につける順番を間違えると大変な事になるからな」

「知識が無くて威光だけあるトップの事を、歴史は暴君と呼ぶからね」

「だからと言つて、補佐団に100%自由にさせる気も無いけどな」

二人は、似たように口元を歪めた。

「ああ、そのために僕達がいる」

「お前に、期待していいよなロイ?」

「期待に値すると判断したから僕を誘つたんだろ?」

「そうだな」

そして、二人は吹き出して小さく笑い合った。

その後、捕まえる軍人や企業の役員の情報、捕らえる順番、その方法等、細かい打ち合わせを続けた。

「さて」

一段落つき。ふと、ジノは壁にかかった時計を見る。時刻は夜十時を越えていた。

ジノは、その顔を仕事からプライベートに戻した。

「話も一区切り付いた所で、改めて一杯どうだ？」

隅に置いてあつた、赤ワインの瓶が掲げられる。

「しかたないな、君は……」

乗り気のない様子を出しつつも、ロイは積極的に二つのグラスを傍に引き寄せた。

何だかんだで、ロイも良い酒には弱かつた。特に、ジノの秘蔵物となれば尚更だ。

「いいけど、あまり長くは付き合わないよ。明日は朝早いから」

「それでもいいさ」とジノは嬉しそうに立ち上がると、備え付けの冷蔵庫からチーズを取り出す。

「そういえば、明日はアーニヤにスザクの歓迎会に行こうって誘われてるんだろ？」

ジノはグラスにワインを注ぎながら言った。ロイは礼を言つてから、

「ああ、場所はアッシュフォード学園だ。ジノも行くんだろ？」

「もちろんだ。でも、一緒に行くって言つたらアーニヤにはメチャクチャ睨まれそうだ

な」

チン、と小気味良い音が鳴った後、二人は香りを楽しんだ後、グラスをグイツと傾ける。

はじめは緩く、徐々に水平に傾ける。

喉の鳴る音と、二つの気持ちよさそうに息を吐く音がした。

「美しいな」

と、ロイは改めてワインを見つめる。

「ああ、これはだな……」

ジノのワインに関するウンチクをBGM代わりに、グラスはどんどん傾けられていった。

○

『ただいま電話に出ることができません。そのままお待ちいただくか、ピーと鳴りましたらお名前とご用件をお願いします』

自室執務室。聞きなれた声での三回目の案内を聞いて、アーニャ・アールストレイムは苛立たしげに、電話を切った。

「飲んでる。絶対飲んでる……」

思わず、携帯を握る手に力が入る。

明日のスザク歓迎会の待ち合わせ時間を決めていなかったのを思い出したのが夜の十時半頃。それから何度も電話をしているのに、ロイは一向に出ない。

こういう時は、ジノの部屋で飲んでいると相場は決まっている。

「あんな物の、一体どこがいいのか……」

これでまた一つ、ロイと時間が共有できる機会を失った。それだけではない、きつと明日のスザクの歓迎会と一緒に回る約束だって、おそらくは体調不良のままで来る。そんな状態では、最大限に歓迎会を楽しめない。下手したら泥酔して昼過ぎにしか起きてこないのではないか。明日は非番だ。過去の実績から見ても十分にありえる。

いつもそうだ。普段はそんな事は無いのに、お酒を飲む時に限り、ロイは自分を疎かにする。いや、本人にそのつもりは無いのだろうが、結果的に疎かにされる。

(……気に入らない)

アルコールに耐性が無いというのもあるが、こうやって大事な人との時間すらも奪うものだから、アーニヤはどうもお酒というものに対して好感を持ってないでいた。

「お酒は嫌い」

『同感だわ』

アーニヤの思わず漏れた呟きに同調する声があった。アーニヤは、その眠たげとも形容できる瞳を更に狭めて、その相手を見る。

『ロイ様、時に私とのお誘いよりお兄様達との飲み会を優先なさるもの。お兄様達の秘蔵酒を振舞われる時なんて特によ。ありえないわ』

部屋に取り付けられた通信モニター、そこには、

「ところで、もう用も済んだでしょ。そろそろ寝たら？ カリーヌ様」

『何よ。生意気言うじゃない』

ムスツとした表情の、神聖ブリタニア帝国第五皇女がいた。ちなみに、すでに休む前なのだろう。寝巻きに、常時は書き上げられている髪は降ろされた形になっている。こういう姿を見ると、やはりナナリーの面影と重なる所は多い。二人が姉妹なのだと思えて感じさせられる。

なぜ、カリーヌとモニターで繋がっているのかと言えば、別にアーニヤから望んだ訳ではない。カリーヌもロイとお話したくて電話をかけたのだが、アーニヤと同じくらいかけても通じなかつたので、もしやアーニヤといっているのではないかと疑って通信してきただけだ。

「失礼。でも、これが私の普通」

と、苛立たしげに告げるアーニヤも、いつものラウンズの軍服ではなく寝巻き姿だ。お風呂も入ってあとは寝るだけなので、髪もおろしている。だからこそ、気の緩みもあつたかもしれない。

カリーヌは、横たわっていた豪勢なソファから体を起こした。その顔は笑ってはいなかった。

『あんた、とうとう私には気すら使わなくなったわけね』

「……………」

カリーヌの言う意味がすぐには理解できず、アーニヤは首を傾げた。

『さつき、それが私の普通って言ったわよね。ってことは、私にはもはや遠慮や、皇族に對する気すら使ってなかったって事でしょ。それってさ、流石にラウンズとしてどうなのよ』

胸の中に刺さるものがあつた。アーニヤは、正直な話、騎士としてブリタニアや皇族に對して絶大な忠誠心を持つている訳ではない。しかし、自身の立場とその重さと、示さなければいけない最低限の範は心得ている、つもりだった。

同じ皇女であるナナリーを守るためでもなく、その他の大した理由も無く、ただロイが自分の電話に出てくれないという個人的に好ましく無い感情を、皇女にそのままぶつける。

ナイト・オブ・ラウンズとして、正しい姿であるわけが無い。

ブリタニア皇帝に仕える者として、皇族に對する行動として正しい姿のはずは無い。

少なくとも、こういう事をロイは良く思わないだろう。

少し、自分が恥ずかしかつた。あまりにも稚拙すぎた。

アーニヤは、一度背筋を伸ばした後、恭しく頭を垂れる。

「カーリーヌ様。数々のご無礼、誠に申し訳なく——」

『うわつ、やめなさいよナイトオブシックス。気持ち悪つー!』

「気持ち悪……」

その言葉に再度イラつとして顔を上げる。カーリーヌの表情は、なんと言うか別に怒つておらず、丸かつた。本当に気持ち悪がつて引いてはいたが。

『あんたの本性、つていうか本心? 知っちゃった限りは、そんな態度を取られても素直に受け取れないわよ』

「では、どうしろと」

踵を揃えながら尋ねる。カーリーヌは視線を上に向けて考え込み。

『まあいいや。許す』

「……………はっ」

『はっ、じゃないわよ。許すつて言ったの。いつも通りに振る舞いなさい』

と、カーリーヌはどうでもよさげに手をヒラヒラと振つた。

アーニヤは信じられないようなものを見るように、疑いの眼差しを向けた。それを居心地悪そうに受け止めて、カーリーヌは、

『何よ』

少し迷って、アーニヤは、

「いいの？」

『聞いておきながら速攻で敬語抜きのいつも通りじゃないの！　つてか良いって言ってるでしょ。その代わり、二人きりの時だけよ。大勢人がいる前で同じ態度取ったらそれは流石に怒るかんね！』

「……」

『な、何睨んでるのよ』

「別に、睨んでない。私は常時こんな目」

そして、アーニヤはモニターから顔を背け、ベッドに腰を降ろす。一度大きく欠伸。

「ねえ、カーリーヌ様」

『何よ』

「変わったね」

カーリーヌは意味が分からないといった様子で眉をひそめながら、

『はっ、何？　どこが？　化粧水なら変えたけど……』

その疑問にアーニヤは答えられない。自分で発言したものの、アーニヤも明確なものを感じた訳では無かったのだ。

ただ自然と、そう言葉が零れてしまった。アーニヤは唇を指でなぞり、誤魔化すように、

「化粧水は知らないけど、少なくとも髪型は変えたほうが良い」

『あんたにだけは言われたくないわね、それ』

その後は、別にたわいもない話が続いただけで、特に楽しいわけでは無かったが、少なくともアーニヤはにとってはつまらない時間では無かった。

②巻 5話『カレンの 決意』

朝。

中華連邦総領事館。ゼロ復活と同時に合衆国日本の領土となった場所。

そのゼロに領土を明け渡した領事館の責任者であり、大中華連邦の権力者である宦官の高亥はすでにこの世にはいない。今、この場所の実質的取締役は、

「はっー」

鍛練場では一人の男が拳を宙に突き出していた。

長髪の黒髪、鋭く隙の無い瞳、細身と言えば細身だが、その体は痩せているのではなく絞られているという表現の方が適切である。

黎星刻、中華連邦の武官であり、現在は高亥に代わりこの領事館内で采配を振るう人物である。

星刻の加速していく動きの中で、その鍛えられた拳は空想の相手を捉えた。後の動作は素早い。

崩し、投げ、追撃としなやかに拳と蹴りの連続技を放ち、最後に肘撃ちでトドメをさす。遅れて、艶やかな黒い長髪がふわり、と舞って元に戻った。

全て一人で行っている動作だ。だが素人が見ても、そこに実物の相手がいるのではと錯覚させるほど緻密で、滑らかでありながら躍動感に溢れた演武だった。

星刻は両手を重ね、足を揃えて静かに立つ。

「……」

息を整え、そのまましばらく目を閉じ黙想。

全ての気を静め、星刻が再び目を開くと、「お〜〜」という感嘆の声と共に、パチパチとした拍手が鳴り響いた。

星刻は、その対象を横目で見た。

「見世物では無いぞ。紅月カレン」

「いやいや。充分見世物になるわよ星刻。あなた剣の腕だけじゃなくて格闘術も大したものなのねえ」

星刻の邪魔にならない位置で正座していた少女が立ち上がり、こちらに近づいてきた。

少女の名は紅月カレン。まだ十代後半かそこらの年齢だが、それでも先日復活した黒の騎士団のリーダーであるゼロの親衛隊隊長であり、ブリタニアからは「ゼロの右腕」「黒の騎士団のエース」などと呼ばれ、恐れられている女傑である。

赤毛の髪、大きく意思の強そうな瞳、無駄の無い筋肉に女性の特徴が豊満に表現され

た肢体、運動用のジャージを着ている所を見ると、彼女も鍛練をしようとしてここまで来たのだろう。

「いや。本当にあなたと戦う事にならなくて良かったわ。つていうか生身なら絶対に勝てないし」

ははっ、と笑ってあっけらかんと言うカレン。

星刻もそれに釣られて、フツと笑う。

「それは、遠回しにナイトメアなら勝てると言ってるのかな？」

その皮肉に、紅月カレンは十代の少女には似付かわしくない、あらゆる修羅場を潜り抜けた者だけが持つ、ある種の余裕を持って不敵に笑った。

「ん、そうね。否定も肯定もしないでおくわ」

「その顔で言われてもな」

少女の勝ち気な顔には、「あんたなんか、私が負けるわけないでしょうが」と、大きくでかでかと書いてあった。

そんな中、カレンは「でも」と付け足す。

「あなたが、完全に私たちの味方になってくれるなら、正直に答えてもいいわよ」

「……」

星刻の顔から笑みが消えた。

いつの間にかカレンも真剣な眼差しをこちらに向けている。

星刻はそのカレンの視線に敵意も好意も混ぜず、相手に考えを悟らせないよう淡々と見据えてみせた。これは別に意識して行つたわけではなく、星刻が交渉の時に行つてしまふ一種の癖のようなものだった。

しかし、裏を返せば、星刻は無意識にこれを交渉と認識したという事になる。

「……ゼロに頼まれたのか？ 私を説得しろと」

先ほどまでと違い、やや暗く圧力を交えて星刻が尋ねると、カレンは、

「はあ？ 無理無理。あんたの説得なんて無理よ。私の仕事じゃないわ」

クスクスとした笑いで返した。

「……」

「信じてない顔ね」

星刻が淡々と見据えていたのを変に勘違いしたらしく、紅月カレンは、また真剣な眼差しに戻る。

「私が言つた事は本当よ。今のところゼロからは、何の指示も受けていない。だから、あなたの事をどうこうするつもりなんて微塵もないの」

「ふむ……。では私に何か用なのか？」

「へ？」

「君の目には少々媚の色が見える。何かお願いしたい事がある人間独特の目だ」

それを聞いてカレンは小さく体を震わせた。どうやら凶星だったようだ。

星刻はそのまま待つ。

カレンはしばらく迷っていたが、やがて意を決したようだった。

「武術を教えて欲しいの」

凜とした大きな瞳がこちらを向く。

星刻は色々言われる事を予想し、その答えをすでにいくつか頭の中で用意していたが、これは流石に予想外だった。

「武術だと?」

「ええ、武術よ」

星刻は一瞬呆然とした。だが、それは本当に一瞬で、すぐに思考は再開される。

紅月カレンの狙いは何だ?

しかし、考えてもそれが分からない。仕方ないので星刻は真っ直ぐ尋ねた。

「なぜ私にそれを頼む。この前救出した藤堂とかいう男に教えてもらえばよかろう。手合わせした事は一度も無いが、あの男の強さは我が中華連邦でも相当有名だが?」

カレンは首を横に振った。

「藤堂さんは、落ちた体力を取り戻すので手一杯みたいだし」

「ふむ……」

星刻はまた思案に戻る。

確かに、藤堂は朝比奈、千葉、仙波とかいう団員と四人で鬼気迫る勢いで基礎訓練に明け暮れているのをよくみかける。しかし、その動きは武術の達人である星刻から見ればどうしても重く緩慢にうつる。

一年にも及ぶ投獄生活から助け出された後なので仕方が無いと言えば仕方が無いが……。

次に、星刻はカレンの体を頭の前から足の先まで、値踏みするように見た。

そして理解した。

まず紅月カレンは相当の達人だろう。足運び、人と接する間合い、気配の有無、体つき。その他あらゆる要素からそれが読み取れる。正直、体力の落ちた藤堂では、この紅月カレンの練習相手は務まらないかもしれない。

紅月カレン本人もそれに気付いているのだろう。だからこそ、この自分に頭を下げた。それは分かる。しかし、

「事情は分かった。だが悪いが他を当たってくれ」

星刻はクルリと踵を返した。

星刻だって暇ではない。「あの計画」の準備もしなくてはいけないし、執務だって腐

る程ある。忙しきにかまけて、自身の鍛錬だつてここ最近疎かになりつつあるというのに、この上他人にまで、

それも下手をしたら敵になる可能性もある人間に、時間を割く余裕など一秒も無いのである。

しかし、その場から去ろうとした星刻の手を、

「お願い！」

と、カレンが掴んだ。

「あなたを見たときこれだ！ つて思ったの！ お願い！ 私には強くなりたいたい理由があるの！」

星刻は足を止められて、その言葉に耳を傾けた。掴まれた手を振り払おうと思えばできない事も無かったが、カレンの「理由」という言葉に少なからず興味を覚えた星刻はそれをしなかった。

「理由とはなんだ？ 個人的に言わせてもらえば、すでに君は女性の武術家として相当完成されている。それなのに、敵でも味方でもない私になぜ師事を請う」

「ナイトオブセブンって知ってる？」

カレンは憎々しげに呟いた。星刻は、もちろん頷く。

「ブリタニア最強の騎士団。その七番目の騎士。枢木スザクの事だろうか？」

枢木スザク。日本人でありながら祖国の英雄であるゼロをブリタニアに売り、ナイト
オブラウンズという帝国でも指折りの地位を得た男。

なるほど、確かに日本のために立ち上がった黒の騎士団の一員であるカレンが、日本
の裏切り者であるスザクに憎しみを抱くのは当然と言えた。しかし、

「あいつに勝ちたいの」

その言葉には、日本への大儀とかそんなものを抜きに、もつと粘着質のある私怨にも
似た響きがあつた。

「勝ちたい？ KMFではなく生身で、という事か？」

「ええ。そりゃあ、生身で戦う機会なんて無いかもしれないけど、でも」

カレンの奥歯がギリツと音を立てた。

「同じ失敗は繰り返したく無いの……」

「……」

「私、そいつに負けたの。それで……。私が、もつと強ければ、力が、あれば……」

カレンが手に力を込める。その手に腕を掴まれている星刻は、女性にしては桁外れの
握力に小さく驚くと共に、ある種の悲しみの色をカレンから感じ取った。

「力があれば？」

無意識に聞き返す。いつの間にか、星刻はカレンの話に聞き入っていた。

「……一人ね、寂しがり屋な男がいるの」

そう答えたカレンの瞳からは、すでにスザクの名を出した時のような憎しみは無い。「寂しがり屋のくせに、その人、私を守って一人でどっか行っちゃったの。でも私、そいつに約束したの。傍にいる。いてあげるって、それなのに……」

(……なるほど)

かつて、星刻はこの紅月カレンに「あなたに興味がある」と言った事がある。あの後、なぜ自分がそんな発言をしたのか分からず、首をかしげたものが、今の話を聞いて合点がいった。

この女性とは自分と同じなのだ。いや、正確には自分と求めるものが……。

「理想と、欲望か……」

カレンはその星刻の呟きを聞いて、

「欲望？」と首を傾げた。

「取り戻したいのは日本、それは理想だ。そして大切な人と共にいたいというのは欲望だ。間違っているか？」

その言葉に、カレンはキョトンとしていたが、

「欲望か……。そう、そうね、欲望ね。間違っていないわ。だって、私はどうしても、その人と一緒に居たいの」

納得し、迷いの無い様子だった。

「しかし日本も解放したい、という事だろう」

星刻が言うと、カレンは自嘲気味に笑った。

「おかしいでしょ？ 私だって馬鹿な事を言ってるっていう自覚はあるわ。二兎を追う者は一兎も得ず。それは分かっている。でも、私この一年で気付いたの。理屈じゃ無いの。必要なの。私にとつて、二つとも……」

「……理解できるものがあるな」

「えっ……」

星刻の答えに、カレンが小さく驚いた。

——シンクー

幼い声が星刻の中で響く、七年前のあの日から、その声が星刻の全ての原動力である。

（あの方のためならば、自分は何だつてしてみせる）

それが星刻の誓い。ただ、同時に自分はそれだけに妄信したただの愚かな男なのではないかとも思う。

星刻は弱き民を救いたくて軍人になった。『あの計画』はそのためのものでもある。しかし……。

本当はただ、自分の傍にあの方を置いておきたいだけではないのか？

理想はある。弱き中華連邦の民は確かに救わなければならない。しかし、民のためと銘うった「あの計画」は、本当は己の欲望を満たすため、それだけのものでは無いのか。汚らしい欲望を隠すために、大義だの、誓いなどで言い訳しているのだけではないのか。

そのジレンマが、棘のように常に星刻の心を突き、責め立てている。

それはまさに、この紅月カレンと似た、ある種の人間としてあたりまえの欲望と、個人を離れた崇高な理想を持つ者が同時に抱える矛盾した悩みに他ならない。

星刻はその同種の悩みを、この紅月カレンからも感じ取ったのだろう。

ただ、この紅月カレンと星刻の違う所は、紅月カレンは理想も欲望も両方一緒に抱え込む決意をしている点だった。

（まさかこの私が。ゼロではなく猪突猛進と有名なこの紅月カレンに、言葉で感心させられようとはな）

中華連邦内でも不穏な話はいくつかある。そう遠くない内に、自分も決めなくてはならないだろう。色々と……。

「星刻？」

カレンの声。星刻は顔を上げた。

「ああ、すまない。少々考え事をしていた」

星刻は改めてカレンに視線を向けた。

「悪いが、私も人に何かを教えるというのは慣れてはいない。師を求めるなら他をあたってくれ」

「そんな……」

カレンは落胆したようだった。星刻はその様子を見て静かに笑って見せた。

（このような女傑に勝ちたいと思わせる男、枢木スザクか。機会があれば一度打ち合ってみたいものだ）

星刻の心の中は、すでに決まっていた。

「それでも……教える事は無理だが。私の稽古相手ならいつでも募集中だ」

「へ？」

「言っただろう。私は教える事には長けていない。それに私だってヒマではないのだ。人に教えている時間など無い。だから、お前が私の稽古に付き合って、私の技を身に付けたいのならその過程で勝手に私の技を盗めばよかろう」

更に、星刻は言った。

「それが最大限の譲歩だ。味方でもないお前の向上心を満たす義理は本来こちらには無いのだからな」

カレンは、顔を輝かせた。

「構わないわ星刻！」

「その意気や良し。では早速組手にでも付き合ってもらおう。グローブは無しでいいな？」

「もち！」

「悪いが、私はその綺麗な顔が崩れても責任は取らんぞ」

「上等！ ありがとう！」

カレンは輝いた顔のまま、距離を取り足を広げて構えた。その綺麗な顔が瞬時に戦闘用のそれになる。

対して、星刻は自然に立ったままだった。もつとも星刻にとっては普通の立ちがすでに構えにまで昇華されている。

逆に言えば、カレンはまだその段階にまで至っていないという事。

力の差は明らか。でも、だからこそだろう。カレンの顔は戦意を漲らせながらも、どこか嬉しそうだった。

「では、初手はこちらから行くぞ、紅月カレン」

言い終わる前に、星刻の体がユラリと揺れて動く。

カレンは、その場で腰を落としたまま動かない。いや、体を動かさないうで足の指を動かす、間合いを測りながらジリジリと前進している。

カレンは腰を落として重く。星刻は掴み所無くゆらりと。お互いが近付いていく。そして、二人の間合いが重なったその時――。

「た、大変です紅月隊長！ C. C. さんが！」

「へ？」

「隙あり！」

突如現れた第三者の声に視線を背けたカレンに対して、星刻は目も留まらぬ速さで身を屈め、猛烈な足払いをかけた。

「！」

カレンは、その足払いを見事に食らい、すつころぶ。何とか受身を取ってクルリと立ち上がる。

「なっ――」

驚いた顔で「何するのよ！」と言いかけたカレンの前に、目も止まらぬ拳が突きつけられた。

「油断でやられるのが一番下らんぞ紅月カレン」

言われたカレンは目を見開いた後、シユンと視線を下げた。

「ごめ……いや、ありがとう」

「いかなる時であろうとも、警戒を解くのは敵より後だ。自分より力量が上の相手と戦

うなら尚更だ。今の隙で私はお前を殺そうと思えば殺せた事を覚えておけ」

「……はっ」

「では、部下の話聞いてやれ」

黒の騎士団の団員は戸惑いながらも駆け足でカレンに寄っていく。

「も、申し訳ありません。紅月隊長」

「構わないわ。何？」

「はい、実は、このような手紙が……」

カレンは団員から差し出された手紙を受け取り、目を通すと、

「あ、あ、あ……」

と、肩を震わせ始めた。

「あの女！ 一体何、考えてるのよおおお！」

すぐに爆発した。

その時、カレンの手にあつた手紙の文字が、チラリとこちらに見えた。

星刻は黒の騎士団の情報を覗き見るのは少し卑怯かな。と思つて顔を背けようとしたが、その前に鍛えられた視力がその内容を読み取り、脳に認識させてしまう。

ちなみに、手紙は日本語で書いてあつたが、やろうと思えば日本語でジョークまで言える星刻には読み取る事など造作も無かつた。

手紙の内容は。

アツシユフオード学園に忘れ物を取りに行ってくる。

夕食にはピザを取っておけ。

C. C.

星刻は理解した。

カレンとの本格的な鍛錬は、明日からになりそうだと。

○

「う、う〜ん」

朝日がロイの目に突き刺さる。頭痛が、思考を支配する。

ソファで寝ていたようだ。格好も軍服のまま。きちんと自室で寝るつもりだったのに、酒の勢いに負けて結局ジノの部屋で一晩を過ごしてしまったようだ。

「いつつつつ」

再度の頭痛。痛みに耐えながら、もはや何度目になるか分からない後悔をする。

次の日が仕事の時は絶対にしないが、非番の前日はいけないと分かっている。ついでに飲みすぎてしまう。

「悪い癖だ。直さないとなあ……」

時間を確認しようと携帯を探す。いつもは懐に入れているのだが、テーブルの片隅にそれを見つけた。

「……げっ」

手にとつて、思わず変な声が漏れた。

着信100件。

この着信というのが、三桁の表示まで可能というのを、ロイは今回初めて知った。

履歴は、

アーニヤアーニヤカーリヌアーニヤアーニヤアーニヤアーニヤアーニヤカーリヌ
 アーニヤアーニヤアーニヤアーニヤアーニヤアーニヤアーニヤアーニヤアーニヤアー
 ニヤアーニヤアーニヤアーニヤアーニヤアーニヤアーニヤアーニヤアーニヤアーニヤ
 〈以下略〉

ロイは、二日酔いとは違う頭痛を感じるハメになった。

次に、一通のメールが届いていた。ロイは、おそるおそる開封のボタンを押す。

——朝八時に政庁前玄関にて待つ。アーニヤ。

時間を確認する。時刻、一二時三十五分。

「……」

ロイは、次に携帯のブックマークのページを選択し、とあるページに飛ぶ。

アーニヤのブログである。

アーニヤはこまめにブログを更新する。彼女の最新の心境などは、これで確認できる

ので、ロイはよく利用していた。

「!!」

ブログを見て、ロイは絶句した。

「うう、なんだ、朝かあ?」

傍の赤い絨毯で大の字になっていたジノが、蘇ったゾンビの如く緩慢な動作で体を起こす。そしてロイを発見して、寝癖混じりの金髪を指で搔いた。

「おう、ロイ。おはようさん。ってどうしたんだ、顔が真っ青だぞ。飲みすぎたか? っ
て俺もだな……」

呻くような声を出しながら、ジノはその指を額に持つていく。頭痛がするのだろう。

「ジノ」

「何だ?」

「あのアーニヤが三時間もブログ更新をストップしている。その意味はなんだと思う
?」

「あくん? あのアーニヤがブログをそんな長時間更新しないって、そりやあ……」

ジノの曇っていた思考が再開し始めたのか、彼は表情を深刻にして、

「あまり、考えたくないな……」

その言葉が、全てを物語っている気がした。

②巻 6話『蒼月 と クラブ』

月下先行試作機、蒼色に塗装されたそれは“蒼月”と呼ばれていた。正式名称ではなく総称である。

かつて黒の騎士団に所属していたエースパイロットの機体だ。

調整された強化ランドスピナーが唸りを上げて、蒼い影は荒野を疾走する。

指定されたコースを目標より早く走り抜ける。操縦桿を握る手は、油断無く正確だ。アラート。赤い光が操縦者の白い肌を染め上げる。

敵と接触した。

目視にて確認。右正面四十度、一キロ先、立ちはだかったのは青い騎士——“ランスロット・クラブ”、中華連邦、EUでは憎悪と尊敬を込めて“パラディン”と呼ばれる機体だ。

「……」

“蒼月”は即座に戦闘態勢。しかし、選択は“クラブ”の方が速かった。

“クラブ”は手にした可変ライフル通常モードを手早く発砲。“蒼月”はフェイントを交えた機動で、射線を事前に外しておいたのもあって、難無く回避。

スピードを落とさずに間を詰める「蒼月」。遠距離から近接攻撃を狙っていたおかげで、「クラブ」がライフルからショートソードに持ち変える動作分、速い。

それに気付いて「クラブ」は時間稼ぎの為に、スラッシュハーケンを射出した。
(温い)

「蒼月」の操縦者はそれを読んでいた。姿勢制御を一杯まで使い、スピードを落とすことなくスラッシュハーケンを機体を逸らすようにして避ける。更に掻い潜って、必殺の左腕を繰り出す。

オリジナルに比べて貧相とはいえ、猛禽の爪にも似た放射波動機構は青い騎士の胴部を側面から驚掴むように捕らえた。

暴れるように、その爪から逃れようとする「クラブ」。機体のパワーは「クラブ」の方が上だ。だが、

(スイッチ)

逃げる暇を与えず、操縦者は放射波動を起動。出力を示すメーターが急上昇、レッドゾーン、続いて朱色を帯びた破壊の衝撃が断続的に青い騎士に叩きつけられる。白い装甲から沸騰した熱湯のような泡が盛り上がり、機体は成す術なく四散した。

昇る炎をバツクに「蒼月」は爪を構え直した。まだ、敵はいる。

操縦者は油断無く辺りを見渡す。

再度のアラート。別方向より。今度はナイトオブブラウンスの機体“トリスタン”だ。
“人型に限定されている”“トリスタン”から打ち出されるスラッシュハーケン、
“蒼月”は最小限のジグザグ機動で躲す。ついでに、そのスラッシュハーケンのロープ
を“蒼月”の右腕で握り締め、引き寄せる。

高速で射出されたスラッシュハーケンを、ロープとは言えナイトメアフレームの指で
掴み取ったのだ。並みの芸当ではない。

咄嗟の事でバランスを崩した“トリスタン”は、迎撃しようと構えていた槍を使うこ
とができず、必殺の左腕に捕まり、その身を青騎士と同じく、爆散させられた。

YOU WIN

モニターに浮かぶ文字を見つめ、

(ノルマの三十戦終了。いくらロイとジノとはいえ、データ上のならこんなものか……)
シミュレーターを終了したアーニヤは、心の中で嘆息した。

画面端の時計を確認すると、時刻は一三時。昼過ぎだ。今日はアシユフオード学園に
て執り行われる枢木スザク歓迎会にロイと出かける予定で、朝から政庁前で待っていた
のだが、いつまで経ってもやってこない上に、電話は繋がらないわ、ジノの自室に行け
ば鍵はかかっているわチャイムを鳴らしても出ないわで、溜まったストレスを発散させる
ためにここに來ていた。

最初は「モルドレッド」で訓練していたのだが、途中から敵——黒の騎士団側のナイトメアを操縦し始める事にした。今日に限った話ではなく、敵のナイトメアの特徴や癖を知っておくことは実戦で色々と有利に働くので、たまにやっていた。

しかし、今日は気が向いて黒の騎士団の中でも旧型に分類されるため、いままですルーしていた「蒼月」でやってみた。

本国での会議で話題にのぼった、というのも選択理由の一つではある。

エリアーに来る前に「紅蓮式」では何度か訓練した事があり、ピーキーな暴れ馬だったもののそこそこ扱いやすかった。似た機体である「蒼月」の操作も特に難しいことは無いだろうと思っていたが、この「蒼月」——と言っても、機体は鹵獲できていないので、過去の戦闘データによる想像上のもの——は特徴的だった。

まず「紅蓮式」に比べて総合バランスが極端に悪い。悪いなんてもんじゃない、極悪とも言える。主たる原因は、「紅蓮式」と比べて出力が低いのに、重い腕部など取り付けているからだ。

しかも、その原因となっている輻射波動は威力はあるものの、発動できる最大回数は多くない、燃費も良くないので連射も出来ない。チャージ中は持てる武装も限られているため決定打と手数が少ないというのに関連して防御力にも欠ける。輻射波動の腕部で、しかもこの腕を付けるために同型である「月下」と比べて刀などの武装も選択でき

ず汎用性も低い。

一撃必殺の輻射波動のために、非常に隙の多い仕様になっているのだ。特攻兵器みただ。こんなもの、一般の兵士が乗り込めばいの一発の撃墜候補である。当の操縦者も文句を言わなかったのだろうか。

そういえば、とアーニヤは思い当たるものがあつた。

身近に似た機体がある。『ランスロット・クラブ』だ。

可変ハドロンプラスタを装備したあの機体は、隙の多い仕様になってしまつており、まさに乗り手を選ぶものになっている。

だが、決められた状況にさえなれば鬼神の如き強さを発揮できる。

つまり、搭乗者に求められるのは、決められた状況に合わせるのではなく、決められた状況を作り出す能力。

この『蒼月』のパイロットは知らないが、少なくともロイ・キャンベルとはそれができる人間だ。

（『蒼月』のパイロットは自身のその特性を理解し、そしてこの機体の開発を行った人間も、パイロットは状況を作り出せる能力に秀でていると見抜き、そのまま改造や修正することなくこの機体を使用し続けさせる判断をした、という事か）

その判断が正しかったというのは、かつて見た本物の『蒼月』の戦闘中の映像を見れ

ば一目瞭然だ。状況を作り出せるという点では、周りが見える目を持っているという事と同義なので、指揮能力も高かった。

以上から「蒼月」と「クラブ」、外観はかなり違うが、パイロットの特性と、開発者の判断方針や性格は非常に良く似ているのが分かる。

(やはり、かなり厄介な人間だったという事か、ライという人物は……)

敵にロイのような人間がいたらと思うと、ワクワクもするが正直ゲンナリとした気分にもなる。

なにせ、ロイとの模擬戦はアーニヤが勝ち越してるとはいえ、部隊運用の戦略シミュレーションでは一勝も出来ていないのだ。一人の達人より、有機的に稼働する集団の方が何倍も恐ろしいという事は、数々の戦場を生き抜いているアーニヤは肌で感じ取っていた。

アーニヤは思考を続けながら、シミュレーターを中止し、座席をスライドさせ外に出た。

すると、視界に見慣れた二つの顔が入ってきた。ちなみに、二人共見慣れた私服姿だ。

「や、やあ」

銀髪の見慣れた眼鏡の男——ロイは、ぎこちなく手を上げて挨拶をした。

思考を中止し、アーニヤは眉間に溝を作った。

「……いたの？ 声をかけてくれればいいのに」

ロイの隣に立つジノは、あのなあ、と呟いた後、

「私達の機体を容赦なく爆散し続ける人間に、なんて声をかけろって言うんだよ……」

「すまなかつたアーニヤ、遅くなって……まだ怒ってるかい？」

控えめなその問いかけに、アーニヤは素直に顔を左右に振った。

体も動かして苛々はすでに吹き飛んでいるし、ここでゴネてもスザク歓迎会で過ごせる楽しい時間が減るだけという考えもある。

「もう怒つてない。別に正式に約束したわけじゃなかつたし」

「そう言ってもらえると私たちも助かる、なあ」

「そうだね」

友人の言に同意するロイ。それを見つめながら、アーニヤは、

（『蒼月』のパイロットも、ロイと同じ種類の人間……）

ふと、そんな事を思い、ロイの顔に視線を向け続けた。

気付いたロイは、

「どうしたの？」

「何でも無い。少し、気になった事があつただけ」

「気になった事？」

疑問の声には答えず、アーニヤは操縦席から身を降ろした。同時に冷たい風を感じて肌が震えた。自分が汗まみれになっている事に気付いて、彼女は二人から早足で距離を取った。

「シャワーを浴びて着替えてくる、待ってて」

「分かった」

「了解了解。いくら待たされても文句は言いませんよ。しっかりとオシャレしてこい」

アーニヤは、再度怪訝そうに眉間を寄せた。

「ところで、なんでジノも出かける準備してるの？」

「私も行くからだよ」

「……」

「うわっ、すっげー不満そう」

アーニヤは、少し考えて、ポンと手を叩く。

「待たせるのは申し訳ないから、ジノは先に行っていい」

「予想はしていたが、実際に言われるとお前の優しさには涙が出そうだよ……」

邪険に扱われたジノは、その整った眉をヒクつかせていた。

○

「機嫌が直ってて助かったよ」

少女が去った後、男二人は安堵のため息をついた。シミュレーションで自分達の機体を派手に撃墜しまくっているのを見たときは流石に血の気が引いたものだ。

「終わった後に話しかけた方がいい、君の言う通りだったね」

金髪の友人はピツ、と親指を立てた。

「アーニャとの付き合いに関しては、私の方が一日の長があるからな」

ロイは、複雑な表情を浮かべた。

「それにしても、アーニャは変わったことをしていたね」

「敵国ナイトメアフレームのシミュレーションマシンだろ。私もやったことがある。そんなに珍しい事ではないだろう」

ジノは当たり前のように言ったが、ロイはレンズの奥の瞳を曇らせた。親友のその違和感を、ジノは見逃さなかった。

「まさか、やった事が無いのか?」

敵国ナイトメアのシミュレーションは、士官学校等で必須科目に加えられている訳ではない。しかし、ある程度の腕前を持つナイトメアフレームのパイロットであれば誰もが自然と興味を持ち、訓練する、そんな類のものだ。

「あるけど、どうもね」

呟いて、ロイはシミュレーションマシンに体を寄せて、内部の液晶パネルを操作した。

しばらくすると、過去の訓練者のスコアが表示された。先程まで訓練していたアーニヤの名前もある。

それをロイは、かなり長い間、下へとスクロールした。やがて出てきたのはR・Cという騎士のスコアだった。

「R・C？ スコアは……まあ、可もなく不可も無く……いや、まあ一般的には優秀なのかなってレベルだな」

「どうも」

軽く恥ずかしげに笑うロイに気付いて、ジノは瞳を大きくした。

「まさか、お前なのか？」

ロイは肯定した。まさしく、ジノが微妙な評価を下したスコアはR・C——ロイ・キャンベルのスコアだったのである

「そうなのか、にしては低いな……。片手でやってたとか？」

メガネを指でかけ直し、ロイは首を横に振った。

「黒の騎士団式は合わないのか、乗り込んでも体が思う通りに動かなくてね。操縦をしようとする、体も震えだすし」

「体が震えだす？」

証明するように、ロイは操縦席にまたがる。バイクを操縦するような姿勢になって、

数十秒後、

「ほらね」

「本当だ」

指の一つ一つが、何かに怯えるように震え始めていた。

「お前、過去にバイク事故とかの経験が？」

「バイク事故？ いや、無いよ。今でも所持はしていないし、スラムに住んでた頃はそんな金銭的な余裕も無かったから」

「過去の恐怖からくるフラッシュバックって訳じゃないのな……」

考え込んだ後、ジノは取り繕うような笑顔を浮かべた。

「まあそれでもこれだけ戦えるのなら十分だろ。黒の騎士団のナイトメアなんてそんなに乗る事も無いだろうし。誰にだって得意不得意はあるし」

親友の気遣いに、ロイは感謝した。

「と言つても、理由の分からない事があるのは気持ち悪くてね。性分できさ」

「あ〜……」

返答に困った様子でしばし沈黙した後、ジノは明るい口調で、

「一戦どうだ。モヤモヤするときは体を動かしてスッキリしようぜ」

と、ジノは指で対戦用のシミュレーションを示した。ロイは手を横に振った。

「止めておこう。気分的にはその話に乗りたいが、今から遊びに行くんだ、汗をかくのは
さ」

「じゃあ、こっちにやるか」

次に、友人は違う方を示した。それを見て、ロイは思わず不敵な笑みを浮かべた。

「へえ」

戦略シミュレーション。それは、体を動かさなくとも頭をフル回転させるもの。お互いに同等の軍を与えられたと仮定して指揮官として采配を振るい、競い合うものだ。

ちなみに、ロイがもっとも得意とするものでもある。

ラウンズの中で、このシミュレーションでロイに勝ち越している者はいない。

「いいのかい？」

「その余裕な表情、少しムカつくねえ。まあ、今までの勝敗を考えれば分からんでも無いが、私だつて成長しているんだぞ」

「分かったよ。なら受けて立とう。断る理由も無いしね」

ロイは、暗い気持ちを払拭させてくれる機会を与えてくれた友人に再度感謝した。

一時間後、訓練室に戻ったアーニヤが見たのは、騎士達にねだられてシミュレーション結果の経緯を説明するロイと、傍で真つ白になって項垂れているナイトオブスリーの姿だった。

○
最低限の家具だけが置かれている。手入れは行き届いているが生活の臭いが微塵も感じられない部屋だ。

(戻った形跡は無しか……)

内心で呟きながら、当然だなどと結論付ける。懐かしさに流されて、彼がこんな所に立ち寄るわけも無い。

自分は何を期待したのでろうか、とスザクは改めて考えてしまった。彼がここに立ち寄った事があるにしても、痕跡など残しているわけ無いではないか。

「何をしてるんだ。こんなところで」

背後から声をかけられて、スザクは慌てることなく振り返る。すでに誰かがこちらに近付いている事には気付いていた。ただでさえ人通りの少ない場所でもあり、人の気配は掴みやすい。

アツシユフオード学園、クラブハウスのとある一室。

「主賓があまりうるつくなよ」

「ごめんよルルーシユ」

スザクは声をかけてきた人物——ルルーシユ・ランペルージにすまなそうな顔を向けた。

今日は、枢木スザクの復学歓迎会なのだ。実行主体は生徒会であり、その役員である彼は、本日の主役であるスザクを探しに来たのだろう。

ルルーシユは、気持ち早足で近寄ってきた。

「会長も探してたぞ」

「そうなんだ。悪いことをしたな」

「別にいいんじゃないか？ 探すという名目で、学園のイベントを見て回ってたからな。どう考えても、お前の事はついでだ」

悪戯っぽく言うルルーシユに、スザクは苦笑で返した。

「ところで、こんなところで何をしていたんだ？」

唐突に、ルルーシユの表情が真面目なものに戻る。スザクも、笑みを消して、

「まだ彼が住んでいた痕跡が残っているかと思ってるね……」

言葉を受けて、ルルーシユは驚いた後、少し悲しそうに瞳を歪ませた。冷静な彼にしては珍しく感情というものを感じさせる顔だ。スザクはその一挙一動きを油断無く見つめていた。

「ああ、そうだな。痕跡は無いさ。俺が片付けたんだから」

「片付けた？ 君が？」

「ほら、口口がさ。アイツには懐いてただろ。一緒に散歩したり、折鶴を作ったり……」

残つてるとき、色々辛いかなつて。いや、違うな、何より、俺も辛いから」

視線を下に向けて語るルルーシユに不審な所は見受けられなかった。

一年前、このクラブハウスの一室に住んでいた少年——ライは紛れもなくルルーシユと友達と言える間柄だった。

(いや、違う。おそらくは友達以上の……)

ゼロの正体がルルーシユである、とライは知っていた。黒の騎士団内ではあのカレンや藤堂すら知らなかったのに。おそらく親友と呼べる関係だったはずだ。

だから、その親友という記憶だけが残っているルルーシユのこの反応に不審な所は無い。

「……そういえばスザク。お前は、知ってるんだよね？ ライがどうなったのか」

思い切つて訪ねてみた様子も、やはり不自然は無い。友の身を心底案じている顔だ。

「知らないのかいルルーシユ。彼は……」

「黒の騎士団にいたんだろ。それは知ってる。残念だよ。俺も、彼とは仲良くしてたから。気付いていれば、そんな道に入る前に止められていたんじゃないかって、何度も思つて……」

後悔の念に苛まれるように、拳を強く握るルルーシユ。瞳には涙が滲んでいた。

その様子を、スザクは冷めた気分で見られなかった。

「君が気にする事じゃないよ。捕まえたのは、僕なんだから」

「そうだったな。悪い、お前も辛い思いをしたのにな……」

「僕は、別に……」

細い指で目元を拭ったあと、ルルーシユは無理やり作ったかのような笑顔を浮かべた。

「さあ、そろそろ戻ろう。いい加減に会長も痺れを切らしてるかもしれない」

「わかった」

細い背中が続いて、スザクは部屋を出る。

ふと、告げてみようと思った。考える前に言葉が漏れていた。

「ルルーシユ」

「んっ？」

「機密事項なんだけど、やっぱり君には教えておこう」

「教えておこう、って。何をだ？」

スザクは、改めてルルーシユを見る。ルルーシユは、首をかしげてこちらの様子を伺っていた。

やがて静かに、重い口調でスザクは告げた。

「ライは死んだよ。もう、ここには戻らない」

ルルーシユの瞳がこれ以上なく開かれた。同時に、大きく息を吸い込む。その後、口は真一文字に結ばれて、彼は顔をこちらから逸らした。

「そうか……ありがとう、教えてくれて」

「残念だよ、本当に」

「ああ、けど、仕方ないんだよな……悪いけどスザク、口口にはもうしばらく内緒にしていてくれ。俺が、折を見て話すから。あいつも、シヨックが大きいだろうし」

「分かった」

ルルーシユの声が震えていた。

そのまま、彼はクラブハウスを出るまで振り返りもしなければ、一言も話す事は無かった。

②巻 7話『歓迎会 A』

「おおっ！ ここがアツシユフオード学園か!？」

学園の入口で、ジノが子供みたいに嬉しそうな声をあげる。

それに伴って、傍の学生達から失笑を交えた視線が三人に注がれた。

ロイ、ジノ、アーニヤである。

三人は白い軍服を脱ぎ捨てて身分を隠し、このアツシユフオード学園で行われる『枢木スザク歓迎会』にお忍びで遊びに来ていた。

アーニヤはゴスロリチックなフリフリピンクのワンピースにリボン。ジノは黒いジャケットに青を基調とした半袖の上着を羽織り。そしてロイはジーパンに大きめな黒いTシャツというラフな出で立ちだった。

「ジノ」

重たい眼鏡を掛け直しながら、ロイははしやく長身の友人を肘でつつく。

「少し控えてくれ。僕はともかく、君とアーニヤは有名人なんだ。学生に正体がバレたら騒ぎになりかねない」

「何言ってるんだよロイ！ そうなったらそうなったら楽しいじゃないか!」

大いに瞳をキラキラさせる帝国最強の騎士の一人、ナイトオブスリー、ジノ・ヴァインベルグ。

「……」

制止は不可能だ、とロイは悟った。こうなったジノは、親にねだってねだって、生まれて初めて遊園地に連れて来てもらった子供と同じだった。

「あつ」

唐突にアーニヤが声をあげた。男二人はその声に従って顔を向ける。

晴天の下、トコトコトコと大きな着ぐるみが前を通り過ぎて行った。

三人は顔を合わせる。

「モグラかな？」

「ビーバーだろ？」

「ラッコ」

男二人が疑問符を浮かべる中、アーニヤだけが携帯で写真を撮りながらきつぱりと言いつつ切った。

「そうかあ？」

納得いかない様子のジノに、アーニヤは疑問の瞳を向ける。

「なんで？ そうとしか見えないのに」

首をかしげるジノに合わせて、これまた首をかしげるアーニヤ。その姿は鏡合わせみたいで面白かった。

「こういう事は女の子の方が理解が早いものなのかもね。さて」

ロイは辺りをグルリと見渡す。生徒達が趣向を凝らした露店が数多く並んでおり、その中のいくつかに好奇心をそそられるが、

「とりあえずスザクを探そう。見学はそれから——つて、あれ？」

「うお、珍し！　なあなあ、見てみるよ二人とも」

「記録」

「とりあえずやる事も無いみたいだし、庶民の学校を見学するか？」

「賛成」

「つてかまはずは何か腹に詰めようぜ。昼飯を食べてないからお腹空いた」

「大賛成」

いつの間にか、二人はロイから離れ、はるか彼方で露店巡りを開始していた。

「おいロイ。何やってるんだ、置いていくぞ！」

「ロイ、早く」

ずいぶんと先に進んだ二人が、大きな声でロイを呼ぶ。

「二人共。だから目立つ事をするなど……」

言い掛けて、ため息一つ。

まあ、いいか、と頭をポリポリと掻きつつ、ロイはそう思った。

ジノとアーニヤの自由奔放な行動を受けて、自分だけが色々と心配しているのがロイは無性に馬鹿馬鹿しくなった。

「二人とも、ちよつと待ってくれ」

ロイは小走りで駆け出す。

正体がバレて騒ぎになった時の事は、そうなった時に考える事にした。

○

看板やら呼び込みの人達で溢れ返っている廊下は、学校にしては広々とした造りのはずだったが、今だけはひどく手狭に感じられた。

活気もすごい、人の往来も激しい、そして熱い、しかも生徒達はその熱気をさらに高めるかのように声を張り上げる。

「ホラーハウスです！ その銀髪のお兄さんとピンクの髪の子。ご兄妹でいかがですか!？」

「映画。機動戦士トリスタンSEED上映中です!」

「占いいかがですか? 恋愛金運仕事運なんでも占います!」

「すごいな」

学生が持つエネルギーに面食らいながらも、ロイは楽しげな声を上げた。

「しかし、人が多い。私とロイはともかく、これじゃあアーニヤははぐれちやうかもな」と、物珍しそうにジノはキヨロキヨロと辺りを見渡す。そんな彼に対してアーニヤは、刺を含んだ口調で。

「ジノ。私はそこまで子供じゃ——」

「そうだね。じゃあ手を繋ごうかアーニヤ」

「……へっ?」

突然とも言えるロイの言葉に、アーニヤはキョトンとして立ち尽くした。

ロイは、そのままアーニヤの横を通り過ぎ、数歩先行してから振り返る。

「あつ、いや、はぐれないように、と思ったんだけど……」

しばらく、アーニヤは電池切れのロボットのようにな反応しなかったが、

「嫌かい?」

とロイが再度尋ねると、彼女は即答した。

「嫌じゃない。全然」

「そうか。じゃあ……」

ロイが手を差し出す。彼女は恐る恐るその手を取った。ロイは強く握り返す。

「行くうか」

ロイが歩きだすと、少し遅れて、アーニヤはどことなく嬉しそうな表情を浮かべながら引つ張られるようにして後に続いた。

そんなアーニヤに、ジノが耳打ちする。

「おいおい、アーニヤ。それじゃあまるで子供のようだぞ」

「ジノ、うるさい」

アーニヤに睨まれ「おお、怖っ」と、ジノは大きな体を身軽に翻し、そのまま二人の後に続く。

「おっ」

しばらくして、ジノが足を止めて、ロイの肩を叩いた。

「見ろよ二人とも。コスプレ喫茶だつて」

ロイが視線を向けると、そこには確かに“コスプレ喫茶”という看板が掲げられたお店があった。

「コスプレ……」

隣のアーニヤがなぜか感慨深げに呟く。

「? ジノ。寄りたいのか?」

ロイが尋ねると、ジノはまたキラキラした瞳で、

「だってコスプレだぞ! こんな面白いのをスルーする手は無いだろ!」

「いや、『無いだろ!』って言われても困るよ。ね、アーニヤ」

ロイが同意を求めてアーニヤの方に顔を向けると。

「ロイ、入ろう」

帝国最強の騎士ナイトオブシックス様はえらく体がウズウズしているご様子だった。彼女の瞳もキラキラと輝いているように見えるのは、多分見間違いでは無いだろう。

「……もしかしてアーニヤ。こういうの好きなのかい？」

「うん」

即答だった。よくよく考えてみればアーニヤの好むゴスロリ系の服も近い要素を持つているわけであり、その彼女がコスプレに強い感心を抱いていても不思議ではない。

多数決で言えば二対一。いつもなら、ロイはしぶしぶこの数の暴力に従うところだが、

(……なんだ。この悪寒は)

理由は分からないが、なぜか体が『この店に入るな! 時計の針を戻す愚を犯すな!』

と警鐘を大音量で鳴らしまくっている。

ふと気付けば背中が冷や汗で濡れていた。

少々考え込んで………ロイは本能に従う事にした。

「二人とも。悪いけどここは猛烈に嫌な予感がするんだ。急いで通り過ぎよ——」

「三人」

「三名ね〜」

しかし、ジノとアーニヤは、すでにこのお店の生徒らしき人物に来店を告げて、中に入る所だった。

「二人共！ 駄目だよここは！ なぜだか分からないがとにかく駄目——つてうわ!?!」

アーニヤと手を繋いでいるロイは、彼女のその小さな体からは想像できない腕力に負けて、ドンドン教室に引つ張られていく。

「ちよつと、アーニヤ？ 待った！ 待って！ お願いだから——」

「……何?」

アーニヤはようやく足を止めてくれた。ロイは咳払い一つして告げる。

「アーニヤ。僕はここに入りたくないんだ」

「なぜ?」

「なぜ、つて聞かれても困るんだけど……とにかく僕は嫌なんだ。悪いけどここはジノと二人で——」

その時、何者かに背中を押された。

「!」

振り返ると、そこには、

「そんな事言わずに、寄って行って下さいよ」

と、満面の笑みを浮かべた女子生徒が三人いた。

「妹さんも入りたがっていますし」

「金髪のお連れさんはすでに着替え始めてますよ」

「はい、三名様ご案内♪」

「あつ、いや、僕は……」

「行こうロイ。きつと楽しい」

アーニヤは、今度は両手でロイの腕を強く引つ張った。そして、後ろからも女子生徒達がグイグイと押しってくる。怪我をさせる可能性もあるので、無理やり振り払うわけにもいかない。

『楽しくお着替え♪ ちなみに、着替えた服装のまま校内も回れま〜す♪』
「やめろ！ 放して！ 駄目！ ダメだつてば！」

結局。ロイは計四人の女の子の力に逆らえず、入店を果たしてしまった。

○

五分後。ロイは鏡に映る自分の姿を見て目を覆いたくなくなった。

「良くお似合いですよ。そのチャイナ服♪」

「うわ、見た目と違って、結構筋肉質〜♪」

「しかも、メガネ取るとイケメンだし♪」

「イケメンチャイナ萌え〜♪」

「……」

ロイは、チャイナドレスを着ていた。いや、着させられていた。もちろん女の子用のスリットが大きく入ったお色気タップリのあれだ。もう泣きたくなる。

肌にフィットしたドレスは鍛え上げた筋肉の凹凸を如実に表し、正直化け物。しかも腹筋は六つに割れているのでさらに収集がつかない。そして、そんな固い筋肉に対比するように胸に詰め込まれた柔らかい物体。

そりゃあもう、動くたびにプリンのような弾力を表現しつつプルンプルン震えた。

「……」

ロイは、中華料理屋に入店して自分みたいな店員が出てきたら間違いなく注文もせず一目散で逃げる自信があつた。

「……ぐすっ」

言い様の無い虚しさと、悲しさと、切なさに包まれる。

自分は一体何をしているのか？ こんな格好をして……。

そう考えると目頭が緩んだ。滲む目頭を隠すように、ロイは着替える時に強制的に外された、自分のトレードマークとも言える分厚い眼鏡をかける。

先ほどからカメラのフラッシュを浴びせていた女性陣から、すかさず抗議の声があがった。

「え〜眼鏡かけないで下さいよ〜」

「嫌です！　というか僕の元の服はどこですか!?　すぐに着替えま——」

「待つてみんな！」

一人の女子生徒がロイの言葉を遮った。その場の人間はロイを含めて全員その子に注目する。

「いや、私は眼鏡をかけてもこれはこれで良いと思う……」

少女が言うのと、女性陣は雷を受けたかのように身を一瞬だけ震わし、一斉にこつちを見て、

『確かに〜』

と頷くと、これまた一斉に黄色い声をあげた。

「そう言われれば〜♪」

「眼鏡で男のチャイナガール〜♪」

「奥に秘める美形を、分厚い眼鏡で覆い隠すっていうのもマニアックな気がするけどー

♪

「眼鏡取ったら美形なのは王道よね〜♪」

「王道は皆に愛されるからこそ王道〜♪」

（ああ、もう何でもありなんだな……）

と、ロイは若干十代後半の年齢ながら、所詮男なんて女の玩具なんだなと悟った。

その時、このクラス的女子生徒が、女性専用の試着室の前で皆に告げた。

「お連れさんの着替えが終わりましたよ」

ロイは、顔を向ける。

「ご対面〜」

開かれる布。中から現れたのは、

「アーニャ!?!」

ロイは驚きで息を大きく飲んだ。

アーニャが着ていたのはウエイトレスの衣装だった。頭には布の髪留め。左胸には

『あーにゃ』と書き込まれたプレート。その姿は、確かに喫茶店にでもいそうなウエイト

レスだった。

（いや、違う……間違っているぞ僕!）

あれは、ウエイトレスではない、とロイはすぐに自分の考えを否定した。

短い、短いのだスカートが。あれではウエイトレスではなくて、いかがわしいお店の店員だ。

「アーニャー！ 一体何て格好を——」

兄貴分としての自覚と責任を抱いて、ロイが注意をしようとアーニャに詰め寄ると、彼女は、

「ロイ」

「何？」

するとアーニャは右手を右目の前に持っていき。

「アーニャビーム」

それを淡々と言った。淡々とお言いになりましたこのアールストレイム卿は。

呆然と、ロイは立ち尽くした。

帝国最強の騎士、ナイトオブシックスとナイトオブゼロの間に長い長い長い沈黙が訪れる。

「……」

「……」

「……」

「……アーニャビーム」

しかし、ロイが何か喋らないと、アーニヤはその発言とポーズを一生止めそうになかったので、

「……アーニヤサン。ナンデスカソレハ」

ロイが片言で訊くと、ようやくアーニヤはポーズを止めて、腕を下げた。

「これを着たら、こう言うのが決まり。それにこれを言うと男が喜ぶ。この服をくれた、学生のお姉さんにそう言われた」

「……」

「違うの?」

と彼女は小鳥のように首を傾げた。その表情は相変わらず変化に乏しいが、少しだけ頬が薄い朱色に染まっている。多分……本人も少し恥ずかしいのだろう。

ロイは頭痛がしてきた。限りなく強く指で眉間を押さえる。そして、普段の彼からは想像できない程暗く、醜悪で、それでいて全てを見下すような狂った王のような笑顔を浮かべた

「オツケー。とりあえず、僕の妹分を弄んでくれたその生徒にはお礼をしよう。今すぐからね。むしろ、その生徒にはお願いしよう、死んでいただけですか? と、もちろん笑顔でね」

「ロイ。怖い……」

「……冗談だ」

首を振りながら、ロイは昂ぶる気分を落ち着かせた。

「着替えが終わりましたよ」

今度は男子用更衣室の前の、男子店員が声をあげた。

「ご対面」

男性店員が告げるとなぜか教室の証明が消え、その更衣室にはどこからともなくスポットライトが浴びせられた。

続けて断続的なドラムの音。更衣室の下からモクモクと上がるドライアイスの煙。

(無意味に豪華すぎる演出だなあ……)。

やがてドラムの音が一度強く鳴って、それを最後に止まった。

ロイは、アーニヤの時とは違った意味で猛烈に嫌な予感に襲われた。

カーテンが軽快な風切り音と共に開かれる。

更衣室の中なら出てきたのは、

「は〜い♪」

ヒラヒラの服装——女装したジノだった。

「……」

吐き気をもよおす何とやら、しかも、微妙に手の込んだ服を着ている所が、無性に腹

立たしい。

「ジノ。キモイ」

アーニヤが完全にドン引きながら言うと、ジノはのしのしと大腿で彼女に接近し、不自然な程に化粧タツプリのその顔を満面の笑顔にした後。

「どうかしらアーニヤさん♪」

ウインク混じりに、媚びるような声で言った。

「うっ……」

アーニヤは顔を青くし、嗚咽を漏らして口を塞ぎながら後ずさりした。そのまま、急いでロイの背中に隠れる。

「あら〜？ なぜお逃げになるの!?!」

「何が『お逃げになるの!?!』だよ……」

自然と間に立つ事となったロイは、昨日のワインの飲みすぎが原因とは違う吐き気を感じながら、ゲンナリした様子で言った。

「君には羞恥心というものが無いのか」

ジノは声を元に戻して、「ははは」と笑った。

「何言ってるんだよロイ。今日は祭りだろ？ だったら、楽しまなきや損じやないかと、それより」

る。ジノはクルリと一回転した。それに伴って、可愛らしく長いスカートがフワリと広がる。

しかし、その仕草は女性がやってこそ本領を發揮するものであり、ジノがやったら癪に障るもの以外の何物でもなかった。

「どうだ二人とも。この服装凄く愛らしくないか？ 我ながら良く似合ってると思うんだが」

「君は僕にどんな答えを期待しているんだ……」

「変態……」

アーニヤが、ロイの背中から顔を出してポツリと呟く。

ジノはチツチツチと舌を鳴らしながら指を振った。

「分かってないなアーニヤ。男は大なり小なり皆変態なのさ。バーイ、ロイド伯爵」

すると、アーニヤは少し考え込んでから、ロイの背中の服をグツと握り「……そうなの？」と、ロイを見上げて尋ねた。

即答せず、ロイは眼鏡を中指でかけなおして、

「男の一人として。まことに遺憾だ」

と、どこかの政治家のように淡々と答えた。

「じゃあ、ロイは変態じゃないの？」

「アーニヤには僕が変態に見えるのかい？」

アーニヤは首を振った。

「見えない。ロイは誠実。でもジノは変態」

「そうだねジノは変態だ」

「変態ジノ」

「ああ、変態ナイトオブスリーだ」

すると、ジノは苦笑いを浮かべながら、

「お前、自分も似たような格好してて、よく私にだけそんな事言えるな」

「……」

ロイには、返す言葉が無かった。

②巻 8話『歓迎会 B』

教室の前に人だかりが出来ている。少し気になった。

「何の騒ぎ？」

早足で近寄りながら、誕生日プレゼントを渡すために水泳部顧問のヴィレッタを探していたシャーリー・フェネットは、人の隙間を縫うように教室の中を覗き込む。

この教室の出し物は、コスプレ喫茶となっていた。室内には看護婦、パイロット、チアガール、婦警、軍人、スチュワーデスと多種多様な制服を着込んだ学生たちで溢れている。

しかし、教室の外から中を伺っている学生達——特に女性が多い——はそういった制服を珍しがっている訳では無いようだ。

視線の先は、明らかにとある一角にいる男女三人のグループに注がれていた。

長身の男と、銀髪の男、そしてピンク色の服を着た少女の組み合わせ。

「あれ？ あの人達、どこかで……」

そのトリオを見て、シャーリーは眉を寄せて首を傾げた。見覚えのある人たちのような気がしたのだ。

「ナイトオブブラウンズ様よ♪」

考え込んでいるシャーリーの隣で、女子生徒の二人組が小声で興奮気味に会話をしていった。

（そっか、ナイトオブブラウンズだ！）

シャーリーの頭の中で欠けたものが塞がった。同時に小さく手を叩く。

見覚えがあるはずである。同じ生徒会のスザクと同僚だ。帝国最強の騎士ナイトオブブラウンズ、その席次の三番、六番そして、ゼロ番の……

「……えっと名前は何だっけ？」

すぐに思い出せなかった自分が言うのもなんだが、ジノ・ヴァインベルグやアーニャ・アールストレイムは、雑誌などの露出が少なからずあるので顔は知られている。しかし、ゼロの名を持つ男はメデア露出が極端に少なく、どうしても印象が薄い。

「さつきキャンベル様がメガネを外されていたのを見たけど、カツコよかったわあ」
傍を見ると、違うグループの女子学生が頬を染めながらしみじみと呟っていた。

「でも、スラム街出身なんですよ」

「関係無いわよそんなの。皇帝陛下直属よ」

「あんた、枢木卿の時も同じ事言ってなかった？」

（そうだ、ロイ・キャンベル卿だ。本物は初めて見たかも）

シャーリーはまたも手を叩いた。

銀の長い長髪、一八〇センチ近い長身、ピチピチのチャイナ服から伺える鍛え上げられた体、残念ながら分厚い牛乳瓶底眼鏡に覆われていて実は美形であると噂される顔は見えなかった。

もつとも、顔が整っているか整っていないかは、シャーリーにとつての興味の対象ラック上下に影響は無いが。

「そっかー、あれが噂のブリタニアのゼロ様か……つて、こうしちやいられない！」

シャーリーはそのまま教室を後にした。生徒会の仕事や水泳部のイベントはまだまだ控えている。早くヴィレッタを探してプレゼントを渡さなければいけない。

——シャーリー。

「つて、あれ？」

振り返る。急いでいるのだが、脳の中に唐突に過ぎる言葉があつて、足を止めてしまった。

「今の、なに？」

親しみが感じられるが、聞き覚えは無い。だが、さざ波の海岸を連想される穏やかな声には懐かしさがあつた。

シャーリーはしばらくそのまま違和感の原因を探ろうと考え込んでいたが、

「……急がないと」

結局、考えがまとまらず、時間に追われているのもあつて教室から離れていった。

○

「そうだね、その通りだ……」

コスプレ喫茶の教室の中、ジノに強烈な言葉の一撃を受けたロイは、ガクツとうなだれた。

「ロ、ロイは大丈夫。その服。よく似合ってる」

珍しく慌てた様子でアーニヤがフォローを入れた。しかし、それはロイにとって全く救いになつてはいなかった。

だが、その自分を励まそうという気持ちはありがたいので、ロイは一応礼は言つておく。

「ありがとうアーニヤ……」

「お礼はいらない。その格好、本当に女の子みたいだから」

バツサリ、と切れ味抜群に、アーニヤはロイの介錯を立派に務めた。

更に落ち込む前に、ロイの背中をジノがバシンと叩いた。

「おいおい、落ち込む暇は無いぞロイ。さあ、この服のまま次行ってみよお！」

「へ？」

暗い気分も一瞬で忘れて、ロイは奇天烈な声を上げた。

「ま、待ってくれジノ。この格好でか？ この格好で学内を回ろうって言うのか君は!」
大げさに腕を広げて反論する。仕草の過程で、胸の詰め物がブルンブルン震えた。

ジノも胸の詰め物を盛大に震わせながらロイに向き直り、何言ってるんだコイツ？
とでも言いたげな顔をした。

「当たり前だろ。みんな似たような格好でうろついてるじゃないか」

確かに、周りを見ると仮装している学生は沢山いる。しかし、そんな中でも自分達は
明らかに「濃い」。

「さっき映画もやってたみたいだし。他にも色んな出し物やってたからなあ。全部回れるかなー」

「しかもこの格好で全部の場所を回るつもりなのか!」

「さっ、行くぞ二人とも——お姉さん。この服借りてくね〜」

ジノはこのクラスの女子学生にヒラヒラと手を振りながら、チャイナ服のロイを引っ張って教室から出ようとした。

「ジノ、待って」

そんなジノを、アーニヤが呼び止めた。

「なんだよアーニヤ。まさか、その服で出歩くのが恥ずかしいのか?」

「ちがう」

アーニヤは否定して首を振った後、迷うように間を置き、

「まだロイに聞いてない」

「何を？」

「感想」

その言葉で何かを察したようで、ジノは化粧の濃い顔にニヤ々とした笑みを浮かべた。

「ああ、なるほど。気が回らなくて悪かったなアーニヤ」

ジノは、ロイの手を離し、

「ほれ、出番だぞ色男」

と、背中を押した。ロイはよろめきながら、アーニヤの前で止まる。

「もう！ 何するんだよジノ！」

「ロイ」

ジノを睨んだ所で、アーニヤが声を掛けてきた。ロイは目元を緩めて、

「ん？ なんだい。アーニヤ」

「感想聞きたい……」

「感想？ 感想って……何の？」

ロイは首を捻った。感想と言われても、何のことかさっぱり分からなかった。「それは……」

アーニヤは何も答えずに俯いてしまった。どことなくその顔は少し——いや、かなりがっかりしているようにも見えた。

「どうしたのアーニヤ？」

「おいおいロイ。何の？　って事は無いだろ……」

呆れた顔のジノが、ロイに詰め寄った。

「感想って言ったら一つしかないじゃないか」

「だから何さ」

「アーニヤのこの格好だよ」

ジノが、アーニヤを指で示した。

「そこでロイはハツとし、自分がアーニヤに掛けるべき言葉を思い出した。

「あつ、そうだよアーニヤ！　今すぐそんな服は脱いで——」

ゴツン！

そして着替えるんだ！　と言おうとしたらロイはジノに頭を殴られた。しかもグー

で。結構、本気で。

「いつ、たあ……何するんだジノ！」

涙目になりながらロイは振り返った。

「ロイ。お前ちよつとこつちに来い！」

反論の余地を許さず、ジノはロイの腕を掴むと、教室の隅まで引つ張っていった。

「何するんだよジノ！ ちよつといい加減に——」

「うるさい黙れ」

小声でピシヤリと言われてロイは口をつぐんでしまった。ジノはヒソヒソ声で、

「いいかロイ。今日は祭りだ。祭りでそんな無粋な事は言うな」

「だってジノ。あの格好はどう見ても、スカートがみじかい——」

「馬鹿！」

またゴツンとロイは頭を殴られた。ロイは再び涙目になってうずくまり、ジノを睨む。

「殴った！ 二度も殴ったね！ ノネットさんにも二回連続で殴られた事無いのに！」

「それは、お前がいつも一回で気絶するからだろ！」

ツツコミを入れてジノは、その化粧が濃い顔をグツとロイに近づけた。

「いいかロイ。お前は過剰に反応しすぎなんだよ。この変態め」

「変態、僕か？」

「ああ、そうだよ。もつと素直に見るんだ。そして一人の男としてアーニヤを見る。そ

して誉めろ。いいから誉めてやれ。それが男の責務だ、納税と同じぐらい大切な義務だ」

「納税ってそれが無いと国が成り立たない規模の問題じゃないか……女性を誉める事の重要度はそれと同レベルなの？」

「馬鹿！ 国家が転覆しても、女性のご機嫌を取っておけば人類は繁栄するんだよ！」

国の中枢を担うべき貴族である上に、ラウンズである人間にしては最悪な発言だったが、ジノの言葉には本質を捉えているような妙な説得力があった。

「いや、でもジノ。あれはさすがに——」

「返事は！？」

「イ、イエス、マイロード……」

変に圧力のある顔で詰め寄られて、ロイは思わず頷いてしまった。

「よし、分かればよろしい。では行ってきたまえ『青い聖騎士』君」

背中をまた叩かれた。ロイは納得できないものを感じつつ、よろめきながら再びアーニャの前に立つ。

「……」

アーニャは、自信を失っているように見えた。彼女は、無言で小さく腕を広げる。その仕草は服装を強調するためのもの、というのはなんとなく分かる。

服装に対する感想を自分に求めている、というのも理解した。

それでもロイは困った。感想と言われてもその内容が思い当たらない。ただ不謹慎な服を着ているなく、としか感じられない。

——一人の男としてアーニヤを見ろ。

ジノの言葉を思い出す。

(二人の男として。か……)

そういえば不思議なものだな、とロイは思った。

アーニヤは、自分がラウンズに入ったばかりの頃、その世話係に任命された少女であり、いわば面倒を見てくれた先輩である。

それが今では、自分はアーニヤを妹のように見て、できる限り彼女の面倒を見たい、守りたいと願っている。

もちろん、実際に自分がアーニヤの面倒を見ているという事は無い。いや、その立場は昔のままで、いまだに自分はアーニヤに面倒を見続けてもらっている、と言っても過言ではない。守りたいという点に関しても、実際は守られる事も多い。

でも、そこに仕事とか余分な要素を取り除き、ただ純粹にロイとアーニヤの今の関係と言えばやはり先輩と後輩と言うよりは、兄と妹の関係の方がしっくりとくる気がする。更に言えば、お互いそれを受け入れているふしがある。

ロイは兄として、アーニヤは妹として……二人はこの約一年でそれを当たり前の関係にしてしまったとも言える。そしてもちろん。今まで一度もその関係が男と女になどなつた事はなかつた。

ロイにとつてアーニヤは先輩であり、そしてその次は妹だつた。

しかし、ジノは、今回それを捨ててアーニヤを見ろと言つた。ジノは何だかんだでロイが最も信頼している友の一人だ。友がそう言うからには、今この場でだけでも、その兄と妹という観念を捨て去る事が正解なのだろう。

(アーニヤは一人の女。僕は一人の男。か……)

アーニヤを見る。男として純粹に。

幼いながらに鍛えられた体、引き締まつて、スラリと長い脚が短いスカートから伸びている。

表情はいつも通り淡々としているが、瞳だけは不安そうに揺れている。

肌を故意的にさらけ出し、扇情的な感情を強制的に男の本能に叩きつける服装は誘惑感タップリだが、それと同時にお客様に奉仕するというウエイトレス独特の清楚感があり、それが誘惑感と上手く相殺されて、新たな極致を生み出している。

胸元にはひらがなで「あーにゃ」と書かれたプレート。それを強調するかのようになり、しかし控えめにそびえる胸元。そして、そのすぐ下にある細くもゴムのような強い弾力を

感じさせる腰のくびれ。

(そうだな。答えは一つしか無いのに、馬鹿だな僕は……)

正直に、ロイは感想を述べた。

「とても可愛いよアーニャ。良く似合ってる」

○

(驚いたな。アーニャがあんな顔で笑うなんて)

コスプレ喫茶の入口。そのドアに身を隠しながら中の様子を覗いていたスザクは、教室の中の様子に驚くと同時にクスリと笑った。

(相変わらずだなロイは……さて)

スザクはすぐに表情を笑顔から険しいものに戻し、教室の中にいる同僚達を改めて冷めた視線で見つめた。

(特に問題は無いみたいだな……)

同僚三人が来ていると機情から連絡を受けて、急いで飛んできたスザクはそう判断した。

この学園は、*「彼」*にとって思い出深い場所であり、もしかしたら何かしらの変化やアクションが起きるかもしれない、と思ったが……どうやら杞憂だったようだ。もちろん、だからと言って油断はしないが。

“彼”の存在は機情にも秘密にされているから、ジノ達の正体が生徒にバレて騒ぎになった時の保安のため、という名目でヴィレッツタ隊長に三人の監視を頼んである。何か怪しい素振りがあれば連絡が来るはずだった。

なんなら後で自分が地下の機情に出向いて何か不審な所は無かったか映像を調べたり、ジノ達に聞けばいい。

どちらにしろ、自分一人だけで同時に二人を、というのは無理がある。ならば今回、自分は今もう一人の監視に集中した方が良さだろう。

もつとも、本当なら“アイツ”のいるこの学園内に“彼”はいて欲しく無いというのがスザクの本心だが。だからと言って、来てしまった三人を帰らせる理由も見つからないので、まあ、これは仕方が無い。

スザクは同僚達に何も告げず、ドアからゆっくりと離れて、来た道に戻ろうとした。すると、

『きやあー!』

「うわっ」

ちようどこちらに歩いてきていた誰かとぶつかつた。スザクはその衝撃によるめいただけだったが、相手は地面に転んでジタバタ、と陸に打ち揚げられた魚のように藻掻いていた。

ラッコの着ぐるみだった。どうやら、自力では立てないらしい。

「すみません。大丈夫ですか!」

スザクは急いで駆け寄る。すると、背後から、

「何やってるんだスザク?」

と声がかかった。ジノだった。どうやら騒ぎを聞きつけてやってきたらしい。その隣にはロイト、そのロイトの腕に細い腕を絡ませたアーニヤがいた。

「三人とも。とりあえず今は手伝ってくれ」

「よしきた」

「分かった」

スザクが頼むと、ロイトとジノ——というか、改めてみると二人とも凄い格好——が、着ぐるみの両側に立ち。『せーの!』という掛け声と共に三人で助け起こした。

着ぐるみは制動を取り戻し、なんとか立つ事ができた。

「大丈夫ですか?」

ラッコについた汚れを手で払いながらスザクが心配して訊く。

「!!」

着ぐるみは、なぜかスザクを見て全体をビクツと震わせた。

「すみませんでした。どこか怪我は?」

スザクが更に聞くと、ラッコは大きな頭をブンブンと横に振った後、助け起こしてくれたお礼なのか頭を何度か下げて、そのままドタドタと廊下を走り去っていった。

「……何だあれ？」

ジノが呟く。それに「さあ？」と答えてスザクは改めて三人に向き直った。

「来てたんだ。三人とも」

スザクは、あくまで「たった今、三人を見つけたばかり」という態度を心がけた。

ジノは、走り去る着ぐるみを見ながら答えた。

「ああ、挨拶に行くのが遅れて悪かったなスザク。どうしてもロイがコスプレしたいって言うから」

ジノに指を向けられたロイが、「なっ！」と息を飲んだ。

「それは、君だろジノ！」

チャイナ服のロイが、ジノに詰め寄った。

「良く似合ってるよロイ」

スザクが誉めると、ロイは肩をガクツと落とした。

「それ以上は言わないでくれスザク……あつ、そうだ。良かったら僕達と一緒に回らないか？」

ロイの誘いを、スザクはやんわりと断った。

「ごめん。これから僕は、生徒会の手伝いをしなきゃいけないから」

「そうか、残念だ……」

ロイは、本当に残念そうにしていた。スザクの中で、小さな針が心をチクリと刺した気がした。

「ああ、本当にすまない」

「いや、気にしないでくれ」

少しがっかりした様子のロイに、ジノがもたれかかった。

「まあ仕方ないさロイ。このお祭りはスザクが主役なんだし、やることも多いだろうさ」

「そうだね」

「ごめん。せめて君たちも楽しんでいってくれ。帰りは一緒に帰ろう」

そしてスザクは、今度はアーニヤに向き直った。

「アーニヤ。その格好良く似合ってるよ」

「ありがとう。スザク」

「じゃあ、僕はこれで」

喜ぶ少女に微笑みを向けた後、スザクはきびすを返した。

「よっしやあ、じゃあ次は昼飯を食べに行くか」

「さつき、激辛カレー完食無料の屋台を見た」

「激辛？ 無料？ 面白そうだな、よし、じゃあそうしよう！」

「私はしないけど」

「いや、そんな奇をてらうようなものにしなくても、普通のを、つて聞いてないね君
たちは……」

背後から同僚達の談笑が聞こえてくる中、スザクだけがすでに表情から笑みを消して
いた。

②巻 9話『歓迎会 C』

アッシュフォード学園、その校庭。

「びびび、びびつたあああ……」

精巧に造られたラッコの着ぐるみの中で、紅月カレンは先ほどの出来事に心揺さぶられていた。

「あく、もう。遭遇することは予想してたけど……」

このアッシュフォード学園に潜入すると決めた以上、今回のイベントの主役であり、アッシュフォード学園に復学しているスザクと遭遇する可能性はもちろん考えていた。

しかし、それはせいぜい遠目から眺めるとかそれぐらいで、まさかぶつかって、こけさせられて、更には助け起こされて「大丈夫ですか？」なんて声をかけられるとは微塵も思わなかった。

「私だってバレてないわよね……」

心配して、カレンは今まで逃げてきた道を振り返る。

何人かの学生は物珍しそうにこちらを眺めているが、それらはあくまでレジスタンス紅月カレンではなく、彼女を包んでいるラッコの着ぐるみへの視線であり、監視や敵意

のそれとは違っていた。

カレンは、昔から体術や格闘技をやりこんでいるので、そういう視線の判別は何となくつくし、例え追跡や尾行をされていても、よほど技量の差が無い限りは、それに気付くことができる。尾行者が同じ達人のスザクでもだ。

「まあでも。よくよく考えればスザクと顔を合わせられたのはある意味幸運だったかな」

それは過信ではない。

現在、カレンは下着に近い格好をしている。着ぐるみに包まれた悩ましげな肢体には、よく見ると目立たないまでも数多くの傷跡があつた。

それは、彼女が“彼”を助けると心に決めた時からこの一年間積み重ねてきた修行という名の苦行の証だった。その代わり、彼女は女ながらに星刻に『大した奴だ』と認められるまでの実力を持つに至った。

しかし、それでもスザクと生身で殺し合いをしたとしても、素手同士なら今も百パーセント敵わないだろう。

でも、こちらにナイフ一本でもあれば……。

「勝率は五分つて所かしら」

カレンはその事実を顔を合わせた事で実感でき、それこそ魔女のように影のある笑み

を浮かべた。

これは一年前、銃と持っていてもスザクには敵わない、と感じていた頃に比べたら大きな進歩だった。

体に刻まれた傷。

確かに、女性であるカレンにとって体に傷が付くのは耐え難い事ではあった。しかし、カレンは「彼」のために、とうに女を捨てた。

「彼」を必ず助け出す。それは自分の体以上に優先される事柄だった。日本解放もそうである。

いや、カレンが修行を重ねてきた理由はもう一つあった。その目的は日本解放やライ救出に遠く及ばないものだが、しかし、確実に果たしたいものだった。

スザクを殺す。

あの男は生きていては駄目だ。それがカレンがこの一年で出した答えの一つだった。スザクが生きている限り、日本解放においても、ライ救出においても、いや、両方果たした後でも必ず障害になる。

なによりアイツは、彼を——ライを撃った。

許せるものではない。絶対に、絶対にだ。思い出しただけでも、殺意が膨張して爆発しそうだ。もはや、スザクとは手を取り合うどころか、同じ向きで歩く事さえ不可能だ。

彼は、ライはスザクと同じ向きに向かつて歩き出そうとした途端——行政特区に前向きな考えを持ち始めた途端、カレンの傍から消えた。

繰り返さない、そんな事は繰り返させない。そのためにも、その原因は抹殺するしかない。

(スザク。今日は見逃すけど、次に会う時は……つて、ん?)

と、ここでカレンは、今回スザクを見逃す事になった原因を見つけた。

学園の隅の方で歩く一人の少女。

「あ、あの女ああ?!」

どこで手に入れたのかアツシユフオード学園の制服を着ている。変な耳飾り、綺麗な緑の長髪、物憂げで、苦勞など知らなさそうなお人形さんみたいな顔。とびきりの美少女だが、中身はたちが悪いただの不良魔女。

「C. C. ううう!!」

カレンは着ぐるみを動かしてドタドタとC. C. の方向に向かつて走る。

それは、着ぐるみにしては相当なスピードだった。どれぐらい速いかというと、周りの人間が驚いて「お〜」と感嘆して拍手を送るぐらいである。

しかし、当のC. C. はそんなカレンに気付いていないようで、何食わぬ顔で校舎の角を曲がり、カレンの視界から消えた。

「逃がすかあ!」

カレンもすぐにその角を曲がった。だが、

「……………あれ?」

そこに魔女はいなかった。

(ああ、もう! 一体、どこに消えたのよ!?)

カレンは睨みつけるように周囲を見渡す。

その時、

「あつ」

カレンの視界に一つの出店が入り。彼女はC. C. の搜索も忘れて気が抜けたように立ち尽くしてしまった。

○

「死ぬかと思った……………」

激辛カレーの感触がまだ舌に残っている。

途中でやめればいいものを、アーニヤの声援と、ジノの「早食い勝負!」などという挑発に乗って完食したのがいけなかった。しかも、結果としてジノには完敗した。

「友は、舌が死んでいる……………」

そう呟く言葉にも違和感がある。舌が回らず発音が心もとない。元に戻るには、しば

らく時間が必要だろう。

ロイ・キャンベルは一階のトイレで用を足しながらため息を付いた。

「酷い目にあつたな。いや、現在進行形で酷い目にあつてるか……」

視線を下げてみる。見えるのはもちろんチャイナ服。

結局、服は返してもらえなかった。

返してください、と頼んでも、女子学生が返してくれないし、なによりジノが「返さなくていいよ。俺達このまま回るから」と言つて取り合つてくれなかった。なによりアーニヤからも「このまま回ろう」と頼まれてしまったため、ロイはしぶしぶ、まだこの格好をしていた。

「何か……僕つて女性に弱い気がするな……」

と、ロイはそんな事を思つたりした。

女子生徒にこのチャイナ服を着てください！ と頼まれた時も断れなかったし、アーニヤのこのまま回ろうという頼みも断れなかった。

ノネットから模擬戦を頼まれたら絶対に付き合つてるし、モニカからお買い物に付き合つてと言われたら付いていつている。それに、ローマイヤから、一緒に図書館で勉強しませんか？ という誘いも断つた記憶が無い。

セシルの夜食は（逃げる暇が無くて）差し出されたら食べるし、カリーヌのお誘いも

ほとんど断らない。ナナリーの頼みも公私問わず大体引き受けてるし、ドロテアの模擬戦だつてそうだ。

(……ちよつと待て)

と、ここである恐ろしい考えに至る。

(僕つて、もしかして本能的に女性の尻に敷かれているタイプ?)

女性の頼みを断れない。それは、女性に逆らえないという意味とイコールではないだろうか? しかし、それはあまりに男として情け無い。

(ば、馬鹿な。違う、そんなわけ無いじゃないか)

ロイは即座にその考えを否定した。

旧来より、騎士とは己のプライドより、女性を大切にするものである。女性を敬うこと。それが騎士の本懐。だから自分は騎士として女性の頼みをあまり断らないのだ。決して、女性に対して自分の意志が弱いわけではない。多分……。

と、ロイはかなり歪曲した騎士道を心の支えとして、何とか心身の体面をギリギリで死守した。

「さあ、スッキリしたし。こんな馬鹿みたいな考えも同じようにスッキリ忘れて、この祭りを楽しむでしょう」

暗い思考を無理にでも振り払うように明るく言つて、ロイは場を離れる。チャイナ服

を着て歩き回る事に対する恥ずかしさとかは、感覚が麻痺したのか、あまり感じなくなっていた。激痛を伴う生傷もやがて麻痺して痛みがなくなるのと同じ原理かもしれない。

「ん？ あれは……」

ロイがふと窓の外に視線を移すと、トイレを隠すように茂っている木々の隙間から見慣れた着ぐるみが見えた。

つい先程、スザクがぶつかって倒してしまった、ラッコの着ぐるみだった。

○

「懐かしいな……」

屋台のクレープ屋を見つめながら、カレンは少しだけ昔の事を思い出していた。

一年前。学園の文化祭での出来事。二人で待ち合わせして、この学園の色々な場所を回った。

クレープ屋もその一つだった……。

もちろん、このクレープ屋を営業しているのはあの時と違う学生だし、よく見れば営業している場所も全然違う。しかし、久しぶりにこの思い出深い学園に足を踏み入れたというのもあって、カレンはどこか感傷的な気分になりやすくなっていた。

記憶が溢れてくる。

一年前。

自分がクレープ屋を見ていたら。「僕が奢る！」と言ってきかなかった彼。

そもそもお金もあまり持ってなくせに、珍しく良い顔をしようとした彼。

そして、自分が豪快にクレープを頬張っていて、その仕草を「地が出るよ」と注意したくせに、直して大人しく食べている自分に、

——僕はやっぱり、大人しく食べてるカレンより、ガツガツ元気良く食べてるカレンの方が好きかも。

「バカよねホント。女の子に言う台詞じゃないわ……」

カレンは懐かしそうに微笑んだ後、

「……」

俯いた。

彼の笑顔。

忘れられない、忘れようとも思わない、忘れたくない。なぜなら、その笑顔はもう一年以上以上、記憶の中で見えていない。

もう、会えないのだろうか？

そんな考えが、何度頭をよぎっただろう。

気が付くと、カレンの目頭はじんわりと熱くなっていた。

「あつ、ちよつと、やだ……」

ここでカレンは、感傷的になっている事を改めて自覚した。

それは仕方が無いのかもしれない。

懐かしい空気、懐かしい場所、懐かしいざわめき、懐かしい光景、かつてライと共有したものが、ここには悲しいほど多く溢れている。

「うう、湿っぽいのは止めよう……」

カレンは心の汗を指で拭う。その時、

「ラッコさん」

「！」

誰かから呼びかけられて、カレンは体を震わす。そして構えるように素早く振り返った。

そこには、

「どうも。こんにちは」

男がいた。

銀のツインテール、顔が見えないぐらいの分厚いぐるぐる眼鏡、筋肉の凹凸が良く分かるピチピチのチャイナ服。

（オ、オカマ？ それとも変態？）

カレンはあまりの光景に数歩下がる。その行動に気付いて、チャイナ服の変態は困った顔で微笑んだ。

「あ、警戒しないで下さい。怪しいものじゃないです」

（いや！ 充分怪しいし！）

どこか舌足らずに話す男に、カレンは心の中で突っ込みを入れる。

実を言えば。カレンは不幸にも変態とか怪しい男とか、そういうのには数多く出会ってきた。

カレン・シュタットフェルトとしてこの学園に通っていた時期。彼女はモテた。

見た目は文句無しの美少女、清楚なお嬢様、そして病気がちで内気となると、どうやら、そういう趣向の方々の琴線に触れるらしく、下校の途中で変な人に声を掛けられるというのも、一度や二度ではなかった。

もつとも、カレンは実際は内気どころか中身は肝っ玉母ちゃんもびつくりの強気な少女なので、そのたんびに、変態の骸を死屍累々という言葉が相応しいぐらいに積み上げていったものだ。

だが、カレンとて女である以上、多少ながらも恐怖を感じていた。

そして今、目の前に立つ男は、そいつらと似たような格好をしていたので、思わず後ずさりしてしまうのは、濃い経験をしてきたカレンにとっては仕方が無い防衛反応で

あった。

カレンがそうやって警戒しているとは気付いていない様子で、男は至極普通に話しかけてくる。

「実はさっきあなたがぶつかつたのは私の友人なんですよ。大丈夫でしたか？ どこかお怪我は？」

（友人？ スザクの？）

その言葉が、カレンの警戒を少し解いた。

この女装した男は、先ほどの件で、心配して話しかけてきただけのようだ。

そもそも、カレンは着ぐるみを着ているわけであり、普通こんな着ぐるみの中に入っているのは男だと思うだろう。つまり、目の前の男は本当の変態だったとしても、今の言葉だけは信頼に値する。

カレンは喋るわけにはいかなかったので、着ぐるみにガッツポーズを取らせた。『私は大丈夫です』というアピールをしたのだ。

伝わたらしく、女装の男は安堵した様子で微笑んだ。

「良かった。大丈夫なんですネ。安心しました」

そして、男は視線を横に逸らし、どこかを見つめた。

「クレープ。好きなんですか？」

その言葉で、カレンは男がクレープ屋を眺めたのだと理解した。この着ぐるみは視界が悪く、目の前にいる男の動作もよく窺えないのだ。

男は、カレンの答えを待たなかった。

「奢りますよ」

驚いているカレンを尻目に、男はチャイナ服のスカートを扇情的になびかせながらクレープ屋に歩いていく。そして店員の学生に声をかけた。

「すみません。クレープ二つ」

「可愛いおじょうちゃんだな、よし、少しサービスするよ」

「はは、どうも……」

という会話を売り子の学生と交わし。男はクレープを二つ手にとって、こちらに戻ってきた。

そして、一つをカレンに差し出した。

「どうぞ」

（え……？）

カレンは男から差し出されたクレープを見つめ、固まってしまった。

男は首を傾げた。

「クレープ屋。ずっと眺めてましたよね？」

カレンは答えない。ただ呆然とクレープと男の顔を交互に見るだけ。

「これは、友人のお詫びの代わりです。どうか受け取ってください」

男は更にグツとクレープを差し出してきた。

カレンの中で男がクレープを差し出す姿と……彼の姿が被った。

——はい、カレン。クレープ。

当然の事だが。目の前の男はライではない。

こんな全体的に野暮ったくないし、女装したとしてももう少し可愛いと思う。つまり全然似ていないのだ。

でも……。

カレンが何もアクションを起こさないでいると、男はあれ？ と首を傾げた。

「あの、もしかしてクレープ嫌いでした？ ラッコさんがずっとクレープ屋を見てたから、僕はてつきり——」

牛乳瓶底メガネをかけ直しながら、少し困った表情で話す男。

口調は似ていない。仕草も似ていない。何も似ていない。銀髪ぐらいしか同じじゃない。でも、

——カレン。

男がクレープを差し出す姿とライがクレープを差し出す姿が確かに被った。

同時に、カレンの中から言い様の無い感情が湧き上がった。その感情はあつという間に許容量を越えて溢れ出した。

(ライ)

今まで傍にいなかった男を、不意打ちに近い形で感じさせられた事によつて、心の中で堰きとめられていたものがあつさりと決壊した。

(何でいけないの?)

分かりきつている答え。それでもカレンはそう問いかけずにはいられなかった。

(何で私の傍にいないの?)

自分が弱かったから、

(何で私、こんな見ず知らずの男の前でこんな気持ちにならなきゃいけないの?)

自分が弱かったから守れなかった。

(傍にいてよ……嫌だよ。私、あなた以外の男の前で泣くなんて嫌だよ……)

不条理だと分かっている。それでも、カレンは傍に本物のライがいてほしかった。ずっと一緒にいてほしかった。

この一年。後悔ばかりが先に立った。

なぜ、一年前。彼は自分の事が一番大切だといってくれたのに、自分はそんな彼の気持ちに怯えを抱いたのか。

なぜ、愛されたいと思つていたのに、愛し合う関係になる事に恐怖を抱いたのか。なぜ、日本解放を言い訳に、問題を先送りにしたのか。

——正直に言えばねカレン。僕は日本解放より、それより、平和な世界で君と過ごせるなら、それで——

そう言われた時、なぜ、自分は「日本解放をおろそかにしないで！」と怒つたのか。分かつていたのに。ライが日本の事を疎かにしていない事なんて自分が一番よく分かっていたのに。

後悔から始まる寂しさは止められない。

気付けば、今度こそ心の汗などと言ひ訳のしようのない本物の涙がカレンの頬を伝つた。幾筋も、幾筋もだ……。

『お〜いロイ。何してるんだ〜?』

カレンの思考を遮るように明朗な声が響いた。潤んだ瞳で声のする方に顔を向けると、そこには二階に並ぶ窓の一つから身を乗り出している男女がいた。

一人は金髪で長身、カラフルなドレスに身を包んだ男だ。そしてもう一人は、ピンクの髪を布の髪留めで結つた、ウエイトレスの格好をした少女だった。

カレンはその男女に見覚えがある気がした。しかし、どこで見たかは思い出せない。

「あ、ジノ。それにアーニャ」

(1)

にこやかに言う目の前のチャイナ服の男の言葉で、カレンの頭の中の欠けたピースがカチリとはまった。

(まさかジノ・ヴァインベルグとアーニャ・アールストレイム！)

カレンは歴戦の勇士。暗い感情などその事実で一気に吹っ飛んだ。

ナイトオブスリーとナイトオブシックス。まごうことなきカレンの敵がそこにはいた。

一瞬見間違いかとも思ったが、やがて確信に変わる。前に一度見た写真とそっくりだった。

それに、今思い起こせば、あの二人は先ほど自分がスザクとぶつかって、起き上がれなくてもがいていた自分を助け起こす時、そのスザクと親しげに会話していた。

ナイトオブブラウズであるスザクと同じ目線で会話できる人物は、相当限られる。

(待って。となると、今、私の目の前にいる、あのスザクと同じ目線で会話していた男は……)

カレンはゆっくりと目の前のチャイナ服の男に視線を戻す。相変わらずブラウズの二人に微笑みを送っているこの男。

確か、この男はあの金髪の男にロイ、と呼ばれていた。

(……そうか、こいつロイ・キャンベルか!?)

カレンは一步下がった。

ナイトオブゼロ。ロイ・キャンベル。

違う。ラウンズの中でも特に目立たない存在だから、この男に關しては完全に失念していた。

(そうか、こいつにライの面影を見たのは、銀髪他にKMF乗りの体つきをしていたからか……)

KMFに乗っている者には操縦者独特の体が出来上がる。長時間の訓練をこなすラウンズなら尚更だろう。

そのKMFを操縦するという私生活からかけ離れた行動を何百時間と繰り返す事によつて、体つきがその行動に順応するために、通常なら付かない体の部位に筋肉を形成するのだ。それは、肩の周りであつたり、手首の辺りだったりするのだが……。

確かにこの男の体つきは見れば見るほどKMFのパイロットだつたライとそっくりだつた。ピチピチの服を着ているからそれが尚更良うかがえる。

それでも、完全にそっくりというわけではない。どちらかと言えば、このロイという男の方がライより筋肉の付きが一回り大きい。しかし、その体の特徴は本当に良く似ていた。

『おつ、なんだ。そこにいるのはさつききのラッコさんじゃないか。良かったなアーニヤ。一緒に写真撮りたかつたんだろ?』

『ロイが捕まえててくれてラッキー』

『つうわけで、悪いけどラッコさん。ちよつと一緒に写真とつてくれないかな? 今からそつち行くから』

男——ナイトオブスリー。ジノ・ヴァインベルグは叫ぶように言うと、窓枠に手を置いて身をさらに乗り出そうとした。どうやら二階から飛び降りる気らしい。

(マズイ! あいつこつちに来る!?)

カレンはその場から、すぐに逃げ出そうとした。

でも、いきなり走り出したら怪しまれないだろうか? と足を止めた。しかし、あの金髪の男、どこと無く好奇心旺盛な子供のような雰囲気がある。もしそれこそ子供の悪戯みたいに着ぐるみの頭を取られたりしたら万事休すではないか。

エリアーにわざわざやって来るラウンズの事だから、黒の騎士団のエースである自分の顔もおそらく知っているだろう。

(ここに留まり続けるのは危険すぎる。ああ、でも、やっぱり、いきなり逃げるのは怪しいし……)

と、こんな事を考えてる間にも、ナイトオブスリーは窓枠に手をかけて飛び降りよう

と
し
て
い
る
。
迷
っ
て
、
結
局
カ
レ
ン
は
、

②巻10話『歓迎会 D』

『私、忙しいのでキュイ』

「へ？」

目の前の着ぐるみが予想外の行動を起こしたため、ロイは思わずうわずった声をあげた。

『クレープはありがたいいただきますキュイ！ それじゃ！』

と、クレープを強引に受け取り、ラッコはそのまま土煙が上がるような勢いで走り去ってしまった。

残されたロイは、

「……キュイ？」

疑問符を浮かべた。

おそらくキュイ、というのはラッコの鳴き声のつもりなのだろう。

ラッコの去っていった方を見ながら、ロイが何もできないでいると、同じ様子で窓枠に手をかけながら成り行きを見守っていたジノは、

『あのラッコ、走るのが趣味なのか？』

『さあ？』

隣のアーニヤが首をかしげた。ジノは、二階からロイを見下ろす。

『なあ、ロイ。お前から何してたんだ？』

「え、いや。ラッコさんがクレープを物欲しそうに眺めてたから、さっきのスザクのお詫
びも兼ねて奢ったんだ」

『ふ〜ん』

ジノが無機質に答える。そして彼は、視線をロイの手元に向けた。

『ところでロイ、それは何を持ってるんだ？』

「ん？ ああ、これ？ だからクレープだよ」

『おいしそう』

「アーニヤも食べる？ チョコバナナでいい？」

『イチゴクリームがいい』

「ジノは？」

『俺は奢ってくれるならクレープより、ブリタニアロールの方がいいな』

「はいはい、了解」

再度クレープ屋に行こうと踵を返す。しかし、ここでロイはとあることに気が付いた。

ロイは、いまだに同じ窓からこちらを見下ろしている同僚の二人を見上げ、

「……つてジノ。そこつて男子トイレだよね」

先程、ロイが用を足したトイレは、ジノ達がいる場所の真下。ならば、建物の構造上その真上——ジノ達がいる二階もまたトイレのはずだった。

「? ああ、そうだよ。俺がここで用を足してる時に、お前を見つけたんだ」

それが何? と言った感じでジノが聞き返してくる。どうやら彼は、この摩訶不思議に気付いていないらしい。

「……なんでアーニヤがそこにいるんだ」

「へ?」

ジノは素つ頓狂な声を上げ、ゆっくりと隣の——当たり前だが女の子の——アーニヤを見る。

アーニヤは、なにやら淡々と携帯を弄っていた。

「……つてそうだよ! なんてお前がここにいるんだアーニヤ!」

「?」

アーニヤは、騒ぐ同僚を心の底から不思議がっている様子だった。

○

コスプレ衣装のレンタル時間が終わって、ようやく元の服を返してもらったロイは、

「いいかいアーニヤ！」

と、しつこいようだが本日何度目かになる兄貴分としての自覚と責任を抱きながら、強い口調で言った。

「これからは勝手に男子トイレに入っちゃ駄目だ！」

レンタル時間を延長して、いまだにウエイトレスの格好をしているアーニヤは、小動物の食事を思わせるしぐさでクレープを頬張りながら首をかしげた。

「なぜ？」

「……………はっ？」

アーニヤは、口に含んだクレープをゆっくりと咀嚼した後、

「なぜ私が男子トイレに入っちゃいけないの？ 男子トイレは男子が用を足す所であっても、女子が入っていけないという道理はない」

言い切った。

(コノコ、ホンキデシヨウカ、カミサマ……)

ロイは、天を仰いだ。

当然の事ながら、この問題は道理はなくても道徳はある。しかし、そんなものをどう説明すればいいのだろうか。

「いや、あのねアーニヤ……」

「それを言うなら」

アーニヤは、ロイの言葉を遮ると、振り返って運動場の隅にあるトイレを視線で示した。

女子トイレの入口の前には長蛇の列ができていた。こういうイベントでは良くあることだが、女子トイレというのはよく混む。

しかし、それだけなら、遊園地とかでもよく見るただの日常的な風景だが、その女子トイレの隣にある男子トイレからは、今まさに、中年の「おばさん」が満たされた顔で手をハンカチで拭きながら出てきた。

ロイは愕然とし、ジノはそれを見てプツと噴き出した。

「あく確かに。それならあのおばさんも注意しなきゃいけなくなるな」

「あれはその、何ていうか、少々お年を召した方だけが行える特別な行動というか……。いや、そもそも、あれは正しい事ではなくて……」

と、ロイは頑張って理論を説明しようとするが、だんだんとゴニョゴニョとした言葉になり、最終的には、

「……………ジノ」

ロイは助けを求めるように、同じく服装を元に戻したジノを見た。ジノは肩をすくめて、

「頑張りたまえキャンベル卿。私ではなくて兄貴分である君の仕事だと思ふよ」と押し殺した笑みを浮かべただけだった。

同僚が役に立たない以上、自分がやるしかない。

観念して、ロイは言葉を選びながらアーニヤに説明した。

「……じゃあ、ちよつと下品な話になるけど。アーニヤが用を足している時に僕が女子トイレに入っていたら君はどう思う?」

「ロイが?」

アーニヤはそれを聞いて眉をひそめ、顔を俯かせて考え込んだ。

そのまましばらく悩み続けた後、おそらく手に持ったクレープが原因と思われる、生クリームを付けた小さな口から出た答えが、

「分からない。だって、ロイがそんな事をする所を想像できない」

「成程、一理あるね」

ロイは頷き、さらに言った。

「じゃあ、仮定を変えよう。もし君が用を足している時にジノが女子トイレに入っていたら君はどう思う?」

「ジノが……?」

アーニヤは、心底嫌そうな顔をして即答した。

「どう思う以前に “トリスタン” の角に括り付けて、シュタルケハドロンで吹っ飛ばす」
その返答に、ロイは学生から正解を聞いた教師のように満足げに頷いた。

「だろう。だから次からはやつちや駄目だよアーニヤ。君のやった事は人に多大な不快感と嫌悪を与えかねない行為なんだ」

「……分かった。良く理解した。次から気をつける」

「分かってくれてうれしいよアーニヤ。ほら、口にクリームが付いてる」

「ありがとう、ロイ」

「落ち着いて食べればいいから」

アーニヤの口元を、ロイはハンカチを取り出して拭い。アーニヤも淡々ながらも頬を朱色に染めながらお礼を言う。

そんな仲むつまじい兄妹のような二人が、穏やかで和やかな空間を生み出す中。ジノだけが輝くような笑顔にくつきりと青筋を浮かべて、

「な あ、お前ら。実は私の事嫌いだろ？」

左腕に右手を添える決闘申し込み寸前の姿勢を取り、背後から暗い空気を醸し出していた。

ロイは何食わぬ顔でハンカチをしまい、それからゆったりと周囲を見渡した。

「とまあ、ジノいじめはこれぐらいにしておいて……ここにはもう何も無いね」

この付近に出店はなかった。あるのは校舎とその周りで生い茂る木々だけ。どうやら、いつの間にか学園の隅の方にまで来てしまったらしい。

「もどろろっ」

アーニヤの言葉に、ロイは頷く。

「そうだね。一般人があまりこういう場所に来て、学校側は迷惑だろうし」

ジノも「いじめ、駄目、絶対……」と呟いた後、少々ふて腐れた態度で同意した。

「……面白そうなもんはここにはなさそうだしな。つて、んっ？」

「どうしたのジノ？」

ロイが聞くと、ジノは前方を指差した。

「なあ、あれKMFじゃないか？」

ロイがその方向に顔を向けると……確かにあった。KMFだ。

三人は早足でそのKMFが置いてある場所まで移動した。

「これは……基本フレームのみだね。MR1か」

「そうだな。外装も外されてるし。コンパクトに折りたたまれてる」

ロイとジノは身を屈めながら、そのKMFをしげしげと眺めた。

「？ 何これ？」

その時、男二人から少し離れた場所でKMFを観察していたアーニヤが、何かを見つ

けて拾い上げる。

「ん？ どうした」

ロイとジノは、KMFを見るのを止めてアーニヤに近寄り、それを横から覗き込んだ。
「これは……計画書みたいだね」

さらに、ロイは言葉が続ける

「どうやらこのKMFを使つて、この計画書に印が付けてある場所までトマトを運ぶみたいだ。へえ、すごいな。巨大ピザを焼くんだね」

「校庭にあつたでつかいかまどはそのためのやつか。しかしトマト？ そんなのどこにもないぞ？」

ジノがあたりを見渡すと、アーニヤがそのジノの裾を引つ張つて言った。

「ここじゃない。多分ここ」

アーニヤが計画書の中にある地図に指を当てる。そこには“トマト置き場”と書かれていた。

「運ぶのはスザク」

「そうか。じゃあ、関係者じゃない僕たちはここから離れた方がいいだろうね。アーニヤ。その計画書を元あつた場所に戻しておいて」

「分かつた」

と、ロイの言葉に従ってアーニヤが再びその計画書を地面に置こうとすると、その横からひよいっと長い腕が伸びてきて、計画書をアーニヤから取り上げてしまった。

ジノだった。

「ジノ?」

「まあ、待てよ二人共。要はそのトマトをKMFで会場に届けばいいんだろ?」

ジノは計画書をもてあそびながら不敵に笑った。

○

スザクは驚いていた。

ユフィの羽ペンを銜えたアーサーを追いかけてきて、トマト置き場でシャーリーとルーシユと着ぐるみという不思議な組み合わせに出会ったと思つたら、なぜか自分が乗るはずだったKMFが現れて、トマトの入った大きなコンテナを力強い動作で抱えたからだ。

『これを会場まで運べばいいんだろ?』

KMFからのスピーカー越しに、聞き慣れた声が場に響いた。

「まさか……ジノ!?!」

そうスザクが言い終わらない内に、KMFのランドスピナーが砂煙を撒き散らし、唸りをあげた。

『はは、面白いな。庶民の学校は〜』

そこはナイトオブスリーの名を持つ一流の騎士。機体以上に重いトマトのコンテナを持つているにも関わらず軽快にKMFを操り、校舎を軽やかに曲がると、一目散にピザを焼く会場に向かっていった。

「ピザ女が！」

ルルーシユが副会長の責任感からなのか、慌てた様子でその後を追い、さらにシャリー、着ぐるみと続く。

スザクは、動き出せないでいた。

（一体何がどうなっている？）

「スザク！」

その時、ルルーシユ達が走っていったのとは逆の方角から声。私服に戻ったロイと、相変わらずウエイトレス姿のアーニヤが駆け足でやってきていた。

「ロイ、それにアーニヤ。これは一体……」

ロイは肩をゆらし、大きく一息つくくと歯噛みしながら告げた。

「すまない。ジノを止められなかった……」

「えっ、どういう……」

「悪ふざけだよ！ ジノの性質の悪い病気だ！」

その言葉に、スザクは「ああ、成程……」と納得した。

「まあ、KMFに乗っちゃった以上仕方が無いよ。それより僕はアーサーを——」

その時、スザクの隣にいたこの学園の会長。ミレイ・アツシユフオードは、こちらの肩を軽くたたいて言った。

「スザク君。あれ、アーサーじゃない？」

「へっ？」

スザクは反射的にミレイが指で示した方角を見る。そこにはジノのKMFに追いか
けられているアーサーがいた。もちろん羽ペンを銜えている。

「ああっ！ 本当だ!!」

スザクも慌てて駆け出した。

○

スザクまで走っていったのを見送って、ロイは深々とため息をついた。

「全く。ジノは本当に……」

どうしようもないやつである。

ロイとて、ジノと付き合い始めて一年になるが、いまだに彼の行動の不規則さは予想
もできない。

「あくあ。予定変えなきゃ」

その時、ロイの隣から静かに現れた女性がいた。残念そうに、でもどこか楽しそうなニコアンスを感じさせる口調でボヤク。

少しウエーブのかかった金髪、いたずら好きな猫を連想させる瞳、抜群に良いからだのスタイル。

「? あなたは……」

ロイが眼鏡を指でかけ直しながら聞くと、その女性はニコツと笑って答えた。

「私? 私はミレイ。この学校の生徒会長です」

それを聞いてロイは少し驚いた。妙に大人びた外見なので、若い教師辺りだと思っただけからだ。

（いや、さて。生徒会長という事は……）

ロイは背筋を伸ばした。

「となると、あなたはこの場の責任者ですね。今回は私の連れが大変迷惑な事をしてしまい、なんとお詫びすればよいのか……」

丁寧な頭を下げると、ミレイと名乗った女性は今度は上品にほほ笑んだ。

「あ、いえ、気になさらないでください。面白くなってきましたし」

「はっ、面白くっ?」

ロイが聞き返すと、ミレイはスカートの裾を広げて一礼した。

「では、私もそろそろ会場に向かわねばなりませんので失礼いたします。ごきげんよう。キャンベル卿」

貴族らしいそのしぐさは、ロイが一瞬頬見惚れてしまうほど優雅なものだった。

余談だが、そのミレイのしぐさに見とれているロイの隣で、アーニヤがムツとした表情を浮かべたのを、ロイは気付かなかつた。

「ご丁寧にごうも」

ロイがそれだけを何とか返答すると、ミレイはまたほほ笑んで、

「では……よっしゃ。待って待ってスザクにルルーシユ〜！」

ドレスのスカートを翻しながら大またで走り出した。

ロイがその変わり身の早さに小さく驚いていると、隣のアーニヤが不機嫌そうに訊いてきた。

「知り合い？」

「いや知らないよ。初めて会った人だ。何で？」

「ロイの事、キャンベル卿って言ってた」

「ああ、そういえば」

確かにそうだった。ロイはこの学園で誰にも一度も名乗ってないのに、ミレイは「ごきげんよう。キャンベル卿」と言った。

ロイは首をかしげる。

「あの人、なんで僕の事知ってたんだろう。どこかで会ったっけ？」

ミレイという名前を、脳の中で検索にかけた。

該当。一件。

ロイは、ポンと手をたたいた。

「思い出した。あの人、アツシユフオード家のご令嬢だ」

隣でクレープを頼張るアーニヤもロイの言葉を聞いて「ああ、そういえば」とうなずく。

アツシユフオード家のご令嬢といえば、ロイ・キャンベル専用KMF “クラブ” の開発者であるロイドの婚約者である。彼女が夫になるかもしれない人の担当の騎士ぐらい、知っていても不思議ではない。

「しまったな。ロイドさんに世話になってる手前、もつとちゃんとあいさつしておけばよかった……」

ロイドさんの奥方になるのなら、自分にとつてもあのミレイさんとは一生の付き合いになるかもしれない。人との関係というのは第一印象が大切である。

「あの人は婚約済み……」

その時、後悔するロイの隣で、アーニヤが何かを考え込み……そして、

「ノープロブレム」と頷き、食べかけのクレープをパクつと頬張った。

ちなみに一体何が「問題無し」なのかは、彼女自身にしか分からない。

「ん？ 何か言ったアーニヤ？」

「何でもない。それよりロイ。スザク達、走っていったけど、面白い事になる？」

「面白い、ねえ……」

ロイは面白いという表現はえらく不謹慎のような気がしたが、もうここまできたら別段怒る気も沸かなかった、

「ああ、多分そうなる……」

ロイは力無く言った。

間違い無くジノの悪ふざけによって、アーニヤの言う意味での面白い事態にはなるだろう。

ロイにとっては、ただ頭が痛いだけの話だが……。

「じゃあ記録してくる」

アーニヤはクレープの最後の一口を頬張って、包み紙をポケットにしまうと、身を屈め、そして次の瞬間、優れた身体能力を生かしてスザク達を追いかけた。

あつと言う間に離れていくウエイトレス——アーニヤ・アールストレイム。それを見送って、ロイはまた苦笑した。

「好きだな、アーニヤも……」

面白いものがあると分かれば、いつも、

『アーニヤ・アールストレイム……発艦！』

と言わんばかりの勢いで走っていく。その様子は本当に、アヴァロンから発進するランスロットのようだ。

ロイは自分の想像のおかしさに吹き出しながら、ゆっくり歩いて皆の後を追い掛けようとした。

その時、

「！」

ロイはとんでもない事に気付き、驚きおののいた。

だんだんと離れていくアーニヤ。もちろん彼女はまだ、あのウエイトレスの格好である。

あの服のスカートは短い。それこそいかかわしいお店の店員並に。

そして、アーニヤの体力は一般のそれを大きく上回る。イコール。アーニヤは足が速い。イコール、足が速いと受ける風の影響が大きい。イコール、その風の影響でスカートがめくれ、後ろから見ると思いつきり白いのが……。

「ちよっ!?! アーニヤ待て！ それを着て走るな！」

ロイは顔を真っ赤にして駆け出した。しかし、アーニヤは小柄なものもあつて素早い。すぐに追いつけない。

「アーニヤ！ 止まれ！」

何度か校舎の角を曲がり、途中。汗を垂らしながらバテている学生の横を通りすぎる。しかし、二人の距離は縮まらない。

「アーニヤあああ！」

呼びかけても、絶叫しても、アーニヤは止まらない。どうやら、走るのに夢中で聞こえてないらしい。

（ああ、くそ！）

ロイは心の中で毒付いて、走る速度を速めた。

どうやら、あのオテンバを止めるためには、じかに追いつくしかないらしい。

『中の人。違いまゝす。それでも僕は！ 焼きたいピザがあるんだああ！ なんちやって♪』

その時、またまたジノの悪ふざけの音がスピーカー越しに学園に響いた。

②巻 11話『歓迎会 E』

KMFから降りて合流してきたジノを小突き、ミレイの所まで引つ張り、詫びを入れさせたころには、もう日は沈みかけていた。

現在、ロイはアツシユフオード学園のクラブハウスに足を踏み入れている。

隣には私服に戻ったアーニヤもいた。

いまは、二人だけだった。

ミレイに詫びを入れた後、ジノはなぜか彼女と意気投合して校庭で一緒にダンスを踊っていた。

スザクは、ピザの一騒動の後、かまどの近くでアーサーを抱えていたのは見かけたが、すぐにどこかに消えてしまっていた。携帯にかけてもつながらない。

ちなみに、ロイとアーニヤも、ミレイにダンスに誘われたのだがアーニヤが乗り気ではなかったたので、ロイも「柄ではない」と断り、「それなら。ウチの学校を見てください」というミレイ勧めもあつて、通常は足を踏み入れない場所の見学をする事にした。

二人は、人気のない校舎を回り、裏庭を回り、雑木林を探索し、

「へえ、ここもクラブハウスか」

と、眩きながらロイたちはクラブハウスの廊下を歩いていった。

外からは、校庭で行われているダンスに合わせたゆったりとした音楽が聞こえてくる。

アーニヤは、携帯で写真を撮りながら言った。

「ここはとても静か。別館と違って……」

ロイは、苦い笑みで応じた。

「何度も死にかけたね……」

ここに来る前に立ち寄ったクラブハウスの別館は、部屋に入った瞬間にサイレンが鳴り、落とし穴が開き、いきなり水撃銃が飛び出してきたりと、なぜか悪意のこもったトラップが満載で、何度も殺されかけた。

しかし、あとから聞いたのだが、それでも昔にとある生徒会役員が別館の大掃除をしてからだいぶマシになったらしく、ロイ達が遭遇したトラップはその掃除の取りこぼしだったらしい。

あの量で取りこぼしだと言うのなら、その掃除をしたという生徒会役員は無事にすまなかったのではないだろうか？

その生徒会役員が今も五体満足でどこかで元気に暮らしている事を祈りつつ、ロイは廊下を進んだ。

「それにしても、クラブハウスっていう割には何のクラブも入っていないんだな」

先ほど回ってきた別館は、トラップという異常なものを除けば、建物内はさまざまなクラブの私物にあふれていた。その場所で行われている、または行われていた活動内容が良くうかがえた。

対して、ここはほとんど空き部屋であり、しかも私物がほとんど見当たらない。これではクラブハウスというよりは一風変わったホテルや空室の多い寮と言った方がしっくりとくる。

「一階は大きなホールだった」

「そうだね。もしかしたら、共同の多目的ルームならぬ多目的施設なのかも。寝泊りとかできるのはオマケみたいな感じで」

「ホールでは飲んで騒いでドンちゃん騒ぎ。そして酔っ払った人たちはベッドのある空き部屋に放り込む。そんな感じ?」

「あくアーニャ。一応ここは未成年者が通う神聖な学校だから」

どことなく眠たげにも見える瞳を、アーニャは、携帯からロイに移した。

「それをロイが言う? 今朝、ロイとジノは全然起きてこないで」

今日の朝、ロイとジノは部屋で酔いつぶれて床で重なるようにして寝ていた。アーニャと、このスザク歓迎会に遊びに行く約束していたのにも関わらず。

あの時シミュレーションルームで見た光景——シミュレーション上とはいえ、自分の愛機がアーニヤに爆散し続けられる光景——が、ロイの中で思い起こされる。

「……」

冷や汗を流し、ロイは口をつぐんだ。

アーニヤは、さらに言った。

「謝罪」

「はい、申し訳ありませんでした……」

ロイは歩きながら素直に頭を下げた。しかし、アーニヤは納得がいかないらしく、小さく唇をとがらせた。

「謝れば済むと思ってる」

「いえ、思ってません。以後気をつけます……」

「前から言いたかった。ジノもロイもお酒飲みすぎ。体に良くない」

「ごもつともです」

「本当に分かっている?」

「イエス・マイ・ロード。いつもご迷惑をおかけしております」

珍しく二人の攻守が入れ替わった瞬間だった。ロイは、困った顔で頭を下げ続けた。

ロイはお酒、特にワインが大好きだった。

一年ぐらい前、ジノと一緒に食事をした時、彼に食後のワインを勧められて、そのまま二人で飲み明かしたのがいけなかった、と思う。

あれからすっかりワインの味にはまり、暇な夜はジノと飲み明かすのが習慣になってしまった。

それをアーニヤは快く思っていない。

ちなみに、本当にアーニヤが快く思っていない理由は、体の健康というのもあるが、口イが暇な夜というのはとても珍しいのに、それを全部ジノに奪われて面白くないからである。

ただ、悲しいかな。ナイトオブセロはそんな乙女心を微塵も感じる事はできず、ただペコペコと頭を下げ続けた。

その態度が、さらにアーニヤをイライラさせるのも無理はなかった。

「いつその事、お酒飲むのやめたら？」

「いえ、もう二日酔いになるまで飲みません。次から気をつけますからそれだけ——ん？」

その時、ロイはふと足を止めた。隣にいたアーニヤもそれに習う。

「どうかした？」

アーニヤが聞くと、ロイは「あつ、いや」と曖昧な返事をした後、視線と体を横に向

けた。

そこには木製の扉があった。何の変哲もない。本当にただの扉。

「ここがどうかしたの？」

アーニヤがさらに尋ねた。しかし、ロイは黙り込んで何も答えない。

「ロイ？」

もう一度問いかけられて、ロイは自分が呼ばれている事に気付いた。

「何かな？」

「ここがどうかしたの？　って訊いた」

「いや、どうかしたって訳じゃないんだけど……」

足を前に踏み出して、ロイは扉を開けた。

軋んだ音とともに、あらわになる部屋。

室内には机とベッド、そして一つのダンスが置いてあるだけだった。私物らしきものはない。

どうやらここも空き部屋らしい。

「この部屋がどうかしたの？」

「いや、何でもない。というか、なんで僕はこの扉を開けたんだろう？」

眉間に皺をつくりながらも、ロイはゆっくりとした足取りで部屋の中に入っていつ

た。アーニヤはロイのその行動を不思議がりながらも、後に続いて扉をくぐった。

「?」意味もなく扉を開けたの?」

アーニヤが部屋の中にあつたベッドに空気の音を立てて腰掛ける。ロイは、部屋の机を指でなぞりながら、

「うん。というか体が勝手に動いた」

部屋全体を眺める。

「?」

アーニヤは首をかしげた。しかし、ロイも首をかしげたい気分だった。

部屋に入ったのは本当に何も考えずに取った行動だった。なぜか、この扉の前に立つと、この部屋の中に入るのが当たり前な気がして仕方がなかったのだ。

「本当に、なんで僕はこんな部屋に入ったんだろう……?」

ロイは頬をかきながら、部屋の中を何度も見回す。何気ない内装が目に入り、その度に言いようのない不思議な感覚がこみ上げてきて、困惑した。

(この部屋……見覚えがある?)

そんな気がした。しかし、ロイはすぐにそれを否定した。

自分がエリアーに來たのはつい最近であり、この学園には今日初めて足を踏み入れたのだ。

見覚えなど、あるはずがない。

しかし、どうもこの部屋にいますと、

「なんかこう、モヤモヤしてくるな……」

「ムラムラ?」

「……違います」

ロイは心の中に湧き上がっていた何とも言えない感情を一時引つ込めて、アーニヤの聞き間違いを即座に訂正した。

「間違っているよアーニヤ。モ・ヤ・モ・ヤ。モヤモヤって言ったの、僕は」
「そう」

納得したあと、アーニヤは携帯を操作し始めながら、

「じゃあ、前から一度聞いてみたかったんだけど……ロイは私というムラムラする?」

訳の分からない事を、本当に唐突に訊いてきた。

長い沈黙の後、ロイは、

「ごめんアーニヤ。よく聞こえなかった。今、なんて言った?」

幻聴だと思つて——いや、幻聴だと願つて聞き返す。しかし、アーニヤの小さな口から出てきたのは残念ながらそれが幻聴でないという事を証明しただけだった。

「だから、ロイは私というムラムラする? つて訊いた」

「どうやら、聞き間違いではなかったようだ。ロイは、頭痛がしてきた。

(どういう意味だ? というか僕にどう答えるか……)

考えても分からない。分かるわけがない。なのでとりあえず、

「しません! っていうかいきなり何言いだすんだよアーニヤ……」

アーニヤは携帯から顔を上げて、不愉快そうに瞳を歪めた。

「それは、私に対する侮辱?」

「……なんでさ」

「“ジノが言ってた”。女が男にムラムラしないって言われるのは侮辱されているのと一緒にだって」

(また君か! 厄介なやつだよ君は!!)

心の奥底で嘆き、うなだれるロイ。それを尻目に、アーニヤは違うの? と言いたげな視線を送る。

ロイは、余計な事しか言わない友人に対して、奥底から静かな怒りがふつつつと沸いてくるのを感じた。

とりあえずロイは、今度ジノに会ったら出会いがしらにボディブローを見舞う事にして、改めてアーニヤと向き直った。

「というか、アーニヤ。そもそもムラムラの意味分かってる?」

「実を言えば分からない。でもジノはロイに聞けって言ってた。きっと事細かく手取り足取り詳しく教えてくれるからって……」

ボデイじゃなくて顔を殴ろう。

そう、ロイは固く心に誓った。

「で、ロイ。良い機会だから教えて。ムラムラって、何？」

ベッドの上から、二つの無垢な瞳がこちらを覗き込む。

しばらく黙考しながらも、ロイはの脳は高速で回転していた。

このまま何も言わないのはまずいと判断した。そもそも、教えなかったらアーニヤの事だからその手に持った携帯を駆使しインターネットで探るだろう。そうなったら終わりだ。

最終的に、ロイは答えを導き出した、

「……複数の村をまとめて示す事だよアーニヤ。『村々』っていう言葉が旧日本にはあるんだ」

ロイが身を屈め、アーニヤと視線を合わせて非常に苦しい事を言うと、彼女は納得していない様子で、

「? なんでそれが、女性への侮辱につながるの?」

「さあ? アーニヤもあんまりジノのいう事は気にしなくていいんじゃないかな。だっ

てあのジノの言う事だし」

「……」

あんまりな言い草だったが、今ここにナイトオブスリーを擁護する人間は誰もいない。というか、多分ブリタニア全土を見ても彼を擁護する人間はいないだろう。

「“村々”をどうやって手取り足取り教わる事になるの？」

「はは、馬鹿なジノと違ってアーニャは賢いから、別に口で言うだけで教えられるんだよ」

「ジノは馬鹿なの？」

「軍人、同僚、仲間としては優秀だけど。友達としては非常に残念ながら……」

「お楽しみ所。失礼いたします！」

会話をするロイとアーニャの側面から声がかかった。二人はとっさの事に驚きながらも動揺はせず、声の方に素早く振り返る。

いつの間にか、部屋の入口には、一人の人物が立っていた。

（僕が気を取られているとはいえ、人の気配に気付かなかった!?）

表情は変えないまでも、ロイは内心で驚いていた。自分が気配を感じずにここまで人の接近を許すなど、ラウンズのメンバー以外では始めての事だった。

やがて、人影が数歩前になる。その姿が窓からの月明かりに照らされて明らかになっ

た。

扉の前にいたのは女性だった。

褐色の肌、アスリートのようにしなやかな肉体、それを強調するスウェットスーツ、半そでの上着。彼女は油断のない足取りで近寄ってくると、やがてロイ達と適した間合いでその歩みを止めた。

「……あなたは？」

今までの少々間の抜けていた感情を捨て去り、ロイはレンズ越しに淡々とした強い視線を浴びせながら尋ねると、女性は背筋を伸ばしてブリタニア式の敬礼をしてから名乗った。

「ブリタニア軍機密情報局所属、ヴィレッタ・ヌウであります。ナイトオブシックス様とナイトオブゼロ様ですね？」

いかにも軍人らしい話し方から出た言葉を聞いて、ロイは首を捻った。

（機密情報局？）

機密情報局といえば、通常の軍情報部とは別系統の独立した皇帝直轄の諜報部局である。その存在は別に秘匿もされおらず、空港の職員でも知っている程度にオープンな組織だ。

だが、決してどこにでもいて良い組織ではない。それなのになぜこんな場所にその諜

報部員がいるのか？

相手の意図を掴めず、ロイがナイトオブゼロである事を肯定するか否定するかを迷っている内に、アーニヤが「そう」と肯定してしまった。

仕方なく、ロイは「何か？」とそのヴィレッタと名乗った女性に尋ねた。

ただ、まだ本当にブリタニアの機情の人間と決まったわけではないので。ロイは相手の一挙一動に対応できるように、足幅を相手に気付かれないように広げ、どんな動きにも対応できるように身構える。

それに並列して、目の前の女性がどんな行動をとっても対処ができるように脳の中で何十通りのシミュレーションを一瞬で済ませた。こうしておけば例え目の前の女性が急にナイフや銃を取り出して襲い掛かってきても、とりあえず、頭だけは取り乱さない。一方、アーニヤも、どうやら完全に信用はしていないらしく、ベッドから腰を上げて立ち上がり、手に持っていた携帯を懐にしまうと、両手を自由にさせて、相手を見据えた。

当のヴィレッタと名乗った女性は、二人の警戒に気付いてか気付かないふりをしているのか分らないが、姿勢を崩さずに言った。

「ここは機情の作戦区域であります。そして、このクラブハウスは一般人の立ち入りを禁止しております。よって、恐れながら今すぐに退館をお願いいたします」

(……作戦区域?)

そのただ事ではない言葉に、ロイは他人に気付かれない程度に眉を上げた。

今日、ロイはこの学園を隅々まで回ったが、生徒のイベントに対する熱意がすぎまじすぎる点を除いては、至って普通の学園だった。

少なくとも、普通の情報局ならともかく、わざわざ皇帝陛下直属の諜報機関が作戦行動を行うような場所には思えなかった。

ロイは、ヴィレッタと名乗った女性を値踏みするように見た。

(なぜだ? テロリストでもこの学校に通っているのか? それとも……) それとも、皇族クラスの親族でも学校に通ってて、護衛をしているのか? それとも……)

ここで、ロイは自分がさまざまな思考を巡らせている事に気付いて、

(……つと、悪い癖だな) と、かぶりをふった。

何か分からない事があると、すぐにその答えと、そのさらに裏まで理解しようとする、自分の癖。

確かに、その姿勢は軍人として必要なものだが、度を超すのはやはりよくない。

この目の前の機情の軍人が、完全に軍人としてこちらに声をかけているならばともかく、自分たちが言われていることは、ここは一般人は立ち入り禁止なので、出て行ってください”。という学園の警備員にも言われそうな些細な内容である。

それに、女性の服装を見るに、どうやらこの教師「役」をしている人のようだ。なら、ただ単にその教師という立場から、一般人として遊びに来ている自分たちに注意を促しているだけという可能性も高い。

つまり……この学園でどんな作戦が行われているのかというのは気になるが、気にしたところで仕方が無いとも言える。

ブリタニア程大きな国家ともなると、このように隠密でしかも一見して不可解に見える作戦の数は格段に多い。ロイはラウンズという立場上その作戦を知る機会も多く、それらを一つ一つ気にしていたらキリがない。

「そうですか、すみません。この場所が立ち入り禁止だとは知らなかったものですから」
ロイは、続けて言った。

「すぐに出て行きます」

「お願いします」

ヴィレッタは、スツと横に移動し、部屋の入口の前を開けた。

「ほら、行こうアーニャ」

「分かった」

そして、二人はヴィレッタの横を警戒しながら通り過ぎ、廊下に出た。ヴィレッタはその様子をずっと眺めていたが二人が退出するのを黙って確認すると、最後に扉を閉め

て廊下に出てきた。

「ご迷惑をおかけしました。ヴィレッタさん」

「ごめんなさい」

「任務ですから」

そう言つて、ヴィレッタは背筋を伸ばして敬礼した。

ロイとアーニヤは、きびすを返して元来た道に戻る。

ちなみに、後になって知ったことだが。ここはあのテロリスト——『ゼロの左腕』ラ
イが生活していた場所であり、ロイが入った部屋も、そのライが生活していた部屋だつ
た。

②巻 12話『歓迎会 F』

この場所——クラブハウスは、ルルーシユが生活している関係上、いろいろと秘密が多い。一般人ならともかく、ラウンズにうろつかれると困る。

「あれがナイトオブゼロとナイトオブシックスですか」

ヴィレッタがラウンズの二人を引き返させ、その姿が見えなると同時に、廊下の影から一人の少年が現れた。

「ロロか」

ヴィレッタは、視線だけをその少年に向けた。

栗色の髪、童顔とも言える顔立ち、しかしその瞳は大人以上に据わっている。

彼はその瞳で、ラウンズの二人が去っていった廊下を眺めて、

「それにしても。なぜ、わざわざ逃がすようなまねを？ 僕なら二人同時に殺せたのに。」

ここなら人もめつたに来ないから死体の処理も楽だというのに」

無垢そうな外見に似合わず、淡々と物騒な事を言うヴィレッタの部下——ロロ・ランペルージ。

その言葉にうそは無い。

それは上司であるヴィレッタが一番良く分かっていた。

このロロは、あどけない少年のような外見とは裏腹に、中身はただの殺人鬼だ。事実、ヴィレッタの部下が何人もこのロロによって無意味に殺害されている。

実は、ナイトオブセブンの依頼でナイトオブゼロとシックスを監視していたロロとヴィレッタが、クラブハウスに入っていった二人を連れ戻すために脚を速めた際、このロロはあろうことか懐からナイフを取り出して、

「これは、兄さんの敵を減らすチャンスか……」と二人を殺そうとした。それを制止したのがヴィレッタだった。

「馬鹿を言うな」

ヴィレッタは、腕を組みながら勢い良くロロに向き直る。

「こんな場所で皇帝陛下直轄のラウンズを二人も『失踪』させるつもりか」

怒気を交えた視線を送るヴィレッタとは対照的に、ロロは変わらぬ冷めた視線を返した。

「陛下——いや、皇帝程度への報告は何とでもなります。そうでしょう？」

ロロは皇帝陛下直轄である機密情報局の一員でありながら、その皇帝を卑下するようなニュアンスを漂わせた。

いや、そもそももう彼はブリタニアの皇帝を敬意を込めて呼ぶ必要は無かった。なぜ

なら、彼——ロロはすでにブリタニアの敵となっていた。

つまりは裏切つたのだ。世界の三分の一をすべる大国を。それも自らから進んで。

ロロの主人はもはやシャルル・ジ・ブリタニアではなく、ブリタニアの敵であり彼の最愛の兄、ルルーシユ・ランペルージだった。

ヴィレッタはかぶりを振った。

「お前は分かつていない。あの二人がこんな場所でないくなれば——特にナイトオブゼロがいなくなれば、彼と親交の深いシュナイゼル殿下やオデウツセウス殿下を初め、同僚のヴァインベルグ卿、エニアグラム卿、クルシエフスキー卿あたりも必ず動く。そうなれば私たちなど一瞬で終わりだ」

そう説明するヴィレッタを、ロロはまたもや冷めた瞳で見据え、そして、次にその視線をナイトオブゼロたちが去つていった方向に戻して、薄い笑みを浮かべた。

「……へえ、愛されてるんですね。あの、ロイつて人」

ヴィレッタは、そのロロの何も理解してなさそうな顔にたまらなく腹が立った。

「笑い事じゃない。情報部の大部分の馬鹿共はナイトオブゼロの性格自体がおとないから、情報部の信用を失墜させた。あの事件」での事を恨んで堂々とキャンベル卿を中傷するが、私から言わせればその行動は愚かな事この上ない。考えてもみる。一人を敵に回す事によって、その国の皇帝陛下と宰相閣下と第一皇子殿下が敵になる人間が他に

いるか？」

考えたようだが、結果としてロロは無言で応じた。

「いないだろう。ナイトオブゼロの恐ろしさはその戦闘技術でも、その頭の良さでもない。人望だ。確かにキャンベル卿の支援を表明している人物は少ない。しかし、それはあくまで、実利的な付き合いではないからそう見えるだけであって、実際の奴の親交範囲は少ないながらもその質は並じやない。並じやないからこそ。ナンバーゼロがいなくなればブリタニアの多くの大人物が、その原因を熱意を持って解明に走る。……これは言い換えれば、奴を敵に回す事は、ブリタニアの怒りを買うといっても大げさじやない」

「あの事件？」

一瞬後には思い出したのか、ロロは「ああ」と納得した。

「東ロシア戦線でナイトオブゼロが情報部が提出した報告を真つ向から否定して、しかもその否定内容が正しかったから、情報部の長ドクトリン將軍含め上層メンバーの面目が丸つぶれになったあの事件ですか……」

ドクトリン將軍と言えば、ブリタニア内で“泣く子も黙る”と言われている猛者であり。情報部だけでなく軍部全体に強い影響力を持つている人物だ。このドクトリン將軍の意見はあのシュナイゼル殿下もむげにできないと言われている。

しかし、そのドクトリン将軍が提出した情報を、ロイは多くの皇族が参加する会議で根本から、真つ向から否定した。しかも、ロイの発言は後に正しかった事が証明され、もし、最初にドクトリン将軍を初めとする情報部が提出した情報を鵜呑みにし、軍を進めていたら、司令官であったシュナイゼル殿下の身も危なかつたと言われている。

これにより、シュナイゼルのロイに対する信頼は確固たるものになり、逆にドクトリン将軍の面目は丸つぶれになった。

そのせいで、ロイはドクトリン将軍に逆恨みされており、いろいろと不遇な扱いを受けている。

それは、主に戦果の天引きや、能力の過小評価等の情報操作だった。おかげで、ロイは戦場でいくらか武功を立てようともそれが軍全体に伝わらないし、評価も上がらない。一般人にもその実力が知らされることもない。

ロイはいつまでたってもうだつのあがらないラウンズ、としてブリタニア全体に認知されたままなのである。

しかし、当のロイはそんな事をされると知っていても文句など一つも言わない。なので、それが原因で、本当ならロイを擁護したいと考える一部でありながらも大きな力を持った皇族や、貴族、そして軍人はなにもできないでいた。

こういう問題は第三者が騒げばよいというものではないのだ。

「僕は、あの將軍は好きじゃありません」

そこだけは、ロ口は歳相応の表情を浮かべてボヤいた。

「そこは私も同感だ」

ヴィレッタも同意した。そもそもあの將軍は好意を抱けるような人物ではない。上司にもなつて欲しくない、というのがヴィレッタの意見だった。

同じ情報を扱う部署でも、ドクトリン將軍の息のかかつていないこの機密情報局に配属になったのを素直に感謝したいぐらいだった。

「それにしてもヴィレッタ隊長。あなたのキャンベル卿に対する評価は実得的を得ていませんね。騎士として戦場を駆けるより、こちらの方が向いているんじゃないですか？」

ヴィレッタは、ロ口を睨んだ。

「裏切り者から誉められてもうれしくない」

「これからもその明晰な頭脳で僕たち兄弟の支援をお願いします」

「つ……」

ヴィレッタは口をつぐんだ。

目の前のロ口はブリタニアの敵である。しかし、すでにヴィレッタにとってロ口は敵ではなかった。

そう、ヴィレッタももうブリタニアから見れば裏切り者なのだ。もつとも、それはロ

口と違い、自ら望んでではなく、脅されてそうなったのだが……。

「それにしても。まるで王様みたいですね。あのナイトオブゼロは」

口口が唐突に言った言葉に、ヴィレッタは眉を寄せる。

「なに？」

「二人を敵に回すと。国が敵になる」

口口が自嘲気味に笑った。それは暗く、でも少し悲しげとも取れる笑みだった。

「……そうだ。そういう事だ。ナイトオブシックスはまだ良い。この場で失踪したとしてもどうにでもなる。だが、ナイトオブゼロだけはだめだ。皇族や、有力貴族の怒りに触れることだけは——」

「なら、今から追いかけてナイトオブシックスだけでも殺しておきましょう」

そう言いながら、心の殺意を表したかのように目を鋭くする口口。

ヴィレッタは即座に反対した。

「それもだめだ。ナイトオブゼロを敵に回す事になる。ナイトオブゼロが支援を頼めば手を貸す大物は一人や二人じゃないと言っただろう」

「つまり、少なくともこの学園では殺せない。今は二人を見逃すしかない。そういう事でするか？」

「そういう事だ」

「そうですか……」

そして、ロロはまた無表情とも言える顔になって、

「でも、いずれ二人共殺します。兄さんのために」

まるで家の掃除を宣言するような、あたりまえの行為を告げるような口調。

「……」

ヴィレッタは、そのロロの言葉聞いて改めて背筋に寒気を感じていた。

その時、ピピピという小さな電子音。

『んっ?』

ロロと、ヴィレッタの小型通信機が同時に鳴ったのだ。二人は、それを慣れた動作で耳に当てる。

ヴィレッタの相手は、ギアスによってルルーシュの制御下に入っている部下の一人だった。

「どうした?」

ヴィレッタが聞くと、

『校舎屋上にいるゼロの所に枢木卿が向かっています』

「そうか。分かった」

ヴィレッタは通信を切る。そしてロロも同じ動作で通信機を切った。

彼のその顔は先ほどまでと違って、殺人鬼のものではなく、兄の危機を純粋に心配する弟のそれであった。

「僕は、兄さんの所に行きます」

「ああ、その方がいいだろう」

そうヴィレッタが言うと、ロロはきびずを返し、早足で最愛の兄の下へ向かって言った。

やがて、ロロが廊下の端に消える。そしてこの場所はヴィレッタ一人だけになった。

「その方がいいだろう。か……」

ヴィレッタは誰もいない空間に声を投げかける。当然、返事は無い。

そして、力なく近くの壁にもたれかかった。

「私にとつて、本当にいい事とは、何だ……？」

ルルーシユの死か？ それともルルーシユの生存か？ いや、どちらにしろ自分には

もう輝く未来はないだろう……。

（全く、あんな男に助けられたせいで、私は……）

ヴィレッタは、ゴールの無い迷宮にはまってしまったような気分になった。

そのままだけの時間、ヴィレッタはそこにそうしていたのだろう。

気付けば、外から聞こえていた音楽はいつの間にか止まっていた。

いろいろあつた一日は、
今まさに終わろうとしていた。

②巻 13話『エピソード』

後片付けの手伝いをするというスザクを学園に残し、ロイ、ジノ、アーニヤの三人は政庁に戻ってきていた。

場所は、政庁の入口である。

余談だが、ホテルのロビーのようなこの空間に、私服姿の三人は結構目立っていた。「楽しかったなあ」

背伸びをして、大きな背をさらに大きく見せながら、ジノが言った。

「そりゃあ、あれだけ好き勝手に動けば楽しかったろうさ」

と、後ろに続くロイは、分厚い眼鏡を指で調節しながら皮肉を被せる。疲れてもいたので無意識に、深いため息も出た。

「自由人すぎ。最近特にひどい。自重したら」

ロイの傍にいるアーニヤも、携帯から目を離さないまま言葉を被せた。

ちなみに、この瞬間も彼女の携帯を触っている指はせわしなく動いていた。おそらく今日のスザク歓迎会での出来事をブログへ更新しているのだろう。

「もう少ししたら、ナナリー総督のこのエリアへの迎え入れもある」

「分かつてる。そのあたりはしつかりやるさ」

「その点に関しては、僕は心配していないよ」

「おお、さすがは心の友ロイ・キャンベル。アーニヤよ！　これが仲間内の信頼ってやつだぞー！」

大仰に手を広げて感動を示すジノ。それをアーニヤは無表情で眺め。

「まあ、その点に関しては私も心配していない」

と、あとはその意識を手元の携帯へと移した。

ロイは、思わず前に進めていた足の動きを止めてしまった。

ジノもしばらくキョトンとした表情のまま、アーニヤを見ていた。

その時のジノの心境を、ロイは理解できた。

実際、ロイも少し驚いていた。あのアーニヤが純粹に他人を——ジノを信用していると公言したのだ。

かなり珍しい事である。思っている、そういうことは口に出さない事が多い、アーニヤとはそんな人物だ。

ジノの視線に気づいたアーニヤは、

「……なに？」

と、携帯から顔をあげた。

「いや、なんでもない。ありがとうな」

ジノは長い手を伸ばし、アーニヤの頭を撫でた。

アーニヤは、表情は変えなかったが、

「……ジノ」

と、威嚇する猫の呻きを連想させる不機嫌な声を出した。

ジノは、伸ばした手をサツと引つ込めた。

「おっと、相変わらず私だと怒るわけね」

「子供扱いは嫌い」

「悪かったよ。勘弁してくれ」

「大体、ジノはいつもそう」

アーニヤとジノの間に、微細ではあるが険しい空気が流れた。いつ仲介に入ろうかと

ロイがタイミングをうかがっていると、

「予定より遅いお戻りですね」

と、聞き覚えのある女性の声が入ってきた。

その声の先に三人が顔を向けると、数メートル先にこのエリアーの文官代表である

ローマイヤが立っていた。

「……」

「……」

ジノは表情で、アーニヤは身にまとう雰囲気とそのローマイヤとの遭遇を快く思っていない旨を表していた。

別に、二人ともローマイヤの事を嫌っているわけではないが、相性があまりよくないのだからなと思うロイだった。

「すまないローマイヤ。少し、羽目を外してしまつてね」

場を和ませるために、この三人の中ではおそらく最も親しいであろうロイが返事をした。

「羽目を外されたのは、主にナイトオブスリーのように」

「もう耳に入ってるのか!？」

ジノが、これまた嫌そうに応じた。

ローマイヤは、重たい眼鏡を指で調節した。

「あたりまえです。軍部の不祥事は常にマスコミからの批判にさらされる可能性があります。唐突にその批判を浴びせられても、その場で適切な文言で応対できるように、あなたたちの主だった行動は全て頭に入れておりますし、情報が常に入るようにしております」

「マジか。私たちに尾行でも付けてたのかローマイヤ」

「尾行など付けなくても、ナイトオブシックスのブログを定期的に確認するだけで事足ります」

ジノは一度だけアーニヤを見て、なにかを納得したように肩をすくめると、それ以上は何も言わなかった。

アーニヤはわれ関せずといった感じで、携帯に視線を落とし、ブログの更新作業に戻っていった。

「心配をかけるね」

ロイが代表してわびると、ローマイヤは疲れを絞り出すような息を一度だけ吐いた。

「心配などしてません。かけられているのは苦勞です」

「そうか、どちらにせよ、すまないね」

「まあ、私たち文官もいろいろありますし、お互いさまということにこの場はしておきましよう」

仕切り直し、と言わんばかりにローマイヤは再び眼鏡を指で調節する。なんとなく、ロイもつられて眼鏡を調節した。

「それはそうと、ちょうど良い時に戻られました」

そう言つて、ローマイヤはナイトオブ라운ズの三人に近づく。

なんとなく空気を察して、三人はローマイヤに顔を近づけた。

「独自のルートで、爆破テロの実施計画を掴みました」

と、ローマイヤは、小声で言った。

ロイは、長年の習慣で無意識という部分も大きいのが、話の内容もあつて付近に気を巡らせた。この声量が聞こえる範囲に、こちらに意識を集中してる——聞き耳を立てている人間はだれもない。

ふと気付くと、ローマイヤは言葉を止めて、ロイを見ていた。

このままこの場で話を続けても良いか？ 問題はないか？ という判断をロイに求めていたのだ。

ロイが、他人の気配を感じたりできる武道の心得があることを、ローマイヤは知っていたのだ。

というより、本国にいたときにロイ自らが話をしていた。

「それで？」

と、ロイは話を促した。

許可と受け取たのだろう。ローマイヤは、そのまま淀みなく話し始めた。

「テログループの拠点の場所まで掴んでいます。そこで逮捕の協力をお願いしたいのですが」

「それは、まず警察がやる仕事じゃないのか？」

呟くジノの発言を、ロイは視線で制す。

「僕たちのところに話を持ってきてきている時点で、警察の手に負えなくなる要因をすでに掴んでるってことだろ。ローマイヤ続けてくれ」

「キャンベル卿は話が早くて助かります」

「鈍くて悪かったな……それで、どこまで分かっているの？」

「はい、実はこのテログループは、数カ月前にわがブリタニア軍から兵器の横流しを受けた可能性ががあります」

「兵器ってまさか……」

「ナイトメアフレーム、ってこと？」

アーニヤが首をかしげ、

「またカラレス総督の不始末関係か……」

ジノがうんざりした様子で呟いた。

ローマイヤが肯定の頷きをした。

「横流しの件の調査は継続中であり、まだはつきりとしていません。しかし、裏切り者がまだ軍部内に残っている可能性を考慮し、今回の件はナイトオブブラウンスである皆さんに依頼するのが最善と判断しました」

いまだ政庁内に裏切り者がいれば、そのテログループ確保の計画が事前に漏れて失敗

してしまう可能性がある。それは、味方の被害の増大を招きかねない。

また、グラストンナイツや、この政庁の軍の中でもコーネリアの直衛部隊ならそんな裏切り者はいないと思うが、彼らを動かすとなるとローマイヤ独自のルートで仕入れた情報である以上、彼らに大なり小なりローマイヤが「軍部」の彼らに指示をする必要がある。

どう考えても、カラレス総督の武官優位主義、もしくはコーネリア絶対主義に染まった「軍部」が、「文官」代表でかつ、このエリアーに來たばかりのローマイヤの指示を素直に聞く筈が想像できない。

それで手間取っては現場で影響が出る可能性もあるので、ラウンズである自分たちに話をした方が確実、とローマイヤは判断したのだろう。

「分かった。じゃあ——」

ロイがラウンズ三人の担当を割り振ろうとしたところに、
「僕を入れてくれ」

と、政庁入口から声がした。

本日のアッシュフォード学園の主演であり、後片付けを手伝うからと学園に残ったはずの枢木スザクが、そこにはいた。

「スザク。どうして？」

ロイの問いには、ローマイヤが答えた。

「枢木卿には、私からすでに連絡を入れておきました。エリアーの地理に詳しいのはこの中では彼でしょうから」

自分たちの仕事には市民の命がかかっている。

学生の歓迎会より、それを優先するローマイヤの行動に、ロイは一片の疑問も無い。むしろ共感さえ感じる。

それでも、ロイは尋ねてしまう。

「いいのかい、スザク」

「学園の片付けはもう終わったよ。それに今日は、少し暴れたい気分だね」

「暴れたい気分？」

スザクの口から出た珍しい言葉に、ロイは眉を寄せた。

「冗談だよ。忘れてくれ」

「冗談って……」

ロイが冗談について追及しようとするが、険しい同僚の表情に対して言葉が見つからないまま数秒がたったころ、ジノが手をたたいた。

「分かった。人員突入部隊の陣頭指揮はスザクで。私はKMFの方を指揮しよう」

「了解。それじゃあ、三人共準備しようか」

と、スザクが同僚三人の前を通りすぎる。おそらく、自室へ向かい、軍服に着替えるつもりなのだろう。

そのあとに、私服姿のラウンズ三人も続く。

「しかし、休暇が終わったらすぐこれか」

この政庁に入ってきた時とは対照的に、けだるそうな口調でジノが言った。

後にくロイが応じた。

「ああ、休日もここまでだ。気を引き締めよう」

本来に楽しい歓迎会であり、学園であり、生徒たちだった。

一時の休息を終え、自分たちはそれらを体験する側から、守る側へと変わる。そのための心のスイッチをロイは一瞬で切り替える。

今からまた、戦場を駆る日々が始まる。

コードギアス 反逆のルルーシュ LOST COLOR

RS R2 蒼失の騎士 TURN 3

③巻 0話『プロローグ』

ジノ・ヴァインベルグから見た友の最初の印象は、よくわからない男だな、というものだった。

初めて出会ったのはコンビで戦う御前試合だった。敵味方に分かれて戦うことになったが、友はスザクとの連携が全くと言って良いほど取れておらず、自分たちにあっけなく敗北した。

その後は、どちらかといえば御前試合でじかにぶつかり合って引き分けたスザクの方に興味があったので、話しかけるのもスザクばかりになっていた。

一度だけ、執務室のほうにあいさつに来たが、ちょうどその時はベアトリスより課せられた報告書作成の業務で、精神的に余裕がなかったというのもあり、特に会話もせず簡単なもので終わらせてしまった。

そして、しばらくたったある日、ジノは驚愕した。

ブリタニア本国の、ナイトオブブラウンスのみに入室が許されている高級士官用ラウンジ。そこに、なにげなく立ち寄った時の事である。

「アーニヤはさ、『モルドレッド』に乗ってるけど極端に砲戦が得意ってわけじゃないだろ」

と、ロイ・キャンベルと、

「どうしてそう思うの？」

アーニヤ・アールストレイムが、テーブルをはさみ、紅茶を飲み交わしながら雑談をしていた。

そもそも、あのアーニヤが他人と面と向かって会話しているだけでも驚きなのだが、さらにその雑談の雰囲気も、

「『モルドレッド』で結構、接近戦をしたがるし」

「よく見てるのね」

「昔からの性分だね。ごめん。不快にさせたかな」

「別に構わない。そう、あなたの言うとおり、もともと私の技能は近距離と比べて砲戦に特化しているわけじゃない。どちらも同じぐらい。好みで言えば、むしろ近中距離戦闘の方が好き」

「あえてモルドレッドのような機体にしてるのは、やっぱり肉体的なことが要因で？」

と、かなり盛り上がっていた。

アーニヤは、携帯ではなくロイをまっすぐ見ながら頷いた。

「中近接戦闘。特に近接戦闘においては技量が比肩していても、私は体型の関係で、他のラウンズと比べて体力ではどうしても一步劣る。それで、体力の差が出にくい砲戦仕様を専用機にした」

ロイは、分厚いメガネが湯気で曇るのも気にせず紅茶の香りを楽しんでいた。

「ラウンズ並みの敵を想定し、もし遭遇した際には砲戦で互角以上の戦いができるように、かい」

「そう」

「君の操縦データの結果でも、砲戦と近接戦闘の操縦において、砲戦の方が操作上の動作が少なく、体力の消耗が少ないことが証明されているね」

「その件に関する実験データは私のKMF開発チームしか持ってないはずだけど、もしかしてハッキング?」

「違うよ。そんな物騒なことはしないさ。君の公開されている戦闘動画や、これまでの模擬戦中で取ったデータなんかを自分で検証した」

「あきれた、ラウンズの業務、激しい模擬戦の合間でそんなことをしていたの?」

「大変だったよ」

「それで私のKMF開発チームと同じ結論に至ったのは大したもの。そう、私のモルドレットは、今後、砲戦型から万能型へと体の成長に合わせてカスタマイズしていく予定。本来であれば、その方がこなせる任務も多い」

ジノは、立ち尽くしてその会話を聞き入っていた。

アーニヤは、ラウンズになる前から“モルドレット”に乗っていたわけじゃない。これはかつて、ジノ自身がスザクに告げたものだ。

しかし、アーニヤがあえて砲撃型の“モルドレット”に騎乗している理由、というのは初めて知った。

いつしか、ジノは吸い寄せられるように二人に話しかけていた。

「キャンベル卿」

すでに接近には気づいていたようで、二人の視線はすでにこちらへ向いていた。さらにロイは気を使ったのだろう。彼だけは立ち上がって一礼した。

「これは、ヴァインベルグ卿」

「そんなかしこまった言い方をするな。同世代なんだしジノでいい」

少しだけ、ロイは困惑したようだった。いきなりこんなことを告げられれば、誰でもそうなるだろう。

それを受けて、ジノは再び言う。

「ああ、そうだな。私が卿呼びでは、私のこともジノとは呼びにくいな。では、今日から私は君の事をロイと呼ぼう」

「ジノ、いきなり入ってきてなにを言ってるの?」

そのアーニヤの言い様に軽い敵意が含まれているのを感じた。どこか昼寝などの安らかな時間を邪魔された際の、猫の威嚇を連想させた。

(アーニヤに、こんな顔をさせるとはね)

ジノはニンマリとした笑みを浮かべ、ロイの肩に長い腕を回す。

「私は君に俄然興味が沸いた!」

「ヴァ、ヴァインベルグ卿?」

「ジ、ノ。私の事はそう呼べ。つてか、どうやってアーニヤを手なずけたんだ。はははっ、面白いやつだな」

「て、手なずけてなどいせんが」

「だから、そういう他人行儀な言い方は止めろつて、ロイ」

「す、すみません」

再度、アーニヤが口を出す。

「本当に、何をしに来たのジノ」

しかし、ジノはスルーした。

「さつき面白いこと言ってたよな。戦闘データとかなんとか、もしかして私のもあるのか？」

「えっ、あつ、はい。一応」

「よし、それなら私と模擬戦しよう。前回の御前試合では実際にロイとは戦ってないし」「今からですか？」

「そう、今から」

「ジノ、ロイはいま私と話をしている」

横から低い声がした。いつの間にか、アーニヤはソファから腰を上げていた。

「おー怖。本当にどんな魔法を使ったんだよロイ。こいつがこんなに他人に興味を持つなんていままでに無かったぞ」

「ジノっ！」

アーニヤが、今度こそ明らかな怒りの声をあげた。

それから、ジノとよく一緒に行動する人数がアーニヤとの二人から、スザク、ロイを入れて四人になるのに、それほど時間はかからなかった。

③巻 1話『総督の護衛計画』

『で、今から送るデータが、あなたが作ったナナリー総督警備案に対する私の考察ね』

エリアー1の政庁にあるロイの執務室。それなりに高級な革張りの椅子に座りながら、ロイは目の前のパソコンに映る女性——モニカ・クルシエフスキーに頭を下げた。

「ありがとうございます」

『別にいいわよ、これぐらい』

と、応じてモニカは画面上でなにやら操作する。数秒後、ロイのパソコンにメールが届いた。

『どう?』

「はい、届きましたよクルシエフスキー卿」

『あら、いつもはモニカさん、って呼んでくれるのに』

そう言つて、モニカはいたずらっぽくクスクスとほほ笑んだ。

「いえ、しかし僕は勤務中で……」

『勤務中でも何でも、今は私とあなた二人だけでしょ?』

「それも、そうです……」

『アールストレイム卿にはいつもアーニヤって言うのに。うん、決めた。これから二人っきりの時は、モニカさんって呼ばないと、私はあなたと喋りません』

「勘弁してくださいよクルシエフスキー卿……」

『喋りません』

そして、ついにツーンとそつぽを向かれてしまった。

ロイは、ため息を付いた。

「分かりましたモニカさん。でも、他に誰かいる時は勘弁してください」

『はい、そこまで我侭はいいませんよ』

そして、モニカはまた楽しそうにほほ笑んだ。

ロイは完全に遊ばれていると自覚しながらも、別段嫌な気持ちはしなかった。いや、むしろ心地よさを感じている自分に気付いて、ちよつと困惑した。

モニカ・クルシエフスキー。ナイトオブトウエルブ。ロイの同僚。彼女は皇帝直属の護衛部隊であるロイヤルガードを統括する人物でもあり、要人警護というジャンルならばラウンズ内でもこの人の右に出る者はいない。

ロイはそのモニカに対して、スザク、ジノ、アーニヤと共に作成したナナリー総督の空港到着時から政庁間における護衛計画を考察してもらえないかと頼んだ。

もともと、ロイ達と親しいモニカは快くオツケーし、そして彼女もラウンズとして忙

しい身であるにも関わらずたった一日でこのように返事をくれた。

「それにしても本当にありがとうございますモニカさん。こんな急な話を引き受けていただいて」

ロイが改めてお礼を述べると、モニカは大きな瞳をパチクリとさせた。

「へっ?」 急な話も何も、ただあなたたちが作った案を私が手直しするだけでしょ?

大げさよロイ君。休憩中にでもできる事だわ」

「手直し?」 何か問題点でもありました?」

ロイが聞くと、モニカは口に指を置いて「うーん」と少し悩んだ後、

『問題というか……あなたたち、もう少し人間を守るっていう事を認識した方がいいわ』

『よ』

「と、言うとは?」

『あなたたちの計画書。確かに、空港を守るには適した内容だったわ。けど、ナナリー様を守るとしたら穴だらけとまではいかななくても、それに近い部分はあつたわね』

「え?」 どこですか?」

『トイレ』

「……はっ?」

ロイは思わず声を高くして聞き返した。

『はっ？　じゃないわよ。その点はどうなってるの？　ナイトオブゼロ』

役職で呼ばれて、ロイは反射的に背筋を伸ばす。続けて、脳に整頓されている知識の棚から、ナナリー総督護衛計画についての情報を急いで引つ張り出す。

「トイレにつきましては大アヴァロンの中にあるもので問題ないかと。艦内ならセキュリティも万全ですし」

それに、艦内の事は自分たちの担当ではなく、その艦の責任者の問題である。

しかし、モニカはそのロイの答えが気に入らなかつたらしく、不出来な生徒を諫める教師のような口調で、

『空港に到着して、総督が急にもよおしたらどうするの？　その事は考えた？　想定してる？　空港はあなたたちの担当でしょ？』

「それは空港のトイレを使う場合の総督の安全の事ですか？　それなら使わなければ済む話では？　予定では侍女が空港到着一五分前に、総督にその点を確認し、必要な際は船内のトイレを使用する事にもなってますし」

『ではキャンベル卿。ナナリー様が空港のトイレをご使用にならないとなぜ言い切れるの？』

「いや、それは……」

『もし、大アヴァロンのトイレが全部使えなくなったら？　特にナナリー様はお体が不

自由だわ。大アヴァロン内に、バリアフリーのトイレは限られた数しかないわよね。それがもしなんらかのトラブルで壊れたら、空港到着後、施設内のトイレを使う可能性も否定できないのではなくて?』

ロイは、押し黙ってしまふ。

『それだけじゃないわ。あなたたちの案の中でナナリー殿下がお通りになる空港やそれから政庁に到着するまでの予定ルートの護衛計画は良く練りこんであるけど、それ以外は全く考えてないじゃない。この場合、せめて空港ぐらいはナナリー様がどこに行く事になっても大丈夫なように考え直さなきゃ駄目よ。例えば、空港のルート上に爆弾を抱えたテロリストが急に現れたらどうするの?』

「射殺します。僕たちの決めたルートに割り込みなんてさせません」

『もしその犯人が持っている爆弾が、心臓が停止したら爆発するタイプだったら、あなたたちは全員死んだわね』

「うっ……」

ロイは口をつぐんだ。画面上のモニカはゆるやかに腕を組み、同僚への指導を続ける。

『そういう爆弾を持ったテロリストが現れたら当然ルートは変更する事になるわけでしょう? いい、ロイ君。最低でも安全なルートというのは施設内、そして施設外にそれ

それに三つは確保しておかなきゃ駄目。皇族の護衛っていうのはそういうものよ。細かい所にまで気を配るのが私たちの務め。あらゆる状況を予想し、それに対応できる策を練る。分かる?』

「……………」

なんていう認識の甘さだったのだろう。

ロイは、総督の護衛を施設や補給輸送の護衛と同じ視点で考えていた事に気付いて、恥ずかしい気持ちでいっぱいになった。

人というのは不規則である。気まぐれである。無機質な物資や補給を運ぶのとはわけが違う。そんなものより多くの不測の事態が付きまとうのは護衛対象が生物である限り当然。そんなの少し考えればすぐに分かる事だったのに……。

ロイが猛省していると、

『つと、少し意地悪な事を言ってみました』

モニカはあっけらかんと言った。

「……………」

ロイが目の前からの女性からの、あまりな言葉に対して思わず聞き返すと、モニカはまたクスクスとほほ笑んだ。

『普通。そんなところまで気は回らないわよね』

「えっと、あの、ええ!？」

モニカは『だって……』と前置きしてから、

『この計画書。良く出来ててほとんど私が言うことないんだもの。ロイ君、やつぱりあなた優秀よね。でも、私だって頼まれた以上、何かこういう所を直しなさい! とか、こうしなきゃ駄目よ! とかお姉さんっぽく言いたいもの……』

「いや、言いたいもの。とかちよつと拗ねた感じに言われても困るんですが……」

ロイが言うと、モニカは本当に拗ねたように口を尖らせた。

『大体、ロイ君も冷たいわ。長期任務からやつと本国に帰ってきたと思つたら、私にあいさつもせずすぐにエリアー1に行つちやうし……エニアグラム卿やカリ―ヌ様とはお会いになつたみたいなのに』

急に話が180度変わった。

「あの。その話と今の話と何の関係が? というかそれ以前に——」

あなたは僕が帰国していた時は、仕事で本国にいなかったじやないですか……。とロイは言おうとしたが、『言い訳は聞きたくないの!』というモニカの言葉と、彼女がドン! と机を強く叩いた音が音に遮られてしまう。

「言い訳って。僕はそんなつもりは微塵も……」

『アールストレイム卿とはいつも一緒にいるし! それに今度エリアー1にはあなたと

仲の良いローマイヤまで行くんでしょ？ 不公平よ！ いっそ私も一年前エニアグラム卿がしたのと同じ手段でエリアーに行こうかしら！ 行けばいいのかしら!? 行つてもいいかしら……』

と、あげくに言葉の最後で、彼女は『あつ、それいいかも』なんて呟きながら何やら考え込み始めた。

一年前。ノネットがこのエリアーに来ていたという事実はロイにとつては初耳で、少し驚いたのだが、今このときに限つてはそんな事はどうでも良かった。

なぜなら、モニカが本気でこつちに来る事を考えていると、本能的に悟つたからだ。

「待つてくださいクルシエフスキー卿。少し落ち着いてください……」

『……』

「クルシエフスキー卿？」

呼びかけるが返事はない。彼女は大きな瞳を少々とがらせて、しばらくこちらをまじまじと見つめた後、やがてボソツと言つた。

『……モニカ』

ロイはハツとして、

「すみませんモニカさん」

即座に言い直した。だがモニカは、『もう、結構です』と告げると、表情を一変して、これ以上無い天使の笑みを浮かべた。

その天使の笑みに、ロイはかつて派遣された極寒の地である東ロシアで経験した以上の寒気を感じた。

『あなたたちの計画書は良くできてましたよ。さすがキャンベル卿、とても優秀ですね。私の言いたい事は送ったメールに添付しておきましたんで優秀なキャンベル卿の参考になれば幸いだわ。せいぜいみなさんと仲良くお仕事を楽しめばいいんじゃないですか？ じゃあごきげんよう。以上、クルシエフスキー卿からだし、た！』

「ええ!? モニカさん何を怒って——」

そして、モニカがふん！ と顔を背けた映像を最後に通信は途切れた。

ロイは通信画面の消えたパソコンをしばらく呆然と眺め、

「……僕は何かを踏み外したのだろうか」

と、冷たい汗を垂らしながら熟考してみる……がそんなもの全く分からない。

こういう時にジノがいれば何か適切なアドバイスをくれると思うのだが、現在ジノを初め、ロイ以外のエリアーにあるラウンズは、中華連邦の総領事館に匿われているゼ口の身柄引き渡しを要求しに行っていて不在だった。

（仕方ない。とりあえず。あとでモニカさんには謝りのメールを送っておこう……）

といっても、一体全体何を謝ればいいのか全く分からないロイだった。

③巻 2話『ゼロ の 評価』

モニカから送られてきたデータを参考にして、ナナリー総督の空港到着から政庁までの警備計画を細部修正していると、机に備え付けられた通信機が鳴った。

ロイは素早く片手で受話器を取る。しかし、もう一方の手は作業を止めない。

「僕——いや私だ。何か？」

オペレーターが電話越しに応えた。

『キャンベル卿。ベスタ島基地のギルフォード卿より通信です』

「ギルフォード卿から？」

意外な人物からの連絡に、ロイは目をしばたたかせた。

ロイは、あのギルフォード卿が自分に連絡をしてくる理由が全く思い当たらなかった。

「分かった。じゃあ私のパソコンにつないでもらえるかな」

『かしこまりました』

受話器を置くと、パソコンにウィンドウが現れてそこに一人の男が映し出された。

ロイは、作業の手を完全に止めた。

「お久しぶりです。ギルフォード卿」

軽くあいさつをすると、画面の中の男——コーネリア皇女殿下の騎士ギルバート・G・P・ギルフォードは鋭利な顔に、柔和な笑みを浮かべた。

『お久しぶりですキャンベル卿。貴卿のラウンズ就任式でお会いして以来ですね』

「ええ、その節はお世話になりました。ところでギルフォード卿は先日の政治犯強奪事件で負傷し、療養のために本国に帰国していると聞きましたが。もう、お体の方はよろしいのですか？」

『はい、お陰様で回復いたしました。本日より、私もエリアーでの任務に戻らせていただくつもりです』

「それは大変心強い事ですが……大丈夫ですか？　画面越しで見える限りでは、どうも顔色がよろしく無いようですが」

そうロイが尋ねると、ギルフォードの顔にスツツと影が差した気がした。

「ギルフォード卿？」

『はい。実は……私がブリタニアの空港を出るとき、ある部下が「自分は退院します！

ついて行きます！」と重症のくせに我俣を言いまして。それを諫めるのに手こずったものですから……』

「我俣？」

『まあ、けがが治るまでおとなしくしていろと一喝し、黙らせました。ですが、あの様子では私の制止も一カ月もつかどうか……』

ギルフオード卿の部下と言えば、おそらくグラストンナイツのメンバーだろう。そして、現在も本国で療養中ともなれば一人しかいない。

「そうですか。ここはかつてコーネリア皇女殿下が治めた土地ですので、やはりアルフレッド卿も相当強い思い入れをお持ちなのですね」

『アルフレッドをご存じなのですか？』

ギルフオードが意外そうな顔をした。

ロイは頷いて応えた。

「ええ、彼とは一度、東ロシア戦線で小隊を組んだ事がありますので」

一年ぐらい前、ロイが初めてラウンズとしての任務に就いた時の事だった。

アルフレッドは一時エリアーから本国に報告に戻っていた時に、命令を受けて助っ人として東ロシアにやってきた。その時に出会い、ロイはアルフレッドと三日間作戦行動をとりにしたのだ。

『ああ、なるほど。やつが我俣を言う原因はキャンベル卿でしたか……』

「はい？ 原因？」

『いえ、合点がいききました。恐らくあなたに恩義を感じているのでしよう。だから早く

戻りたいと……』

「へ？」

『おっと、これから先は本人の口からいう事ですね。でしやばりは控えましょう』

「はあ……」

ロイが曖昧な返事を返す。

ギルフォードは咳払いしてから、その顔を真面目な軍人のそれに戻した。

『それより。先ほどナナリー総督を乗せた大アヴァロンが補給のためベスタ島基地に到着いたしました』

それを聞いて、ロイも表情を引き締めた。

「そうですか。報告感謝します。護衛は確かアプソン將軍でしたかな？」

『はい』

「そうですか……」

アプソン將軍はあまり良い評価を聞かない人物である。ロイはギルフォードには気付かれない程度に顔を険しくした。

「では、ギルフォード卿。あなたは高速艇で一足早くこのエリアーに戻ってきていただけませんか？ 空港の防備を固めたいと思いますので」

『了解しました。ですが……』

と、ギルフォードが言いよんだのをロイは見逃さなかった。

「ギルフォード卿。何か心配事でも？」

ロイが尋ねると、ギルフォードは少し躊躇って、

『はい、どうも嫌な予感があるのです。できれば、私はナナリー新総督とともにエリアー1に参りたいのですが……』

ロイはそれを聞いて、「ふむ」とアゴを指でなぞった。

「参りたいのですが、というのはどういう事ですか？ いや、待った……それ以前にあなたが今そのペスタ島にいるのはおかしいですよ。今、思い出しましたが、私が聞いた限りでは、あなたはナナリー総督がエリアー1に到着されるずっと前——予定ではすでにエリアー1到着しているはずでは？」

『……はい』

「それなのに、あなたはまだペスタ島にいる。理由をお聞かせ願いますか？」

これは問題である。ギルフォード卿は軍であらかじめ予定されていたエリアー1への帰還ルートを外れて、自分の部隊を率いて自由奔放な行動をしている事になる。

もちろんあのギルフォード卿の事なので、何か理由はあるのだろうが、だがこうやってその事実を知ってしまった以上、黙って見逃せるほど、ラウンズという立場の責任は軽くない。

ギルフオード卿はロイの怪訝そうな瞳を真つすぐ見つめ返した。

『実は……私はアプソン将軍には内緒で、大アヴァロンに捕捉されない距離を保ちつつ、自分の部隊を率いてこのペスタ島にやってきました』

「？ それは一体どういう事ですか？」

『護衛です』

「護衛？ 誰から守る護衛ですか？」

『ゼロです』

この答えには、ロイも「馬鹿な」と驚くしかなかった。

「そんな場所をゼロが襲うわけがないでしょう」

『はい。ここまではやつも姿を現しませんでした。しかし、エリアーに近づけば近づくほど、やつが現れる可能性が高くなります』

「ギルフオード卿。悪い事は言いません。少し冷静になって考えてみてください。カリフォルニア基地からペスタ島基地の空路上でゼロが襲ってくるわけがないではありませんか。事実こうやって襲われなかった」

『はい。私も99,9%襲われなかったと思います。しかし、ここからエリアーへの間ならありえるかもしれません。本当ならば、私たちは大アヴァロンに沿う形で同行したかったのですが、カリフォルニア基地で、アプソン将軍にわが部隊も同行させてほし

いと頼んだところ、断られまして……』

と、困った様子で言うギルフォード。

あの将軍の性格ならそう言うだろうな、とロイは思った。将軍とは顔見知りではなかったが、頑固者といううわさはいろいろと聞いていたからだ。

だが、それはこの際、問題ではない。

「だから軍の規則を破って、自分の部隊とはいえ、あなたの独断でブリタニアの軍を勝手に動かしているのですか？」

ロイがそう咎めるように言っても、ギルフォードは全く臆する様子を見せず、むしろ堂々として言った。

『私は、ゼロを甘く見たくはないのです』

ロイはそれを聞いて、またか、と視線を上げた。

「あなたもですかギルフォード卿……」

『はっ？ あなたも？』

「あつ、いや……」

ロイは、自分から不意に出た言葉に軽く驚いた。

こうやって、無意識に言葉が出るといふ事は、どうやら、自分は先ほどスザクと行ったやりとりを少々根に持っているんだな、と気付かされる。

「スザクもそう言つて、僕の制止を聞かずに中華連邦の総領事館にゼロの身柄引き渡し要求に行つたものですから」

『枢木卿が……』

「ええ、困つたものです」

——ゼロを甘くみるな。

そう言つて——いや、言い続けて、スザクはロイの制止を聞かず、領事館に行くと言つてきかなかつた。

ロイの意見としては、オデユツセウス殿下と天子様のご婚儀も早まつた事だし、あまり中華連邦を刺激するような行動はどうかとも思つた。

それにご婚儀が執り行われれば、さすがに中華連邦もゼロを匿うことは止めるはずである。いや、むしろ向こうからゼロを差し出してくるかもしれない。

われわれブリタニアはそれを待つていればいいのだ。なのに、スザクはわざわざ波を立てに行つた。しかも、ナナリー総督が到着するこの大事な時期にだ。

『賢明な判断です』

しかし、ギルフオードはスザクの行動を擁護した。呆氣に取られるロイを尻目に、卿の鋭利な瞳がさらに細くなつた。

『私には、あのゼロが自分が中華連邦から追い出されるのを手をこまねいて見ていると

は思えません』

ロイはギルフオードの言葉を聞いて、机に肘を付き、指を交わらせモニターの前にゆったりと上半身を近づけた。

「ではギルフオード卿。つまり、ゼロは何かしらの行動を起こす。と、そうおっしゃりたいのですか？」

ギルフオードは小さく頷いた。

『その可能性は高いでしょう。ですのでナナリー総督が就任されるこの時期、取り返しが付かなくなる前にゼロを確保したい、という枢木卿の考えは分からなくもありません。とはいえ、外交問題に発展するような問題を起こすのもどうかとは思いますが……』

「その点は大丈夫です。ナイトオブスリーやナイトオブシックスも同行しています。それに、スザクだって政治というのをちゃんと理解している人物です。外交問題になるかならないかの見極めはできるでしょう」

と、ロイは自信ありげに言った。私は完全にスザクを信頼していますから、という顔をロイは作った。

だが、それはうそだった。

そもそも、本当にスザクに外交問題になるかどうかの見極めができると思っていれ

ば、彼が領事館へ行くというのをロイは制止したりはしない。

実を言えば、ロイはスザク一人で領事館に行かせるのはかなり不安だった。なぜならば、スザクはゼロに対しては冷静さを失う節がよくあるからだ。

感情的になる、衝動的になる、と言い換えても良い。

それはユーフェミアを交えたスザクとゼロの過去の確執を見れば仕方が無いとも言えるが、だからといって暴走してもらっては困る。なのでロイは、ジノとアーニヤも同行するならという条件付きでスザクが領事館に行くのを嫌々ながらも納得した。

ちなみにスザクに付き添う二人には「くれぐれも問題を起こさないように。スザクが何かしそうになったら止めるように」と出発する時にスザクに隠れて何度も言い聞かせた。

本当ならロイは自分が付いていけばもつと確実だったのだが、モニカと通信の約束もあつたし、一人ぐらいうんズが政庁に残つてないといざとなつた時に困る、という判断だった。

ギルフォードは少し思案顔をしてから口を開いた。

『そうですか。ただ正直に個人的な意見を言わせていただければ。やはり多少中華連邦との関係が悪くなつたとしても、早々にゼロを捕まえるべきだと思います。』

「……ほう」

ここで、ロイはゼロに対して、ある種の驚きにも似た感心を感じた。

(それほどの男なのか。ゼロ)

スザクもギルフォードもブリタニア屈指の騎士と言っているいい人物だ。その二人が――実際にゼロと相対したことがあるこの二人が、そろってゼロに脅威を感じている。

(ここまでくると、もしかして僕の方がゼロに対する認識が甘いんじゃないのか、とすら思えてくるな。それとも、この二人が単に気にしすぎなのか……)

『キャンベル卿?』

少し考え込んでいたようだった。ロイはギルフォードの不審げな声を聞いてハッとした。

「はい、何でしょうか」

『すみません。差し出がましい事を申しました』

「いえ、あなた程の人物が危険視するのです。なるほど、私は少しゼロという人物を甘く見ていたのかもしれない。注意しますよ」

『はい。キャンベル卿も油断なさらぬよう』

「ありがとうございます。して、ギルフォード卿」

ロイはモニターに対して、ゆっくりと体を近づけた。

「私への要求を聞きましようか。わざわざ隠密行動をとっているのも関わらず、こう

やって連絡してきたのですから。行動を黙認してくださいとかそんな内容じゃないんでしょ？」

行動を黙認してくださいと頼むものにも、ロイはそんな事を知らなかったわけだから、こうやって連絡する意味がない。そして、ギルフォード卿はとりあえず「甘そうなら、上司に連絡だけしておいて、後で、

「キャンベル卿には今回の私の行動は伝えてありました」と言つて厳罰逃れをするような人物でもない。となると、何かしらロイにしてほしい事があつてこうやって連絡してきたと思うのが普通だろう。

ギルフォードは躊躇わなかった。

『はい。実は私の部隊が使つていた輸送機が、急に調達した古い機種なものもあつてかエンジンントラブルのため、修理に二時間程かかる事が判明いたしました。しかし、その間にナナリー新総督を乗せた大アヴァロンはこのベスタ島を出航してしまいますので……』

（つまりは、라운ズの権限でなにかしらの航空手段を確保してくれないか、という事かと……）

と、ロイは解釈した。

それならば、この通信は本来スザクにつなぐはずのものだったのかも知れない。い

や、多分そうだろう、と判断できた。

この種のお願いならば、ギルフォード卿にとつても顔見知りであるスザクに頼むのが普通であるし、確実だ。しかし、今はスザクがいないので、それならばロイに、という事だろう。

(ジノやアーニヤに比べて説得しやすいとも思われたのかもしれない)

そう思つて、ロイは心の中で苦笑した。しかし、たとえそう思われていたとしても、いや、そう思われたぐらいで傷つくような安いプライドをロイは持ち合わせていない。

「では、こうしましょう。私の部隊でもある“キャメロット”が使用している“アヴァロン”も確か予定ではその基地に給油のため立ち寄っていますよね？ 本来なら“アヴァロン”はアプソン將軍出発の一時間後にその場所——ベスタ島基地を離れることになっていますが、……予定を繰り上げて三〇分後に出立にしましょう。そして、ギルフォード卿の部隊にはその“アヴァロン”の護衛をナイトオブゼロの名において正式にお願い——いえ、命令します。これで、よろしいですか？」

そうすれば、もし、ナナリー総督の乗る大アヴァロンの方に何かあったとしても、KMF用の例の装備の量産化の事もあるし、すぐに後ろから駆けつけられる。

ギルフォードは自分の意見がすんなりと通つた事に、一瞬目を見開いて驚いていた。しかし、すぐに、ほつとしたような表情を浮かべた。

『感謝いたします』

「いえ。私はあなたの意見を聞いて、よりナナリー新総督の安全が高い選択をしたまでです。では、"アヴァロン"の責任者であるロイド伯爵にはこちらから連絡を入れておきます」

『よろしくお願ひします』

背筋の伸びたギルフォードの敬礼を最後に、通信は切れた。

執務室には再び静寂が訪れる。ロイは真つ暗になったモニターを見つめ、呟く。

「……ゼロか」

ロイの頭の中にスザクとギルフォードが言った、

——ゼロを甘くみるな。

——ゼロを甘くみたくはないのです。

という言葉が何度もよぎる。

ロイは妙な胸騒ぎを感じて、もう一度、情報部から届けられた黒の騎士団のデータを確認する事にした。

パソコンを操作し、黒の騎士団の最新情報を表示させる。

しかし、何度確認してもその航空戦力の欄には、"黒の騎士団には航空戦力は無し"としつかり記載されていた。それは情報部の報告を信じるならば、黒の騎士団は空中戦

ができないとい、つまり、ナナリー総督は少なくとも空にいる限りは安全という事になる。

黒の騎士団に航空戦力は無い。

これは前から判明していた事で、だからこそロイ達ラウンスは、もし黒の騎士団が総督を狙って何らか行動を起こすとしても、ナナリー総督が到着する前後、つまり空港か、政庁までの護送ルートが一番危険であると判断し、ナナリー総督に先立ってこの土地にやってきて防備を固めていたのだ。

しかし、ロイはスザクとギルフオードの言葉を聞いて、自分たちはいつの間にか襲撃があるとすれば、空港到着前後、という固定観念に囚われてしまっていたのではないか？ とそんな不安に駆られた。

——ゼロを甘くみるな。

——ゼロを甘くみたくはないのです。

スザクとギルフオードの言葉が再びロイの頭によぎる。

（それはつまり、黒の騎士団はナナリー総督を空港ではなく、渡航中に襲う可能性があるという事か？）

そう思い立って、ロイはパソコンにエリアーを中心とした地図を表示させた。そこにはブリタニアからこのエリアーに来るまでにナナリー総督が通る空路が示して

あった。

（僕が黒の騎士団のリーダーだとする。そして敵にバレていない航空戦力を保持している。と仮定して……）

海上決戦。それを行う場所として、大アヴァロンの航空ルート上、黒の騎士団に一番都合が良い場所。それは、

「ポイントT—2031……」

ここだ、というかここしかない。ここならば、他のブリタニア軍施設からもっとも離れているため、もしナナリー総督が襲われても他の基地から救援に駆けつけるのに時間がかかる。

少なくとも自分が黒の騎士団のリーダーで大アヴァロンと一戦を交えるつもりなら絶対にこの場所で待ち伏せをする。だが……。

「う〜ん」

ロイは、頬をポリポリと搔いた。

「そもそも、航空戦力をそれなりにそろえていたとしても、あの大アヴァロンの編隊に敵うかな……」

攻撃を加える。これは誰にでも可能な事だが、敵を撃破するとすると話が違ってくる。それが分からないゼロでは無いだろう。

ナナリー総督を護衛し、このエリアーまで送り届けてるのはアプソン將軍率いる量産化された空中戦艦アヴァロンの編隊だ。

それらは一隻で街一つを焦土にできる力がある。しかもそれが五隻、五隻も護衛についているのだ。

生半可な航空戦力で奇襲を敢行した所で、このアヴァロンの編隊はビクともしないだろうし、たとえこの大アヴァロンを撃破できるほどの航空戦力を持っていたら、さすがにそんな大きな規模の戦力の保持を情報部が見逃すわけがない。

それこそ、ゼロが奇跡でも起こして、短時間で師団クラスの航空戦力をそろえられるというのなら話は別だが。

「それとも、僕は何かを見落としてしているのか？」

ロイは画面上の海図を見つめてうなる。

黒の騎士団がブリタニアの情報部が見逃してしまう程度の小規模および中規模の航空戦力を持っていたとしても、やはりそれでアヴァロンに戦いを挑むのは無謀すぎる。

それならまだナナリー総督が空港に到着した瞬間に地上戦力である無頼や月下のKMFで突撃をかけた方が現実的だろう。もつとも、空港には自分たちラウンズが四人もそろっているのです、たとえば黒の騎士団のKMFが軍団規模で攻めて来たとしても遅れなどとらないが。

「……まあ、念のためだ。アヴァロンの通過するT-2031に先行してこちらから偵察機を飛ばしておくか」

——あらゆる状況を予想し、それに対応できる策を練る。

モニカの言葉だ。しかし、これが、帝国を守護するナイトオブブラウنزの役目である。

○

ギルフォードがナイトオブゼロとの通信を終えると、部下の一人、グラストンナイツのデヴィットが話しかけてきた。

「どうやら、キャンベル卿をうまく説得できたようですねギルフォード卿」

「説得?」

そう言つてギルフォードはデヴィットをチラリと見やつた後、その視線を再び真つ暗になつたモニターに戻した。

「少し違うな、あの方を説得したのではない。あの方がこちらに理解を示したのだ」

「はっ?」

「説得というものは伝える情報を全部提示して、それから始めるものだ。私は、今の会話では情報の提示しかしていない。情報を聞いて、判断をしたのはキャンベル卿だ。なるほど。アルフレッドが熱中するのもわかるな。賢い人物だよ」

そして、ギルフォードはフツと軽く笑い、

「いや、それとも人が良いだけなのかな」

「？」

デヴィットが首をかしげる。その様子を見てギルフォードはまたほほ笑んだ後、すぐに顔を引き締めた。

「さあ、聞いての通りだ。われわれはロイド伯爵の “アヴァロン” に搭乗する。すぐに取り掛かれ」

「イエス・マイ・ロード！」

デヴィットの敬礼する横を通り過ぎ、ギルフォードは通信室からペスタ島基地の廊下に出た。

○

黒の騎士団が中華連邦領事館から抜け出して一夜が明けた。

「……」

紅月カレンは租界地下に作られた地下道を歩いていた。

地下道。と言っても、この場所はブラックリベリオン以前から黒の騎士団が、よく使っていた施設で、横幅はちよつとした体育館ぐらいの広さがあり、簡易な宿泊施設や通信施設等が存在し、さらにその周りには黒の騎士団のKMFである無頼と月下が所狭しと並べられていた。

つまり、この場所はちよつとした地下基地とも言えた。

もう少しで出撃なのもあつてか、ここは整備兵達の飛び交う声で騒がしかった。

だが、そのKMFが並べてある空間を通り過ぎるとやがて喧騒も無くなった。

自分の歩く足音が反響する音を聞きながらしばらく通路を進むと、カレンはやがて目的の場所に着いた。

そこには布で仕切られた一角があつた。ここは現在、カレンの所属する黒の騎士団のリーダーがいる場所だつた。

「失礼しますゼロ。零番隊隊長紅月カレンです」

仕切られた布の前でそう言うと、

『入ってくれ』

「はい」

カレンは声に従つて、空間を覆っていた布をサツとどけた。中には簡素な机とテーブル。椅子が数個。粗末なベッド。そして、

『呼び出してすまなかつたなカレン』

カレンの上司であり黒の騎士団のリーダー、ゼロがいた。木製の椅子がある中で、唯一革張りの椅子に座っている。カレンが入ってきたのを確認すると、その椅子をクルリと回転させてその体をこちらに向けた。

黒い仮面に黒い装束。何度見てもセンスが悪いとカレンは思う。もっとも、このゼロという人物の服装をどうこう思い始めたのは、ゼロの正体を知ってからだったが……。

「何か御用でしたか。ゼロ」

カレンはゼロの前に立ち、敬礼こそしなかったが一年前と変わらない敬意を持つて尋ねる。

ゼロは腰掛けた椅子でゆったりと足を組み直し、そして言った。

『君に、作戦前に話しておきたい事があつてな』

「? 何でしょうか?」

『一応人払いはしたんだが……気配は?』

「気配? ああ、少しお待ちを」

そう言つてカレンは周りの人の気配を探った。遠くから先ほどの喧騒が聞こえてくる他は、この辺りに人の気配は一切しなかった。

つまり、ここで何を話そうともそれが第三者に聞かれる心配はないという事だ。

「大丈夫です。人の気配はありません。もっとも、猫の気配はしますけど」

「やっぱりすごいな。お前は」

カレンがゼロから視線を外し、ジト目で布で仕切られた空間の一角を見ると、その布が不意に揺れてその隙間から一人の女性——C, C, が現れた。

「あんたの気配は、薄いようでなんか目立つのよC, C,」
「そうか？ これでも潜入は得意なんだが」

C, C, はそう言つて、クスクスと笑つた。女性のカレンから見てもその笑みは綺麗だなどと思えた。

『茶化するC, C,。それとなカレン——』

二人の女性の会話を遮り、ゼロは己の仮面に手をかける。同時に空気が抜ける音がして、彼はその仮面を脱いだ。

繊細で綺麗な顔が現れる。ゼロの正体——ルルーシュ・ランペルージだった。

カレンはそれを見届けて、片方の眉をピクリと上げた。

「仮面を取つたという事はゼロとしてではなく。ルルーシュとして私に用があるという事かしら？」

ルルーシュはほほ笑みもせず神秘的な顔で「ああ」と小さく頷く。その隣では、C, C, がそれこそ猫のようなしぐさでゆうゆうと空いていた椅子に腰掛けた。

「何の用かしら？ 出撃前だし、なるべく端的に済ませてもらえるとありがたいんだけど」

すると、ルルーシュはその宝石みたいに綺麗な瞳をカレンに向けて、そして告げた。

「ライの事だ」

「!」

カレンの瞳が大きく見開かれた。

○

「領事館に黒の騎士団がない!」

ロイが執務椅子から立ち上がりながら聞き返すと、携帯電話の先のジノは、いつもより低い声で『ああ』と答えた。

『今、確認したんだが領事館の中には黒の騎士団はいない。ここの責任者の話では昨夜の内に黙って出て行ったそうだ』

黒の騎士団が領事館から消えた。その事実が意味するものは一つしかなかった。

ロイは己の中に巻き起こった小さな焦りを、これまた小さな息と共に吐き出す。

とにかく、少しでも早く気分を落ち着けるよう努めた。

行動は焦ってもいい。ただし思考まで焦らせるとロクな事にならない。それをロイはよく分かっていた。

「そうか、ここにきて黒の騎士団が動いたとなると……」

『どつちだと思う?』

ジノが尋ねたのは、黒の騎士団がナナリー総督を狙うとしたら、空港か、それともそれ以外かという事だ。

ロイは、少し視線を下げて考え込んだ後、

「今の状況では判断しかねる。ただ黒の騎士団が空港ではなく空で大アヴァロンを襲うのなら——」

『ポイントT-2031だろうな』

ジノ達もすでに空で黒の騎士団が大アヴァロンを襲うをしたら。という話し合いをしていたのか、彼はロイが予想していたのと同じポイントをサラリと言った。

『すでにスザクが大アヴァロンに連絡して、進路を変更してもらっている。それで……』
「分かった。今エリアーには空中戦ができるKMFは僕たちの機体しかない。空港の事はこの駐留軍に任せて、僕たちラウンズは——」

『出撃だな。ポイントT-2031で奴らがのんびり待ち伏せをしていたら、やってくるのは自分たちラウンズ部隊ってことだ。じゃあ、こっちはこのまま格納庫に向かう』

「ああ。また後で」

そして、ロイは電話を切った。

携帯電話を懐にしまうと、ロイはすぐに執務机の上にある通信機に手を伸ばした。先ほど、T-2031に偵察機を飛ばすよう指示した部署に連絡を入れると、すぐに女性のオペレーターが応答した。

「私だ。先ほど飛ばした偵察機からの連絡は」

オペレーターの返事はすぐだった。

『偵察機は指示されたエリアに到着し、現在索敵中です。今のところ、不審な機影は確認できません』

「そうか……では引き続きエリアの搜索を。そこには黒の騎士団が向かっている可能性が高い。鳥一匹見逃さないつもりで探してくれ」

『イエス・マイ・ロード』

聞きなれた返答を最後に、ロイは受話器をあえてゆっくりと置いた。誰にであれ、自分が少しながらも焦っている事を知られたくないという心理が働いたからかもしれない。

「来るのか、ゼロ」

ロイは身をひるがえし、早足で政庁地下にある格納庫に向かった。

③卷 3話『裏の裏』

白いパイロットスーツに着替え、政庁地下にある格納庫に入ると、技術少佐の階級章をつけた男が近寄ってきて敬礼をした。

「クラブ、S兵装で準備完了しております！」

「行けるかな？」

「いつでも！」

「ありがとう」

ロイは笑顔で応じて、奥へと進む。

広い格納庫では優秀な整備士達が所狭しと駆け回っている。そして、それら見下ろす鋼鉄の青い騎士の姿があった。

ロイ・キャンベル専用KMF “ランスロット・クラブ”。

ロイは傍に備え付けてあったタラップに足をかけ、早足で一気に駆け上がるとコックピットに滑り込んだ。

懐から青いキーを取り出し、それを差込口に取り付けて、“クラブ”に読み込ませる。ロード、暗証番号入力、確認、認証終了、またロード。

ひとつとおりの操作を終えると、目の前のモニターに“クラブ”の起動を知らせる表示が出た。

「んっ？」

その時、通信を知らせる電子音。

一瞬、偵察機が黒の騎士団を発見した、という報告かと思った。だが違った。

『キャンベル卿』

通信をつなげると、ウィンドウに映ったのはギルフォードだった。背景を見るに、どうやらKMFのコックピットにいるようだ。

「ギルフォード卿。出撃したのですか？」

『はい。私たちは枢木卿から連絡を受け、キャンベル卿に乗せていただいたアヴァロンから出撃し、現在T-2031に向かっています。ですが、こちらが先行して飛ばした偵察機によると、そのポイントでは黒の騎士団を確認できません』

「それは本当ですか」

ギルフォードは小さく頷いた。

ロイは、新たに通信をつなぐ。ウィンドウに現れた女性オペレーターに、「私だ。こちらが飛ばした偵察機はどうなっている」と尋ねる。

『駄目です。不審な船一隻見つかりません』

オペレーターからは相変わらずの答えが返ってきた。

(どうゆうことだ……)

ロイは、分厚い眼鏡の奥で瞳を細めた。

二つの偵察機でこれだけ探して見つからないとなると、本当にそのエリアに黒の騎士団はいないのだろう。

しかし、騎士団がこのタイミングで姿を消したという事は、なんらかのアクションを起こそうとしていると見て間違いない。

(本当に空中戦などやるつもりがないのか？ ととなると中華連邦の領事館を出てエリア1-1のどこかで、空港を襲うべく息を潜めているのか……)

それならば自分たちラウンズは無駄足を踏もうとしている。いや、そもそも無駄足を踏む事も見越して、このエリアの駐留軍をいたずらに動かさず、ラウンズのみで出撃しようとしているわけではあるが、なにも完全に無駄足と判明したのなら、出撃する必要がそもそも無くなる。

(ここは動かず、おとなしくエリア1-1で残った方がいいだろうか……)

そんな事を考え始めた時、

『おい、どうした。早く出ようぜロイ』

いつの間にか領事館から帰ってきたらしい、ジノから通信が入った。すでに専用のK

MFである “トリスタン” に騎乗しているようで、その姿は白い軍服ではなくパイロットスーツだった。

『ロイ。総督が危険じゃないの?』

続いて、同じパイロットスーツに身を包んで、 “モルドレット” のコックピットにいるアーニヤからも通信が入る。

ならスザクも帰ってきてるのか? と思つて、コックピットから辺りを見渡すと、格納庫端にあるV-TOL機に乗り込もうとする白い影が見えた。スザクだった、だがどうもその足取りがおかしい。

いつもキビキビと歩くスザクにしては全体的に弱々しい仕草だ。

「スザクはどこかケガでもしたのか?」

ジノとアーニヤに尋ねると、二人は画面上でなにやら意味深な視線を交わらせた後、ジノが気まずそうに言った。

『実は……スザクのやつ。むこうの武官とやり合つてさ』

「やりあつた!?!」

ロイは思わず声を張り上げ、ジノが映る画面に体を近づけた。

「どういう事だジノ! あれほど外交問題は起こさないようにと——」

『ケンカを売つてきたのは向こう。ちなみにケガをしたのはスザクだけ』

アーニヤが遠慮気味に口を挟む。

そんな彼女を、ロイはキツと睨んだ。

「ケンカ売ってきたからって、それを全部買ってどうするんだ！」

『でも……』

眉をひそめるアーニヤ。

見かねてジノが助け舟を出す。

『大丈夫だ。ナイトオブスリーの名にかけて、絶対に外交問題にはならないと約束する。

とりあえず経緯は後で説明するから、今は私を信じてくれ』

「……」

ジノが信頼に値する時の顔をしていた。

ロイは、少し間を置いてから「分かったよ」と納得していないながらもこの時ばかり

は頷いた。

そもそも、今、こんな言い合いをしている暇はない。

『ありがとう』と、ジノは前置きしてから続けた。

『よし、じゃあ話を戻すぞ。といっても一体全体どうなってるんだ？ 黒の騎士団はポ

イントT-2031にいるんだろう？ 違うのか？』

ロイはチラリとギルフォードを見やり、お互い困った顔を見合わせた後、その視線を

画面のジノに向けた。

「実は……僕とギルフォード卿が飛ばした偵察機によると、そのポイントには黒の騎士団どころか、不審な船一隻ないそうだ」

『海中もか?』

「ああ、海中もだ」

ジノの眉間に皺ができた。

『じゃあなにか。黒の騎士団はやっぱり空中戦なんかやる気がなくて、実は空港を襲うべく息を潜めている可能性もあるわけか』

「その通りだ。ただ、空港の防備は完璧だ。いくら黒の騎士団の戦力が多少充実したからといって、そこを襲うというのはあまり考えられない」

空港及び、空港から政庁までのルートへの防備に穴は無い。なにせ、あの警護担当のラウンズであるモニカも太鼓判を押ししたほどだ。ここで、ナナリー総督を襲うのは空中で大アヴァロンを襲うよりはるかに困難だ。

黒の騎士団が脱出を考えず自殺的な行為に出たとしても、である。

すると、話を聞いていたアーニヤが、相変わらず集中していなかったら聞き逃してしまふような静かな声で言った。

『じゃあ、どうする。T-2031に向かうのはやめて、大アヴァロンと合流する?』

ジノは、迷いながらもその案に同意した。

『そうだな。その方が確実かもしれない。ポイントT-2031以外で黒の騎士団が大アヴァロンを襲う事は無いと思うが、ありえないわけじゃ無いしな。ロイ。お前はどうか思う?』

ロイは水を向けられて、唇に指を当てて考え込んだ。

黒の騎士団がなんらかの行動を取ろうとしていることは間違いない。その黒の騎士団の目的が何であるかの検討はこの際置いておいて、今この場で一番に優先されるのはナナリー総督の安全だ。なら、

「……そうだね。そうしよう。その方が確実だ。アプソン將軍はいい顔しないだろうけど。僕たちが護衛につけば総督の安全は保障される。スザクにもそう伝えよう」
そしてロイは先ほどのV-TOLを見る。

スザクの乗せたV-TOLは緩やかに地面で旋回し、今にも発進する所だった。
通信をつなぐと、ロイはそのスイッチに手を伸ばした。

『大アヴァロンはルート変更してるから、合流するのに結構時間がかかりそう』
ふいにアーニヤがポツリと言った。

それを聞いて、ロイはスイッチに向かっていた指をピタリと止めた。

(ルートを変更している? 時間がかかる?)

ロイの頭の中で、火が入り、何かの計算がめぐるましく行われ始めた。

ルート変更。それによって起こされた合流時間の増加。

(……いや、待てよ、まさか)

一つ一つ、絡まっていた糸が解けていくような感覚。それは、どんどん進み、やがて糸は全てほどけ……。

『結構っていつても、それほどかかんないだろう。とりあえず黒の騎士団が空で襲ってくるっていう可能性はポイントT—2031の線が消えた以上、ほとんど無くなったんだ。自分たちは総督がこのエリアに到着する前に合流して護衛につけばいい——』

「そうか！　そういう事か！」

唐突にロイは、ジノの言葉を遮って叫んだ。その行動に呆気に取られている三人の騎士を尻目に、ロイはスザクのV—TOL機に通信を繋げた。

スザクはすぐに応じた。ウィンドウから、少し顔色の悪いスザクが現れた。

『なんだいロイ。僕は今から発進——』

ロイは、スザクの言葉を待たずに尋ねた。

「スザク！　君は大アヴァロンにルートを変更するように指示したらしいけど、それは南のルートか!?!」

ロイにしては珍しい強い口調に面食らって、スザクは一瞬呆気にとられたようだが、

すぐに頷いて口を開いた。

『えっ、うん。黒の騎士団が大アヴァロンに襲い掛かるのならポイントT―2031以外ありえなかったから、そこを南に迂回するように連絡した』

なんてこった！ とロイは内心で毒づいた。

ただ、スザクの判断は間違っていない。おそらく、ロイでもスザクの立場ならそうしただろう。

そう分かってはいても、スザクの取った行動に齒噛みせずにはいらなかった。

それはしてはいけない事だった。

(間違っていた。僕はゼロを甘く見ていた……)

黒の騎士団に都合が良い場所。それは大アヴァロンの予定ルート上でいえばポイントT―2031しかない。しかし、今その大アヴァロンは予定のルートを変更して大きく南に迂回している。つまり、

誕生した。

ポイントT―2031より黒の騎士団に都合が良く、さらに本来の大アヴァロンの予定ルートから外れているがためにブリタニアにとって危険度が増す都合の悪い場所が。

自分たちはルートを変更“した”のではない。間接的にゼロにルートを変更“させられた”のだ。

「失態だー！」

強く拳を握り締め、ロイは自分の膝を思い切りたたいた。

『ロイ？』

『キャンベル卿？』

アーニヤとギルフオードが、ロイの行動を不思議そうに尋ねてくる。

ロイは、すぐに顔を上げた。

「ギルフオード卿はすぐに部隊を引き返してください！　そして“アヴァロン”と共に

アプソン將軍と合流を！」

『はっ？　……あ、いや、まさか』

ここでギルフオードは一連の仕組みに気付いた様子だった。

『おいおい。一体どういう事だ？　私たちは帰ってきたばかりで状況がよく飲み込めな

いんだが』

そう言うジノに、ロイは告げた。

「一杯食わされたんだ！　黒の騎士団は大アヴァロンが進路を変更した先にいる！」

『！』

聞いていたスザクの顔も、画面上でハツとした。

その隣に映るジノが、信じられん。といった様子で、

『ちよつと待て。じゃあ何か。黒の騎士団は私たちが大アヴァロンのルートを変更すると読んでたつていうのか？ その上で、待ち伏せをしたと？』

「そうだ」

ロイは頷いた。

『……もしかして、マズイ？』

アーニヤが首をかしげた。しかし、この場合、もしかしなくてもマズかった。

○

「すごい、こっちに来た」

紅月カレンはそう内心で呟きながらリーダー上で捕捉した大アヴァロンの編隊を、半ば信じられないといった様子で眺めていた。

V-TOLで吊るされた紅蓮式式のコックピットの中。カレンは、敵の出現に呆けながらも、戦闘の開始が近いのを無意識にも感じているのか、体だけは自然と操縦桿のグリップの握り具合を確認している。

「まさか本当に、ブリタニアがルートを変更するなんて……」

ゼロに『われわれはナナリー総督のアヴァロンが、通る予定の無いポイントで待ち伏せする』とミーティングで聞かされた時は耳を疑ったものだが……。

カレンはフツと下を向いてほほ笑んだ。

(さすがです……。ライ、私たちが守るべきゼロは健在よ)

『うわ、本当に来たよ。にわかには信じられなかったけど』

『こういう先読みに関しては、我らがリーダーはさすがというより無いな』

『……しかし、偶然かもしれない』

朝比奈、仙波、千葉の声が紅蓮の通信を通して呟いた。やはり、四聖剣のメンバーもこの目の前に広がる事実には、興奮半分、驚き半分と言った感じのようだった。他の団員達も同じで皆一様に驚きの言葉を投げ合っている。

『ゼロが来ると言ったのなら来る』

その時、少々浮き足立った団員達を諫めるような渋く重い声が響いた。

黒の騎士団の戦術的要。藤堂鏡志朗だった。いろいろな意味で気持ち昂ぶっている団員達の中で唯一、波の無い海、澄んだ湖のような静けさを醸し出しながら、触れれば切れるような鋭い瞳をさらに尖らせて、前方の獲物を眺めている。

『ゼロを信じ。我らは刃を振るう。それだけだ。皆、準備はいいな』

「承知」「了解」と各々返事を返す。

『では、ゼロ……』

そして、藤堂はゼロに言葉を譲った。

受け取ったゼロは通信機を通して全団員に呼びかける。

『黒の騎士団よ！ 目標はナナリー総督を確保することだ。絶対にナナリー総督に傷を付けるなよ！ いいか！ 絶対にだ！』

先ほどよりすこし大きな声で、団員たちが返事を返す。

カレンも返事をした後、アヴァロンの編隊をにらみつけた。

ゼロに従う事に迷いは無い。

ゼロは、いや、ルルーシユは言った。必ずライを助け出すと。

ルルーシユはライの親友。カレンが信じた男の親友なのだ。

信用できない道理は無い。

(ゼロの道は、私が切り開く)

それが、ライを助け出す事にもつながる。

紅蓮を吊るしたVERTOLは、ナナリーを乗せたアヴァロンに向かって加速していった。

○

戦闘は始まった。計算によるとギルフォード卿が少し早くラウンズ部隊より駆けつけられるはずだが……。

『ギルフォード卿が大アヴァロンに到着したみたいだ』

ジノの言葉に、ロイはモニター越しに広がる青い海を睨みながら「そうか」と答えた。

ギルフォード卿に遅れる事五分。ロイを含む四人のラウンズは、大急ぎでナナリー総督の乗る大アヴァロンに向かっていった。

フロートシステムの加速についてこれないスザクのV-TOLが少し遅れている以外は特に問題も無い。

「僕たちもあと五分ぐらいでたどり着く。二人とも準備はいいかい」

『問題ない。"トリスタン"は"ご機嫌だ"』

『"モルドレッド"も大丈夫』

ロイは小さく頷き、そして同僚達に告げた。

「よし、じゃあ僕とジノが前に出る。アーニヤは後方で援護」

『援護?』

すると、アーニヤが眉をひそめながら聞き返してきた。

「不満かい?」

ロイはまた聞き返す。基本、ラウンズ同士に順序は無く、命令口調であろうとそれはあくまで提案になる。

ラウンズの命令をラウンズが従う道理は無い。ただ、この三人で組む時はロイが指示を出す事が多いため、自然とロイの口調は命令のそれになる。

『……』

しかし、ロイのその提案に対して、アーニヤは声に出して嫌だ、とは言わないまでも、相当に不満のようだった。

なぜなら、通信画面に映る彼女のその小ぶりな顔には——見事に不満の色しか無かったからだ。

ロイがそんなアーニヤにかけるべき言葉に困っていると、

『私もその意見に賛成だ』

と、ジノが口を挟んだ。

ロイも素早く思考をまとめて口を開く。

「敵にはあの紅蓮式式がいる。あいつの輻射波動に装甲は関係ない。だから、動きの遅い——」

画面に映るアーニヤの眉が不自然に動き、さらに不満の色が表情に充満していく。

ロイは（しまった……）と内心舌打ちし、慌てて言い直す。

「僕たちの中では動きの遅い——」

『ロイは』

アーニヤは、ロイの言葉に被せるように言った。

『私がああ赤いのに負けると思ってるの？』

ムツとした怒りの色を混ぜた顔でこちらを見るアーニヤ。どうやら不満を充満させ

た上に怒りも充電させてしまったようだった。

「……」

言葉を詰まらせる、というのはいつ以来だろう。

失言だった。

言い方も悪かった。

基本的に「アーニャ」はロイのいう事をよく聞いてくれるが、ひとたびそれが「ナイ トオブシックス」となれば話は別だ。

彼女は、プライドも誇りも実力も一人前の騎士であり、戦い方には彼女なりの美学もある。それらをロイは結果的に傷つける形になった。

「いや、そうじゃないんだアーニャ」

『そうとしか聞こえない』

ピシヤリと言われて、ロイは冷や汗を垂らしながら、口を閉じる。

なぜか、猛烈にいけないことをしてしまった気分になった。

ロイは女性に怒られるということが苦手だった。

かつて、そのロイの性格を見抜き、

「弁舌と交渉術でシュナイゼル殿下に称賛され、さらに中華連邦、EUでは影で相当に評価されている英傑も、女の前ではただの雄」という評価をさもおかしそうに下したの

シュナイゼルの副官カノン・マルディーニだった。

ちなみに、シュナイゼルはそれを聞いて「なるほど、確かに君の女性関係を見ていると思うえてしまうね。でも分かるよ。私も、しよせんは男の一人なのだから」と珍しく愉快そうに笑っていた。

『まあまあ、アーニヤ。ロイはお前が心配なのさ』

ジノが軽い口調で口を挟んだ。

『弱いから心配って事?』

画面の中でジノに視線を移すアーニヤ。ジノは肩をすくめた。

『分かってやれよアーニヤ』

『何を』

『お前が大切だから、心配なのさ』

『大切だから?』

ロイは小さくため息をついた。

ジノが何かうまい事を言つてアーニヤをなだめてくれる事を期待したのだが、そんな抽象的かつ当たり前な理由でアーニヤが納得すれば苦労はない。

そもそも心配だったらジノやスザクに対してもしている、このメンバーはロイにとつてかけがえの無い仲間、友達なのだから。

ロイは全く持つて役に立たない友を、少々恨めしげに見やった後、正直気が重かったが、しぶしぶアーニヤに向き直った。

「あのねアーニヤ。ジノが言ったのもあるけど、特性と相性の問題でね——」
『分かった。援護に回る』

「……………へっ?」

アーニヤの子供のような素直な返答に、ロイは目を丸くした。

そんなロイを尻目にアーニヤはどこか満足そうな表情で、

『うん。大切なら仕方がない』

その言葉を最後に、通信の窓が閉じる。同時に「モルドレット」が「クラブ」と「トリスタン」からスイッと離れた。

どうやら本当に援護に回るらしい。

「……………」

ロイがその様子を呆然と眺めていると、ジノがクツクツクと笑った。

『ロイ。お前もまだまだ修業が足りないな』

「? な、なんの? っていうかジノ。今何か魔法使った?」

ロイが聞くと、ジノは『いやいや』と顔の前で手を振った。

『アーニヤは以前から切なくも甘酸っぱい魔法にかかっているんだって。そこん所はどう

思うのかな、わが友は』

「甘酸っぱ……って何だって？」

訳が分からない。といった様子で尋ねると、ジノはそんな友人の様子をさもおかしそうに眺め、また静かに笑った。

『分かんない？ まっ、天然なのも魅力の一つなんだろうな』

「天然って……」

『まあいいか。さてそろそろ作戦区域だ。引き締めようぜ。ラウンズが四人もいて総督が捕らわれたらシヤレになんないだろ』

「……分かったよ」

ジノにはいろいろと聞きたい事があったが、ロイはとりあえず戦闘に集中する事にした。

少なくとも、今は。

③巻 4話『青 対 紅』

「フロートに追いつけない！」

空を飛び回る「ヴァインセント」を、紅月カレンは憎々しげに睨みつけた。

戦局は、明らかに黒の騎士団にとって不利な状況に傾いていた。

大アヴァロンの対空攻撃を掻い潜り、取り付いたままでは順調だった。しかし、ギルフォード率いる、KMFの新装備フロートシステムを搭載した部隊が救援に駆けつけてから状況は一変した。黒の騎士団は、空を舞う巨人に振り回され、苦境に立たされた。た。

すでに、何機かの味方の「無頼」は倒されている。

「ええいつ！」

左腕のグレネードを乱射する「紅蓮式式」。しかし、当たらない。「ヴァインセント」は焦るカレンを嘲笑うかのように、スイと避けて、破壊力を伴った弾は青い空に消えていく。

機動性が違いすぎる！

地上では無類の強さを発揮した野獣も、空を飛ぶ鳥には爪が届かないのだ。

無駄と分かりつつも、カレンは射撃を続けるしかなかった。

『カレン隊長！ このままでは——』

その時、部下が乗る“無頼”からの通信が途切れた。カレンが不審に思つて目を向けると。

「！」

赤黒い閃光が“無頼”の脚部を貫いていた。“下半身”を完全に破壊された“無頼”は、壊れた人形のように崩れ落ちる。

「江島！」

仲間の撃破を目の当たりにし、部下の名を叫ぶ。そして、その光線が放たれた先を見る前に、

『う、うわあああ！』

隣のもう一機の“無頼”が、同じ赤黒く細い閃光に貫かれて大破した。

カレンは首を回した。

「南さん！」

呼びかけるが返事は無い。緊急脱出のイジエクシオン・シートが飛び出したので、命に別条はないだろう。

(一瞬の内に二機も!?)

前を向くと、はるか遠く離れた空には、身の丈以上もある細長い砲身を肩に抱えた青いランスロットの姿があった。

「なっ、まさかあんな距離から!」

搭乗者がスザクではないランスロット。

資料では何度か見たことがある。〃ランスロット・クラブ〃だった。

『ひゅ〜。この距離から命中とは。すごいな〃クラブ〃の新兵器は』

通信機越しに、ジノの感嘆の声が漏れた。

可変ハドロンブラスター狙撃モード。〃クラブ〃の可変ライフル以上の射程距離を誇るこの兵器は、主人であるロイの期待に寸分違わず、しっかりと応えた。

ロイからも〃無頼〃二機のイジエクシオン・シートが確認できた。人を殺さず機体だけを倒す。〃青い聖騎士〃の名の通り、慈悲深き戦法だった。

(それにしても、地上兵器であるKMFで大アヴァロンに奇襲、か……)

ギルフォード卿からその旨を伝える連絡を受けたとき、ロイは純粹に、(なるほど、その手があったか)と感心した。

空を飛ぶ鳥も、その身に取り付いた虫や植物の種を自由には落とせない。

(勉強になったよ。ゼロ)

内心で敵に称賛の言葉を送り、ロイは細長く展開した可変ハドロンプラスターを長距離モードから待機モードにした。

すでにこちらの位置は特定された。

狙撃というものは、こちらの場所が不明な状況で初めて意味を成すものだ。すぐに身を隠せるジャングルや市街地なら話は別だが、空では隠れる事もできない。

『紅蓮は残しておいたのか。気が利くな』

ジノの言葉に、ロイはハツとした。

「え、あつ、いや。そうだね、今なら確実に撃墜できたのに。僕とした事が……」

ありえない判断ミスだった。敵のKMF三機を捕捉し、その中にあの黒の騎士団のEースである「紅蓮式式」も入っていた。

確実に撃墜できるタイミングだった。それなのに、ロイが撃ったのは二機の「無頼」。

たかが量産機である。

「無頼ではなく紅蓮を狙うべきだった……」

悔しげにロイが呟くと、紅蓮はこちらの射線から逃げるように、大アヴァロンの装甲の影に隠れる。

だが、そんなロイを咎める様子も無く、ジノはむしろご機嫌な様子で言った。

『何言ってるんだ。あの紅蓮をあつさり落としたらつまらないだろう。よし、あいつは俺に任せてくれ』

「いや」とロイは首を振る。

「責任は僕が取ろう。君は“月下”の方を」

『あつ、おい！』

ジノの制止を聞かず、ロイは“クラブ”のフロートを加速させた。

(ナナリー総督も心配だけど。まずは黒の騎士団を壊滅させなくては)

そうしないと、安全にナナリー総督を連れ出すのも難しい。

時間の勝負だった。見る限り大アヴァロンのフロートは停止状態。サブシステムで

なんとか浮遊している状態で、そう長くはもたないと思えた。

もつとも、大アヴァロンのフロートが損傷しているというのもおかしな話だった。黒

の騎士団はおそらくこの大アヴァロンの鹵獲を考えていたはずだ。

「つ、アプソン将軍……」

ロイは煙のあがるフロートを拡大表示させて、憎々しげにその名を呟いた。おそろく、アプソン将軍自身がこの大アヴァロンのフロートを傷つけたのだろう。

(敵に渡すぐらいなら。とでも思ったのか、愚かな……)

本当は、アプソン将軍はそんな事など考えず、ただの衝動的な行為の結果、この大ア

ヴァロンのフロートは損傷したのだが。それは愚かどころかただの馬鹿と言える行為であり、いくら聡明なロイでもその事実には思い当たる事はなかった。

いや、思い当たる必要もなかった。思い当たった所で、ロイの中のアプソン将軍の評価が愚かな将軍から、馬鹿な将軍に変わるだけの話である。

ロイの視界に大アヴァロンの白い装甲がグングンと大きくなる。そして、一角に、あいつはいた。

「これが、『紅蓮式』か」

ロイは改めて、敵のエース機を観察する。

肉食獣を思わせる機動。猛禽類を彷彿とさせる外見。

まるで紅い野獣だった。

「……………」

どう攻撃を仕掛けるか。

あのように、大アヴァロンに取りつかれたら、可変ライフルや可変ハドロンプラスターはもちろん使えない。

ナナリー総督が脱出するまで、少なくともこの戦艦を海に叩き落すわけにはいかなかった。

となると、選択肢は一つしかない。

ロイは旋回しつつ、二振りのMVSを引き抜いた。鞘から解放されたショートソードタイプのMVSは主人の攻撃の意志に呼応するように、断続的な唸りをあげはじめた。

「まずは、小手調べだ」

滑空するように接近。

紅蓮は動かない。牽制の射撃も無い。こちらが、近接武器を手にした以上、その土俵に上がってやるとでも言わんばかりにどつしりと構えている。

（へえ、黒の騎士団のエースは女だったはずだけど）

並の男以上に肝が座っているようだ。

ロイは紅蓮の懐に、滑り込むように着地し、赤い装甲を断ち切ろうと左右の剣を振るう。

洗練された剣筋。二本の剣がまるで獲物を追い詰める猟犬のように連携し、追い詰め、そして“紅蓮式”を切り裂こうと食い下がる。

それを“紅蓮式”は俊敏な機動で全て躲した。

ロイの口元に、楽しげな歪みが生まれた。

「やる……しかし！」

“クラブ”は剣を振るう手を止めなかった。触れれば切れるその刃が何度か紅い装甲を削り取る。

紅蓮は「クラブ」の疾風の如き攻撃を嫌がって、後方に跳躍した。すかさず追撃する。

すると距離を空けた「紅蓮式」は地を蹴り、身の丈程もある大きな右腕の振り上げで突進してきた。

——輻射波動か！

情報部のデータベースで見えたことがあった。

巨大な爪で相手をわしづかみにし、そこから破壊の衝撃を叩き込む必殺の武器。しかし……。

(当たらなければ、どうという事は無い！)

ロイは迫る禍々しい指のような爪を冷静に眺め、タイミングよく操縦桿を動かして初撃をかわす。しかし、紅い野獣の攻撃はそれだけでは終わらなかった。

今度は、こちらが受けに回る番だった。

「紅蓮式」はその場でステップを踏みながら「ランスロット」や、「クラブ」特有のスピード感のあるダンスのような優雅な機動ではなく、どこか野生的な機敏さを持って、突発的な足払いを織り交ぜた、爪の連続攻撃を繰り返して来る。

「クラブ」はそれらをその場から一步も引かずにかわし、凌ぎ続ける。

スピードはあるが、読みやすく単純な攻撃をするパイロットだ、というのがロイの

第一印象だった。

とはいえ、「紅蓮式式」のパワーは「クラブ」と同等かそれ以上。力強く繰り出された爪や攻撃が青い装甲をかすめるたびに、風圧が装甲を抜けてコックピットまで届く気さえる。

それに、「読み易い攻撃」といっても決して「読める攻撃」ではないわけで、しだいにロイの額に冷たい汗が浮かぶのも無理は無かった。しかし、攻められ、下がり、押されれば「紅蓮式式」のパワーで一気になじ伏せられる可能性がある。

だからロイは引かない。いや、引けない。引いたらむしろやられる。しかし、ロイとてこのままずっと受け手に回るつもりは微塵もない。

やがて、攻め疲れたのか「紅蓮式式」の攻撃の鋭さがふいに緩んだ。

どんな力強い暴風を伴う台風も、いずれ通り過ぎ、納まる。そういう事だ。

ロイは、ここぞとばかりに操縦桿を一気に前に倒した。

フロートが火を吹き、青い機体が前に奔る。次の瞬間。「クラブ」が「紅蓮式式」を体当たりで吹っ飛ばした。

確かに、「紅蓮式式」のパワーは「クラブ」以上だが、フロートを利用すれば話は別だ。このブリタニアのテクノロジーが結集された装備は黒の騎士団の最新鋭機を単純なパワーでたやすく圧倒した。

よろめく“紅蓮式式”。その様子をロイは淡々と眺め、“クラブ”に双剣を握り直させ、グリッブを確認する。

——終わりだ。

フロートではなく大アヴァロンの装甲をつたってランドスピナーで飛び出す“クラブ”。

“紅蓮式式”は完全に死に体。“クラブ”があと数歩踏み込めば、剣のエリアに入る。そしたら切り伏せて終わりだ。

しかし、今にも“クラブ”の勝利が確定しようとしたその瞬間。コックピット内に赤い光を伴ってアラムが鳴り響いた。

ロイは咄嗟に剣先を止めて、フロートを使い宙に飛び、“紅蓮式式”と距離を取る。周囲を確認する。

アラムが鳴った原因はほどなく分かった。

「なっ——」

ロイは言葉を失った。

『おいおいおいおい！』

いつの間にか四聖剣の朝比奈、仙波を撃墜していたジノも、ロイと同じ事実気付いたようで、通信機越しに驚きの声を上げた。

目前に薄い紫の装甲が視界いっぱいに迫っていた。

大アヴァロンの護衛を務めていた小アヴァロンが制御を失って、こちらに近寄ってきているのだ。このままでは、ぶつかって……。

『ロイ！』

「分かってる！」

ロイとジノはその掛け声で、お互いがやるべき事を理解した。

大アヴァロンも小アヴァロンも損傷が激しく、その上、フロートのエンジンも止まって、どちらもサブシステムで何とか浮遊している状態。回避は不可能。となれば、外部的な圧力によって小アヴァロンの軌道を逸らすしかない。

ジノは小アヴァロンに「トリスタン」の機首を向ける。ロイは再び、「クラブ」の可変ハドロンブラスター狙撃モードを展開した。

しかし、どちらも頭によぎる不安は同じだった。

——やれるか、砲撃戦用ではないこの機体で。

「クラブ」の可変ハドロンブラスター狙撃モードは貫通力はあるが破壊力が心もとない。「トリスタン」の例の武器も調整中で使用不可能。

絶望的なまでの火力不足。

しかし、やるしかなかった。この大アヴァロンには命をかけても守らなくてはならな

い人物——ナナリー総督が乗っているのだ。

騎士二人が覚悟を決めたその時——。

巨大な熱量の塊が空を切る音の後、どこからとも無く赤黒い閃光が飛来した。その赤黒い閃光は大アヴァロンのブリッジをかすめ、“クラブ”と“トリスタン”の中間を少々“トリスタン”寄りに抜け、今にも突っ込もうとしていた小アヴァロンに伸びて激突した。

一拍置いて、小アヴァロンには炎が上がり、艦は爆発。その後、霧散した。

膨大な熱量が、周りにいる人間の肌を、爆発の光が視界を焼いた。

その様子を戦闘中の誰もが——黒の騎士団も、ギルフォードもただ呆然と眺めていた。そんな中、ロイとジノだけが、笑みを浮かべた。

『相変わらずだなモルドレッドのやることは』

「ああ、ちよつと。もとい、かなり心臓に悪かったけどね」

『なんだ、ビビったのか？』

「うん。ビビったというか、なんというかヒヤリとした」

そして、ロイは遠い空で浮かぶ“モルドレッド”に通信を開いた。

画面に映ったアーニヤは自慢げにえっへん、と胸を張っているように見えた。いかにも褒めて褒めてといったオーラを醸し出しているようにも感じた。

そのしぐさを見て、ロイはまた軽く笑った。

「よくやったアーニヤ。でもシユタルケハドロン砲はもう使わないようにしよう。君の腕を疑うわけじゃ無いけど、万が一ナナリー総統を巻き込んだらマズイし、それに……今、結構“トリスタン”が際どかった。一瞬ヒヤリとしたよ」

『えっ?』

それを聞いてジノが声を上げた。どうやら、あちらのコックピットからでは、赤黒い閃光が“トリスタン”の下、結構ギリギリを抜けていったのが見えなかつたらしい。

すると、

『大丈夫。ロイには絶対にあてない』

アーニヤはまた、だから大丈夫。とても言いたげに胸を張った。

『ば、馬鹿! “トリスタン”にも絶対あててるなよ!』とジノが怒るのも無理はなかつた。

○

二対のメインカメラがこちらを向いた所で、紅月カレンはようやく小アヴァロン爆砕の呆けから立ち直り、そしてすぐに呆けていたことを後悔した。

目の前にいるナイトオブラウンズの機体“クラブ”と“トリスタン”。一騎当千の機体がこちらに狙いを定めている。

背筋に冷たいものがよぎるのを感じた。

「く、来るか」

“紅蓮”を身構えさせる。しかし、二機はすぐに襲ってこなかった。それどころか“トリスタン”はフロートを吹かしてどこかへ飛んでいってしまった。

“紅蓮”の眼前には“クラブ”だけが残った。

遠くの空に浮遊している“モルドレット”も戦闘に加わる意志は無いらしく、大アヴァロンの周りを飛んでいるだけである。

どうやら、この“紅蓮”は“クラブ”一機で事足りると判断されたいらしい。

(舐められたものね……)

しかし、それが当たり前というのも理解できた。

『“紅蓮式”のパイロット』

外部スピーカーを通して“クラブ”のパイロットからの声がした。

カレンがその唐突さに驚いて、返答するかどうかを迷っている内に“クラブ”からの言葉は続く。

『降伏する気はありませんか?』

なんだそんな事か、とカレンは肩透かしをくらった気分になる。カレンは鼻を鳴らし、外部スピーカーの電源を入れた。

「ありがとう。優しいのね」

と、おしとやかに言つてやり、侮蔑の笑みを浮かべた後、声のトーンを一つ下げ、「それとも……戦死じゃなくて、公開処刑の方がそちらの都合がよろしいのかしら？」少しの沈黙があつた。

『そんなつもりは……』

「あなたはそんなつもりじゃなくても。ブリタニアはそうでしょ？ だから」

“紅蓮式”は爪を構える。それがカレンの意思表示だった。

「第三の選択をさせてもらう。私はあなたを倒して、生き残つて、目的を達成する」

“クラブ”は構えなかつた。

『……こちらも時間に余裕があるわけではありません』

その男の穏やかとも表現できる声に、微かな殺気が重なつた。

『あなたでは僕に勝てない』

そうだろう。それは先ほどの戦闘でよく理解できた。ただ、この目の前の男がカレンと同レベルであるスザクに比べて強いというわけでは決してない。おそらく、純粋な強さで言えば“クラブ”のパイロットとスザクでは、十中八九スザクの方が強いだろう。

多分、相性の問題だ。思えば、カレンにとってのライがそうだった。

ライは究極的に理詰めを持つて戦闘を行う。そういう相手は自分にとって最も苦手

なタイプなのだ、カレンはかつて彼との模擬戦で散々思い知らされた。

目の前の男も、おそらくはそんなタイプだった。

『これが最後です。僕はあなた程のパイロットを殺さずに取り押さえる自信は無い。悪い事はいいません。投降してください』

その呼びかけに、カレンはスラッシュハーケンの射出で応えた。ワイヤーでつながれた刃を、*“クラブ”* は双剣を最小限に動かして弾く。

「これが返答よー」

『……残念です』

“クラブ” は剣を構えたまま後ろに跳躍して距離を取る。

そして告げる。

『僕の名前はロイ。ナイトオブゼロ、ロイ・キャンベル』

驚くべき事だが、カレンはここで初めて、目の前の男があ文化祭の時に、自分に*“クラブ”*を差し出してきた人物だと気付いた。

もちろん、カレンは文化祭での彼がナイトオブゼロだと知っていたし、*“クラブ”*が出てきた時点で、相手はロイ・キャンベルだと認識してはいた。

でも、あの平和な学園で優しいほほ笑みを持つて*“クラブ”*を差し出してきた男と、鋼鉄の巨人を操って殺し合いを行う人物とはどうしても繋がられなかった。

カレンは戦争という現実には悲しみの感情を抱いたが、それは本当に一瞬で、次の瞬間にはカレンにとって目の前の男はただの倒すべき男となっていた。

カレンは、戦士なのだ。

「カレン。紅月カレンだ」

『……良い名です』

それが最後だった。両機はそれぞれの武器、それぞれの構えで、お互いの距離を測る。先に動いたのは「クラブ」だった。

「クラブ」は剣を構えランドスピナーで甲板を疾走。真つすぐ向かう。愚直で、フェイントも無い。本当に真つ直すぐ。

「そんな馬鹿正直な攻撃でっ！」

「紅蓮式」は遠慮など微塵もせず爪を繰り出す。それに対して「クラブ」は避けようともしない。

——もらった！

カレンは勝利を確信した。意外に倒すのは簡単だった、そう思った瞬間。

「クラブ」は目の前から消え失せた。

カレンは目を見開いて息を飲んだ。同時に、必殺の白い爪がむなしく空を切った。

③卷 5話『青い亡霊』

——終わった。

ロイは「紅蓮式式」の側面——「紅蓮式式」からは死角——で勝利を確信し、紅の装甲に剣を振り下ろす。

使ったのはロイの必殺技、ブルーファントム。

機体を直進するように見せかけて、相手に気付かれない程度に徐々に右か左に寄り、そして敵の攻撃が「クラブ」に到達する刹那、一気に身を翻えして、その攻撃をかわす。つまり、一種のフェイント。

おそらく「紅蓮式式」のパイロットは、この「クラブ」が何の前触れも無く、急に消えたように見えただろう。

それこそ、幽霊（フォントム）のように。

この技はかなり強力で、ラウンズ同士の模擬戦でもうまくいけばこれだけで一勝を奪い取れる。

それ程の技なのだが……。

「！」

完全に相手の死角から振り下ろしたはずのMVSは、紅い装甲を切り裂く事はなかった。

“紅蓮式式”の頭部メインカメラは完全に正面に向いている。しかし、その腕だけは、正確にこちらに伸びて“クラブ”の腕を掴んでいた。

「防がれた？ 読まれたのか？ しかも初見で!？」

ロイは驚愕した。

ラウンズにだって、初見ではこうも完全に止められはしない。

あの、ナイトオブワンとて、模擬戦でこの技を初めて使われた時は、成す術無く一本を取られたのだ。

つまり、この技は初見に限ればまさに必殺。

そのはずだった。

いや、すでに初見で防がれたので、そう思っていた、という過去形の表現の方が正しいか。

あまりの出来事に、ロイは一瞬だけ動きを止めてしまった。その一瞬の隙で、ロイはいままで数多くの敵を屠ってきたというのに。

● “紅蓮式式”のコクピットの中で、カレンは驚いていた。

「こいつ、ライみたいな技を!」

ライが得意としていたフェイント。

それとほとんど同じ技を「クラブ」は繰り出してきた。

防げたのは、過去の模擬戦で何度もこの技で撃破されている内に身に付けた、無意識レベルでの条件反射だった。

つまり、考える前に体が動いた。

かつて、ライも「もうこの技に限って言えば君は無敵だね」と苦笑していた。

まさに彼が守ってくれた。そうとしか思えなかつた。

不意に、カレンの顔に哀しげな影が浮かぶ。

(ライ、必ず助けるからね……)

再び、目の前に立ちちはだかる「クラブ」を睨み付ける。

「私の邪魔をするな! こいつっ!」

● 「紅蓮式」が主人の意志に呼応して、右腕を力強く伸ばした。

ロイが動揺した一瞬の間隙をついて、「紅蓮」は身を俊敏に反転させ、必殺の右腕を伸ばしてきた。

「!」

われに返って、ロイは回避行動を取る。しかし、間に合わない。必殺の技が破れたという事実は心に動揺を呼び、ナイトオブゼロであるロイにすら一瞬の判断を鈍らせた。

白い爪が「クラブ」の肩部に食い込む。

コックピットが一度、大きく揺れた。

「しまっ——」

急いで逃れようとする。しかし、爪は青い装甲にしつかりと食い込んでいて離れられない。

「クラブ」のランドスピナーが煙をあげてむなしく空回りする。

「紅蓮式式」のメインカメラが光った。「破壊の衝撃、とくと味わえ」そう言ってる

気がした。

やられる、とロイが思った瞬間。

『ロイ、動くなよ』

遠い空。

遅れて到着した白き騎士——「ランスロット」が持つ青い銃身から、ためらいの無いヴァリスの弾丸が発射された。

「スザク!?!」

「紅蓮式式」の行動は素早かった。

彼女は「クラブ」を捕らえていた右腕を外し、それをヴァリスの弾丸に向けて、「間に合えっ！」

赤い障壁が展開される。

弾丸と、障壁が、接触して火花を散らす。

その隙に、ロイはイジエクシオンシートの起動レバーから手を離し、操縦桿を持ち直すと「クラブ」のフロートエンジンをフル回転させて、空に逃れた。

額には、冷たい汗が浮かんでいた。

『枢木卿。貴公は——』

『スザク、あなた——』

「牽制です」

「ランスロット」の操縦席。

ギルフォードとアーニヤからの非難を、スザクは一言で遮った。

『味方の艦にヴァリスなど正気か!? あそこにはナナリー姫様もおられるのだぞ!』

「あれぐらい「紅蓮式」は止めます」

『近くにロイもいた。あの赤いのが防がなかったら、敵もろともロイは——』

「ロイはあれぐらいでは死なない。そうだろう」

『スザクっ』

アーニヤがまだ何か言いたげにこちらを睨み付けてくる。それを無視して、スザクは大アヴァロンの白い甲板に立っているライバルを見据えた。

● “ランスロット” の位置は “紅蓮” と、大アヴァロンに対して水平になっていた。これなら “紅蓮式” をあの武器で狙っても大アヴァロンは傷付かない。

「スザクか！」

カレンはヴァリスを輻射障壁ではじくと、見慣れた忌々しい機体の登場に “歓喜” した。

● 黒の騎士団としては、ここにきて “ランスロット” の登場は危惧すべき事柄だったが、カレン個人としてはよく来たなどと言ってやりたいところだった。

● 出撃前。カレンはゼロに呼び出された。

「なにか分かったの!？」

空間を布でおおっただけの簡素な場所。そこでカレンはゼロの親衛隊隊長という体面を捨てて、感情的にゼロ——仮面を脱いだルルーシユに詰め寄った。

ルルーシユは、部下のその行動を咎める事も無く、小さく頷いた。

「ああ、新たな事実がな」

彼は、傍の机からA4サイズぐらいの紙を取り出すと、それを差し出した。

カレンは、ひったくるように受け取った。

「……なによ、これ」

心臓が止まりそうになった。

その紙には、ライの結末が書かれていた。

黒の騎士団のバイザーをつけたライの写真と、

〈処刑済み。データ無し〉の無機質な文字。

カレンの世界が不意に歪む。足に力が無くなりグラリと崩れる。しかし、体が床の冷

たいコンクリートに触れる前に、だれかが彼女を支えた。

「大丈夫か？」

C・C・だった。

彼女はカレンを支え、心配そうに声を掛けた。しかし、そんな言葉などカレンには届かなかった。

それ程までに、目の前の事実は衝撃的だった。

「カレン。今は冷静になって俺の話を受け」

ルルーシユの淡々とした言葉。

いつもは尊敬にすら値する声でもあったが、今はそれがどうしようもなく腹立たしかった。

「冷静になれって……なれるわけ無いだろう！」

カレンはぶつけようの無い激情と、あふれ出てくる悲しみを目の前の男に浴びせた。手渡された紙を投げ捨て、ルルーシユを締め上げる。

細身の体はなす術なく持ち上げられ、蹴られて椅子が飛び、ルルーシユは苦しそうに息を漏らす。

「ちよ、ちよつと待てカレン。落ち着け、少し落ち着——」

「どういうこと！ 何なのコレは!? 何なのよ！ 何だ!?!」

感情のまま力任せにルルーシユを振り投げようとした所で、カレンの視界が反転した。

背中を引かれ、さらに足払いまでかけられたようだ。今度こそ、カレンは床の冷たいコンクリートに背中からぶつかった。

痛みには耐えながら頭を起こすと、そこには首を押さえて苦しそうにしているルルーシユを庇うように、C・Cが立っていた。

彼女は、呆れと、微細な怒りにも似た表情を浮かべてこちらを見ていた。

しかし、それはカレンを責める類のものではない。むしろ、

「気遣いも何も無くいきなり本題に入ったルルーシユの馬鹿さ加減には、私も女として腹が立たなくもない。だが、少しは落ち着け。話が進まないだろう」

「でも、でもC・C。ライが……ライが」

「ラ、ライは生きている」

ルルーシユが苦しそうに呼吸をしながら告げた。

カレンは、すでにポロポロと涙を流し始めていた目を丸くした。

「……へっ?」

C・Cが、スツと脇にどく。

ルルーシユは転がった椅子を直しながら立ち上がる。乱れた服装を整え、一度咳払いしてから、

「今度は話を最後まで聞いてくれ」

と念を押した。

「公式発表では、ライはブラックリベリオンの後、すぐに処刑された事になっている。それは資料にある通りだ。だが、俺はそれをウソだと思っている」

「どういう事?」

カレンは、力なく立ち上がる。そうするには傍のテーブルに寄りかからなければいけなかった。

ルルーシュは丁寧に説明した。

ライがこういう形で死刑とされているのはおかしいということ。

ライがブリタニアで生きている可能性が高いという事。

記憶を改ざんする皇帝のギアスの事。

そして、すでにルルーシュはブリタニア情報部へのハッキングを繰り返し、ライの行方を捜し始めているという事。

「これが、そのライ候補者リストだ」

カレンは、大辞典並の分厚い書類を手渡された。

「その中にライがいるとは言えないが、可能性のあるものを俺なりにリストアップしてみた」

カレンは黙ってその書類に目を通し始めた。

軍人、文官、学生、商人、執事、さまざまな人物のその詳細な経歴が写真付きで書き込まれている。

「どうだ？」

カレンが一通り読んだのを見計らって、ルルーシュが声を掛けてくる。

カレンは自信なさげに答えた。

「分からない。この中に本当にライがいるの？ その、皇帝のギアスとかで」

「それは俺も分からない。ブリタニアは広い。俺だつて全てのブリタニア人を調べ上げたわけじゃないからな。ただ、俺が確信を持つて言えるのが――」

「変な気遣いは止めて。断定じゃないんでしょ。ライが生きてるつていうのは」

被せるように言うと、彼はどこか悲しげな表情を浮かべた。その様子はまるで親に悪い所を指摘された子供のようだった。

「お前が俺の推論を信じないのも、その……無理はない。むしろ、お前の男を巻き込んだ俺に、いや奪つた俺に、まだよく仕えてくれるとありがたいと思うている。だから、俺はお前には最大限の誠意を持つてだな……」

「そんなのはどうでもいいよルルーシユ。少なくともあなたはライが生きていると確信している。そうね？」

その言葉にルルーシユは驚いたようだった。しかし、カレンの。先ほどとは違う力強い表情を確認すると、彼は、その瞳に力を込めた。

「ああ、そうだ。助けてみせる。アイツは俺の親友だ。だからカレン、お前も」
カレンは、その言葉にウソが無い事を感じ、頷いた。

「うん、分かつてる。正直、ゼロルルーシユに全て納得してるわけじゃない。けど、あなたがライを助けると言うのなら、私はあなたの指示に従うし、あなたの目的への協力も惜しまない。そうね、今この瞬間、あなたの道は、私の道になった」

ルルーシユは瞳を細めた。パツと見れば不愉快そうなかめつ面をしているが、この男は天邪鬼なので、おそらく、喜びを隠すためにこんな表情をしているのだろう。

ルルーシユは、カレンに数歩近寄った。

「分かった。誓おう。俺はライを取り戻す。そのために力は惜しまない」

「私も誓うわ。私はあなたのために力を尽くす。あなたの目的とライのために」

「これは契約だな」

傍で事の成り行きを見守っていたC・C・Cがポツリと呟く。

ルルーシユとカレンは、その比喩がおかしくて小さく笑いあつた。

「……ありがとうカレン。そしてすまない。俺はお前の大切なものを奪ってしまったというのに」

カレンは小さく首を振った。

「それは違うわルルーシユ。今の結果は彼が選んだ事だもの。きつと、ライは巻き込まれたとかそういう感情なんて持ってない」

そして、カレンはこの部屋に入って初めて優しげな顔ではほ笑んだ。

「しっかりしてルルーシユ。親友であるあなたまでそんな間違いをしていたら、ライが悲しむわ」

「そうだな……」

「カレン。大丈夫なのか」

C・C・に訊かれて、カレンは顔を向けた。

「大丈夫よC・C。もうたくさん泣いたもの。知ってるでしょ？ だから、大丈夫」

「カレン、お前……神経がずぶとくなつたな」

カレンはそれを聞いてガクツとコケそうになつた。

「そ、そこは、素直に強くなつたな。つて言いなさいよ」

「それはすまなかつた」

そう言つてC・Cは笑つた。



「会いたかつたわ、スザク……」

カレンの表情が怒りと喜びが入り交じつた複雑な表情を浮かべる。

自分とルルーシュの道を妨げる敵。特にこの男には個人的な恨みもタップリある。

そしてここは学園ではない。感情を抑える必要は無い。

戦場で、二人は兵士。

「アンタには……」

スザクはライを撃つた。傷つけた。許せない。許せるものではない。

同時に悔しい。

あいつさえ早めに殺しておけば、ライだってまだ自分の隣にいたはずなのに。

「今こそ……」

歪む。奴に対する何かが、それに呼応して表情が、心が、全てが奴にぶちまけろと憎悪に。

「こいスザク！ 私と戦え！」

『カレン。君はまだ戦っているのか……』

スザクからの声に、カレンは怒声で応じた。

「当たり前よ！」

『ライはもういない』

スザクのその言葉に一瞬息を飲む。

処刑。

イメージがよぎる。

（違う！ そんなわけない）

カレンは、思考を拒絶するように頭を強く振った後、ぬけぬけと告げた男を睨みつけた。

「黙れ！ お前の言葉など誰が信じるものか！」

スザクは、息を吐いたようだった。

『……なら、何も言う事は無い。今更、許しは乞わないよ』

その時、 “ランスロット” の右肩から長い砲身が伸びた。

「！」

カレンの脳裏に、 “クラブ” が長い砲身を携えて味方の “無頼” を屠った光景がよみがえる。

——来る。あの赤い閃光が！

『隠れろ！ 紅月！』

その時、近くにいた千葉の “月下” から、通信機越しに声が飛び込んできた。

カレンは岐路に立たされた。

(隠れるか？ いや駄目だ。あいつはここに味方がいたと言うのに、あの馬鹿みたいに破壊力のヴァリスを発射した。すでにあいつはブリタニアの軍人。敵を倒すためなら、味方の犠牲も省みない非常な男)

奴は信用できない。

奴は友達二人を売った男。

“紅蓮” を移動させれば、それに合わせて、照準を変えてくるかもしれない。例えばナリーがいる大アヴァロンを傷つける事になったとしても。

(防ぐしかない！)

それに今、大アヴァロンにはゼロもいる。

ナナリーを、そしてルルーシユを殺させるわけにはいかない。

判断した次の瞬間。あの「クラブ」とは比較にならない力強い閃光が「ランスロット」の砲身から撃ちだされた。

「お願い、紅蓮！」

「紅蓮式」は腕を突き出し、赤い障壁を展開する。

しかし、

「っ、まさか！」

輻射障壁のパワーがいつもより弱い。間に合わせのうえ、連射がきかない甲冑型、というのもあるかもしれないが、それにしても障壁の出力が低すぎる。

——故障!?

今の黒の騎士団の整備力の無さが、ここに来て決定的になった。

閃光が飛来する。それは障壁をやすやすとぶち破り、「紅蓮式」の命ともいえる右腕を奪った。



『紅月！』

「紅蓮式」が腕を失い、制動を失って大アヴァロンから落下していくのを、一機の

“月下”が追った。

それを眺めつつ、アーニヤはフロートを吹かし、頭上から、その“月下”を驚掴みにした。

『！』

パイロットが、驚きの吐息を漏らす。そして、手に持った剣でこちらを切りつけてきた。しかし、その剣は“モルドレット”の強固な装甲に阻まれる。

「おしまい。かくれんぼは」

“モルドレット”は、“月下”の頭部を握る力を強めた。

“月下”はその間に、何度も紫の装甲を切りつける。しかし、逆に切りつける刀が壊れる有様だった。

「赤いのは落ちたから、もう前線にでも大丈夫。ロイは心配しない」

“月下”のパイロットが聞けたのかどうかは分からないが、その言葉を最後に“モルドレット”は“月下”を握り潰す。

パイロットの安全を優先し、飛び出す脱出用のイジエクシオンシート。アーニヤにとつては大切な友達であるナナリーを襲った黒の騎士団だ。一瞬、撃ち落してやろうかとも思ったが。

「……やめた」

アーニャはそれを実行に移さなかった。ナイトオブテンのような趣味はないし。それに、ロイはそういうのは嫌いだろう。そう思ったからだった。

③巻 6話『守るべき者』

捕らえられていた状態を、スザクのお陰でなんとか脱出したロイは、紅の機体が落ちていくのをモニターで見ている。

“ランスロット”の“バドロンブラスター”が“紅蓮式式”の輻射障壁を破った時はヒヤリとしたが、コックピットブロックはどうやら無事のようなのだ。

「良かった」

ロイは安堵の息を吐いた後、はたと気付く。

「つて、なんでホツとしてるんだ僕は……」

思えばこの状況で“紅蓮式式”に降伏勧告など、馬鹿な事をしたものだと、ロイは首を傾げた。そして自分の行動を思い起こして、なぜそんな事をしたのかと不思議に思う。

敵に優しいのはいい。しかし、敵に甘いのはいけない。

それはロイにとって守るべき指針の一つなのだが、“紅蓮式式”への降伏勧告を初め、あの機体に対するロイの感情は、どうもその甘い領域に足を踏み入れつつあるようだ。

(うぐん。女性には弱いからな、僕は……)

戦場で戦う以上女も男も関係ないという主義のつもりである。しかし、まだその主義に殉じきれしていない部分があるのも自覚している。

『おく、結局スザクが良いとこ取りか』

“クラブ”の隣に“トリスタン”が、続けて“モルドレッド”も近付いてくる。

『良いとこ取りはいいけど、スザクはちよつと強引すぎ』

『……お前がそれを言うか』

先ほど“トリスタン”スレスレにハドロン砲を撃たれたのを思い出したのか、ジノがゲンナリとした様子で言った。

アーニヤが不満げに反論する。

『私はジノにもロイにも当てない自信があった。でもスザクは違う。スザクは完全に敵の判断に任せた攻撃をした。もし、あそこで紅蓮がヴァリスを弾き返してなかったら、ロイどころかナナリー総督も危なかった』

『でも、結果的に二人は助かったじゃないか』

『私は、ギャンブルでロイとナナリー総督の命を賭けてほしくないだけ』

画面でムツとするアーニヤを、ロイは手で制した。

「もういいよアーニヤ。ありがとう。でも、僕はスザクの判断は正しかったと思う。そ

もそも僕があゝの「紅蓮式」に油断して負けたのがいけなかったんだ。スザクは褒められこそすれ、責められるいわれはない。どちらかと言えば責められるのは僕の方だ」

『……』

アーニヤはしぶしぶといった感じで口を閉じた。

その時、スザクから通信が入る。

ロイは、恩人に笑顔を向けた。

『ロイ。無事か?』

「お陰でね。ありがとうスザク。助かったよ」

「良かった。じゃあ、僕はナナリー総督を探しに行く。後の事は任せてもいいかな?」

「もちろんだ。でも、総督の現在位置は分かっているのか?」

「セシルさんが探してくれている。それに、いざとなったら、あれを使う」

「分かった。僕の方でも「クラブ」のレーダーで探してみる」

『ああ、何か分かったら連絡を頼む』

「ランスロット」は身を翻して大アヴァロンの内部に向かっていった。

見送ってから、ロイは同僚の二人に告げる。

「さて、僕達は残りの一機を片付けようか」

『藤堂か。その必要は無いみたいだぞ』

ほらな、と「トリスタン」が指で示す、その先では「月下」のイジエクシオン・シートが海面に向かって勢い良く飛んでいく所だった。ギルフォードの「ヴィンセント」と「グロースター」がその後を追う。

どうやら、黒の騎士団は全て片付けられたようだ。

殲滅すべき対象がいなくなったのなら、ロイ達の後の行動は一つしか残っていない。

「よし、じゃあ藤堂はギルフォード卿に任せて僕達はナナリー総督の搜索を——」
三機が大アヴァロンへ機体を向けた時、

「！ 何だ？」

赤い光が弾けた。

振り返ったロイは息を漏らす。

手元のリーダーに視線を落とすと、LOSTのマークが三つ。

『おいおいおいっ！ 飛んでるぜ、あの赤いの』

ジノの声で顔を上げると、そこには確かに赤いKMFがあった。

「紅蓮式式」だった。しかし、先ほどまでの満身創痍とは違い、破壊された右腕は修復され、溶けた装甲は再生し、背中には尖った羽のようなパーツが付いていた。

興奮気味にジノが言う。

『へえ、黒の騎士団もフロートを開発してたのか。私としては、こっちのフロートより

あっちの方が好みだ』

『……でも、どんなにパワーアップしたって』

アーニヤの眩きに、ロイは同意する。

「だからといって、一機じゃどうにもできないさ。ジノ！　アーニヤ！　あれをやるぞ！」

『了解。牽制する』

『了解。でも私の出番ある？』

そう答えてジノは前に飛び出し、アーニヤは後ろに下がった。

二人とも、自分の機体の特性を把握した上での判断だった。

一方、ロイはMVSを構え、ジノに少し遅れて飛び出す。

この場合、ロイの役割はジノが敵を取りこぼした時のその始末だ。そして万が一、ロイも取りこぼせばそれはアーニヤが始末する。

いままでこの隊形を取って撃墜できなかった敵はいない。それどころか、アーニヤまで出番が回った事も無い。

だが、今回は違った。

“紅蓮可翔式”は、“トリスタン”に向けて右腕を突き出すと、そこから輻射波動の“弾丸”を撃ち出した。

ジノは、一度見せられた技に易々とやられる男ではない。

『へえ、おもしろええ!』

“トリスタン”は、神速の機動でその弾丸をかわし、戦闘機に変形してスラッシュハーケンを放つ。敵の七割はこれで沈む。だが“紅蓮可翔式”は的確に迫るハーケンをかわし“トリスタン”に接近すると、

『お、私を踏み台にしたあ?!』

なんと戦闘機形態の“トリスタン”を上から踏みつけて加速。その勢いで奥の“クラブ”に迫った。

「!」

“紅蓮可翔式”は、“トリスタン”を踏み台にした加速を生かし、ロイにとっては完全に予想外の速さで一気に接近する。

突き出される紅蓮の脚部。

回避か迎撃かを迷った一瞬の時間のせいで、結局その選択肢は二つとも消えた。

“クラブ”のメインモニター一杯に赤い足の底が映る。

『はああああああ!』

カレンの咆哮。

回避は間に合わず、“クラブ”の頭部に、体当たりにも似た痛烈な蹴りをくらう。

“クラブ”のコックピットが縦横無尽に揺れた。
何度か壁に頭をぶつけて、ロイは気を失いそうになる。

その様子を見ていたアーニヤの瞳に珍しく怒りの色がともり、口元に明確な歪みが生まれる。

『！・土足で』

“モルドレット”は展開していたハドロン砲の狙いをつける。

砲身に赤い光が灯り、戦艦を一撃で沈める閃光と熱量が飛び出た。それは真つ直ぐ“紅蓮可翔式”に向かって伸びる。

『紅蓮を、舐めるなああああああ！』

“紅蓮”は機敏な動きで赤い閃光を潜り抜けるようにかわすと、右手の爪をピンタの要領でぶん回した。

『！』

紅蓮に張り倒された“モルドレット”は、巨体を揺らし、道を譲った。
「くっ、まだ！」

『ラウンズ並の腕前かよ！』

その頃には、ロイもジノも改めて紅蓮を追う。

距離は空いている。ラウンズの三人はフロートの出力をあげた。

すると唐突に、紅蓮が上空で停止した。

「なにっ!？」

三機共、今度は減速する。

紅蓮は、先ほどまでの軟弱そうな白い爪とは違い、まるで肉食恐竜のような大きく鋭い爪を突き出すように展開した。

(また、あの弾丸か?)

ジノも、体勢を立て直したアーニヤもそう思ったらしく、いつでも回避できるような操縦桿を握る。

強力な輻射波動が飛び出ると言いながらも、しよせんは効果範囲が限られた弾丸。

来ると分かかっていてかわせないメンバーはこの三人の中にはいない。

(かわして、そのままの勢いで突っ込む!)

三人は一瞬で同じ事を決断した。すると、*“紅蓮”*の爪の付け根——いままでと違う機構——が、ガチャリと動いた。

〈収束の次に拡散に発想がいくのは自然な流れだよ〉

いつかのロイドの言葉が頭をよぎる。同時に、ロイドの背筋に何か冷たいものが伝った。

(まさか……!)

爪に充電していく熱量。

「二人共！ 散開——」

ロイが叫ぶのと同時に、膨大に広がった赤い閃光が三人を襲った。

●
アーニヤが目を開けると、そこには相変わらず青い空が広がっていた。

「あれ、私……」

紅蓮に張り倒されて、そして体勢を立て直して、改めて紅蓮を追おうとしたら。赤い閃光が視界一杯に広がって……。

『アーニヤー！ ジノ！ 無事か!?!』

ぼんやりとした脳内に聞きなれた声が飛び込んでくる。アーニヤはそれで完全に目が覚めた。

「ロイ」

『私も無事だ』

アーニヤと同時に、ジノも答えた。

『にしても、一体全体なんなんだ？ 私達は何をくらったんだ？ “トリスタン”も全く動かないし。あゝくそ、後はスザクに任せるしかないな……』

ジノの問いに、画面上で操縦桿をガチャガチャと動かしているロイが答えた。

『おそらく、あれは僕の可変ハドロンプラスター拡散モードと同じように、輻射波動の弾丸を拡散させた攻撃だろうね。見た目のダメージはほとんど無いみたいだけど、……駄目だ、センサーをはじめ精密機械が全部いかれてる』

それを聞いてアーニヤも操縦桿を動かしてみた。確かに精密機械に深刻なダメージを受けたようで、“モルドレッド”は錆びたゴーレムのように軋みを上げながら、断続的に動くだけ。これでは戦闘は不可能だ。

仕方が無いのでアーニヤは視界を上に向けた。“紅蓮”とスザクの“ランスロット”が戦っている。しかし、その戦いもすぐに終わった。

スザクは“紅蓮”に背を向けて大アヴァロン内に突入し、“紅蓮”も“ランスロット”を追わず、大アヴァロンの周囲を、何かを探すように飛び始めた。

『つて、おいおいロイ！ お前大丈夫か!?!』

ジノの声を聞いて、アーニヤはモニターに視線を戻した。そして彼女は目を見開いて、一瞬、呼吸を忘れた。

「！ ロイ」

先ほどは光の加減で気付かなかったが、ロイの頭から顔の三分の一を隠すように血がダラダラと流れていた。

弱々しく、ロイは笑った。

『ああ、実はさつき蹴られた時に頭をぶつけてね。大丈夫、と言いたいところだけど……』

ロイの顔から、血の気が失せている。いや、さらに失せていく。

『ごめん、駄目だ。悪いけど“クラブ”の回収は任せ、る……』

そして、ロイは頭を垂れると、気を失った。

一応はフロートシステムが起動しているので、急に海に落ちたりはしないが、それでも“クラブ”は糸が切れた操り人形のように、だらしなく四肢を垂らし、青い機体はゆっくりと高度を下げていった。

アーニヤは、一瞬何が起こったのか理解できなかつたが、

「……ロイ？　ロイ!？」

アーニヤは叫ぶように呼びかけながら、“モルドレット”を、急いで“クラブ”に寄せる。

それをジノが声で制した。

『むやみに動かすな！　運ぶならゆっくりとだ!』

「でもジノ！　ロイが——」

アーニヤの声は今にもかすれそうだった。瞳にも水分がたまり始めている。そして思い通りに動かない“モルドレット”に苛立ち、乱暴な手つきで操縦桿を動かし、とに

かく一刻も早く「クラブ」に駆け寄ろうとした。

アーニヤの脳裏には。もはやモニター上でありえない量の血を流すロイしか映っていなかった。

その様子を見たジノは、目を吊り上げた。

『バカヤロウ！ 落ち着けナイトオブシックス！』

ジノは珍しく語尾を強めて、アーニヤを諫めた。そして、彼は一度息を吐いてから口調をゆるやかにする。しかし、その声には軽くドスがきいていた。

『もう一度言うぞ。落ち着いて、そしてゆつくりと運べ。それができないならできないと言え。私がやる』

「……できる」

首を振り、感情を収め、表情を落ち着いたものに戻してからアーニヤが答えると、ジノは穏やかに『それでいい』と言った。

『なら任せる。あと、そう心配するな、ロイはただ気を失っただけだって——ロイド伯爵。これより帰艦します。ロイが負傷したんで、一応医療班の手配を』

ジノがロイドと、事務的な会話を交わす隣で、アーニヤは指で瞼を拭い、心配そうな顔をモニターのロイに向けながら「モルドレッド」に「クラブ」をゆつくりと抱えさせる。

本来なら、KMFにはこういう騎士が意識を失った時に備えて自動で帰艦できるプログラムが入っていたりするのだが、輻射波動をくらって、精密機械に甚大な被害を受けた以上、それは当てにできないだろう。

“クラブ”はマニュアルで“アヴァロン”まで運ぶ必要があった。

「ロイ……」

アーニヤはもう一度、画面のロイに不安げな視線を送った後、

「つ、よくも……」

一転して、唇を噛み、怒気の炎を内包した瞳で空の紅蓮を睨みつける。

じきに、スザクがナナリー総督を救出したという連絡が入った。しかし、アーニヤはその本来なら喜ぶべき知らせにも何の反応も示さなかった。

彼女は丁寧に、それこそ赤子の手を握るかのように優しく操縦桿を動かし“クラブ”を抱える“モルドレッド”を操り“アヴァロン”への着艦作業に入るまで“紅蓮可翔式”と紅月カレンを奥歯を噛みしめながらモニターに映し出される限り、睨みつけ

た。

——アイツはいつか私が落とす。

● そう決意したのは、この時だった。

——ねえ、〇イ。

呼びかけに、自分は手をあげて応じる。

笑顔を浮かべたのは、無意識だった。

彼女と顔を合わせるのは、純粋に楽しいことであり、嬉しいことであり、幸せなことであつた。

態度だけではいけないと思い。口を開く。

だが、声が出ない。

おかしい。喉に何かが詰まつたかのようだ。

やがて、彼女は離れていく。

呼び止めようと、手を差し出すが、相変わらず声は出ない。

それ以前に、彼女の名前が出てこない。

先程まで理解をしていたのに。

赤い髪に快活な印象を与える顔立ち。

誰であつたか。

どこで会つたか。

どのような関係だつたか。

記憶をたどる。

すると、その少女は消え失せて、目の前には見慣れた貧困街の光景が広がった。自分が生まれ育った街だ。

しかし、なぜだろう。その光景は、まるで映画のスクリーンでも眺めているかのよう
な、ひどく実感が沸かない映像のような……。

目を覚ます。

薄暗い空間に青い天井。視界の隅には点滴袋も見える。

自分がベッドに寝ているのだと自覚するのに、そんな時間はかからなかった。

「ようやくお目覚めか、ロイ」

声のほうに顔を向けると、そこにはジノがいた。

疲れたような、そんな顔をしている。

隣には、暗くなった空と白い雲が見える窓がついていた。もう遅い時間なのだというのは、それで分かった。

「ずっと、そばにいてくれたのか」

ロイは体を起こす。

そして徐々に思い出す。自分たちが、ゼロに襲われたナナリー姫の護衛のために、
“アヴァロン”にて黒の騎士団と戦ったことを。

「そばにいるのは、私だけじゃないよ」

ジノは、床に指を向けて、何度か上下する。

視線を落とすと、そこには桃色の髪の少女——アーニヤの姿があった。

彼女は、ベッドに顔を付けて、安らかな寝息を立てていた。

「私はスザクと交代だったが、アーニヤはお前がここに運ばれてからずっと付いていたよ」

「……そうか」

ロイは桃色の髪を撫で、心の中で感謝の言葉を呟いた。

「そうだ。ナナリー姫様はご無事か？」

「スザクが助けたよ。心配するな。今は自室で休まれている」

「そうか、それは良かった……」

胸を撫で下ろす。彼女の身に何かあれば、本国にいるときから協力して準備してきた例の件が実行不可能となるというのもあるが、ロイにとっては、その件や主従関係を抜きにしても彼女の無事は純粹に喜ぶべき事だった。

「僕は、どれぐらい寝てた？」

「五時間ぐらいかな。ちなみに、今はエリアーの空域に待機中だ」

元々、ナナリー姫のエリアーの空港到着はテレビにて生放送される予定だった。し

かし、ルート変更もあって、到着時間がズレた。

深夜よりは朝々昼に到着とし、放送した方が視聴率が稼げると、ブリタニアらしいそういう判断だろう。

「ちなみに、なぜエリアー近辺の空で待機しているかというとだな——」

「事情は大体分かる。テレビ放送のためだろ」

ジノは頷きもせずに、ただ言葉を止めて肩をすくめた。

「体は大丈夫なのか？」

問われて、ロイは軽く体をひねり、腕を回す。

「頭がボーとはするけど大丈夫だ。あえて言えばお腹が空いたな。血が足りない」

「分かった。何かもらってこよう。さつきセシルさんが見舞いに来てくれたから、彼

女に軽食でも作ってもらって——」

「カップラーメンが食べたいっ!!」

大声を出しすぎて、ロイはめまいがした。思わず手を額に持っていき、落ちそうになる頭を支える。

「な、なんだよ急に大声出して、びっくりするじゃないか……」

「頼むジノ。カップラーメンを、後生だからカップラーメンにしてくれえ！」

体の不調を堪えながら、声を搾り出す。

う、
ジノはよく分からないといった様子だったが、ロイの懇願に何かを感じ取ったのだろ

う、
「後生？ 意味は分からないが、なんとなく分かったよ。カップラーメンだな。まったく、さつきまで気を失ってたつてのに、変なやつだなあ……」

と、言つて早足でこの部屋から出て行つた。

ロイは、再び胸をなでおろす。

一日に、二回も気を失うのは遠慮しなかった。

「ロイ、目を覚ましたの？」

そんな事をしているうちに、桃色の髪がゆつくりと起き上がった。あれだけ目の前で騒げば当然と言えば当然だが。

「無事？ 大丈夫？」

彼女は眠たげな瞳を手でこすりながら、憂いを帯びた表情をこちらに向ける。

ロイは、大丈夫だということを証明するために笑みを浮かべた。

「ああアーニヤ。大丈夫だ。心配かけたね」

「そう」

彼女は、一瞬だけ安堵した表情を浮かべたが、すぐに

「悪い夢でも見てた？」

その質問に、ロイの心臓は一度だけ高鳴った。

「? どうして」

「運ばれた時、『紅蓮式』のパイロットの名前を、しきりに呟いていたから」

夢の中の女性の顔が、明確となった。

(そうか、あの女性は『紅蓮式』のパイロットか)

自分を撃墜しかけた上に、気を失わせ、『クラブ』を戦闘不能にさせた女性パイロット。

(印象は強く残っている。夢にまで見るのも、無理はない、か……)

なにか釈然としない夢だったが、それを見る理由としては今日一日の出来事がかんがみれば十分なのかもしれない。

(いや、しかし、夢では僕は彼女を恐れていなかった。それどころかむしろ……)

「ロイ?」

「んっ、ああ。何でもない。しかし、情けない話だなそれは。怯えて夢に見るなんて」
取り繕うように、そういう事にした。

「……」

アーニヤは、労わるような手つきでロイをベッドにゆつくりと倒した。

「今日は、もう少し休むといい」

心配そうにアーニヤが提案してきた。

「ロイ。大丈夫。次は私があなたを守るから」

「ありがとう。でもそれは、僕からも言いたいね」

「期待してる」

アーニヤのほほ笑みが、暖かかった。

ああ、そうだ。とロイは思い直す。

自分の守らなければいけないものは、傍にある。夢のことなど、気にしている余裕は無い。

とりあえずジノが戻ってくるまで、ロイはアーニヤに従って横になることにした。

③巻 7話『ロイの本質』

『行政特区日本を設立します』

総督就任式の全国中継で、そう宣言したナナリーを、それぞれのラウンズはそれぞれの表情をもって受け止めていた。

スザクは驚き、

アーニヤは淡々、

ジノはため息をつき、

ロイ・キャンベルは苦笑いだった。

ナナリーの発言に対する反応は、やはりというか予想通りというか、発表後に政庁内で執り行われた会議では反対の声が巻き起こった。しかし、ロイ、ジノ、アーニヤや文官の取りまとめであるローマイヤがナナリーの発言に対する擁護に入ると、その声は次第に沈静化していった。

会議終了後、ローマイヤがナナリーの行政特区日本宣言を庇うような行動をしたのをロイは意外に思い、呼び止めて尋ねてみると、

「別に賛成なわけではありません。むしろ反対です」

緑色の淑女服に身を包む彼女は、キツパリとそう言い切った後、不機嫌そうに眼鏡をかけ直す。

「ただ、すでに『総督』が『公式の場』で発表してしまった事に反対してどうするのですか……」

そう言つて彼女は、行政特区日本に参加を希望する日本人の受け入れ体制を整えるための案を作成するために、しぶしぶといった様子を漂わせながら自分の執務室に入つていった。

まあ、そう言われてみれば、といった感じでロイはローマイヤの行動を納得した。しかし、ロイはもう一人、その行動に納得がいかない人物がいる。

「なんで僕が会議でナナリーを擁護しなかったか、かい？」

ナイトオブセブンの執務室。ロイからの質問を聞き返したスザクは、テーブル上の湯呑を口につけると、笑っているのか怒っているのか、それとも表情を変えていないのか判断がつきにくい顔をした。

スザクは、先ほどの会議においてこのエリアーにいるラウンズの中で唯一、ナナリーの発言については何も語らず、結局そのまま最後まで口を開かなかつた。

「そうだね。驚いたから、というのが本心だよ。だからどうしていいか分からなかつた。賛成するべきか、反対するべきかもね。まさか総督があんな事を言うとは思わなかつた

から」

そしてスザクは、再びお茶をすすする。

ロイはその行動を黙って見つめていた。しばらくの沈黙の後、

「……君は知っていたのか」

スザクが不意にポツリと呟いた。

今度はロイが黙り、目の前に用意された湯呑に初めて手をつける。それを口の前まで運んぶと、茶葉の香りが湯気と共にロイの形の良い鼻をくすぐり、同時に分厚い眼鏡を曇らせた。

「僕としては、君が知らなかった事の方が意外だった」

ロイはお茶をグイッと飲んだ。すでに熱湯と言える温度では無くなっていたが、それでも多少は熱いお茶を、一気に飲み干す。

「察してはいたんだろ？」

尋ねると、スザクは静かに頷いた。

「総督からユフィの意志を継ぎたいというのは以前から聞いていた。でも、それがいきなり行政特区日本に飛ぶとは思わなかった」

それはロイも同じだった。もつとも、ロイは以前からナナリーに相談を受けていたから、いつかナナリーは行政特区日本をやると思っていた。しかし、それはあくまで、ナ

ナリーの意志の「通過点」としてで「到達点」ではない。だから実行するとしても、こんなすぐではなくて、総督の意志が軌道に乗る、早くても数年後だろうとロイは予想していた。

「総督は無意味に急いでおられるんだ。だから、ユフィの意志ではなく行動を真似しようとする……ねえロイ。君はどう思う。今回の行政特区日本について」

「失敗する」

ロイが即答してもスザクは顔色一つ変えなかつた。

驚かないところを見ると、おそらくスザクも同じ考えなのだろう。いや、自分とスザクどころか世界のほとんどの人間が同じ考えに到達しているのかもしれないな、とこの時にロイは思ったりした。

「さっきの会議の通りさ。ブリタニアに味方は無く、イレブンは僕たちブリタニアを信用しないだろう。イレブンについてはカラレス総督が相当嫌われる事をしてきたから当然と言えば当然かな」

ロイはあえて、カラレス総督の行いより、イレブンの心境に影響を与えた一年前のあの事件——ブラックリベリオンの原因になったあの事件——の事は言わなかつた。

しかし、スザクは当然その事に思い当たっているだろう。「イレブンは僕たちブリタニアを信用しない」というロイの言葉を聞いた時、スザクの瞳に悲しみがよぎつたのを

ロイは見逃さなかつた。

「そうだねロイ。今回の総督の行政特区日本も失敗する。それは確實だろう」

スザクもそう言い切つた。しかし、

「それでも僕は、ナナリーがユフイの意志を継いでくれるというのなら。今回は失敗だとしても、できる限りの協力はしてあげたい。それが例え、ナナリーの意思に背く事だとしても」

「そうだね。それがいいだろう」

ロイは頷いた。

このとき、ロイはスザクのこの言葉を、

スザクは自分の意志を示した。

と、それぐらいにしか思つていなかった。正直、軽く受け取つていた。

スザクがナナリーの意志に背く。そんな事などあるわけないとタカをくくつていたのかもしれない。あるいは長い会議の後だったので、頭の回転が遅くなつていたのかもしれない。

しかし、ロイは失念していた。スザクがその意志を行動とする事に、何の躊躇いも無い男だという事を。

それに気付いたのは、スザクとのその会話から一〇日がたった後だった

ロイが、ローマイヤとシズオカに到着し、行政特区日本の会場設営と警備について話し合いながら視察を続けている途中にその知らせは届いた。

すでに空は暗くなり、ローマイヤとホテルに引き返そうか話をしている最中の事だった。

『枢木卿。オガサワラにて黒の騎士団捕縛作戦を展開！』

ロイはその知らせを聞いた時、手に持っていた数枚の書類を落とすした。

隣のローマイヤは眉をピクリと動かしたただけだった。

○

黒の騎士団が小笠原近海に潜伏しているのを発見。

ナイトオブセブンは降伏と武装解除を相手に通達後、返答が得られなかったため直属艦隊とエリアー統治軍の混成部隊はこれを捕縛しようと作戦を開始。

しかし、黒の騎士団のリーダーゼロが作戦途中で姿を現し、行政特区日本に参加する旨を宣言したので枢木卿は作戦中止を決断。撤退を指示。

「さて、僕は何から聞けばいいんだろうか」

小笠原の戦いから引き上げてきたラウンズの三人を、政庁で待ち構えていたロイは、早速三人を会議室に押し込んだ後、重い声で尋ねた。

数十人が一齐に会議ができる場所に四人。部屋は広いが、ロイの声はその震えまで全

体に良く通った。

「……聞きたい事があるのなら、早く頼むよ。この後、僕は事後処理をしなきゃいけないから」

そう臆面も無く言ったのはスザクだった。スザクはそっぽを向き、先ほどからずっとロイとは目を合わせていなかった。

スザクの対面に座るジノが、大きな手で顔を覆って首を横に振った。

「じゃあ、単刀直入に聞かせてもらおう。スザク。君は今回の行動をどう考えているんだ」

「どう? とはどういう意味だい。もっと明確に言ってくれないと分からない」
「僕が君に法的に問題ないか尋ねているとでも?」

ちなみに、スザクの今回の行動は、例え総督の意志に反するものであったとしても、法的には何の問題も無い。そもそも黒の騎士団はブリタニアにとって指名手配うけている立派なテロリストであり、ブリタニア軍が捕らえるべき義務を負った存在なのだ。

それにラウンズは自分の部隊の運用にかなりの裁量権が与えられている。それを制限、もしくは行動を摘発できるのは皇帝陛下だけであり、総督ではない。そして、皇帝陛下は、おそらく今回の件でこのスザクを責めることはしないだろう。

つまり、スザクが黒の騎士団を捕まえようとした行動だけを見れば、違法では無く、完

全な合法であり、本来であれば誰からも責められるいわれは無い。

しかし、ロイはスザクを責めなければいけないかった。いま、こんな出来事があつたとは知らず、文官と力を合わせて行政特区日本を設立させようとしているナナリーのために。

「もう一度尋ねさせてもらう。スザク、君は今回の行動をどう考えているんだ？」

「黒の騎士団はテロリスト。それを捕らえるのは僕たちの任務の一つだと考えるけど」

ロイは机を強くたたいた。ジノとアーニヤが微かに肩を震わせる。それに気付いて、ロイは努力して緩やかな口調を心がけた。

「ナナリー総督には、何とご説明するつもりなんだ」

「ありのままを」

それを聞いて、あく、もうだめだ。とロイは思った。

「ふざけるなよ」

今度こそ静かだが明確な怒りを含んだ声を発し、ロイはもう一度を机を強くたたいた。

スザクはここに来て初めてロイと目を合わせた。彼の冷ややかな瞳が、ナイトオブゼ口を見返す。

「ふざけてなどいないさ。僕は今回の行動こそがナナリー総督のためになると信じてい

る」

「総督のため？　黒の騎士団に行政特区日本への参加を呼びかけていた総督の意志を無視して、総督の補佐役である君が黒の騎士団の捕縛に乗り出した行動がナナリー総督のためだと、君はそう言うのかスザク」

「その通りだ」

スザクも瞳を尖らせた。しかし、ロイはレンズの奥でもつと瞳を尖らせた。

「今回の行動を知ったイレブンが、ナナリー総督の事を何て囁き始めているのか君は知っているのか？　『嘘つきナナリー』だ。情報規制は敷いたけど、あんな近海でドンパチをやったんだ。完全に情報が広がるのを防ぐのは不可能だろう。まさか、なんで総督がそんな不名誉なあだ名を付けられたか分からないって言うんじゃないだろうね」

「分かっているさ。ナナリー総督が黒の騎士団に行政特区参加への呼びかけをしていたにも関わらず、総督の補佐である僕が、黒の騎士団が特区参加か不参加かの表明前に捕獲に乗り出す。事実的に、僕はナナリー総督の言葉をウソにしてしまったに等しい」

ロイの拳に力がこもった。

「分かっているながら。なぜだ」

「僕は、黒の騎士団の本質を知っているからさ」

「本質？」

聞き返したロイに、スザクは確信を込めて言った。

「黒の騎士団は危険だ。そしてゼロもね。彼らはナナリーの意思の前に必ず立ち塞がる。いいかいロイ。黒の騎士団とは手を取り合うべきじゃない。殲滅すべきなんだ。……ロイ。君は甘すぎるよ。それは君の美德であるから、僕は好意を抱くけど、それを黒の騎士団に向けるのはやめた方がいい」

「……」

ロイは、ここである事を確信した。それにしたがって頭に上つていった血が急速に落ちていく。

「甘いだって？ スザク。君は分かかっていない。僕が怒っている理由を……」

革張りの背もたれに体を預けながら、ロイは軽い失望を口調に漂わせた。

「甘いのは君だよスザク……」

スザクがその表情を軽く怪訝な色に染めた。

「僕が、甘い？」

「黒の騎士団を殲滅しなければいけない。という思想を持っているのは君だけじゃない。僕だって同じだ」

と、ここで、その言葉がよほど意外だったのか、スザクは驚いた様子で目を丸くする。

「えっ……」

「僕が問い詰めてるのは、何で黒の騎士団の捕縛を君がやったか。という事だ。もつと言えよ。こつやつて僕みたいに怒るのは君の役目だ」

「どういう事だ」

「君は何だ？ ナナリー総督の補佐官だろ」

「そうだ。だからこそ、僕は——」

「だからこそ、やつてはいけなかつたんだ……君はナナリー総督を裏切つてはいけない。ナナリー総督が黒の騎士団と戦う意志を無しとした以上、君は不本意でも……少なくとも表面上はそれに従わなくてははいけない。ラウンズとして、総督に同行するというのこそういふ事じゃないのか？」

「しかし、だれかがやらなければ……」

「だから、なぜその誰かで僕を使わない。いいかいスザク。君は常にナナリー総督を擁護すべきだ。ああ、これはナナリー総督に反対意見を言うとかそういう事ではないよ。でも君は、表面上ではナナリー総督につき従う騎士であるべきだ」

そしてロイは、体を前に倒して肘を付き、テーブルの上で指を絡ませた。

「ド口を被るのは僕たちでいい。そのために君以外のラウンズが三人もいるんだ」

つまり、平和路線のナナリーと日本人のスザクは、ナナリー総督が望む日本人との融和路線の象徴でないといけない。とロイは考えていた。象徴というからにはそこに一

片の影や曇りがあってはいけない。

そのスザクが日本人の味方である黒の騎士団を捕縛する。これは、日本人に不信感を抱かせるには充分だ。しかし、黒の騎士団はナナリー総督の提案に乗ってくる事は無い危険な存在なので放っておくわけにもいかない。

ならば、それはスザクとナナリーの少なくとも表面上はあずかり知らぬところで行えば良いだけの話だ。

だから、この場合、黒の騎士団捕獲作戦で陣頭指揮を執るべきだったのは、スザク以外の三人のラウンズだ。

そのラウンズの仲でも特に権限の低い（と、少なくとも世間に認知されている）、例えばロイが暴走して、黒の騎士団を捕らえるために出撃、捕縛。

そして、その行動をこのエリアで地位の高いナナリー総督とスザク、さらにジノとアーニヤが声高らかに責め、日本人には黒の騎士団の解放を約束するとともに行政特区日本の参加を改めて黒の騎士団にお願いする。こういうシナリオにすれば、少なくともナナリーの発言はウソにはならないし、日本人からのスザクの印象が崩れる事はない。

それに黒の騎士団を捕らえて、一度でもブリタニアの手の内に入れてしまえば、料理のしようなどいくらでもある。それこそ、うまい餌、妥協案、強いては拷問まであらゆる手を使い、黒の騎士団に共同歩調を取らせる事も可能なはずだ。

なんなら、ゼロを捕らえた後、その存在を「消して」、新たにこちらで「ゼロを作る」という手もある。ナナリーの行政特区日本に必要なのは黒の騎士団ではない。ゼロだ。

「ブリタニアに協力してくれるゼロという存在」さえいれば、いくら古株の藤堂や皇が騒いでも、そんなものは小波のようなもので。結果、ナナリー総督の政策もスムーズに運べるだろう。

もつとも、このいくつかの手段はロイにとつてあまり好ましくも望ましくもない手段ではあるが、必要ならば躊躇わないのもロイ・キャンベルという人間である。

ロイは、善人ではあるが聖人ではない。

最終的に、今回のスザクの行動によつてもたらされたものは、ナナリー総督の信頼の失墜、三桁に昇る死傷者、この二点だけである。

これを不毛と言わずになんと言えば良いのか。

それらの説明を聞いて、スザクはただただ目を丸くした。

「スザク。君は優しい。だから、他人にドロを被せるというこの事に頭が回らなかつたんだと思う。だから君は甘い。君には信頼する仲間にドロを被つてくれとも言えないんだからね」

「……しかし、ロイ。君は僕とナナリーを象徴と言うが、ナナリーはともかく僕は日本人

にしては裏切り者、ゼロを捕らえた男だ。そんな僕が——」
「だからこそだ」

ロイはスザクの言葉に被せる。そこには有無を言わせない何かがあった。

「君には、総督の意志実現のためにゼロと共同歩調を取ってもらいたかった。お互いの過去は忘れ、日本のためにね。もちろんそのゼロは本物でも偽者でも構わないわけだけど」

そして、ロイは眼鏡をかけなおして、少しだけ口元を、悪の組織の幹部のように樂しげにゆがめた。

「みんな大好きだろう。敵対していたライバルが和解して、仲間になるっていうシナリオはさ」

ロイのその言葉と笑みに、同僚の三人は微かな寒気を覚えた。

かつて、ジノはロイの事を「正道すぎる」と言った事があった。しかし、それは必ずしも、ロイに正道以外はできない、と結びつかない。

ただ、ロイは正道を極端に好むだけなのだ。だが、そんな謀略じみた事をするのは非常に抵抗があるロイだが、それがもつとも良い、もしくはそれしかない、それが一番被害が少ない”と判断した時は躊躇わずそれを実行する。

ロイは心に健全な面を持つ一方、その逆の、それこそブリタニアの貴族の間で往来す

る悪意の応酬を非常な手段で逆手に取れるだけの陰湿さも持ち合わせていた。

ただ、その陰湿さを必要なものとしながらも、それを使いたがらないのもやはりロイであった。

しかし、今回はそれしか無かった。ナナリーは行政特区日本設立のためにゼロを必要としている。でもゼロは首を縦に振らない。だったら首を縦に振るゼロを用意するしか無いではないか。

「だけど、僕はゼロを許すつもりは……」

ロイは、スザクにその反論を許さなかった。

「だから、そのゼロは本物じゃなくてもいいって言っただろう。君が過去の復讐を果たしたいというのなら、ゼロを捕らえた後、收容所の隅でもやっててくれ。君はあくまで、こちらで用意したゼロと手を取り合ってくれればいいんだ」

スザクはまた目を見開いた。スザクには理解できたのだろう。この銀髪の同僚がそう言っただけならはそのように事を運べるだけの自信と、そして準備があったのだと。

「ようも、そんな事が考え付く……」

「もつとも。今回の君の行動で全てがパーになったけどね」

「……」

「とにかく。今後、このような行動は慎んでくれ。もつとも、ナイトオブゼロは君に命令

する権限は持たないから、これは単純なお願ひになる」

その時、今まで黙っていたジノがそつと手を上げた。

「あく、ロイ。この事は、ナナリー総督にはすでにご報告済みなのか？」

「いや、まだだ。ナナリー総督にはローマイヤさんがおりを見て、話してくれるそうだから、そのタイミングは彼女に任せよう」

「ロイ」

スザクが呟いた。ロイは顔を向ける。

「何だい？」

「君の言う事も分かる。しかし、そんな損得勘定だけでは……」

そして、スザクは苦い怒りを押し殺すように言う。

「損得勘定だけでは……」

スザクの鍛えられた拳は小さく震えていた。

ロイはそんなスザクを悲しげに見つめ「僕が言いたい事は以上だ」と言つて、少々乱暴に席を立つた。

③巻 8話 『過去からの変化』

夜風が通る。

ここは政庁の庭園。すでに辺りは暗くなっているため、咲いている花は少ない。それでも一面から甘い香りが漂ってくる。

女性とは、花の香りというのに得てして弱いものであり、それはこのナイトオブシックス——アーニヤ・アールストレイムにとっても例外ではなかった。

アーニヤは、その庭園の一角にあるお気に入り場所の座りながら携帯をいじっていた。

三日前の、自分の日記を振り返る。

今日。ロイがローマイヤとシズオカに視察に出て三日がたつ。

ロイは私との約束である、二時間に一回のメール、をしっかりと守っている。しかし、そのメールにローマイヤとのツーショット写真が添付されているのはいかがなものだろうか。

いや、ただのツーショット写真ならまだいい。問題は、その写真に写る「ローマイヤさん。一緒に撮りましょうよ」「キャンベル卿。私たちは任務でここに来ているわけ

あつて、遊びに来たわけではないのですよ」「いいじゃありませんか、記念にもう一枚だけ」

「仕方ありませんね……。もう一枚だけですよ」なんて会話をした後で、困ったような、でもちよつとうれいようなローマイヤの表情はいただけでない。というか近い。体の距離が近い。肩を抱いているのもある。これはどうするべきだろうか。これは、一体全体ど、ど、ど、どううううするううううううう。

(中略)

昼食後、スザクから話しかけられた。内容は支援要請だった。黒の騎士団を見つけたからそれを捕縛する手伝いをしてほしい、と。

私はそれをスザクがやっていいものかどうか疑問に思った。どう考えても、今の時期、スザクが黒の騎士団の捕獲作戦なんてやったら政治的に見てもマズイし、ナナリー総督が悲しむのは容易に想像できた。

スザクの後ろにいるジノは、やる気マンマンのようで「紅蓮にこの前の借りを」とか言っている。

ジノは、優秀と言つても、出は名家の貴族。こういう人間の恨みつらみが関わる問題には疎いらしく、この行動がどういう意味を持つかに気づいてないらしい。

私は、ロイにこの事を知らせようか迷つた。彼が、自分の名誉が傷つくのを承知で、ナ

ナリー総督の理想実現のために裏でコソコソと黒の騎士団を捕らえるために動いているのは知っている。

今回のスザクの行動は、そのロイの謀略めいたものを完全に無にするものだ。私は、胃になにかどんよりとした重みが発生していくのを感じ、結局昼食を残した。

(中略)

やはりロイには伝えるべきだろうか、と私は「モルドレッド」のコックピットに乗り込んだ今でも迷っている。

だが、私はやはりロイにはこの事を伝えたくないと思う。知らせばロイはスザクの行動をなんらかの方法で止め、それが無理ならば、先回りして単身部隊を率い黒の騎士団を捕らえるために予定を前倒ししてでも行動を起こすだろう。

ロイは自分の部隊を持ってないが、私はロイに部隊を貸してほしいと言われたら断る自信が無い。

ロイが黒の騎士団を捕縛すれば、彼はさらに不名誉な事を言われるだろう。

イレブンからは恨まれ、ブリタニアからは、これだから育ちの悪い貧乏人騎士は、とののしられるだろう。

特に、あのロイにくだらけでない恨みを抱く情報部のドクトリン將軍などは手をたたいて喜び、その過失を——皇族であるナナリー総督に従わなかった不忠の騎士として言いふ

らし、信頼の失墜を図る事は簡単に想像できる。そうなれば、ロイは軍での立場をますます失う。

ロイはナナリーの理想のためならば、もともと無いに等しい自分の名誉なんて、と言うだろうが、私にはそれが耐えられない。

ロイは優秀なのに、なぜブリタニアからも、ナンバーズからも嫌われなくてはいけないのか。

好かれるべき人物なのに、彼はいつも普通の人嫌がるような汚れた道を笑って進み、それが報われる事は無い。

それが納得できない。だから、私はこの事をロイに伝えずに出撃した。

私は、ロイが誰かに好かれる事にあまり良い感情を抱かない。でも、私はロイがみんなに嫌われるのもっと嫌だ。

気付いているのにも関わらず言われるがままに出撃する事を、ロイは怒るだろうか。

それが不安と言えば不安。

視線を携帯から外して、アーニヤは夜空を仰いだ。

「……………ふう」

それは、何に対してのため息なのかアーニヤには分からなかった。

結局、ロイはスザクの言に従って出撃したジノとアーニヤを責める事は無かった。

ただ一言「僕達たちはナナリー総督を助けるためにここにいるんだ。分かるね」と、告げただけ。

しかし、アーニヤは、ロイの言う事もハズレなのでは無いかと思う。ロイは総督が目指しているものをそのまま実現させるのが自分たちラウンズの今回の任務だと思っている節がある。

だが、そもそもラウンズとは皇帝陛下に仕えるものであり、その行動はブリタニアの国益につながるかどうか判断の比重を置くべきだ。

その点を考えれば、今回のスザクの行動は正しかったといえる。

黒の騎士団は信用に値する組織ではない。殲滅すべき対象だ。それがブリタニアにとって、最も良い国益につながるはずである。その視点から見るとナナリー総督の考えやそれを完全に擁護するロイは、国益に反している存在と言える。

「結局。スザクもロイもどっちも甘い」

呟いて、その言葉を携帯の日記に残す。

(でも、そんなナナリー総督の意志を実現させてあげたいとどこかで考えている私も甘い……。そしてそう考えているのに、そのために最も良い方法を選択しようとしていたロイを見捨てられず、スザクの言う事に従った私は……)

甘い中でもさらに甘いという事か……。と、少女は、今度は自分に対して呆れるしか

ない。

そう考えると、このエリアにいるラウンズは、ラウンズの中でも特に甘い人間が集まっているようだ。

なにせ、スザクのように一見は総督に逆らった行動をしている人でも、その行動の根源はナナリー総督の意志の実現のためである。ロイは言うまでも無く、ジノもナナリー総督のために行動している。

他のラウンズならば、ナナリーの政策をそのまま実行させるような事はしないだろう。ここまで共感を示す事も、協力する事もないだろう。

思い起こせば、ラウンズの人選を決めたのはシュナイゼル殿下だが、その点も考慮しているのかもしれない。

だが、そうなるると一つの疑問が浮上する。

(そもそも、シュナイゼル殿下は何を思つてナナリー総督を、手助けしているのか……) 一見すると、シュナイゼル殿下とナナリー総督は融和路線という方針の上での共通点はある。しかし、シュナイゼル殿下の融和路線はあくまでブリタニアの利益につながる帝政上での融和路線であり、ナナリー総督は極端に言えばブリタニアの国是を是としないう、共和的な融和路線である。

同じようで全く違う。

ただ……何の力を持たない友人、ナナリーを手助けしてくれるシュナイゼルを、アーニヤはありがたくは思っている。しかし、本心がかめめない救いの手は、本来であればあてにするべきではなく、でも、いまはそれに頼るしかないという現実、アーニヤに微かな不安を抱かせる。

「にやあ〜」

黙考にふけていたアーニヤの耳に何かが触れた。

「はうあ……」

アーニヤは、何かが自分の底から駆け上がるものを感じて、体を震わし、暖かい息を吐き出しながら、嬌声にも似た声を上げた。

弱いのだ。特に耳は。

「な、なに？」

驚いて振り返ると、背もたれに使っていた石の囲いの上に黒い猫がいた。

「お前、スザクの……」

飼猫、ではなかった気がするが、とにかくスザクと一緒にいる猫である。

とりあえず猫に出会ったときの礼儀として、その喉元に細い指を伸ばした。

「気に入ったみたいだね。アーニヤの事」

アーニヤが、アーサーの首を下から撫でていると、いつの間にか袴姿のスザクが近く

に立っていた。そして、そのスザクは何かを肩に抱えていた。

「?」

良く目を凝らして見てみると、それは人だった。スザクと同じ袴姿。見覚えにある長い銀髪と手足が、重力にしたがって下にダランと垂れている。

「つて、それまさかロイ?」

アーニヤが尋ねると、スザクは困った顔をして答えた。

「ああ、ロイだよ」

「一体全体、なんでスザクがロイを抱えてるの?」

「僕たちが定期的に武術のトレーニングしてるのは知ってるだろ? で、今日は僕が日

本の武術を教えたんだけど、ロイは物覚えがいいから、つつい本気になっちゃって」

「一緒にトレーニング?」

あんな激しい言い合いをしてから三日もたつてないのにもう仲直り? と、アーニヤ

は首をかしげたくなった。

アーニヤの記憶によれば、昨日まで二人は必要最低限な事以外、口もきいてなかった。

ナナリーなんか「あのお二人。何かあつたんですか?」と、本気で心配してアーニヤに

聞いてきた程だ。

だが、今のスザクのロイを見る表情には、そんな昨日までの様子など微塵も感じられ

ない。

(それが男のケンカというものなのだろうか……)

と、アーニヤは少し肩透かしをくらった気分になる。

よくよく考えれば、ロイもスザクも結局のところ、その行動原理はナナリーのため。これ一点だ。

だからいくらお互い嫌悪感を抱いても、その根底が同じわけだから、この二人の日課であるトレーニングという名の殴り合いでもすれば、そこで仲直りできてしまうものなのかもしれない。

(単純。二人とも……)

ただ、アーニヤは、ケンカが後を引かないという付き合い方ができるこの二人の関係を、ちよつと好感を持って見ているのも事実だった。

「スザクが一方的に勝ったの?」

アーニヤが立ち上がって、スザクに近づく。

アーサーは「にやくん」と鳴いてその後について来た。

「あ、いや、ロイは僕が教えた流儀に合わせて戦ってたから」

アーニヤは、うなだれているロイの顔を覗き込んだ。眼鏡はしておらず、彼のめつたに見られない端正な顔立ちがよくうかがえた。

見事にノビているようだった。これが漫画ならば、ロイの瞳はおそらくグルグルの渦で表現されている事だろう。

アーニヤは眉をひそめた。

「大丈夫なの？」

顔を上げてアーニヤが訊くと、スザクはこんな日常茶飯事じゃないか、とでも言いたげな様子で笑った。

「大丈夫。気を失つてるだけだよ。ここは、風が通つて気持ちが良いから。ロイを休ませるには良いだろうと思つて」

「枢木卿。こちらでしたか」

その時、男が二人——気を失っているのもあわせれば三人——に声を掛けた。グラストンナイツのクラウディオだった。

アーニヤは少しだけ、と言つても相手に気付かれない程度にだが嫌な顔をした。グラストンナイツのメンバーは“一人を除いて”ナイトオブゼロであるロイを見下している感があるため、アーニヤはこの人たちにあまり良い感情を持っていなかった。

「すまないアーニヤ。ロイを」

「分かった」

スザクは、ロイを持ち上げてアーニヤに手渡す。アーニヤは自分より二回りほど大き

いロイを、ふらつきもせず受け取った。だてに鍛えてないのでそのまま軽々とお姫様抱っこで担ぐ。

小柄——あくまで、他のラウンズメンバーと比べてだが——なアーニヤが、身長180近いロイをお姫様抱っこしている姿は異様と言えば異様だった。

(なるべくなら、次は逆がいいかも……)

そんな希望を抱いた後、アーニヤはある事を思いついた。

アーニヤは、先ほどまで座っていた石の背もたれまで戻り、ロイをゆっくりと寝かせ、自分もそこに座ると、そのスラリとした膝にロイの頭を寝かせた。

膝枕だ。ロイは意識があったら絶対によらせてくれないので、この際やってみた。

その様子を見て、スザクは一度軽く笑うと、表情をナイトオブセブンに戻して、クラウディオに向き直った。

「待たせてすまない。何か?」

クラウディオは「いえ」と断った後、脇に抱えていた書類をスザクに手渡した。

「枢木卿を襲ったイレブンの死刑執行命令です。ラウンズ以上の方の承認をもつて刑は執行されます……」

「……」

そんなことがあったのか、とアーニヤは内心少し驚きながら、スザクを見やった。

スザクは、渡された書類に視線を落としたままピクリとも動かない。

「枢木卿？」

クラウディオが不審に思ったのか、眉を上げてスザクに声をかける。

スザクはそれでも動かなかった。

アーニヤは小さく息を吐いた。

「クラウディオ卿」

「はい。何でしょうかアールストレイム卿」

「その書類をこちらに」

「……はっ？」

クラウディオは驚いたのか、すぐに動かなかった。しかし、アーニヤが「早く」と急かすと、彼はハツとしてスザクに「失礼します」と断つてから書類を返してもらい、膝枕をしていて動けないアーニヤのところまで早足で持ってきた。

アーニヤはそれを受け取ると、素早く自分のサインを書いて、こちらを見下ろしているクラウディオに突き出した。

目を丸くしているクラウディオにアーニヤは告げた。

「私も、ラウンズ」

「あつ、はい。問題ありません。では、失礼いたします」

クラウディオは簡単な敬礼をして、踵を返し、スザクの前で頭を下げてから立ち去った。

アーニヤは呆気にとられているスザクに視線だけを向けた。

「ねえスザク。あなたって、マゾ？」

彼から驚きの混じった声が返ってくる。アーニヤはいつもと相変わらず、淡々と言葉を続けた。

「ここは、あなたにとって決しているいい場所じゃない。ここはあなたへの禍根が渦巻く土地。それなのにあなたはここにいる。自ら望んでここにいる……」

アーニヤは、スザクの答えを待った。

スザクは、アーニヤから顔を背けて思案顔をした後、

「誰かに分かってもらいたいか、そういうのはもういいんだ。昔……分かってくれた人がいたから」

(ユーフェミア皇女殿下か……)

そして、アーニヤは思った。

このスザクの原動力はナナリーではなく、実はそのユーフェミアの理想にあるのかも
しれない、と。

それにしても、スザクのユーフェミアへの忠義とも言うべきものはここまできると、

少々度を超しているようにも見える。

なにせ祖国を裏切り、死んだ主君のために、命を狙われてもこのエリアに留まり、そして亡きユーフェミアの理想を身を粉にしても実現しようとしている。

(スザクは、ユーフェミア皇女殿下と知り合ってからそんなに日数がたっていないはずだが、そんな相手にここまでできるものだろうか)

騎士としての忠義に動かされて、と言ってしまうばそれまでだが、スザクの行動はそんな崇高なものではなく、もつと根本的な感情に近いものに突き動かされてユーフェミアの理想を追っているように見えた。

(本当に、付き合っていたのか)

一年前、このスザクがユーフェミア皇女殿下の騎士になるという情報が世界を駆け巡ると、このスザクとユーフェミア皇女殿下の情事的なデマやウワサや記事が往来した。

当時のアーニヤなど、同年代の少女たちがその話題に盛り上がるのを冷めた視線で見ているのだ。

と、ここでアーニヤは今現在、その冷めた視線で見つめていた話題。つまり、他人の男と女の關係に、興味を持っていることに気付いた。

一年前までそんな問題など気にも留めなかったというのに。自分の事ながら、人間変われれば変わるものと、アーニヤは困った時のロイみたいに頬を指でポリポリとかきた

い心境になった。

「どんなにみんなに嫌われても、その一人に分かつてもらえばいいって事？」

そんな心境を悟られまいと、アーニヤは返答が分かっているながらも、そんな問いをスザクに投げかけた。

「そういう事だ」

スザクは、ためらいなく言った。

これで、ユーフェミアが生きていればスザクのこの発言はただのノロケ話なのだが、不幸にも彼女はすでにこの世におらず、その発言には心臓をチクチクと刺される様ないたたまれなさと、哀しさしか感じる事はできなかった。

「ふくん。まあ、分からなくもないけど……」

全てを敵に回しても、一人にさえ分かってもらえばいい。確かにそういう気持ちは存在する。それをアーニヤは知っている。

視線を下げてみる。自分の膝の上では銀髪の少年が気持ちよさそうに吐息をこぼしていた。アーニヤはロイの前髪をそつと撫でてみた。それに伴って、ロイが「うくん」と呻く。それを見てアーニヤは柔らかなく口元を緩めた。

（私だって、多分そうだから）

それがロイだ。と、アーニヤはまだ少女のような純粋な気持ちでそう思えるのだっ

た。

アーニヤは、言ってみればいつも一人になる恐怖と戦っていた。

自分に記憶の障害があることを知っていた。今のところ、それは幼少の頃の記憶の矛盾のみのだが、その矛盾がまた明日にも起きないという保障は無い。

だから、もしかしたら自分は明日になればみんなのことを忘れているのではないか？ という恐怖と戦いながら幼少から過ごしてきた。

その恐怖をやわらげるために記録をこまめにつけてはいるが、根本的な事が解決されない以上、それに大した意味は無い。

いくら記録をしていても、それを自分が認識できなければ意味が無いのだ。でも、それが分かっているながらも記録をしなければ不安でしかたなかった。

やがて、アーニヤは自然と寡黙になり、周囲から孤立していった。

アーニヤにとって、だれか仲間・友達ができるという事は、同時にその仲間・友達を不条理な記憶の障害で失う恐怖が生まれるという事だった。

その恐怖からアーニヤは目を背け続けた。背けなければ自分がその重さで潰されてしまいそうだった。そして、アーニヤは自分を守るために一人である事を自ら望むようになった。

しかし、そんなアーニヤにこう言ってくれた人がいた。

『だったら、僕は何度もアーニヤと友達になろう。たとえ君が明日、全ての人を忘れても、僕は君が友達である事を忘れない。忘れない限り、僕たちはまた友達になれる。何度でも友達になれる。いや、無理やりにでも友達になつてもらおう。ほら、もう安心だろう?』

それは誰にでも思いつくような何の捻りも無い提案だった。でも、そんな提案を堂々とアーニヤに言ってくれた人物はこの時まで誰もいなかったのも事実だった。

それから、アーニヤは少しだけ前に進めた。新たにナナリーという友達ができた。ジノとも、一年前まで仕事の事以外は干渉し合わない間柄だったのに、今は友達といえば友達である。

勇気が出た。自分は何をしても一人にならない。そう安心できる事の何と素晴らしきことか。それをアーニヤはこの一年で実感させられた。

「あんた、昔に比べて携帯をいじる時間が減つたんじゃない?」いつだったか、そうメールで言ってきたのは、どう考えても友達ではないが、メル友——いや、メル知り合いのカーリー又だった。

アーニヤにとつて、携帯での記録は、そもそも記憶を失う事への不安を打ち消すための行為だったので、その不安が減った以上、携帯に触れる時間が減るのも自然な流れなのかもしれない。

と言っても、ジノに言わせれば「タバコを一日一カートン吸う人が、半分になった所で中毒なのは変わらん」らしいが、それでもその後、「ま、進歩ではあるよな」と、アーニヤの頭を優しく撫でた。もちろん、その時アーニヤは「子供扱いしないで」と、ジノを睨んだが。

アーニヤはそつと目を閉じ、小さく笑った。

だんだん足がしびれてきた。ドラマとかマンガとか小説で、ヒロインは何食わぬ顔で男を膝で寝かせているが、長時間だと結構つらい。しかし、アーニヤは膝枕をやめようとは思わない。痺れより大きな充足感があつて、もう少しだけそれを味わっていたかつた。

「おくい二人とも。お待ちかねの連絡だ」

その時、クラウディオの去っていった方向から、ジノが長身を揺らして歩いてきた。

スザクはジノの言葉に反応して顔を上げ、アーニヤもそれに続いた。

ジノはそんな同僚二人の顔を交互に見やって、足をそろえて立つと告げた。

「ゼロからだ」

スザクの瞳に鋭い光が宿る。

少し残念そうにアーニヤは表情を曇らせる。この時間も、どうやら終わりらしい。

アーニヤは、自分の膝で眠る男を軽くゆすつた。

「……ロイ。起きて」

アーニヤのその言葉で、ジノは初めてロイに気付き「おつ」と呟いて、上からロイを覗き込んだ。

「なんだ、三人だったのか。探す手間が省けた。にしても、幸せそうに寝ちやつてまあ」「私が膝枕してるんだから、幸せに決まってる」

「それは失礼した」

ジノは苦笑しながら丁寧な動作で謝罪すると、「一枚撮ってやろうか？」と気の利いた事を提案した。

アーニヤは迷わずに、自分の携帯を長身の同僚に差し出した。

③巻 9話『ゼロの提案』

政庁中心部にある防音構造の壁に囲まれた一室。

そこが今回の会談の場所だった。

「すみません。遅くなりました」

トレーニンング用の袴から白い軍服に着替えて部屋に入ると、すでにメンバーは全員がそろっていた。

こちらを見て軽くお辞儀をするローマイヤ。

柱に寄りかかって指を立てるジノ。

椅子に座って携帯をいじっているものの、一瞬だけ視線を上げるアーニヤ。

同じく椅子に座ってジツと目の前の巨大モニターを見つめているスザク。

ワインのグラスを傾けているロイド伯爵。そして、

「つて、セシルさん。どうしたんですかその格好は？」

ロイは目をしばたかせた。

キヤメロットのセシル・クルーミーは、おへそを大胆に開けた“青い”ドレスを着ていた。

確かに、この部屋はお酒をたしなめるカウンターなども備え付けてあり、小さなパーティーを開けるような内装ではあるが、それにしても他のメンバーが政庁での仕事着を着用している中では異様なほど浮いていた。

セシルは腕でおなかを隠すようにした後、

「ちよつとね、どうやら会の趣旨を勘違いしたみたいで……」

と、恥ずかしそうに弁明した。

ロイはそれを聞いて少し呆然としていたが、急にその顔をパツと輝かせた。

セシルが着ていたドレスは、以前にロイがプレゼントしたものだつた。

「うれしいな。それ、僕がプレゼントした服ですよね」

「え、ええ。ちよつと派手だな、とは思ったんだけど。せつかくもらつたし」

セシルは、ロイドに恨めしげな視線を送る。

「ロイドさんからは。すてきな殿方達とのパーティーって聞いてたし……」

「どういうことですか？」

ワイングラスを傾けているロイドに、ロイが尋ねると、彼は飄々とした態度で「あはつ」といつも通りに息を吐き出して笑つた。

「すてきな殿方達とのパーティーには違いないだろう？　ねえ、ヴァインベルグ卿」

「私に話を振らないでくださいよ」

ジノは苦笑して応じる。その後、彼はセシルをまじまじと眺めた。

「でも、これは逆に目の保養をさせてくれたロイド伯爵に感謝するべきでしょうね。セシルさん、よくお似合いですよ。なあ、ロイ」

「ええ、本当にとてもよく似合っていますよ」

とロイが、自信満々で頷くと。先ほどから黙って立っていたローマイヤがその鋭利な瞳に、珍しく困惑の色を浮かべた。

「キャンベル卿。これが、あなたの趣味なのですか……」

なぜか彼女はシヨックを受けている様子だった。

「えっ、あつ、いや、僕の趣味というか……」

ロイが続きの言葉を作り出せないでいると、携帯を弄っているアーニヤがポツリと言った。

「ジノの趣味」

「そうです。私が愛を込めてロイに助言しました」

ジノが胸を張って告げると、ローマイヤは胸を撫で下ろした。

「そ、それは良かった。さすがにこれは、私には抵抗がありますので」

「はっ？ なにが良かったんですか？」

ロイが聞き返すと、ローマイヤは、ハツとして咳払いを一つすると眼鏡を指でかけな

おした。

それを見てジノが楽しそうに笑った。

「ロイ。なんならミス・ローマイヤにもプレゼントをして差し上げたらどうだ？」

「それは名案だ」

ロイは同意した。

ただでさえ、ローマイヤには仕事の面で世話になっている。ちょうど、なにかお礼をした我也想えていたところだ。

「そうですね。ローマイヤさんは何色がお好みですか？」

「結構です！ それにしてもキャンベル卿が、女性にドレスの贈り物というのも意外といえれば意外でした」

「いや、セシルさんだけじゃなくて、ロイドさんにもプレゼントしたんですよ。日頃の感謝を込めて。もちろんドレスではありませんが」

「僕は最新式の眼鏡洗浄機をもらったな。こうやって水に浸けておくやつ」

ロイドは眼鏡を外し、その眼鏡を水に浸けるけるしぐさをした。

「そうだったのですか。彼女にだけプレゼント、というわけではないのですね」

ローマイヤはまたなにかにホツとしたようだった。

ロイは、先程からローマイヤがなにを安心しているのか分からなかったが、なんとなく

く追求できる様子でもなかったもので、そのまま黙ってしまおう。

一方、ジノだけはニヤニヤと意地が悪そうに笑っていた。

「それにしても、本当にセシルさんはよくお似合いだ。正直、目のやり場に困るほどですよ」

ジノが改めてセシルを褒めたたえようと、その隣で、ロイは少しだけ首を捻った。

「うん。でもちよつと派手すぎましたかね？」

「そ、そうね、派手は派手かも……」

セシルが言うと、ジノは大げさに首を振って見せた。

「なにを言ってるんですか。それぐらいがいいんですよ。なあ」

ジノはロイに同意を求め、ロイはそれに、当然の如く肯定で応じた。

「本音を言わせてもらえば、セシルさん奇麗ですよ、の一言に尽きます」

それは、シンプルな評価だった。

だが、飾り気のない好意の言葉というのは、派手さはないが、それだけに相手の心にまっすぐと届くものがある。

セシルは、顔を真っ赤になせた。

「もう、ロイ君！ 大人をからかわないの！」

「いえ、そんなつもりは……」

一方、そんなやりとりをを横目で見ていたアーニヤは、携帯の操作が少々強引になつていた。

「おい、アーニヤ。携帯壊れるぞ」

「……」

アーニヤは、近寄つてきたジノをチラリと見ただけで答ええない。指に込める力も緩めない。

哀れ、なんの罪も無い携帯はその少女にしては破格の腕力に嫉妬という追加効果を受けて、ボタンを押されるたびに、小さな軋み音を立てていた。

それを見てジノは軽く笑った後、セシルに大人との付き合い方を説かれているロイに視線を向けた。

「それにしても、ああいうことを自然に言えるやつてうらやましいな。やつぱ性格かな」

「私だって、露出度は負けてない」

アーニヤはブスつとして呟いた。おそらくそれはジノに言ったというよりは、自分に言い聞かせるという意味合いの方が強かったのかもしれない。

ジノはその大きな手をゆつたりとアーニヤの頭に置いた。そして、かわいらしい妹に優しく言い聞かせる兄のような表情で、

「アーニャ……」

と呼びかける。そして、息をためてから告げた。

「露出度、は、な」

彼は、ナイトオブシックスの名誉を、死神の鎌にも似た言葉でばつさりと切り捨てた。アーニャは額に筋を浮かばせると、即座にナイトオブスリーのすねを思いつき蹴っ飛ばした。

○

「つながるみたい」

ジノの悲痛な叫び声が上がると、ほぼ同時にロイドが呟いた。

目の前のモニターに小さな波が立ち、そして光がともった。

一人の人物が映し出される。

黒いマントに黒い服、そしてなによりも目を引く黒い異形の仮面。

魔人ゼロ。

和気あいあいとしていた一同は、その表情を瞬時にそれぞれの地位に相應しいものに戻した。

『ほう、ナイト・オブ・ラウンズが四人も——しかし、肝心の総督の姿が無いようだが？』
「これは事務レベルの話だ」

先行して発言したのはスザクだった。その隣で、ロイドが独特な笑い声を上げた。

「あのさ、一つ聞きたいんだけど」

『何かな』

「君と前のゼロは同じ？ それとも……」

『ゼロの真贋は中身ではなく、その行動によって測られる』

「あは、哲学だね〜」

会話が続く中、ロイドは発言することもなく柱に寄りかかって、ただジツとゼロを見つめていた。

正直、ロイドはこのゼロとの会談に興味がなかった。

どうせ、ゼロはなんだかんだ言葉を並び立てて、行政特区日本への参加を拒否するだろうと考えていたからだ。

(そうだったら、今すぐにも僕たちで黒の騎士団の歴史を終わらせる)

ロイドは、このゼロに対してはもう自分がなにか言うことも、聞くこともないと考えていた。

ただ、このゼロは会談の後、数日中に自分たちが処刑台送りにする敵の大将だ。この通信で少しでもその性格や氣勢などを把握できれば、戦略や戦術も立てやすい。

ロイドにとって、この場合はゼロを観察する。それだけの意味しか見いだせていなかった

た。

そんなロイの隣から、なぜか片足をヒョコヒョコと引きずった「涙目の」ジノが威圧的な口調で言った。

「く、黒の騎士団の意見はまとまったのか？」

しかし、格好はついていない。威圧を与えられたかも少し疑問だった。

それでもジノはめげずに言う。

「一度参加すると言ったからには」

『こちらには、百万人を動員する用意がある』

ジノの言葉をさえぎるようなゼロの発言に、この場にいる全員が少なからず驚きを感じた。

えた。

「ひゃ、百万……」

信じられない、といった様子で呟くセシル。

その隣のスザクがまるつきり信用していない様子で、

「本当だろうか」

と尋ねた。

ゼロは『ああ』と頷き、そして言った。

『その代わり、条件がある』

この場のほぼ全員が心の中で、ほらきた、と思つたに違いなかつた。
どんな無茶な要求をしてくるか。

全員が身構えた。

『私を見逃して欲しい』

一瞬、空間が静まり返つた。だれもが、それを咀嚼するのに苦労した。

「なん、だと……」

スザクが皆の気持ちを代弁するかのようにはやく。その後、彼は目を見開いたまま言葉を詰まらせた。

ロイすらも、完全に予想外のゼロの言葉に驚きを隠せなかつた。思わず、背を預けていた柱から身体を起こして画面に向き直つたほどだ。

そんな一同を尻目に、ゼロの変声機による機械的な声は続く。

『もちろん。そちらにも立場があるということは承知している。どうだろう、ゼロを国外追放処分としてはいかがかな?』

「く、黒の騎士団は!」

スザクが立ち上がった。

そのスザクの問いに答えたのはゼロではなく、ジノだった。

「捨てる気だろ。自分の命だけ守つて」

「おやおや」

ロイドは相変わらず飄々とした口調で言った。その表情は不謹慎ながらもどこか楽しげに見えた。

「こんなこと、黒の騎士団にバレたら君はリンチだよ」

『だから、このように内密に話をしている』

「……」

この時、ロイは無言でローマイヤに視線を向けた。

正直、ロイはそこまでブリタニアの法律に詳しくないので、ゼロの言うことは可能なのか？ ということを専門家であるローマイヤに確認するためだった。

ローマイヤもその視線と意図に気付き、二人はしばし視線を絡ませる。

記憶の辞書をたどっているのだろう。ローマイヤは数秒間沈黙を保ったあと、小さく頷いた。

「エリア特法。十二条第八項」

ローマイヤが淡々と言い始めると、あらかじめ彼女と視線を合わせていなかったロイ以外の人間は、彼女に視線を集めた。

「そちらを適用すれば、総督の権限内で、ゼロの国外追放処分は執行可能です」

スザクが、まるで仇敵でも見るようにローマイヤを睨みつけた。

「ミス・ローマイヤ！ 犯罪者を見逃せと言うのですか!？」

「私は——」

「ローマイヤは、法的な根拠を提示してくれただけだ」

ロイは、反論しかけたローマイヤの言葉を遮り、さらにゆつたりと歩くとスザクの視線から庇うように間に入った。

「それに、法的に可能ならばこれはそんなに悪い話だとは思えない」

今度は、スザクがロイを鋭く睨んだ。

「悪くないだつて？ ロイ！ やっぱり君は——」

「確かに」

ロイに詰め寄ろうとしたスザクを制止するように、ジノが彼の身体に腕を回した。

「悪くない話だ。トップが逃げ出せば、テロリストどもは空中分解だろうからな」

「しかし、犯罪者を……」

スザクは納得がいつていない様子で、奥歯を強く噛む。

このとき、ロイは視線でジノと意思を疎通する。

——続きは僕が？

ジノは頷いて、スザクを抑えている腕の力を強めた。

ロイは身体を翻して画面に近寄った。

ゼロに言葉をかけるつもりは微塵も無かったが、こうなると話は別だ。

「ゼロ」

『何かな』

「こちら側にも協議する時間をいただきたい。と言つてもそんなに時間はかからないから、二三日中には「良い」返事が出来ると思う」

『ほう』

ゼロは感心したように言葉を漏らす。

なかなか話が分かるやつ、とでも評価されたのかもしれないが、そんなのうれしくとも何ともなかった。

『そのメンバーの中であなたがそれを言うのか。いや失礼。武と文を兼ね備えた騎士として名高いあなたにそう言っていただけなら、こちらも安心だ』

組織を裏切る小男に言われても嬉しくない！ この恥知らずめ！

ロイは内心ではそう激しくののしかったが、それを言葉に出してしまうほど、取り乱してはいなかった。

「お褒めにあずかり光栄だ。こちらも、この件についてすぐに話し合いに入りたい。そちらの連絡先を教えてくださいらおう」

『分かった』

「それと、この件に関しての公表のタイミングは、こちらの条件でやらせてもらう。異存はないな？」

『ああ。と言つても、あまり早く公表されても困る。これは提案なのだが、“式典”で発表するというのはどうだろうか？』

「そうだな。そっちの方が都合がいいだろう。お互いにな」

『そうだな。お互いに、な。それでは、良い返答を期待している』

そしてゼロは、会話が終了したあと、こちらが指定した方法で連絡先を伝えてきた。

○

ロイがゼロに言った。「良い返事ができる」というのは、その通りになった。

ゼロとの会談の後、すぐに開かれた政庁の会議ではほぼ一同がゼロの提案に賛同し、司法取引を成立させるといふ方向で、ナナリー総督の指示を仰ぐということを決着がついた。

それをスザクが総督に伝え、総督はそれを了承した。

以後、政庁の職員全員は、間断ない仕事に追われるようになった。

突如、百万人の日本人の特区への参加が決定したのだ。警備、制度、広報、人員、その他様々な面において計画の練り直しとその実行が責任者達に求められた。

「ふう……」

その責任者の一人であるロイ・キャンベルは自分の執務室兼自室で、出来上がった新たなナナリー総督の式典中の警備計画書をパソコンに保存し、大きく息を吐いた。

背伸びをしながら時計を確認すると、夜の二〇時を回っている。

「もう、こんな時間か……」

遅めのランチをとったのが一四時だった。仕事を再開したのが一五時だったので、ぶっ続けて五時間ほど仕事をしていたことになる。

途中で夕飯代わりにサンドイッチをつまんだため、おなかこそ空いてないが、さすがに疲れてきたし、仕事の効率も下がっていた。

計画書を総督に相談する前に各部署との事前調整をする必要があるが。

「あとにするか」

少しでも休憩することにし、コーヒーでも淹れようかと席を立つ。

ロイには、コーヒーが飲みたいなど思った時にスツと差し出してくれる秘書がない。休憩のコーヒーも自分で用意しなければいけない。

（いや、秘書とかコーヒーだけの問題じゃないな……）

そう改めて考える。

スケジュールの管理やら、ラウンズの業務上ではどうしても雑務に当たる類のもの。

また、業務上の助言、助役としての力を発揮する副官は、軍においてある程度の地位

を得た人間にとって必要不可欠な存在であり、そのそもラウンズという将官に相当し、他の軍隊ならば「閣下」と呼ばれる地位にあるロイが副官を持たないというのも異様と言えは異様だった。

特に、ロイの仕事は幅広い。

ただでさえ忙しい軍務の他に、ナナリーがブリタニアで立ち上げたの福祉事業の実務的な責任者まで手がけているのだ。その仕事量は他のラウンズと比較しても、膨大と言つて差し支えない。

恐らくロイでなければ、とうに全ての仕事に滞り、破綻しているだろう。しかし、今まではなんとかやってこれたが、だからこれからも大丈夫と思えるほどロイは樂觀主義者ではなかったし、事実、体からは疲労の悲鳴が上がり始めている。

通常、秘書や副官というのは軍が人材を回してくれるもののだが、そうっていないのは、ナイトオブゼロという地位の不確立性に問題があった。

ロイは極端に言えばブリタニア内でナイトオブラウンズという将官待遇の地位と見られ、そのように他者から扱われるが、それを確固たるもので約束されているわけではない。

もつと言えは、ロイはブリタニア軍人ではない。

そもそも、軍にはナイトオブゼロという階級も地位も存在しないのだ。

ロイは皇帝陛下に私的に雇われた傭兵みたいなものである。ただ、皇帝がナイトオブゼロとし、ナイトオブラウンズと同列のように扱っているから、軍もそうしようとしているだけで、細かいところではそこでラウンズとの待遇の差がどうしても出てしまう。

傭兵に正規軍が副官を回すという事は無いのである。

ロイは優秀であり、その優秀さ故に、数多くの味方に疑惑の瞳を向けられる反面、シャルル、シュナイゼル、オデュツセウス等の数少ないながらも、最高峰の地位を持つ人たちには頼りにされている。

そして頼りにされているというのは頼られるとほぼ同義であるから、仕事量は増える一方だった。

(そろそろ、本気で補佐役が欲しくなってきたな……)

ロイは器用な人間であり、ある程度のことでは一人でこなせる。しかし、それでも限界があった。

ここら辺の問題を、以前、帝国宰相であるシュナイゼルが「なんとかするよ」と言ってくれたので、じきに改善はしてくれれると思う。しかし、

(その前に、自分の体が壊れるのではないか?)

と、そう思えてきた今日この頃であった。

③卷10話『ナナリーの依頼』

控えめなノックが数度。

「んっ? どうぞで」

執務席のロイが背筋を伸ばして応じる。木製の扉は小さな軋みをあげて開かれた。

現れたのは二人の少女だった。一人は車椅子の上で、高貴さを醸し出す長髪をなびかせている。その後ろで車椅子を引くのは見慣れた同僚、アーニヤ・アールストレイムだった。

「こんにちは。ロイさん」

「総督!」

純粹に驚く。深夜とも呼べる時間に意外な来訪者だった。

車椅子の少女に駆け寄った後、ロイは即座に膝を折り、律儀にその少女と視線の高さを合わせた。

「どうされたのですかナナリー総督。御用があるのでしたら、お呼びくだされば私のほうから参りましたのに」

「私的なことでお話したいことがあります。アーニヤさんをお願いして連れてきても

「らいました」

別に何も悪いことをしたわけではないのに、いたずらをした子供のようにはほほ笑む皇女殿下。そんな彼女を、ロイはとても愛おしく感じた。

「私的なことですか？ ああ、いえ、それよりもすぐにお茶でもお出しますよ。アーニヤ。総督をテーブルに」

「分かった」

「いえ、気を使わないでください。私は……」

「いまちようど一仕事を終えてお茶にしようかと思つていたところです。よろしければお付き合いください」

「そういうことでしたら……」

と、ナナリーはアーニヤの誘導に従つて席についた。

アーニヤはその隣の席に腰掛ける。

それを見届けて、ロイは馴れた手つきで紅茶を淹れ始める。その一方で、隣の冷蔵庫を開けると、席に座っている少女たちに声をかけた。

「総督。チーズケーキとショートケーキ、チョコレートケーキにシフォンケーキがあります。どれがよろしいですか？」

「あつ、私はどちらでも……」

「チーズケーキ」

「じゃあ、アーニャの意見に従って全員チーズケーキにしましょう」

そしてロイは、チーズケーキを特大、中、小に切り分ける。

紅茶もできたので、三つのカップに注ぐ。その中の一つだけは、カップを何度か交互に入れ替えて中身を冷ます。これはナナリー用だ。万が一、中身をこぼして、身体にかつてもやけどをしないように温度を下げたのだ。

それらをお盆にのせて、ロイはテーブルに向かう。

それぞれに、ケーキと紅茶を振り分ける。ちなみのそのケーキの内訳は、アーニャは大、ロイは中、ナナリーは小食なので小さいのだ。

「お待たせしました」

ロイが席に座ると、ナナリーが意外そうに聞いてきた。

「それにしても、ロイさんは甘党なんですか？　冷蔵庫にはたくさんケーキが入っているみたいですけど」

「ああ、あれは僕じゃなくてアーニャですよ。この部屋にわざわざお菓子を持ってくるのは面倒くさいから買って置いていくんです」

「そうだったんですか。それにしても、頻繁にアーニャさんとロイさんはこの部屋でお茶を一緒にするのですか？」

「ええ、大体はそこにスザクやジノも加わりますが。ねえ、アーニャ」

「その通り」

すでにアーニャは小さな口を精一杯開けて、ケーキを食べ始めていた。

「ナナリー総督もよろしければどうぞ。ケーキは一口サイズに切り分けてありますし、紅茶は人肌の温度にしてありますので」

ロイは、ナナリー総督の手に優しく触れ、それを食器の位置まで誘導する。さらに口頭で説明して、彼女にその位置を認識してもらった後に、フォークを手渡した。

「ありがとうございます。ロイさん」

「いえ」

ロイは席に戻り、まず紅茶を飲むと、次いでケーキを一口含んだ。

ナナリーもフォークでケーキを刺し、口に運び、それを紅茶で流し込む。ナナリーの小さな口の動きが止まったのを見計らって、ロイは尋ねた。

「それで、ナナリー総督。僕に話とはなんですか？」

「あ、はい。行政特区でお忙しい時期に、お時間を取らせるのもどうかと思ったのですが……」

「それは総督も同じでしょう。それに」

ロイは、紅茶の湯気のぬくもりを鼻で感じながら、笑みを浮かべる。

「ナナリー総督。僕は先ほど休憩すると言いました。つまり、今はプライベートです。聞きたいことがあるのなら、遠慮無くお尋ねください」

「ありがとうございます。では、お言葉に甘えさせていただきます……」

と、ナナリーはフォークをケーキのお皿の上に乗せると。しばし間を置いた。

やがて、意を決したように彼女は話し始めた。

「あの、先日ロイさんはスザクさんの通うアッシュフォード学園に行かれたとか」

「ええ、行きましたよ。先日って言ってももう随分と前ですけど……アーニヤから聞いたんですか？」

「はい、つい先ほどアーニヤさんにお話していただきまして。それで私、いてもたってもいられなくて……」

言いたいけど言いにくい。そんな空気がナナリーには充満していた。

ロイは怪訝に思い、アーニヤに補足を求めて視線を向けた。

しかし、当のアーニヤはその視線に気づいても黙ってケーキを食べている。どうやら、は口を挟むつもりはないらしい。

仕方なくロイは、ナナリーが話し出すのを根気よく待つことにした。

「あの……その時、スザクさんにおかしなところはありますか？」

言われてロイは首をかしげた。ナナリーの質問の意図を理解しかねたのだ。

「スザクが、ですか？」

「はい」

「ふむ……」

ロイは当日の様子を思い出してみる。

自分とジノは馬鹿をやつて、アーニヤは積極的に学園のイベントに参加していた。スザクもとても楽しそうだった。そのスザクになにか変わったところがあつたかと聞かれれば。

「そうですね。帰りは一緒だったのですが、少しなにかを考えているような感じがありました。呼びかけても何度か気付かないということもありました。僕は久しぶりに騒いでスザクも疲れたんだろうと思つてましたが」

「そうですか……それでは、その、学園内で、スザクさんがだれかと一緒にいたのを見かけませんでしたか？」

「スザクと一緒には？」

ロイは一瞬、総督はスザクと親密な女子がいなかったか。ということを中心に聞いて聞いているのかな、と思つた。

ナナリーがスザクを想っているというのを、ロイはよく知っていたからだ。しかし、ナナリーの真剣な表情を見る限りでは、そんな類の悩みではないように思えた。

「心当たりはありませんか？」

さらに問われて、ロイは脳の中で記憶の棚をひっくり返して探った。すると、そこに一人の女性の存在があつた。

歓迎会の時、ジノの暴走を呆れるロイの隣から、まるで元気なサラブレッドのように勢いよく現れたあの女性だ。

「確か、スザクはロイドさ——いえ、ロイド伯爵の婚約者の方と一緒におられました。名前は……」

名前が出てこない。記憶力は自分で言うのもなんだが抜群に良いほうである。いつもなら、こんなことはないのだが、仕事の後なので脳の回転が遅くなっているのかもしれない。

「ミレイさん」

ナナリーに言われて、ロイはジグソーパズルが正しくはめられた時の様な感覚を味わった。

「そうです。ミレイさんです。よくご存じですね。もしかしてお知り合いですか？」

「え、あ、はい……。昔、少し……。あの、それではいらっしやいませندしたか？」

例えば、男性とか」

「男性ですか？ 申し訳ありません。そのミレイ嬢以外は記憶に残ってないですね。そ

もそも、僕たちとスザクは歓迎会開催中はほとんど別行動でしたので、一緒にいた時間も少ないんですよ」

「そうですか……。では、そのミレイさんは、スザクさん以外の誰かと一緒にいらつしやいませんか?」

「男性ですか?」

「男性です」

「うん。ミレイ嬢はスザク以外とはだれとも……」

とここで、ロイの頭の中に、

へよっしや。待て待てスザクにルルーシユ〜!〜

という、あの時のミレイの言葉がよぎった。

「……ああ、そういえばルルーシユ」

「!」

ロイが思い出して呟くと、ナナリーの肩が震えた。ロイはそれに気付かず、指を額にあて、目をつむり、うんとうなって、自分の記憶をさらに探る。

「ミレイ・アツシユフォード嬢が確かルルーシユという人物を呼んでいたような気がします」

「そ、それで、あの、ロイさんはそのルルーシユという人とお会いになりましたか?」

身を乗り出すナナリー。そのナナリーが勢い良くテーブルに手をついたせいで、テーブルが傾き、ナナリーの身体が車椅子から崩れる。

四脚のものではなく、中心から脚が伸びているデザイン重視の机なのがいけなかった。

「きゃっ!!」

「総督!」

ロイは素早く動いた。前のめりに倒れるその華奢な体に手を伸ばし、一気に自分の胸元に抱き寄せる。

テーブルは倒れ、紅茶は飛び散り、チーズケーキはすでに胃の中に入っているアーニヤの分を除いて、床に散らばってしまった。

ナナリーは無我夢中で、ロイにしがみ付いていた。

「総督。ご無事ですか?」

ロイは、ナナリーが硬い床に身をぶつかなかったことに安堵し、自分の胸の中で混乱し、小さく震えているナナリーに、穏やかな口調を心がけて尋ねた。

ナナリーはハツとして、自分が抱きかかえられていることに気付いたのか、顔を恥ずかしそうに赤くした。

「す、すみません、私……。部屋の中がメチャクチャになっていませんか?」

ロイが視線を上げると、頭にティーカップを被り、紅茶まみれになって、口にケーキを運ぼうとしたまま固まっているアーニヤと目が合った。

「いえ、大したことはありません」

そう告げる。

「……」

アーニヤが無言で抗議の視線を向けてきた。ロイはそれを無視して、アゴでお茶とケーキが散乱している床を示して、「早く床を片付けて」と伝える。

アーニヤは納得いかないという様子だったが、ロイが視線で、「早く拭かないとシミになる」と訴えると、彼女はそれを正しく理解し、しぶしぶといった様子で立ち上がる。そして部屋の隅にあった雑巾を持ってきて、床の掃除を始めた。

それを見届けて、ロイはナナリーをお姫様抱っこの要領で担ぎ直した。

「あっ……」

ナナリーが、自分の身体の向きが変わったことに、驚きと戸惑いの声を上げた。

「申し訳ありません。驚かせてしまいましたか？」

「いい、いえ。大丈夫です」

ナナリーはロイの腕の中でまた縮こまってしまった。

ロイの体格は、一見すると中肉中背で、どちらかと言えば細身に見える。しかし、そ

こは帝国最強といわれるナイトオブブラウンズの一員。筋肉は程良く付き、胸板は厚い。ただでさえ体重が軽いナナリーというのもあり、その姿勢は微動だにしない。

その姿はまさに物語にでてくる、お姫様と、そのお姫様を抱きかかえながら城へと凱旋する騎士の一枚絵のように見えた。

この時、アーニヤが床を雑巾で拭きながら少々うらやましそうな視線を二人に向けたのだが、ロイは気付かなかつた。

ロイはナナリーを抱いたまま車椅子まで近づき、それこそ、姫様をベッドに寝かせる騎士のように丁寧な、そして優しく座らせると、ナナリーの手を取って、少女と同じ高さに見線を合わせた。

「総督。お怪我はございませんか？」

ナナリーは椅子の中でも体を縮めた。ちなみに顔が赤いのは申し訳ないのと、恥ずかしいのが約八割で、後の二割は恐らく違う感情が原因だろう。

「すみませんでした……」

「いえ、気になさらないでください。本当に大したことありませんから」

そう優しく言い、ロイがナナリーの手を乗せている上からもう片方の手を重ねると、ナナリーの頬は蒸気した。

「総督、しばしお待ちいただいでよろしいですか。少しですが、散らばったものを片付け

ますので」

「も、もちろんです。本当に重ねがさね……」

そう言いかけたナナリーの唇に、ロイが指を重ねた。

「それ以上おっしやらないで下さい。本当に、少ししか汚れていませんから」

「は、はい……」

さらにナナリーは顔を赤くする。その傍から立ち上がり、ロイはアーニヤの肩をたたいて、執務室に隣接する自分の私室に誘導した。

「アーニヤ。とりあえずシャワーを浴びてこれに着替えるといいよ。あと、はいタオル」

ロイはタンスから自分のパジャマとタオルを突き出して、シャワー室を指差した。

アーニヤはそれを黙って受け取ると、不機嫌そうな顔でロイを一瞥した。

「なにさ?」

「なんか、態度が違う」

「なにが?」

ロイが不思議そうに尋ねると、アーニヤは唇を尖らせた。

「総督には、口調に優しさがあつた……」

「どういう意味?」

「別に」

アーニヤはそう会話を強制的に終わらせると、シャワー室に歩いていった。

「どうやら、自分はアーニヤを不機嫌にさせてしまったらしいというのをロイは理解したが、不機嫌にさせてしまった理由がさっぱり分からなかった。

仕方なく、ロイは首をかしげつつもナナリーの元に戻る。

「あの、それで、先ほどの話の続きなんですが……」

ロイがナナリーの元に戻り、新しい紅茶を差し出すと、ナナリーはか細い声で遠慮がちに話し始めた。少し声が震えているのはまだ先ほどの恥ずかしさが残っているのかもしれない。

「ロイさんは、学園でそのルルーシュというかたとお会いになりましたか？」

「いえ、ミレイ嬢がその人の名前を叫びながら走り出したのを目撃しただけであって、僕はそのルルーシュという人物は見えていません。もちろんすれ違っていないとは断言できませんが……」

「しかし、アツシユフォード学園でルルーシュ。いえ、少なくともルルーシュと呼ばれる人物は存在するということですよね？」

「そうなりますね。あのミレイ嬢の言い様は明らかに学園にいる人を呼ぶときの喋り方でしたから。しかし、ナナリー総督。そのルルーシュという人物がどうかなさったのですか？ もしかしてお知り合いですか？」

「それは……」

と、ナナリーは黙ってしまつた。

ロイは、その無言を肯定と受け取つて話を続けた。

「そういえばそのルルーシュという人物と一緒にスザクも呼ばれていましたから、もしかしてスザクの知り合いなのではありませんか？　なんなら、いまからスザクに聞いてき——」

「ロイ。汚れた服を入れたいんだけど、ビニール袋とか無い？」

と、その時。アーニヤが体をタオル一枚だけで隠したあられもない姿で執務室に出てきた。

ロイはそれを目撃した時、これ以上は無いほど瞳を大きく見開いた。

「なんて格好をしてるんだアーニヤ!？」

勢い余つて椅子から立ち上がると、状況が理解できない盲目の少女は首をかたむけた。

「アーニヤさん？　アーニヤさんがどんな格好をしているんですか？」

「いや、このまま服置いたら、そこが汚れるし」

アーニヤが片手をタオルがほどこけないように押さえ、もう片方で、丸めた白い軍服を掲げる。いや軍服だけではない。その中には純白の……。

「そんなものを人に見せるんじゃないやありません！ カゴにでも入れておけばいいだろ！」
「はあ？」

アーニヤが眉を潜めた。どうやら、自分がなんで怒鳴られてるのか理解できていないらしい。

「そ、そんなものってなんですか？ 一体なにが起きてるんですか？」

ナナリーだけが、不安そうに顔をいろいろな方向に向けていた。

「でも、ロイ。カゴに入れたらそのカゴに紅茶が付くけど」

「カゴなんか汚れてもいいから早く中に戻って！」

「汚れてもいいの？」

「いいから早く！ 早くシャワーを浴びなさい！」

そして、アーニヤは肩をすくめてスタスタと裸足を動かし、再びシャワー室に入ってしまった。

やがて、奥から水が流れる音がし始めた。

「あ、あのロイさん。一体何があつたんですか？」

ロイは焦りで波打っていた心臓を整えて一息つく。次の瞬間には慌てなど様子も微塵も感じさせない態度で、爽やかに「いえ、なんでもありませんよ」と答えた。

ここら辺の変わりようはさすがで、シユナイゼルに「優れた感情制御能力を持つてい

る」と評価されただけのことはあった。

「で、話を戻しますが総督。どうでしょう。ルルーシユのことを、スザクにも聞いてみては？」

ロイとしては当たり前の提案をしたつもりだったのだが、ナナリーの帰ってきた反応は「当たり前」からは程遠かった。

「……いえ、すみません。それはやめていただきたいのです」

「なぜですか？」

「あの、ここまで言っておいてなんなんですが。これは他言無用にお願いできませんか？」

「……へ？」

「もつと言えば。ロイさん。極秘でそのかたのことを調べてはいただけないでしょうか？」

「えくと。いや、あの、極秘で調べるって、そのルルーシユという人物をですか？」

「はい。調べる、と言っても別に探偵のように身边を洗い出せとかそういうことではなく。そのルルーシユという人物の容姿や相貌、喋り方や、別に一般人でも分かるような経歴、その他の特徴を私に教えてほしいのです。それもスザクさん達には内緒で」

「スザク達にも内緒に？ ジノにも、ですか？」

「その通りです。調査は仕事の片手間で行っていたかもしれませんが。そして分かったことは私にこっそりと教えていただけられないでしょうか」

「いえ、しかし……」

「お願いします。どうか……」

泣きそうな顔で頭を下げるナナリー。その切羽詰った頼み方に、ロイは困惑するとともに一定の懐疑を抱いた。

ロイはしばし、呆然と目の前の盲目の少女を見ていた。やがて咳払いを一つすると、眼鏡を指でかけなおし、表情を真剣なものにした。

「そうおっしゃる理由と、他の人物に秘密にしなければならぬ理由を伺っても？」
「……」

ナナリーは見ているこつちが哀しくなるようないたたまれない表情をした後、視線を下げて黙り込んでしまった。

「言えない、ということですか？」

さらに問うと、ナナリーはしばし躊躇った後、頷いた。

ロイは困り果てた。

ナナリー総督のお願いとあれば、どんなことでも叶えるつもりでロイはこのエリア1に来た。しかし、

(一体、何だというんだ……)

ロイは悩んでも結論が出ないので、意を決して言った。

「総督がそこまで思いつめている理由は僕にはよく分かりませんが。これはもしかして下手な方に転べば、少なくとも総督以外の人間にも災いが降りかかる。そういった類のものですか？」

「はい」

その返答はすぐだった。

やっぱりか、とロイは思った。

心優しき総督がこのような顔をするのは、他人に迷惑がかかる時だけだというのを、ロイは約一年の付き合いを通して知っていた。

(しかし……アツシユフオード学園か)

ナナリーが気にかけているルルーシユ。そして、そのルルーシユがいるあのアツシユフオード学園には機密情報局がいる。

あの皇帝陛下直属の組織の存在は、ロイの中であのナイトオブセブン歓迎会の夜からずっと引つかかっている。

(総督の奇妙なお願いと、機密情報局……共通するアツシユフオード学園という場所。あの学園には少なくとも皇帝陛下と、ナナリー総督というブリタニア内でも地位の高い

人間が気にとめる要素があるということか)

ただの学園に機密情報局がいるというのは、異様なことだ。

それだけでも十分怪しいというのに、今回、ブリタニアで皇女という地位にあるナナリーがその学園にいるある人物を調べて欲しいと言つて来た。

しかも、秘密裏に。

これにはなにか裏があるな、と考えないほうが無理だろう。

どちらにしろ、このお願いは軽い気持ちで引き受けてよいものではなさそうだった。

「総督。私は今の話を聞かなかったことにもできませんが」

「……」

ナナリーは答えない。

「その上で聞きます。ナナリー総督の友達であるアーニヤはともかく、僕は、あなたが被るリスクに比べて、信じるに値する人間ですか？」

このときばかりは、ナナリーはしっかりと口調で応じた。

「はい。少なくとも私はそう思っています。だからこそ、お願いしました」

「……」

負けたな、とロイは諦めた。

ここまでこのかわいらしい少女に信頼されて、それに応えないのでは男が廃るとい

ものだ。

「分かりました。しかし、調べるのは人物の断定と経歴、容姿。そして特徴のみです。いくら総督の頼みでも、理由を明かしていただけないのであれば、これが限界です」

ナナリーは、その顔にパツと笑顔を浮かべた。

「いえ、十分です」

「本当に、書類上のことしか調べませんよ？ あと、他の人に教えられないというのは他の人を使えないということですよ。申し訳ありませんが、僕も行政特区日本の件で、正直忙しい身です。調査開始は特区設立後になる、ということだけご理解ください」

「構いません。我俣を言っているのはこちらなのですから。ありがとうございます。口イさん」

その喜びようは、このもの静かな少女にしては意外なほど大きなものだった。よほど、この頼みを引き受けてもらえたのがうれしいらしい。

「わかりました。では、そのように。ちなみに、もう一度確認しますが、ルルーシュという人のことを調べている、というのは他の人に知られないほうがいいのですね？」

「はい。このことを知っているのは私とアーニャさん。それにロイさんだけということでお願います」

「分かりました」

ロイが頷くのと、総督を探しに来たローマイヤが、執務室の扉をたたくのはほぼ同時だった。

③巻11話『アーニヤ の 変化』

ローマイヤとナナリーを廊下まで見送った後。

自分の執務室に足を向けながら、ロイは総督のお願いについて考えを巡らせていた。

(背後関係を洗う必要があるな)

ナナリーには依頼を快く引き受ける旨を伝えたが、今回の話は簡単ではなさそうだ。

そう考える理由は証拠や経験に裏付けされたものではなく、どちらかといえば勘によるものに近かった。

しかし、勘「だけ」というわけでもない。

(ルルーシュという人物を調べるのは行政特区設立後なんて言わずに、明日にでも調べられる簡単なものだ。けど、なぜそんな簡単なことをスザクや他の部下ではなく僕に頼むのか。しかも、総督は僕とアーニヤ以外には秘密にしてほしいとも言っていた。なによりあの学園には皇帝陛下直属の機密情報局が居座っているというのも気にかかる。総督となにも関係がないというのなら、それでもいいけど。もし関係があるとしたら……)

見通せない要因が多い。

取り返しのない事態になるのだけは避けなければいけなかった。

なにげなく調査結果を教えて、それが原因で総督の身になにかありましたでは、あまりに寝覚めが悪すぎる。

(とりあえず、行政特区設立後に調査を開始するにしてもルルーシュという人間を調べるだけではなく、そのルルーシュという人間とナナリー総督の関係性、また総督がルルーシュという存在を知ったら、どういう事態が起こりうるのか。それがある程度予想ができるまで、総督にはなにも教えないほうがいいだろうな)

もつとも、ナナリーのお願いと機密情報局の任務にアツシユフォード学園という共通点があるからといって、ここまで気にするのも少し大げさなのかもしれない。

(いや、大げさなぐらいでちょうどいいんだ)

ロイは、自分の思考にかぶりを振る。

ナナリーは、正直に言えばなんの力もない総督だ。ちよつとしたスキャンダルが再起不能な失墜の原因にもなりかねない。

特にこの件にはブリタニア内でも“大ごと”を扱う機密情報局が絡んでいるのだ。

もしこの機情の任務がナナリーのお願いと全く関係ないとしても、調査の過程で機情と捜査範囲が被り、いやおう無しに機情の任務に巻き込まれるという自体も十分ありう

る。

慎重に過ぎるのは駄目だが、適度ならばそれは自身の命を守る良き僚友となるのを口
イは知っていた。

ロイは思考を継続させつつ、自分の執務室の扉を開ける。

「……」

そして、目の前に広がる光景に、その思考は途切れさせられた。

手で自身の銀髪を搔く。次いで頭痛に近いものを感じてロイは頭を左右に振った。

「なんで僕のシャツを着てるんだアーニヤ。君に手渡したのはただのパジャマだったと
思うんだけど」

目の前には、なぜか上着のシャツ“だけ”を着たアーニヤがいた。

ロイが視線を横に向ける。執務室に隣接する私室のタンスから、きちんと奇麗に折り
たたんであったはずの衣類が、何枚か飛び出ているのが見えた。

アーニヤが漁った。というの容易に想像ができた。

その衣類が飛び出ている二段下の棚——ロイの下着の棚——が荒らされていないの
が幸いと言えば幸いだった。

「どっつー」

「なにが？」

ロイは、アーニヤに視線を戻して問い返す。

アーニヤは腕を広げ、少しだけ足も広げた。その四肢はふくよかという表現に程遠かったが、肌はきめ細かく滑らかで、白い布地から伸びる足はスラリとしており、思わず目がいく。

シャワーを浴びたばかりなので、珍しく髪が下ろされていた。

いつもより幾分か落ち着いた雰囲気。それが彼女からは醸し出されていた。

ナイトオブセブン歓迎会の時のウエイトレス姿と同様、ロイは素直にその姿をかわいいと思う。

もつとも、その数瞬後にはロイの脳は自身に自制を呼びかけていた。

ロイが困惑を隠すように咳払いすると、アーニヤは言った。

「いつだったかジノが言っていた。「大きいシャツ だけ」を着ている少女は男のロマン。それは男である以上、ロイも例外ではない」って」

(つて、また君かジノ……)

友人に失望と呆れを感じて、ロイは天井を仰いだ。

「一応。私も少女」

「……」

「そこを踏まえて……どう?」

安全上、味方のKMFをハドロンプラスターでロックオンできないのを、ロイはこんなに恨めしく思ったことはなかった。

次のロイの口調は、本気の懇願だった。

「ねえ、アーニヤ。とりあえず、ズボンを穿いて。お願いだから……」

「私は感想を訊いてる」

答えをウズウズして待っている。そんなアーニヤの態度。

その仕草は、ロイにさらに大きなため息をつかせた。

「ノーコメント。それに、ここは僕の部屋だ。言うことが聞けないのなら——」

出て行ってくれ。と言う前に、アーニヤはつまらなそうに傍に置いてあつたロイのパンツに手を伸ばした。

その細い体が、ズボンをはくために傾き、膝があがる。ロイはいけない所が見えそうになって顔を赤くした。

「ここでじゃなくて向こうの部屋でだ！」

怒鳴つたロイを、アーニヤは怪訝そうな顔で、

「注文が多い……」

そしてアーニヤは裸足で執務室の赤いじゅうたんを歩き、居住スペースの部屋を横切つて、シャワールの更衣室に入つていった。

それを見送った後、ロイは「まったく……」と肩を落とした。

「ジノは本当に仕方がないことばかりアーニヤに教えて……」

どうしようもないやつである。

というか、

(そもそも、ジノはそんなキャラだったのだろうか……)

と、ロイはここにきてようやく、そんな基本的なことを悩むに至った。

出会ったばかりの頃、ジノの性格は相変わらず明るかったが、もう少し温室育ちっぽくて、話す内容は今のようによつぽくなかった気がする。すくなくともいたいけな少女に馬鹿みたいないなことを教えるような性格ではなかった。

(まあ、口調も話す内容も俗っぽくなったというのは、多分僕のせいだろうけど……)

ジノは、貴族ぶっていない男友達ができたのが相当にうれしかったらしく、よくスザクやロイに街に遊び連れてってくれとねだった。

街に繰り出してみたいが、自分はお坊ちゃんで浮いた存在だというのは自覚してるから、一人で行くのは心細いということも本人から聞いた。

ロイもスザクもどちらかと言えば平民的な生活者で、しかも男が三人が遊ぶとなれば、やはり俗っぽい場所めぐりになる。

三人で変装してカラオケ、ゲームセンター、ファーストフード店、遊園地、スポーツ

観戦（一般席）。買い食いして、映画を見て、薄利多売をモットーにするような安い服屋もよくまわった。

仕事終わりに大衆向けの酒場にまで足運び、飲み潰れて公園で一晩を明かしたこともある。ここだけの話、ナンパもやったし逆もある。それらを一年も繰り返していればお坊ちゃんのジノも影響され、ああなるのも無理はないのかもしれないなかった。

聞くところによると、ジノの父親はロイとスザクのことを「息子をたぶらかした悪友」としており、相当嫌っているらしい。

「でも、まあ、勝手に俗に染まったのはジノの責任だ。うん……」

ロイはそう言つて、やつぱりアーニヤに変なことを吹き込むのは百パーセントジノが悪い、として回想を止めた。

次に、ロイは私室にある簡易キッチンに足を向けた。

お湯を沸かし、棚からカップを出し、暖かいココアを二つ用意し始める。

アーニヤはシャワーを浴びた後、ほぼ裸の状態でこの部屋をうろついたわけだから、体が冷えてるだろうと思つたからだ。

その予想を証明するかのよう。アーニヤが男物のパジャマを着て部屋に戻つてくると、と控えめなくしやみをした。

「……グス」

鼻をすすするアーニヤを見て、ロイは言った。

「言わんこつちやない」

アーニヤを席に促すとロイは淹れたばかりのホットココアを勧めた。アーニヤは礼を言つて受け取り、一口すすつた。

「……甘い」

と、アーニヤは満足そうに呟いた。

「それが君の好みだろ」

ロイは腰掛けて、自分用の甘さ控えめのココアを口に含んだ。

「それにしても、変な話を持つてきてくれたねアーニヤ」

あえて先ほどのことには触れずに、ロイは話を切り出した。

「迷惑だった？」

アーニヤは裾の長いパジャマでの動作に若干惑いながら、暖かいココアに息をふうふうを吹きかけ、上目遣いで答えた。

「いや、迷惑ではないよ。ただ変な話ではある。アーニヤも総督から話は聞いたんだろ？」

「どうもキナ臭い。機密情報局のいる場所に、総督のこの頼み」

ロイがナイトオブセブン歓迎会で機密情報局と接触した時、アーニヤは傍にいたの

で、あの学園にはなにかある、と気にはとめていたようだった。

「ロイ。これはまだ総督にはしゃべってないんだけど、ルルーシユという人間は確かにあの学園にいた」

ロイは、カップを持ち上げかけていた手を止めた。

「へえ、どうしてそう言えるんだい?」

「歓迎会中、学園の女の子達が話をしてた。ルルーシユ君カツコイイ。ルルーシユ君素敵。ルルーシユ君を見かけた。ルルーシユ君、ルルーシユ君、ルルーシユ君。何度も聞いたから嫌でも覚えた……」

最後の方は、どこかゲンナリとしてアーニヤは言った。

「そうだったのか。全然気付かなかった……じゃあ、なんでアーニヤはそれを総督に教えなかったの?」

アーニヤはカップをテーブルに置いた。

甘い香りの湯気が二人の間に立ち上る。

「教えてもよかったけど、機密情報局がああ場所にいたのがどうしても頭に引っかけた。でも、総督は、そのルルーシユのことを知りたがった」

「それで?」

「私は総督に安易に教えていいものか判断がつかなかった。だから、総督には何も言わ

ず、ロイに相談するように勧めた」

と、アーニヤはココアをすすって、白い湯気の混じった息を吐いた。表情が少し緩んでいる。

やはりココアを甘めに作ったのは大正解だったらしい。と、ロイは思った。

「もつとも、ロイはあつさりしやべちやつたけど」

「確かに。少し浅はかだったかもしれないね」

ロイは軽くほほ笑んで、カップをテーブルに置いた。

「でも、引き返せないわけじゃない。別にこの後、ミレイ嬢の言葉はやっぱり聞き違いました、つて言ってもいいわけだし」

「そうするつもりはないんでしょ？」

それが分かっているから、総督に僕に相談するよう勧めたんだろ？ とロイは思ったが、それを口には出さず、浅い頷きで応じた。

「そうだね。総督が知りたいというのなら、協力はしてあげたい」

「なら、いいこと考えた。私たちも、スザクみたいにあの学園に通えばいい」

ロイはその提案に一瞬面くらったが、「ふむ」と呟いてしばし考えた後、

「悪くないね。それなら、怪しまれることなくルルーシュを調べられる。スザクも学園に通ってることだし。誘えばジノだつて通いたいって言うんじゃないかな。それに、僕

も興味あるな、学園生活」

「じゃ、決定」

表情は変わらないが、アーニヤはうれしそうにココアの入ったカップを傾けた。

しかし、この時のロイにはある予想があった。

行政特区日本が設立し、黒の騎士団が消滅すれば、派遣されているラウンズ四人の内
の何人かはブリタニアに帰国することになるだろう。

そもそも、このエリアーにラウンズが四人も派遣される、という本来ならばありえ
ない人事は黒の騎士団の存在があるからだ。

それがなくなれば、ナナリー総督の補佐であるスザク。また、女性であるナナリー総
督の身边のお世話や、込み入った場所での護衛ができるアーニヤは別として、ロイかジ
ノはブリタニアへの帰国命令が出るだろう。

いや、最初から赴任が決まっていたジノはもしかしたら、このエリアに残されるかも
しれないが、単なるついでとしてこのエリアに来たロイは確実に帰国だろう。

もしかしたら行政特区設立後、ロイはアッシュフォード学園に通う手続きをしている
暇さえないかもしれない。

「じゃあ行政特区が設立したら、すぐに入学」

「すぐには無理だよ。特区設立後は、目の回るような忙しさになるだろうから、学校に通

えるのはそれからしばらくたってからだろうね」

そのしばらくの間に、おそらく自分はブリタニアに帰っている。という予想を、ロイは口に出さなかった。

「屋上で昼食を食べる」

「楽しみだ」

「弁当作る」

アーニヤの瞳が、珍しく歳相応にキラキラと輝いているように見えた。

「期待してるよ」

ロイは、ほほ笑むしかなかった。

一年前とは違い、多少なりとも喜びという表現を他者に表現し始めるようになった少女を見ていると、ロイは自分の予想などとても口にできるものではないように思えた。

ロイはアーニヤに笑顔を向ける裏で、その笑顔から目を背けるような気持ちで、ナナリーからの頼みごとについての思考を巡らせた。

ナナリー総督からお願いされた調査は、慎重に動くにしても、素早く目標を達成する必要があった。

最悪でも、調査継続に危険性が無いことを確認して、アーニヤに引き継ぎができる段階にもっていかなければならない。

時期的に相当厳しい。なにせ、行政特区日本が設立して、後処理を済ませ、身体が空いてから帰国するまでの間にそれをやっつける必要があるのだ。

(まあ、でも……)

ロイはすっかり調べてあげようと思った。なぜなら、これがこの任務で自分がナナリーにしてあげられる最後のこともかもしれないからだ。

アーニヤに視線を戻す。彼女はいまだに楽しそうに学園生活でどう過ごしたいかを語っている。

ロイは、甘いはずのココアがなぜかとても苦く感じた。

③卷1 2話『特区 日本』

二度目の行政特区日本。野外の会場。

式典の進行は静寂をもって執り行われた。

『各部隊、気を抜くなよ。なにが起こるか分からないからな』

通信機からのジノの声。それは「クラブ」のコックピットにいるロイにも届く。

ロイは「クラブ」を空中で旋回させながら、地上にいる百万人の日本人たちをモニター越しに見つめていた。

ゼロは約束を果たした。それは、会場が隙間なく人に染まっている光景が証明していた。しかし……。

(だれも笑っていない)

ロイは、モニターに拡大した日本人たちの表情を見て小さく息を吐いた。

分かっていたことだ。ここに集まっている日本人はナナリーではなく、ゼロの呼びかけに応じて集まった人々。もっと言えばゼロに信頼を寄せていてブリタニアに反感を抱いている人々だ。彼らは決して自らの希望でこの場に來たわけではない。

以前、ローマイヤに頼んで、すでに極秘情報扱いになっていた一年前の行政特区の映

像を見せてもらったことがある。

後半は見るに耐えないものだったが、前半は違った。

日本人は、嬉々としており、

「ユーフェミア万歳！ 特区日本万歳！」

口々にユーフェミアをたたえ、その行政特区への参加を心から希望し、湧き上がる気力に満ち溢れていた。

しかし、いまロイの眼下の日本人たちは静寂を保っている。

（まるで嵐の前のなんとやらだ……）

それは不吉な予測だった。

万が一、この会場で嵐が巻き起されれば、ロイ達はその暴風がナナリー総督を傷つける前に、対処しなければいけない。

会場の各所にはKMFが睨みをきかせ、日本人たちを監視するかのように頭部のメインカメラをせわしなく振っている。

地上のKMF各機は“実弾”と、ロイ、ジノ、アーニヤの強い要望で暴徒鎮圧用の対人ゴム弾銃の二種類の銃を装備しており、その銃を足元の日本人に見せ付けるかのよう
に誇示している機体もある。

「んっ？」

と、ここでロイは、モニターの中の一騎の「サザーランド」を見て、分厚いレンズの奥で眉を微細に動かしした。

機体の高度を下げて通信機のスイッチを入れる。

「B—2地区担当の「サザーランド」 応答せよ」

返答はすぐだった。

『こちらB—2地区担当の「サザーランド」。ナイトオブゼロ様、なにか？』

「なにかではない。なぜ貴公はゴム弾銃ではなく、実弾入りのライフルを装備している。命令違反である。速やかに装備を変更せよ」

行政特区開始前。ロイ達ラウンズはKMFで警備にあたる者——警備兵、騎士問わず全員に、許可無く実弾入りのアサルトライフルを装備する事を禁じた。

よって周囲の兵やKMFは全て、腰のハードポイントにはアサルトライフル。手にはゴム弾銃という格好なのだが、この「サザーランド」はそれが逆だった。

『しかし、ナイトオブゼロ様』

「私は、貴公に意見を求めていない」

通信機の向こうでは「サザーランド」の騎士がまだなにか言いたそうに息を飲んだ。しかし、それをロイは「返答は？」と言葉で制した。

『イエス・マイ・ロード』

その言葉に、「サザーランド」の騎士の納得は感じられない。しかし、ラウンズの命令には逆らえないと考えたのだろう即座に装備を交換した。

それを確認して、ロイは辺りの警戒を続けた。

(結局、ブリタニア人も日本人を信用していないわけか……)

ここに集まっている日本人はナナリーを——ブリタニアを信用して集まったわけではない。

かたやブリタニア人のほうも日本人は絶対に何かやらかす、とそう信じて疑っていない。

さきほどの「サザーランド」だけではない。おそらく、この場にいるどの騎士も、命令には従ってKMFの手にはゴム銃を持っているが、内心では、

どうせ、実弾を使うことになる。

と、大なり小なり思っているに違いなかった。

(一度すれ違った者同士というのは、ここまで信用できなくなるものなのか……)

ロイはそれを十分に理解しているつもりだった。しかし、それをこうも間の当たりにさせられてしまうと、口の中になにか苦いものが広がっていく。

(ナナリー総督。もしかしてあなたは、ユーフェミア皇女殿下より、困難な道を選んだのかも知れない……)

すくなくともユーフェミアには日本人の支持があつた。しかし、ナナリーにはどちらの支持も無いのである。

その時、控えめなファンファーレが会場に響く。

補佐のローマイヤ。護衛のスザク。そしてアーニヤの手を借りて、エリアーの総督ナナリー・ヴィ・ブリタニアが舞台の袖から姿を現した。

もちろん、日本人たちからの歓声など起こらない。

『始まるぞ。各自、警戒を』

空を旋回している「トリスタン」のジノが全員に注意を促す。

ロイもその言葉に従い、行政特区の式典会場に注意を巡らせた。

ナナリーの演説が始まった。

ナナリーは訴えた。自分がとてもうれしいこと、人とは手を取り合えること、過去の確執を捨て、皆で新たな歴史を歩んでいこう、と。

言葉にされた内容は実に美しく、誰もが素晴らしいと思えるものだ。

だが、それによつて感動を覚えたものは、おそらく皆無だ。

やがて、ナナリーに代わり、その傍に立っていたローマイヤが前に出た。

ブリタニア軍の中で糸を張り詰めたような緊張が走るのを感じた。

ここだ。

この静けさが破れるタイミングがあるとすればここなのだ。

ローマイヤは今から語るのだ。ゼロはお前ら日本人を裏切った、と。

『では、特区日本に参加する者たちに対して、われわれからの処置を発表します——』

ローマイヤの実務的な話は続く。

ロイは、いつの間にか心臓が強く脈打っていた。おそらく、それは警備にあたるどのブリタニア軍人も一緒だった。

これからどうなるのか予想が付かない。ここにいる日本人はゼロを慕って集まった人々。その人々にゼロはお前らを裏切った、という事実を放り投げることによって、一体どのような化学反応を招くのか。

(もし暴動が起きたとしても、それが警備隊で押さえつけられる程度のものならば問題はない……)

しかし、それが警備隊の守備容量を超え、舞台にいるナナリーに被害が及ぶような域に達すれば、ロイは、ブリタニアのナイトオブゼロとして実弾の引き金を引かなくてはいけない。

そうなれば会場は再び行政特区と言う名の棺桶に早変わりだ。世間からはユーフェミアだけではなく、ナナリーも虐殺皇女として後ろ指を向けられることになるだろう。

やがて、ローマイヤの演説がとうとうゼロの進退について触れた。

『しかしながら、カラレス前総督の殺害など指導者の責任は許し難い。エリア特法12条第8項に従い、ゼロだけは国外追放処分とする』

言ってしまった。

この中継を見ている世界中の人々の「はあ？」という呟きが聞こえてきそうだった。ロイは額に浮かぶ汗を気にも留めず、あたりを警戒する。

(どうなる!?)

暴動は起きない。

いや、起きかけているのか？ 起きるのか？ 起きないのか？

その思考は一瞬だったが、とても長い時間を感じられた。

『ありがとう。ブリタニアの諸君！』

元の時間に引き戻したのは、ロイとは違うゼロの名を持つ男。黒の騎士団のリーダーの声だった。

ロイは呆気にとられた。気が付けば会場に設置してあったモニターには全てゼロが映し出されていた。

『寛大なるご処置。いたみいる』

ロイを含めてほぼ全員のブリタニア関係者が、目の前のあまりの出来事に戸惑っている中。軍の任務を忠実に果たした男がいた。

スザクだった。

彼はナナリーをモニターのゼロから庇うように立ち。頭上のモニターに映るゼロに言葉をぶつけた。

『姿を現せゼロ！』

ロイは、そのスザクの声でようやく思考を再開させる事ができた。

(くそ、電波ジャックか。一体どこから……)

ロイは「クラブ」のレーダーとファクトスファイアを最大に活用して、会場のモニターへ送られてくる電波を計算し、ゼロの場所を割り出そうとした。

電子キーボードの上を、ロイは滑るような指の動きで往来させる。電波の種類、強さ、距離を判別し、逆探知の指示を素早く行う。

この間にも、会場ではスザクとゼロの討論が繰り広げられている。しかし、ロイにはそんな会話をじっくりと聞く余裕は無かった。

(ナナリー総督を守るのは、スザク。君の役目だ。僕は……)

やがて、「クラブ」に取り付けられたロイド特製解析コンピューターが逆探知に成功した。

「よしー！」

「クラブ」内のモニター表示が切り替わり、地図が表示される。

地図には一つの光点があった。電波の発信源だ。

それは海の真ん中で、しかも、ここからそう遠くない場所で点滅していた。

ロイは、地図に光点が指し示す方角に顔を向けた。

「? なんだ、あれは?」

目線の先には、大きな白い山があった。

(あんなところに山なんてあっただろうか? いや、まて、違う。あれは)

『うわああ。ガスだ!』

警備隊の一人の声で、ロイは弾けるようにその視線を海から下の会場に戻した。なんと、会場から火事のような白い煙が立ち上がり、会場全体を覆っていた。

『ど、毒ガスか?』

『落ち着け! ただのスモークだ!』

『マスクを! だれか俺にマスクを!』

『ええい。落ち着けと言うのに!』

通信には錯乱した声が行き交っている。

「総督は!」

ハツとして、ロイは壇上の様子をコックピット内のモニターに拡大させる。アーニヤが、ナナリーの車椅子を引いて舞台の隅に逃げ込んだ。

(よかった。なんとも無いようだ)

しかし、ロイが安心したのもつかの間だった。

『暴徒殲滅準備!』

鎮圧ではなくて、殲滅。

それは、実弾装備の許可を与える命令だった。

発言したのは、空中から会場を警戒していたKMF “ヴィンセント” に騎乗しているギルフォードだった。

『イエス・マイ・ロード』

何機かのKMFが、命令を受けて、飛び出すのが “ゴム弾では無い銃口” を煙に向けた。

ロイは間髪入れずに声を張り上げた。

「まて! 相手はまだ手を出していない!」

『まて! 相手はまだ手を出していない!』

声を出したのはロイだけではなく、スザクもだった。二人のそのとつさの命令により、銃口から虐殺の弾丸が飛び出ることには無かった。

『各機。自制せよ』

続けてジノも言葉を発し、さらにそれを徹底するよう命じた。

やがて、スモークは海の風に晒されて、薄れ、消えていく。そして、

「――！」
「クラブ」のコックピットの中でロイは驚きの声も出せず、かすれた呼吸だけを搾り出す。

会場にはゼロがいた。

ゼロが、ゼロが、ゼロが、ゼロ、ゼロ、ゼロ、ゼロゼロゼロゼロゼロ……。

会場を埋め尽くした魔人ゼロ。一人ではなく、百万人がゼロ。

『全てのゼロよ！』

モニターの、おそらく本物であると思われるゼロが、会場のゼロに呼びかけた。

『ナナリー新総督のご命令だ！ 速やかに、国外追放処分を受け入れよ！ どこである

うと、心さえあれば、我らは日本人だ！ さあ、新天地を目指せ！』

そして、ナナリーとの支持の差を表すかのように、日本人たちから地を震わすような歓喜の声が巻き起こった。

○

会場を抜けて、ナナリーは廊下を進み、護衛車に向かっていた

「一体、どうなったのですか？」

盲目のため、状況が理解できないナナリーが問いかけると、周りを囲むSPの一人が

返答した。

「ただいま、ミス・ローマイヤが対応中です」

「任せると言うのですか!」

「総督」

感情が昂ぶり始めたナナリーに、アーニヤは冷や水をぶっ掛けるような冷静な声で呼びかけた。

ナナリーは声を頼りに、友人に顔を向けた。

「アーニヤさん……」

「会場にはスザクがいる。ロイもいる。頼りないようでも頼りになるジノもいる」

「……」

「信じて。ラウンズに任せて」

ナナリーには、返す言葉が見つからなかった。

○

ロイが先ほど発見した白い山は、島ほどもある巨大な海氷船だった。それは中華連邦の用意したものだが、真つすぐにこの行政特区日本の会場に向かっている。

ここまでくると、ブリタニアの一部の人間は、ゼロのやろうとしていることを理解した。

——海水船で、ゼロは黒の騎士団とその支持者たちごとエリアーを離れ、再起を図るつもりか!?

当然のように、通信機には怒気を交じえた声が往来した。いや、それは通信機だけに留まらず外部スピーカーで会場中にも響いた。

『枢木卿！ これは反乱だろ！』

ギルフオードの言葉に、すかさずロイが反論した。

「反乱？ 待って下さいギルフオード卿！ このどこが反乱ですか！」

コクピット内のモニターに身を乗り出して言うと、ギルフオードがやや慥然とした様子で、

『これは奇妙な事をおっしゃられますなキャンベル卿！ ブリタニアへの反心は見るに明らかではありませんか！』

「かといって、別に彼らは何かを訴えているわけでも！ 私たちに危害を加えようとしているわけでもありません！」

『だからと言って！ このままみすみすゼロを見逃して国の威光が示せるとお思いですか!?!』

「威光が示せれば百万の死体の山を作ってもよいとおっしゃるか！」

『そもそも、約束を違えたのは黒の騎士団です！』

「そうであつても罰せられるべきは黒の騎士団だ！　ここにいる約九割以上の人間はただブリタニアの支配を是としないだけの一般人なのですよ！」

『一般人であつてもゼロの支持者です！』

「道理に沿つても人道に外れると言つているのです！　それこそ国の威光の失墜につながると思います！」

『止める二人とも！』

ロイとギルフォードのやりとりを止めたのは、珍しく怒声を発したジノだった。

ジノは、「トリスタン」で空中の「クラブ」と「ヴィンセント」の間に割るように入ると、声のトーンは幾分か下げて、威嚇を込めた口調で言つた。

『二人の意見はもつともだ。だが、全部隊に通信が開いている状態で平静さを欠いた応酬はナイトオブスリーとして認められない』

「……」

『……』

二人が黙つたのを見て、ジノは「トリスタン」を壇上のスザクに向けた。

『どうするスザク。責任者はお前だ。お前が決める』

スザクが苦虫を噛み潰したような顔をした。

（スザク……）

ロイには理解できた。スザクの心の中は今、ゼロに対する怒りで一杯だろう。ゼロの今回の作戦はなんのことはない、一般人を人質に取った脅しだ。

つまり、ゼロはこう言っているのだ。

一般市民を虐殺するわけにはいかないよな？　ならば、その一般市民と共に私と黒の騎士団を見逃せ、と。

スザクのその怒りは、ロイとて同じだ。

何が正義の味方だ！　ただのペテン師じゃないか！　日本人を騙す詐欺師じゃないか！

ゼロの衣装に扮した者たちは、おそらく自覚が無いまま人質として銃口に晒されているのだ。

忌むべき実に汚い、卑劣な手口。

だが、それだけにナナリーの日本人との融和政策を支持しているロイ達には有効なものでもあった。

それに多くを犠牲にして一人を生かすというものは、政略上れっきとした策であり、それを知るロイにとっては、実行について多少なりの共感を抱くものでもある。

繰り返すが、それがロイにとって忌むべき策であるというのは変わらない。しかし、詐欺でもこれは立派な策であり、成った時点でそれを防げなかったロイ達は負けを認め

るしかないのである。

黒の騎士団の力を大アヴァロン襲撃で削ぎ、スザクの出撃で一時はゼロの生死与奪の権利まで握ったにも関わらず、みすみすこのような形で見逃すのは悔しいが、一般人を巻き添えにしてまで黒の騎士団を殲滅するわけにはいかない。

いや、殲滅がブリタニアのやり方として正當なものだとしても、ナナリーは、あの心優しき皇女は絶対に……。

『いかがなさいますか。 枢木卿』

今まで事の成り行きを黙って見守っていたローマイヤが、スザクに鋭利な瞳を向けて問いかけた。

『このままみすみすと百万の労働力を失うぐらいならば、いつそ——』

それを聞いたとき、ロイの頭の中で熱いものが迸った。

「ローマイヤー！」

いつもとは違い、ロイは呼び捨てでその名を呼んだ。

その意味を、ローマイヤは正確に感じ取った。

だが、ローマイヤは別段驚いた様子はない。どちらかと言えば「まあ、あなたならこう言えば当然怒るでしょうね」と、予想していたようでもあった。

ローマイヤは眼鏡を指でかけ直すと、空中の“クラブ”を一瞥し、改めてスザクに向

き直った。

『いつそ、見せしめとする。という手段もやもえないかと。しかし、暴徒の対応において、われわれ文官は専門家である武官の判断を尊重いたします。見たところ、見せしめ“についてキャンベル卿は断固反対。ギルフォード卿は賛成。ヴァインベルグ卿は中立の姿勢をとっておりますが……』

そして、ローマイヤは視線の鋭度を増して言った。

『この場の武官の責任者であるあなたの判断は？　ちなみに時間はございません。このままあなたの判断が付かぬようでしたら、私の権限を使った範囲内においてだけでも、見せしめ“を実行いたします』

そして、ローマイヤはその言葉の本気を証明するかのようになり、懐から銃を取り出して見せた。

皆がそれぞれの感情を抱きながら見守る中、スザクは拳を握りしめ、目をつむり、考え込んだ後、悔しそうに……。

『全軍。ゼロを見逃せ……』

絞り出すような声で、命令を下した。

スザクの隣のローマイヤが、不快そうな、でもちよつと安心したような複雑な顔をしながら、大きく息を吐いた。

『……全員聞きましたね。ナイトオブセブン様のご命令です。ゼロを見逃しなさい』

ローマイヤは素直に通信機でスザクの命令を部下に伝えた。彼女の行動は意外と言えど意外だったが、今はそれよりも、ロイはスザクがナナリーの意志に沿った命令をしてくれた事がとてもうれしかった。

「スザク……」

ロイは胸を撫で下ろした。ロイのかけがえのない友人は見事にナナリーの信頼にこたえたのだ。

ロイは命令を復唱した。

「全軍に告げる。ゼロを見逃せ。繰り返す。ゼロを見逃せ……」

○

誰もいなくなった行政特区日本の会場。

ラウンズの白い軍服に着替え、同僚から譲り受けた紫のマントを翻しながら、ロイは壇上の中心に立つ男に近づき、その左肩に手を置いた。

肩をたたかれた男。枢木スザクは無言で応え、そして、だれもいなくなった会場を見つめ続けている。

「スザク。胸を張っていい。君は何も間違ったことをしていない」

スザクは、すでに去ったゼロの方角を睨んだまま呟いた。

「これが、ゼロの本質なんだ」

唐突なスザクの言葉にロイは返答を迷った。しかし、スザクはロイの返答など必要としていなかったようで、そのまま言葉を続けた。

「人の盾に隠れて、自身は表に出てこない。人を操り、騙し、自分の目的を達成することしか考えていないんだ……結果しかみていないんだ」

最後は、スザクの心からの怒りから発せられた声だった。

しかし、ロイは怒るスザクに共感を抱きつつも、ゼロの策の内容に心を高まらせている自分がいるのを感じていた。

多数を犠牲にして少数を生かす。組織のトップとは時にそれを是とし、良心を非として実行する必要がある。それをロイは知っていた。

だから、ロイはスザクの言葉に戸惑った。

もつとも、ゼロがただの臆病者の指導者であり、この指導者が多数の犠牲をただの盾とし、安全な場所から高みを決め込むようなやつなら話は別だが、ゼロは「上が動かなければ下はついて来ない」と公言している通り、常に前線に出て行く指導者である。

これは、ゼロが自分の部下や支持者達を、単なる盾や切り捨ての対象と見ていないことでの証明でもあった。

その上での今回の策。

多少、敵の心理に頼りすぎな面もあるが、逆にその心理を計算に入れて実行したのだとすれば、ゼロの策は見事でもある。

つまり、ロイは今回のゼロの策に一定の好感を持つていた。しかし、スザクのように、一般人を盾にしたその行為自体には反感も持った。

だから、ロイがスザクに向ける表情は複雑なものになった。複雑すぎて、最終的にそれは無表情にも見えた。

スザクは単純にゼロの策を非としているが、ロイにはその判別が付かないのだ。

もちろん、ロイはブリタニア軍人としてはゼロの策を“非”以外の何物としても見てはいない。

ただ、ロイ・キヤンベル個人で今回の策を見ると“非”である。という感情の他に“是”としても仕方がない、とする感情もあるのだ。

返答を迷っていると、スザクは踵を返し、ロイの傍を通って壇上の隅へ歩いていった。しかし、彼はその途中で足を止めた。

「……ロイ」

スザクは背を向けたまま言った。

「君は、そうはならないでくれ」

それは願いたいというより、

——君がゼロと同じになったとき、僕はそれを許さない。
という警告のように感じられたのは、気のせいだろうか。

「スザク？」

そのままスザクはマントを翻して、壇上の隅に姿を消した。

ロイはスザクを見送り、そして迷いのある瞳で会場に視線を戻した。

大きな広場に、カバンや帽子がいたるところに置き忘れられ、それが沈みゆく夕日に照らされて細長い影を作っている。

それは、なんだかとても寂しい光景だとロイは思った。